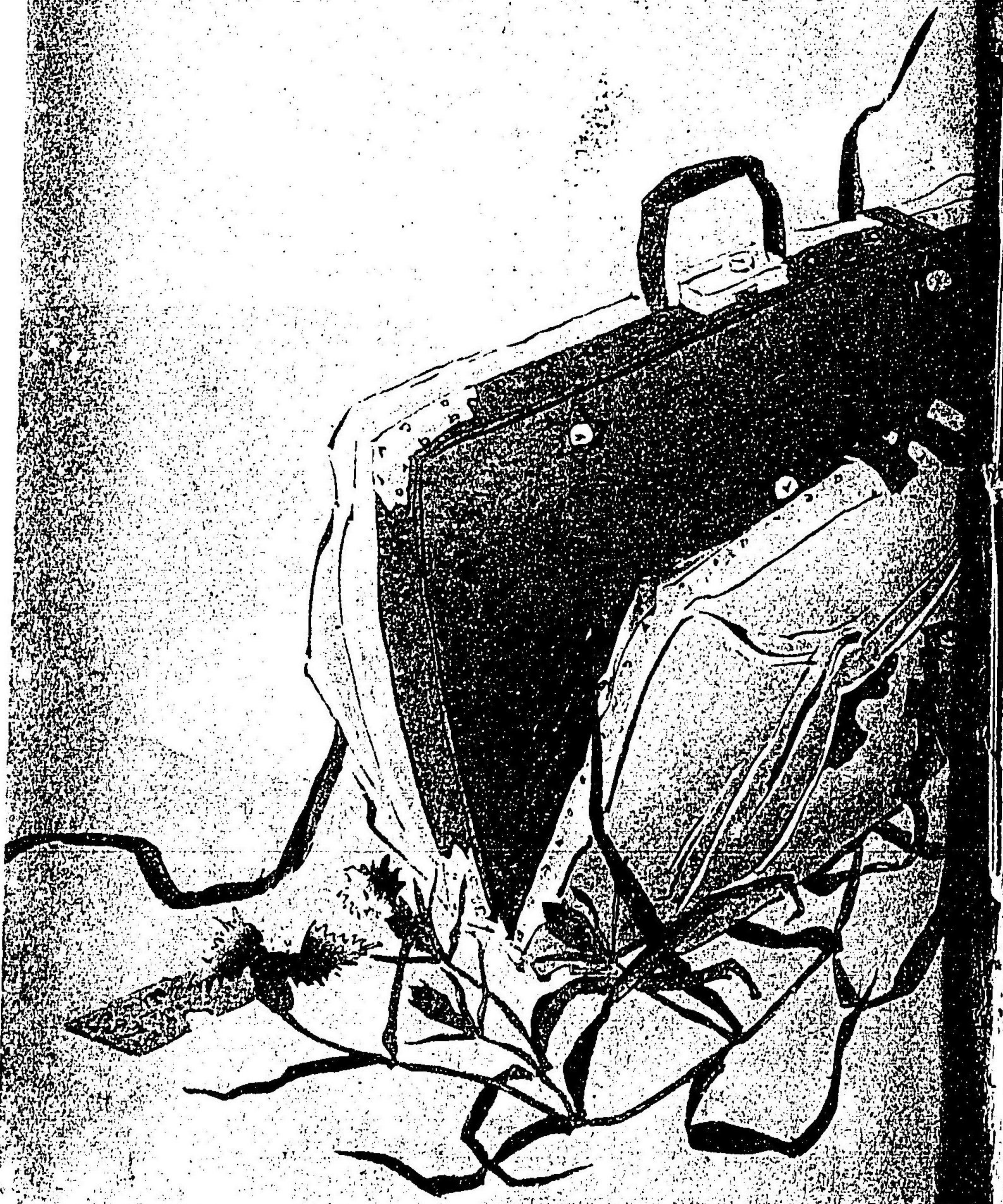


漫遊之友

91
66

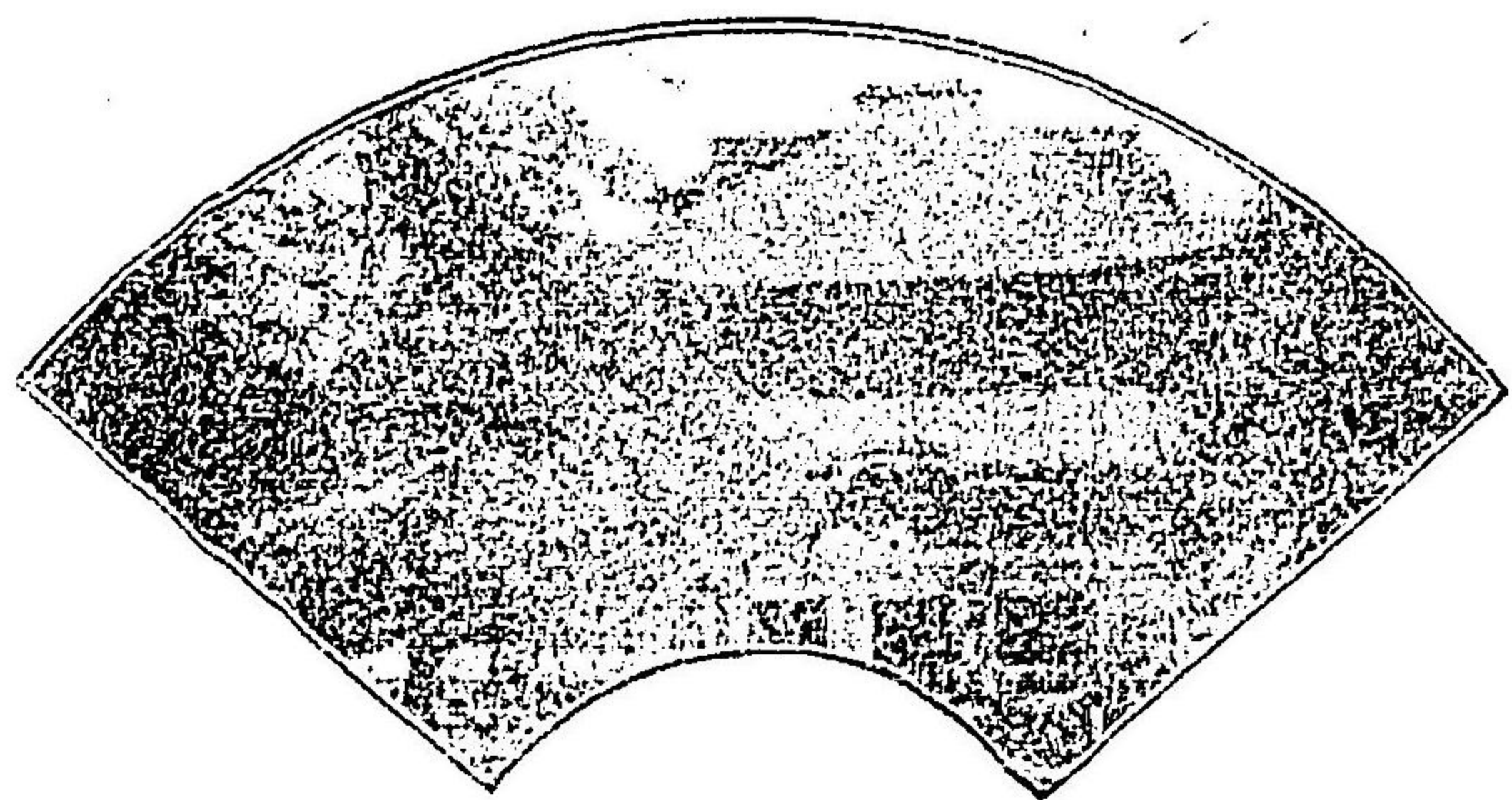




日ざかりの 春葉

海は木の間の
ひかり哉





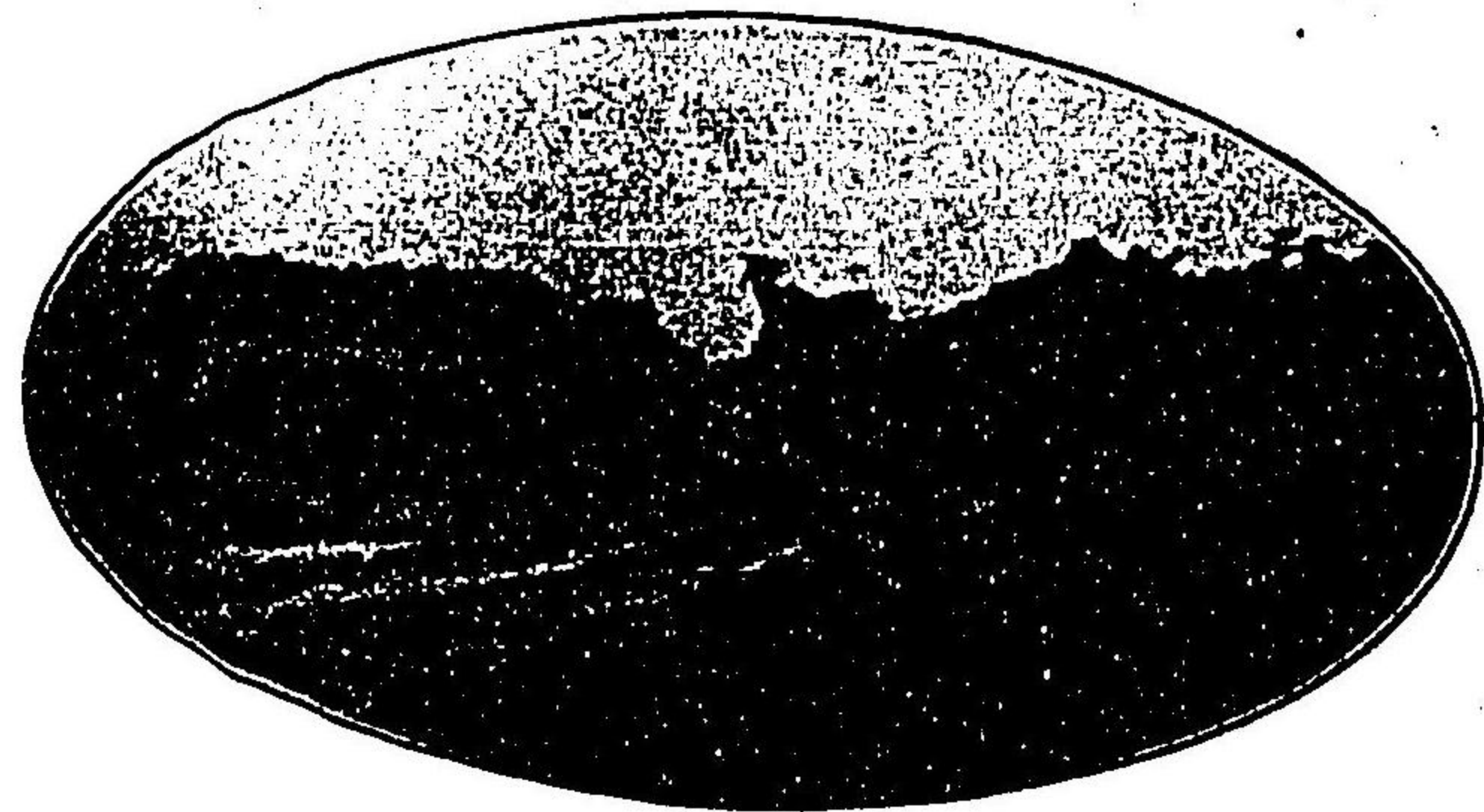
建長寺



日本
京都府
宇治市

建長寺
大佛殿

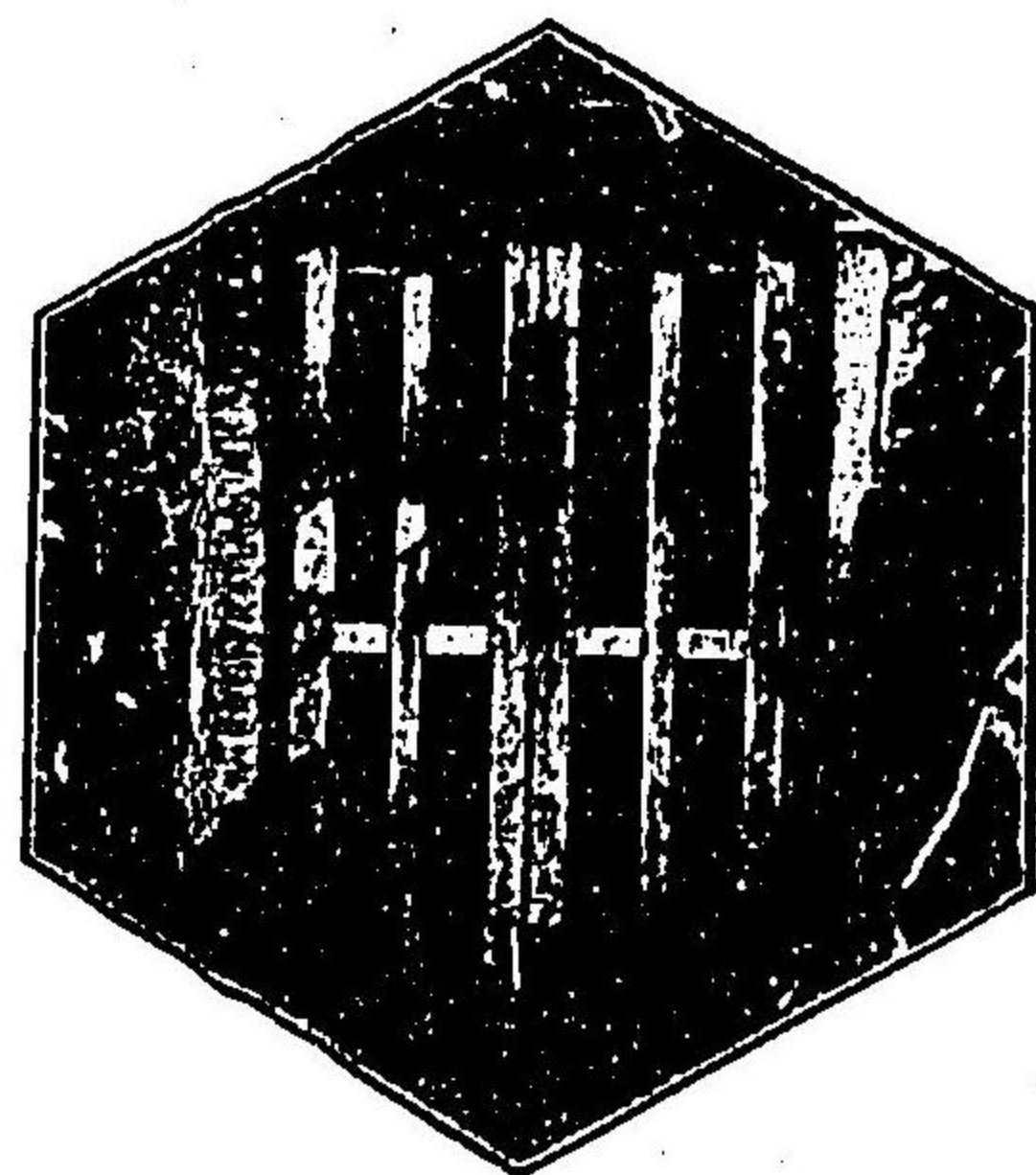
鎌倉大佛



濱里七



墓の朝顔



大塔宮土窟



越岡八幡宮表門



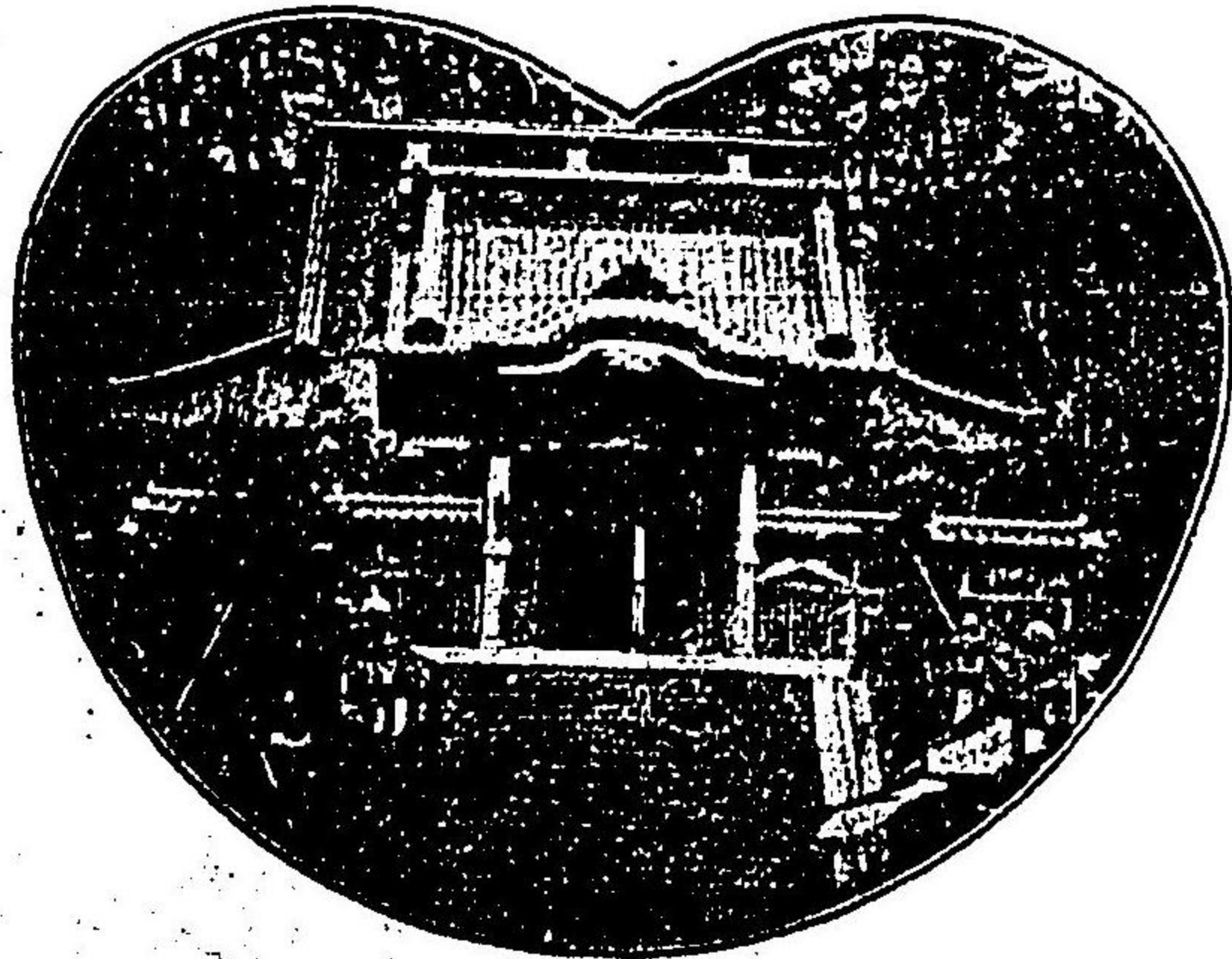
岩子帽島



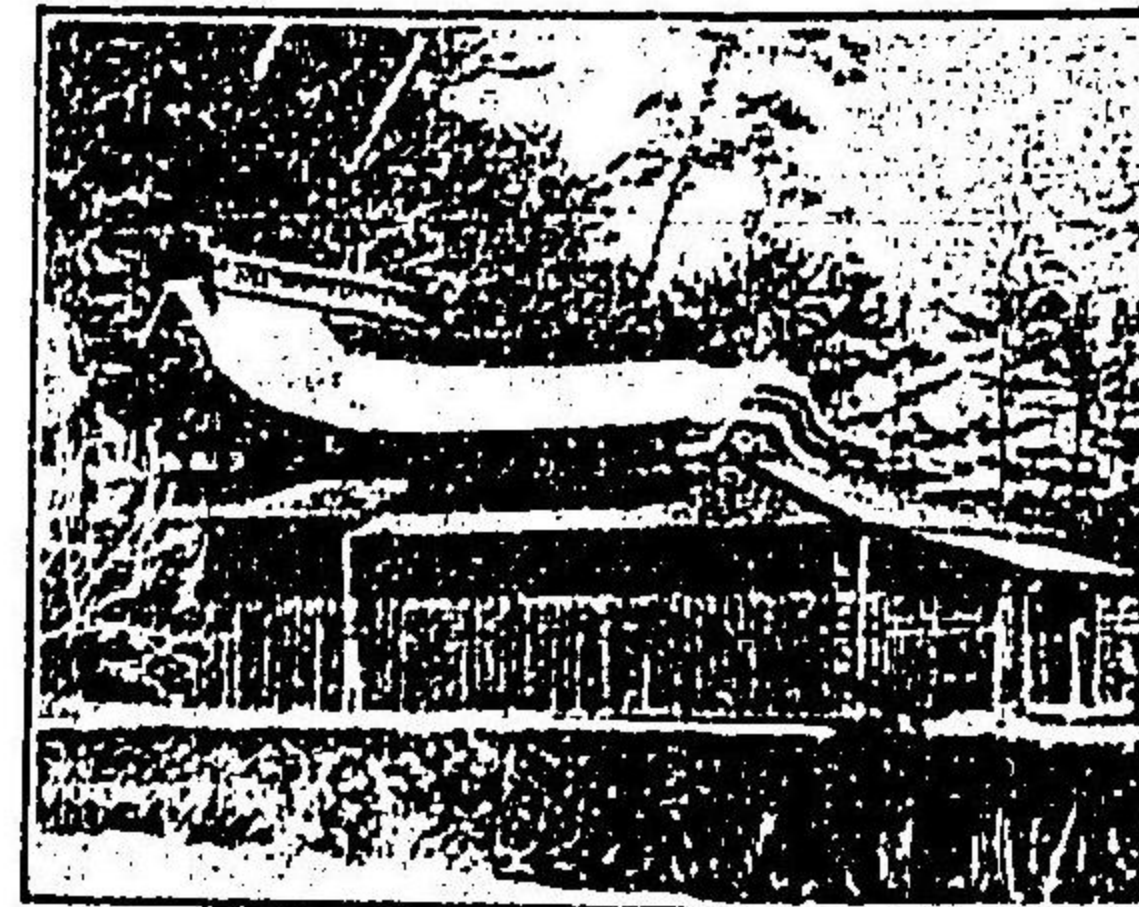
祠の耶五権倉録



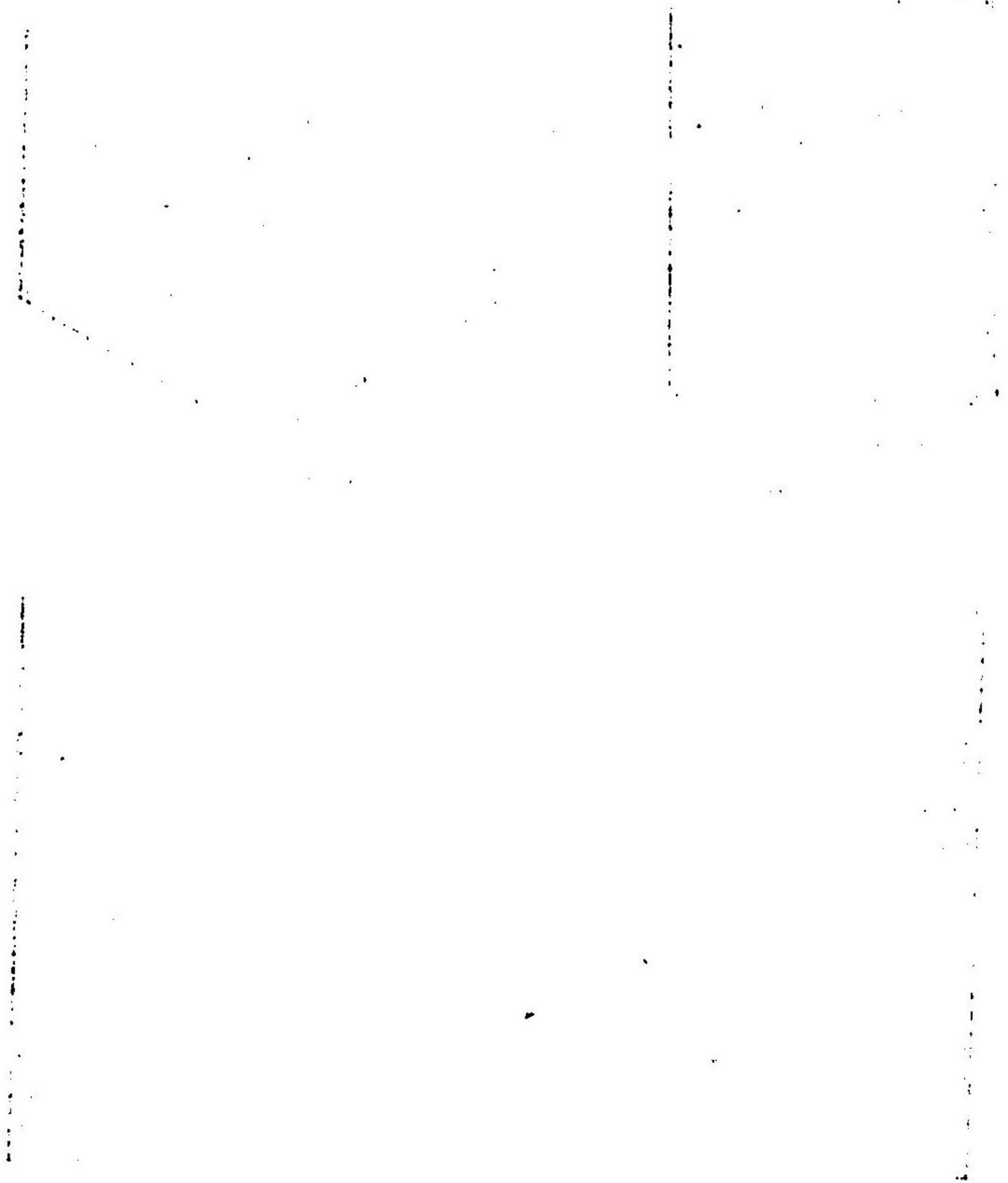
寺覺圓

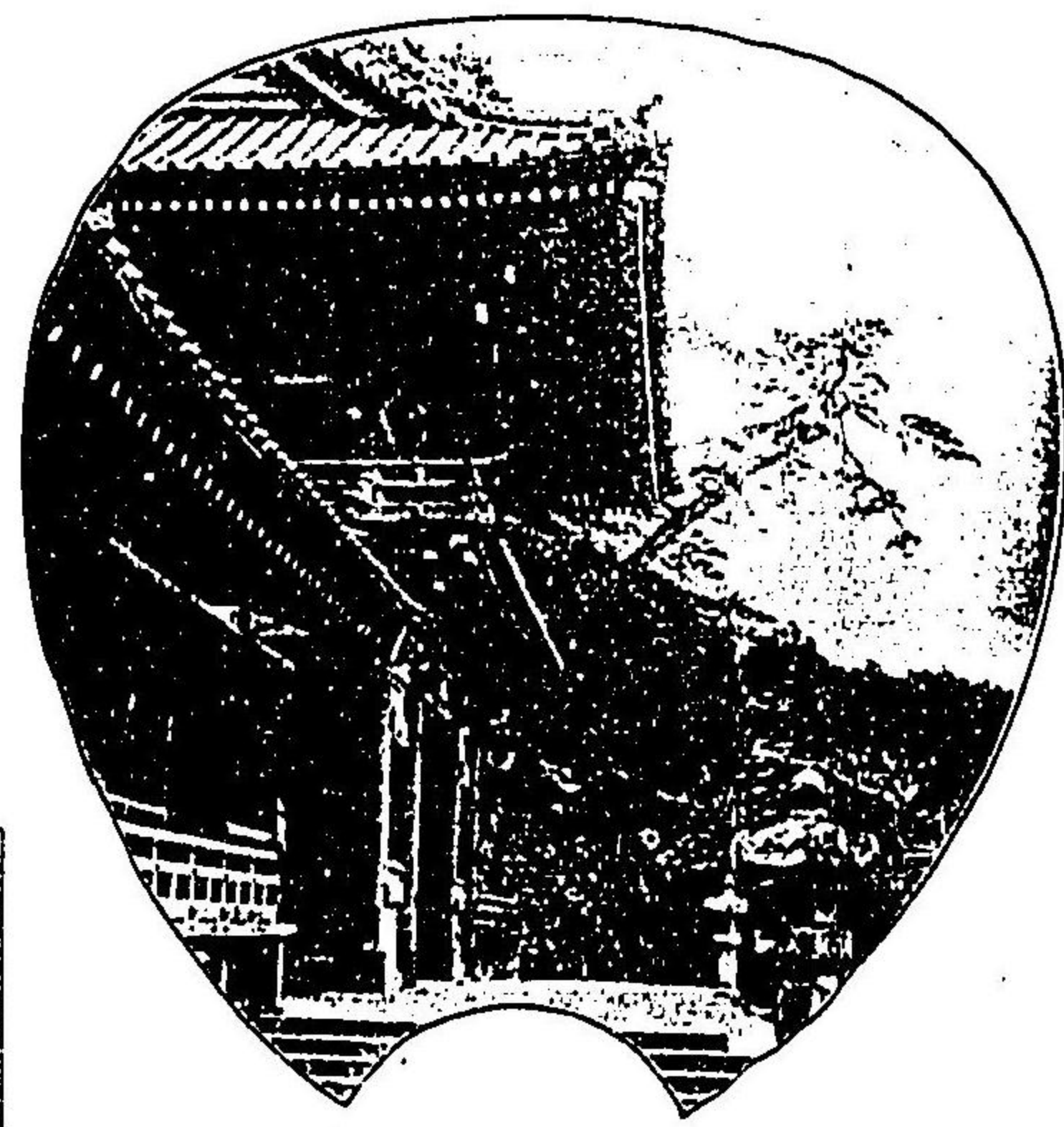


守口龍

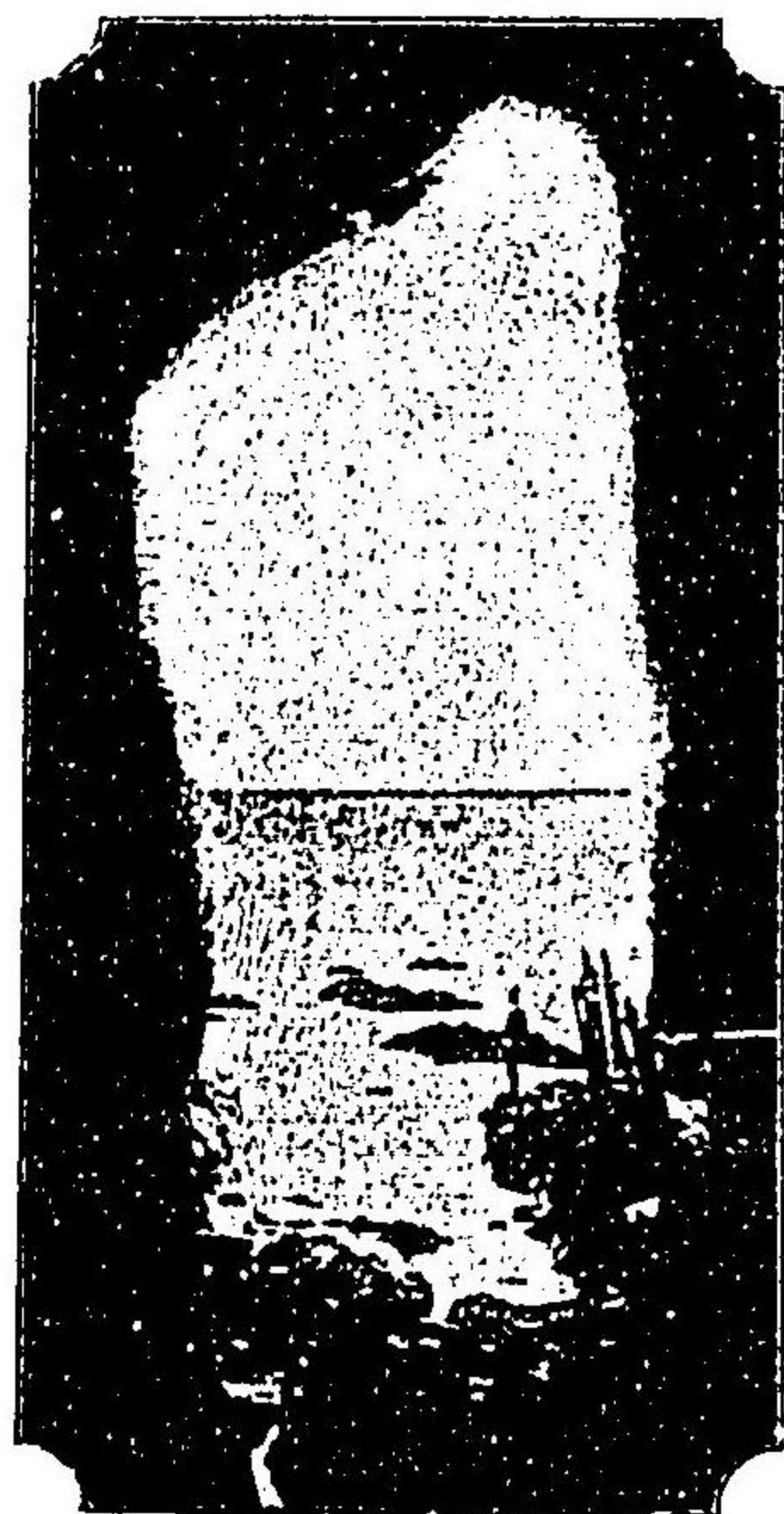


宮旗白





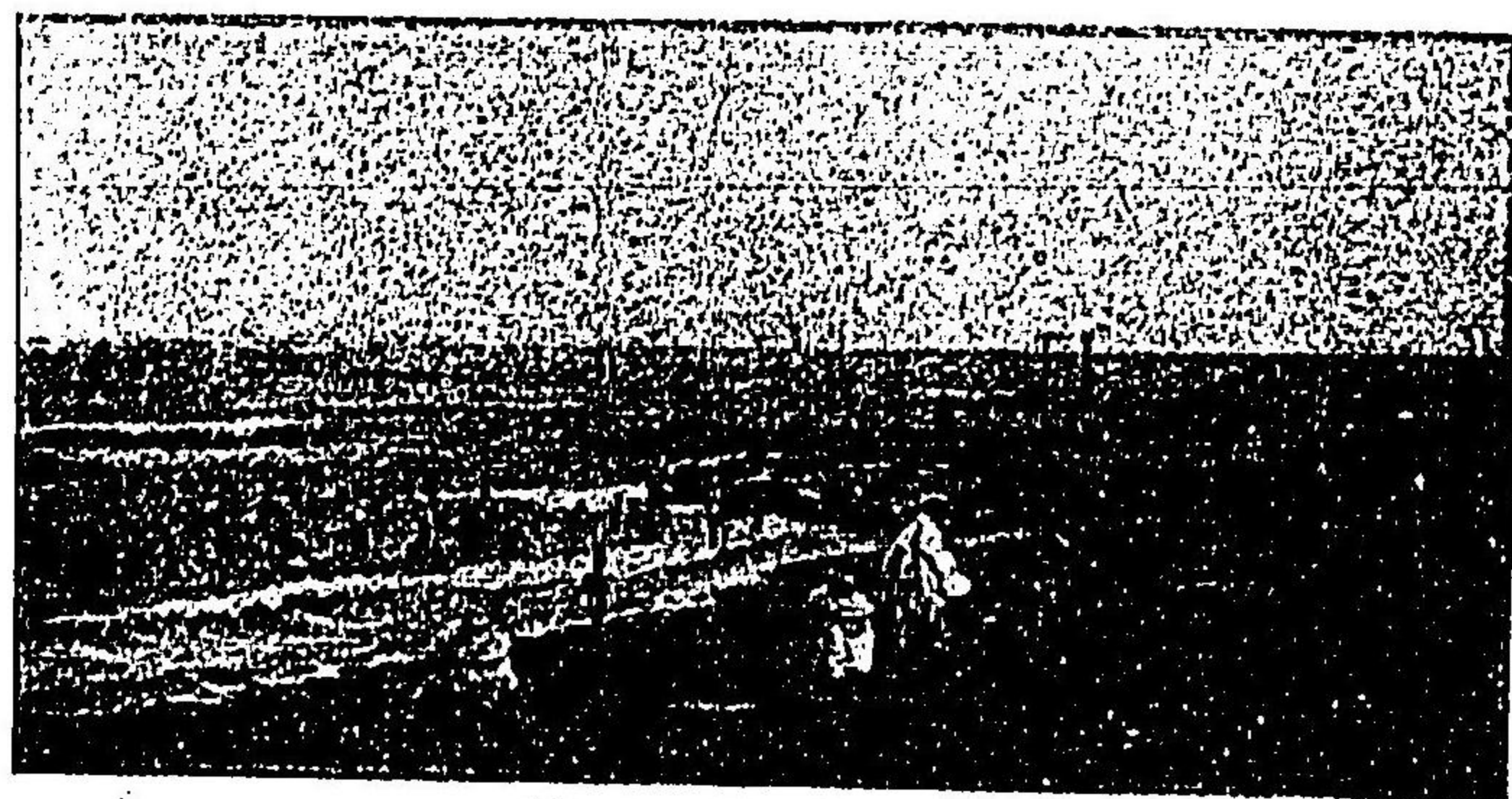
宮橋八岡鶴



窟龍嶋の江



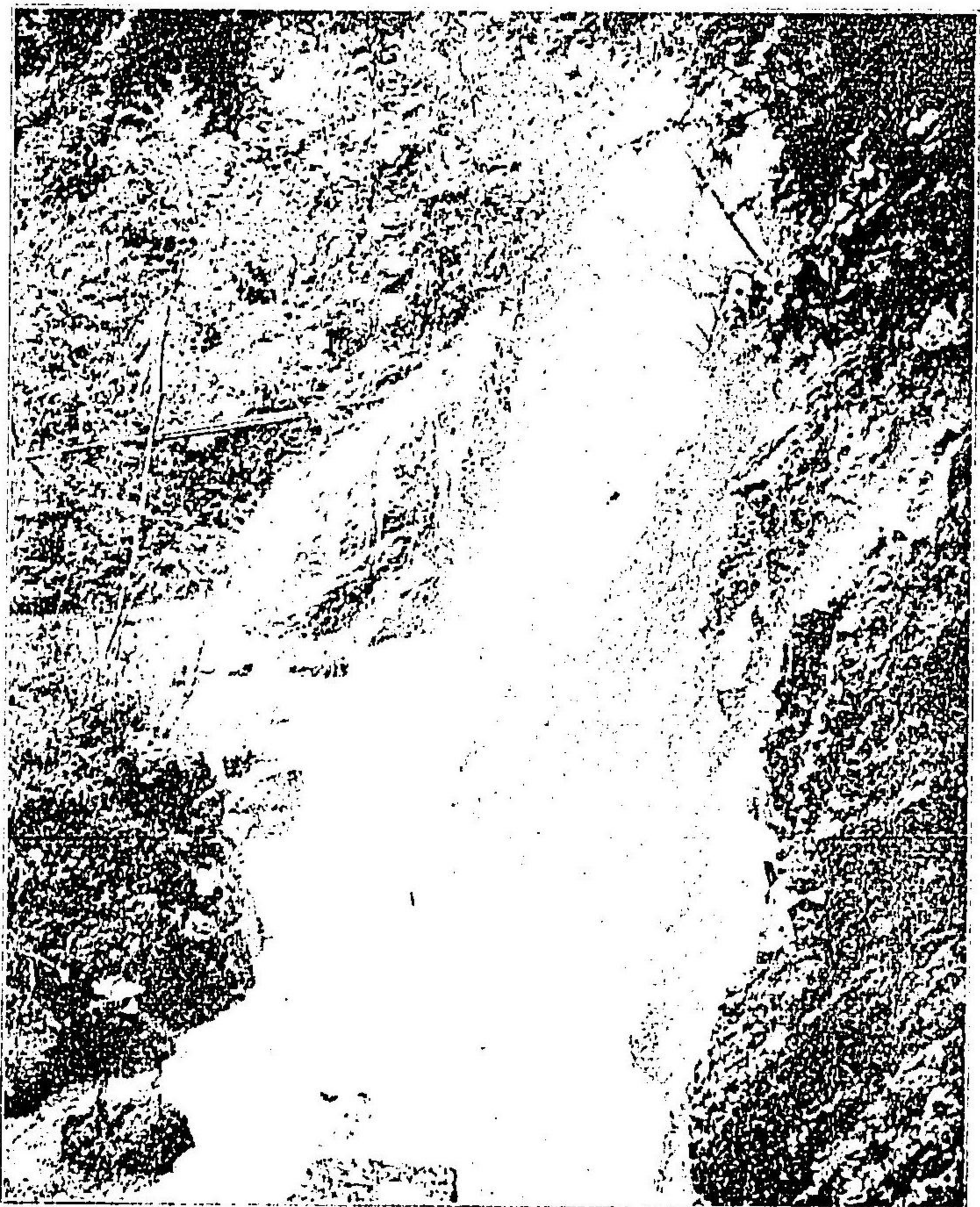
佛石根箱



浴水海磯大



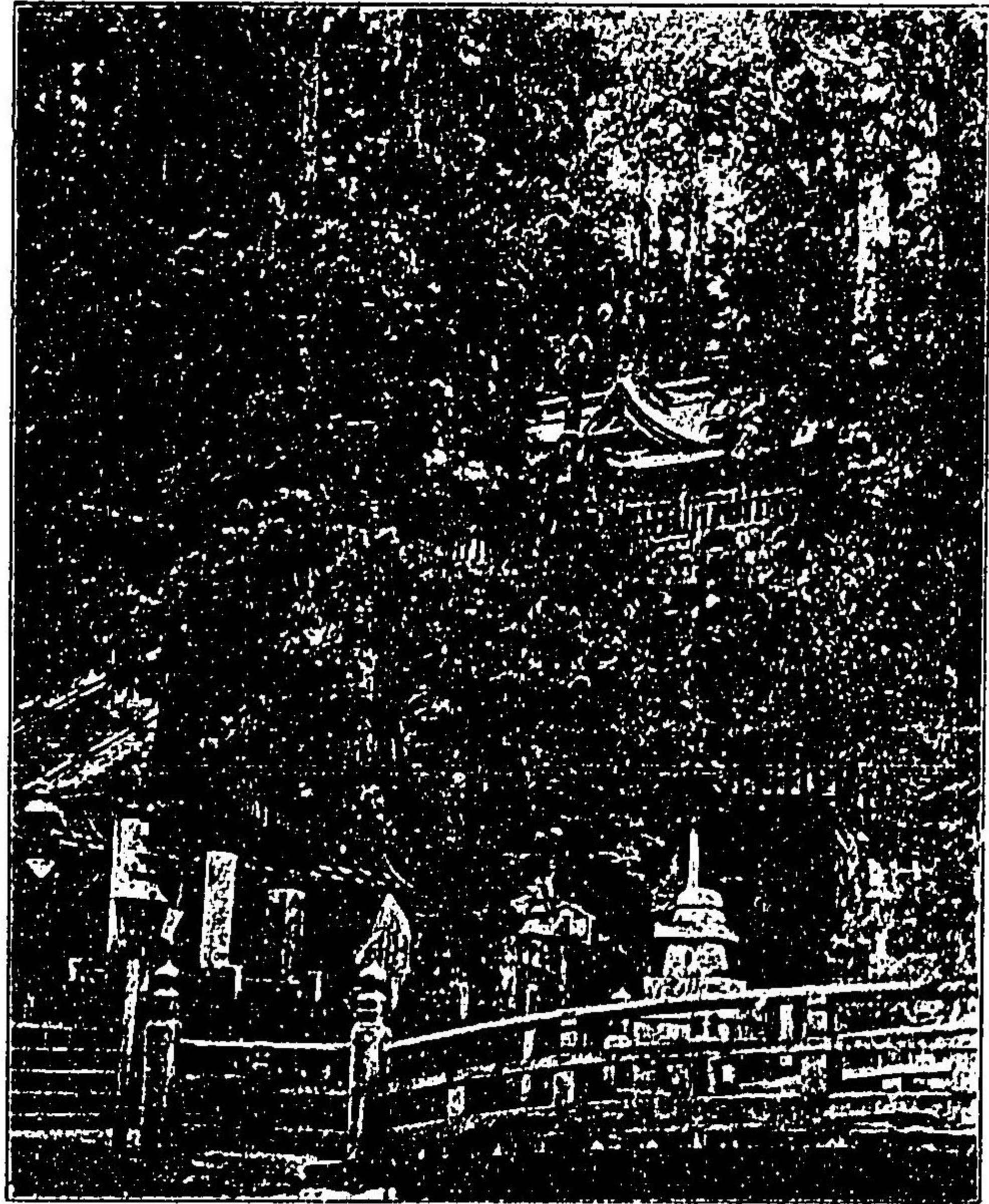
箱根芦の湖



湯本玉垂之瀧



小田原外郎



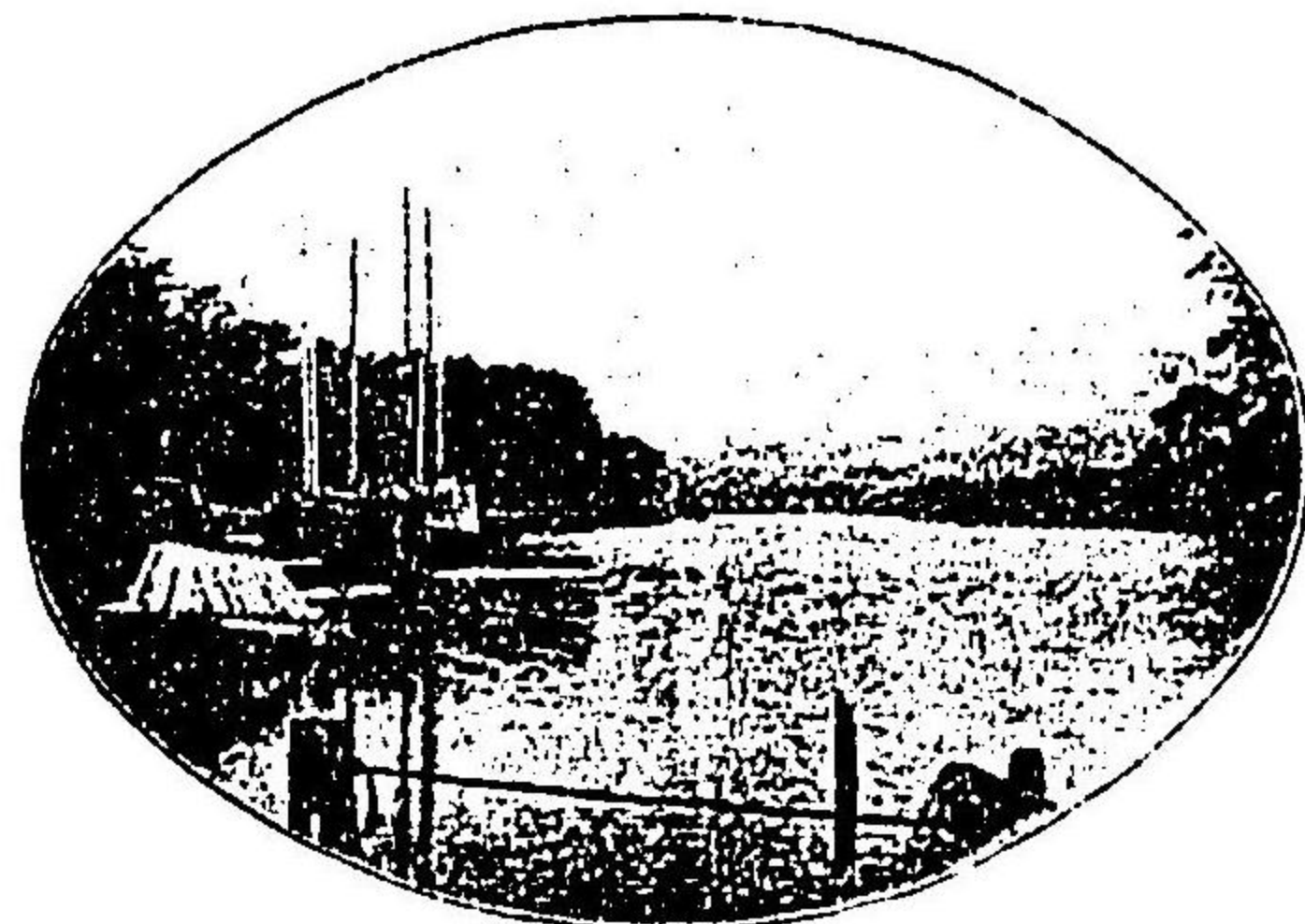
道了社



伊豆網代湊



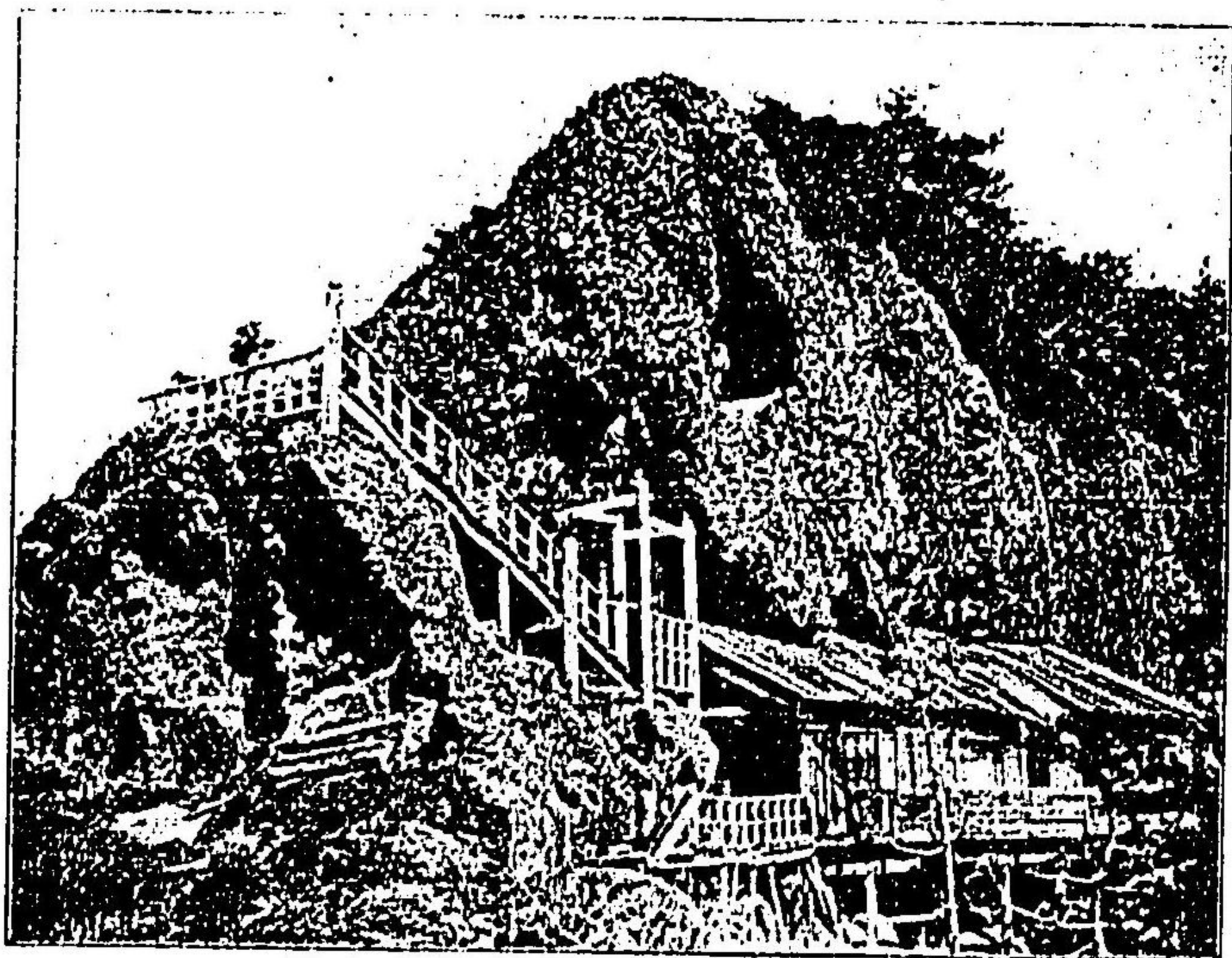
乙女峠より富士を望む



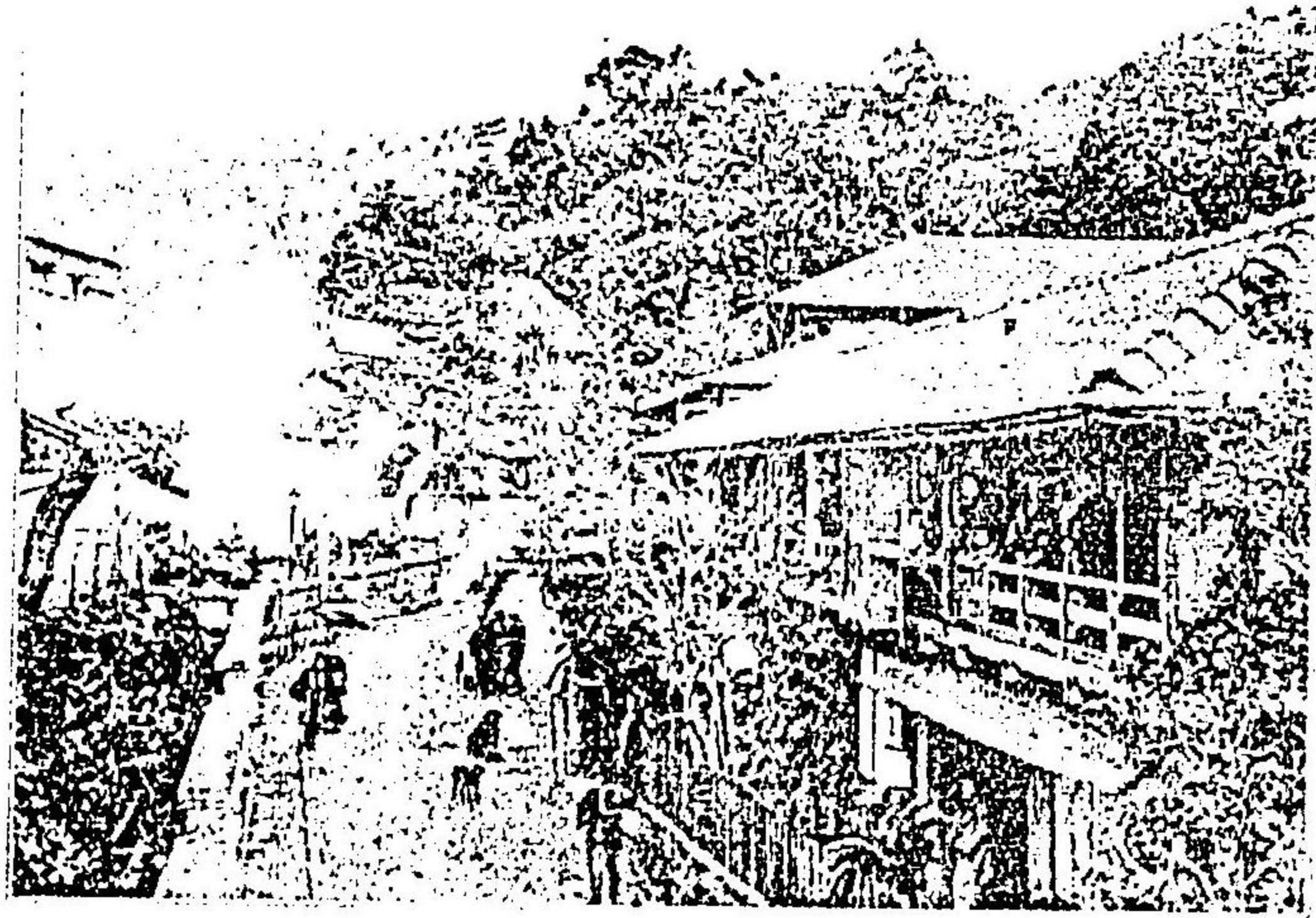
浦の子田



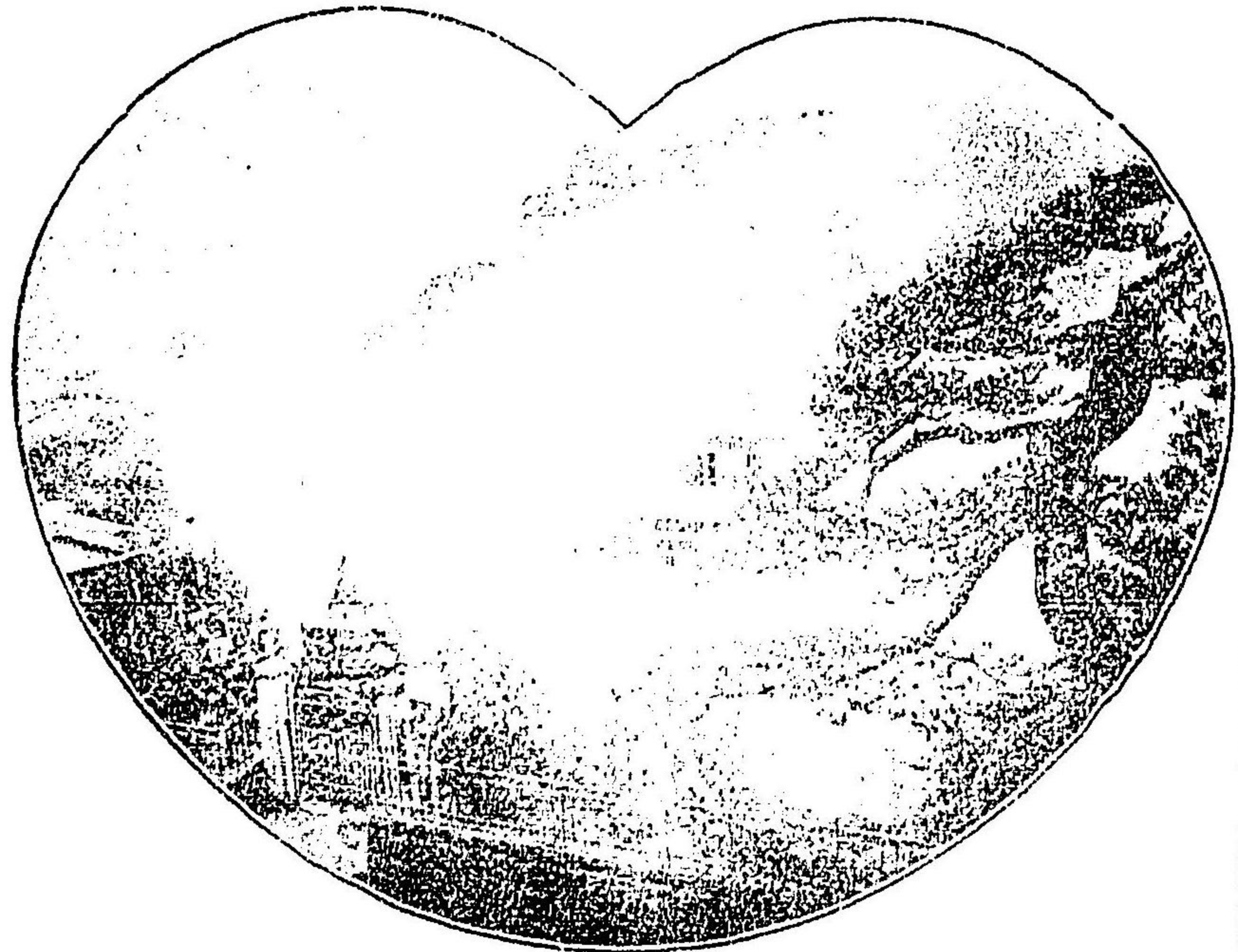
松見物道入東伊



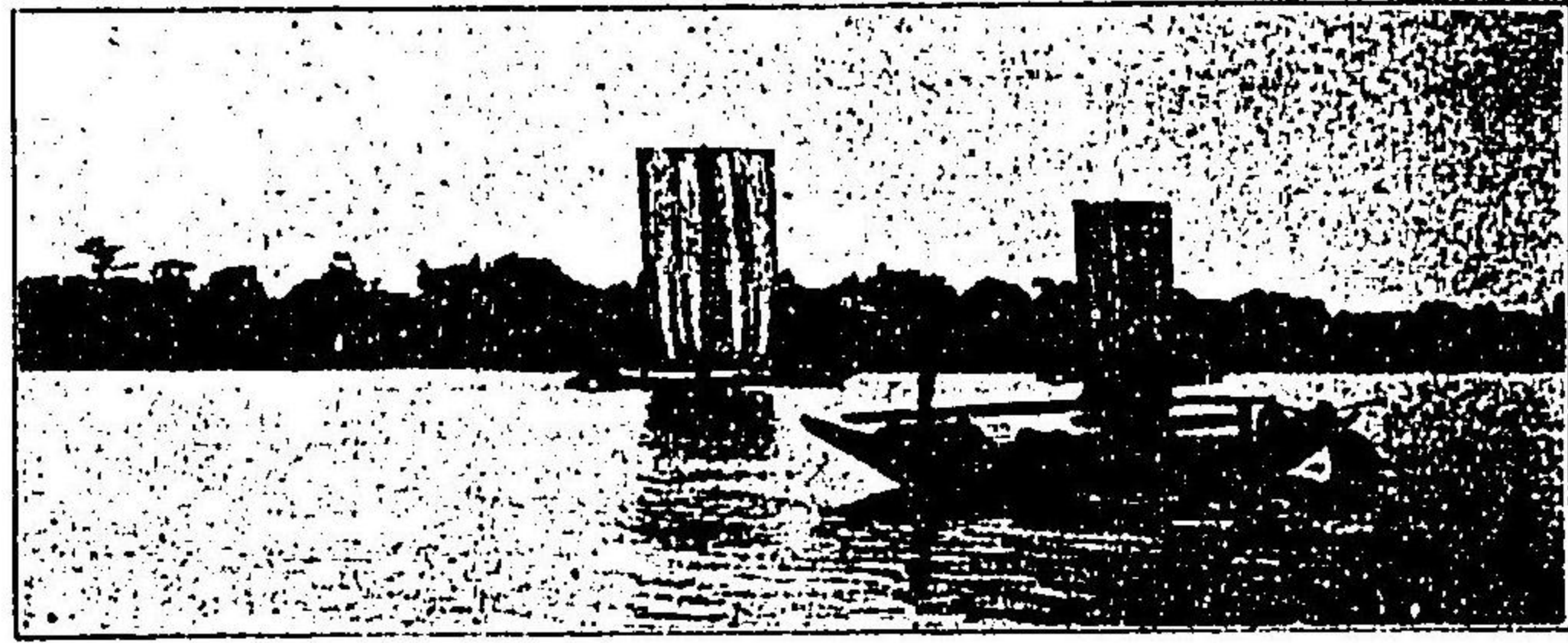
東伊豆伊



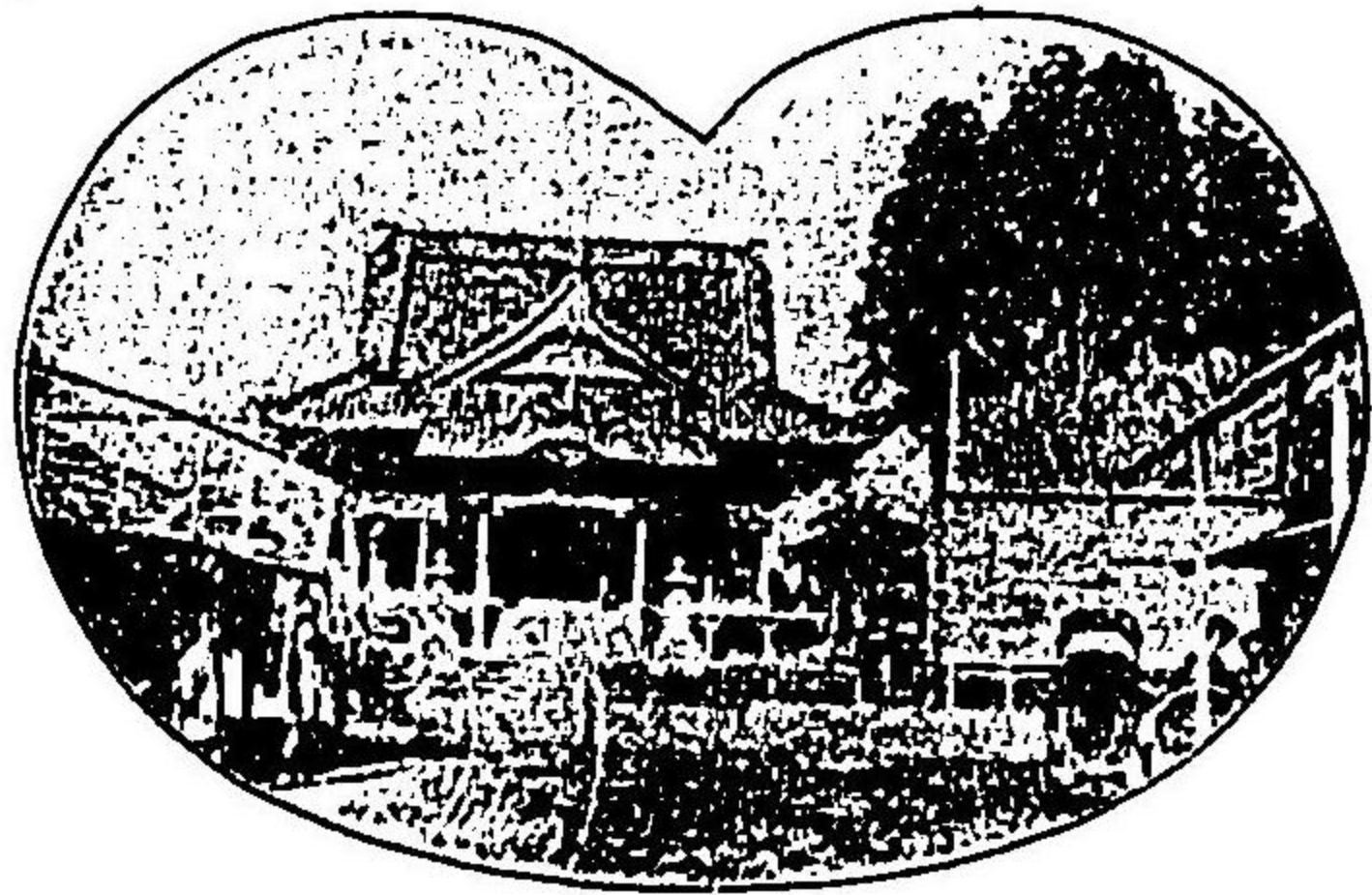
宿泉温湯熱



湧湯湯大湯熱



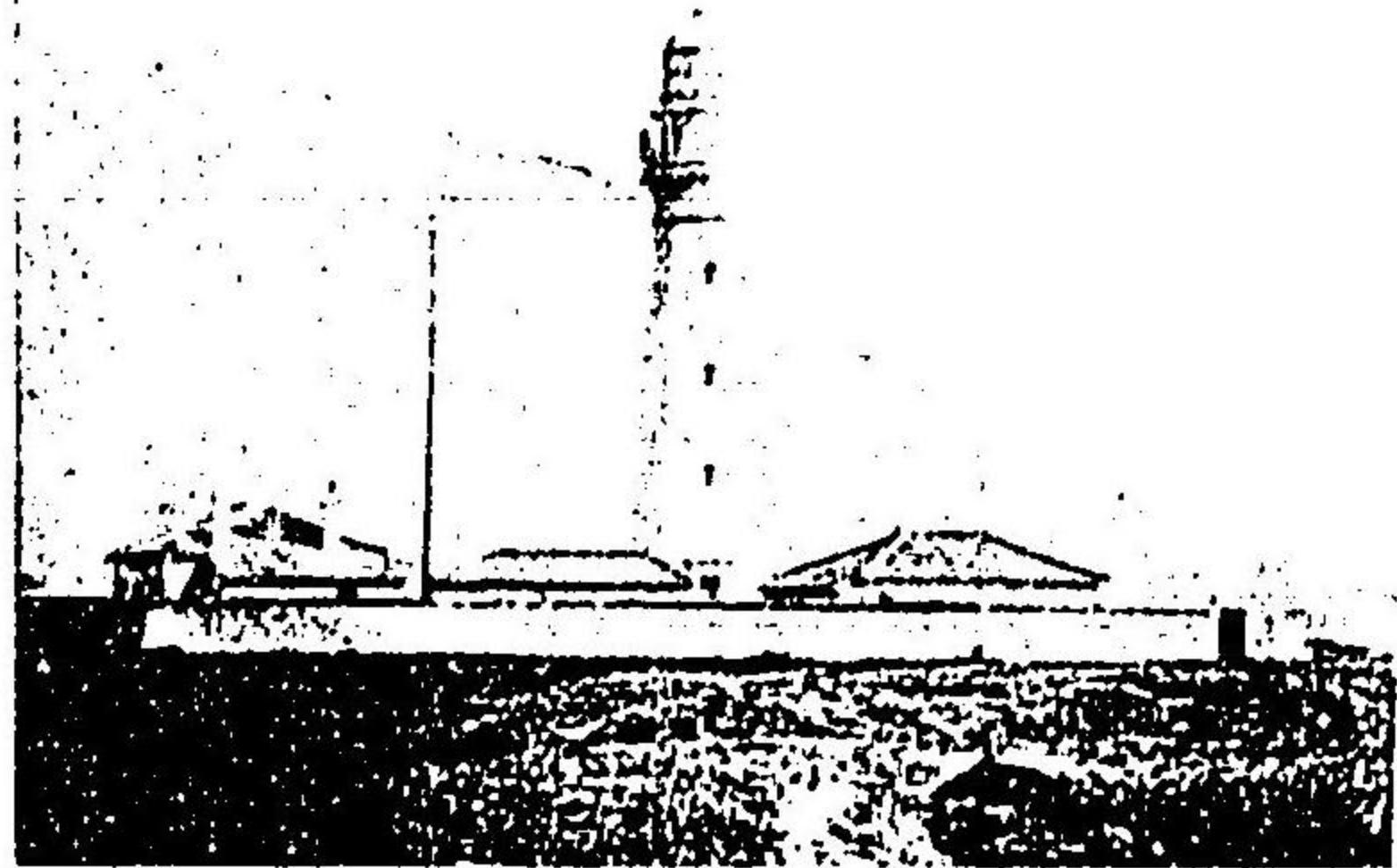
利根川



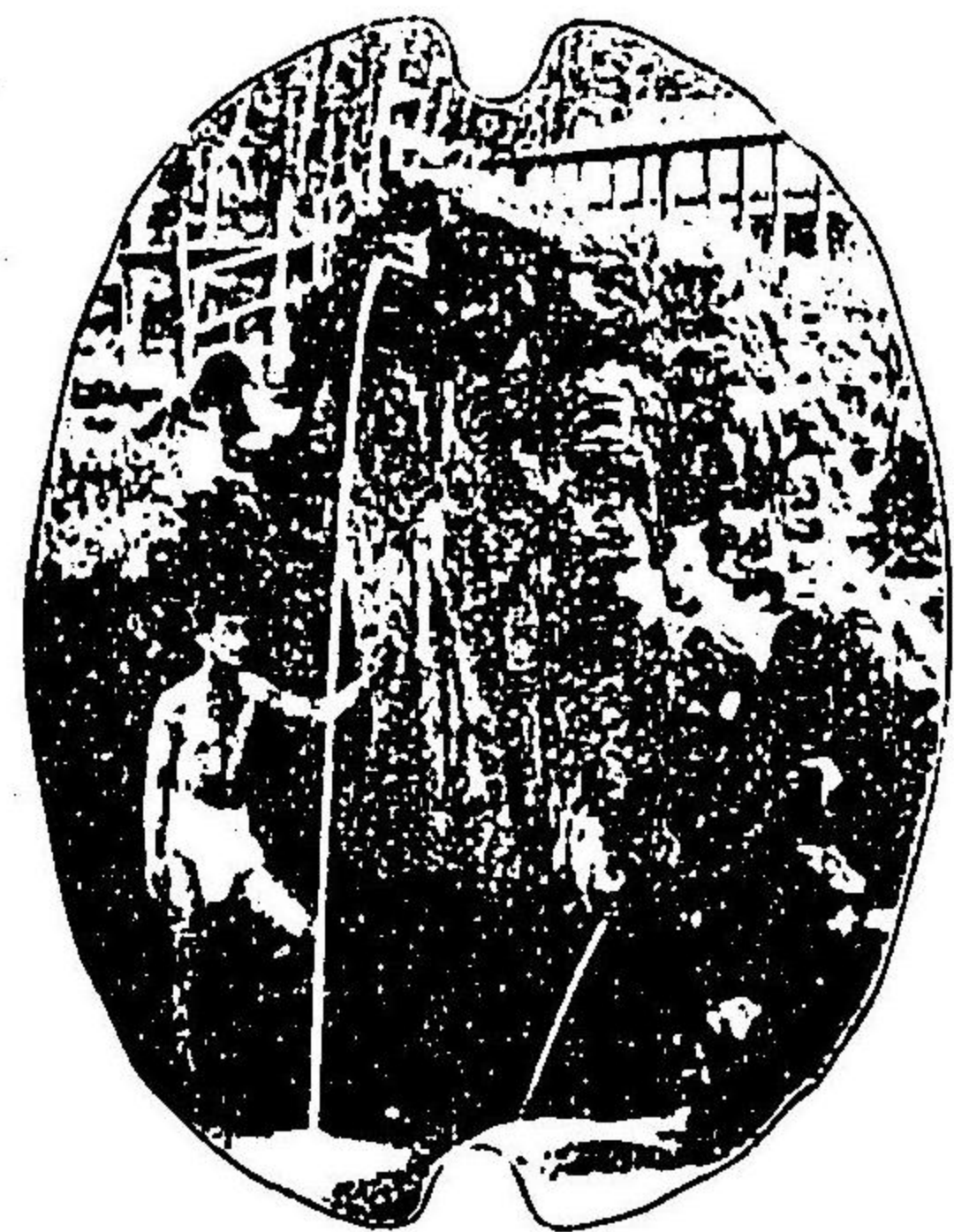
宗吾神社



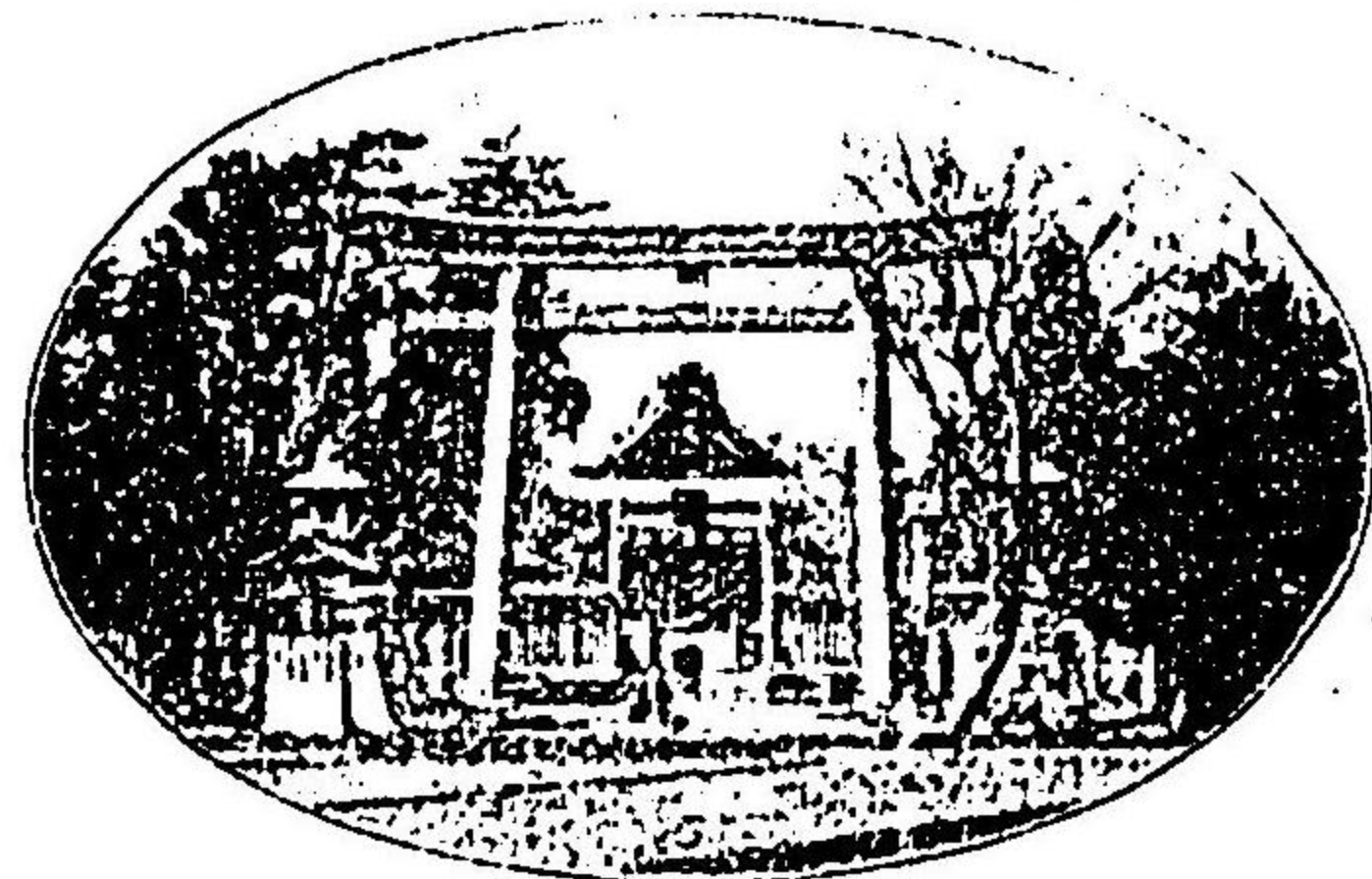
銚子海濱



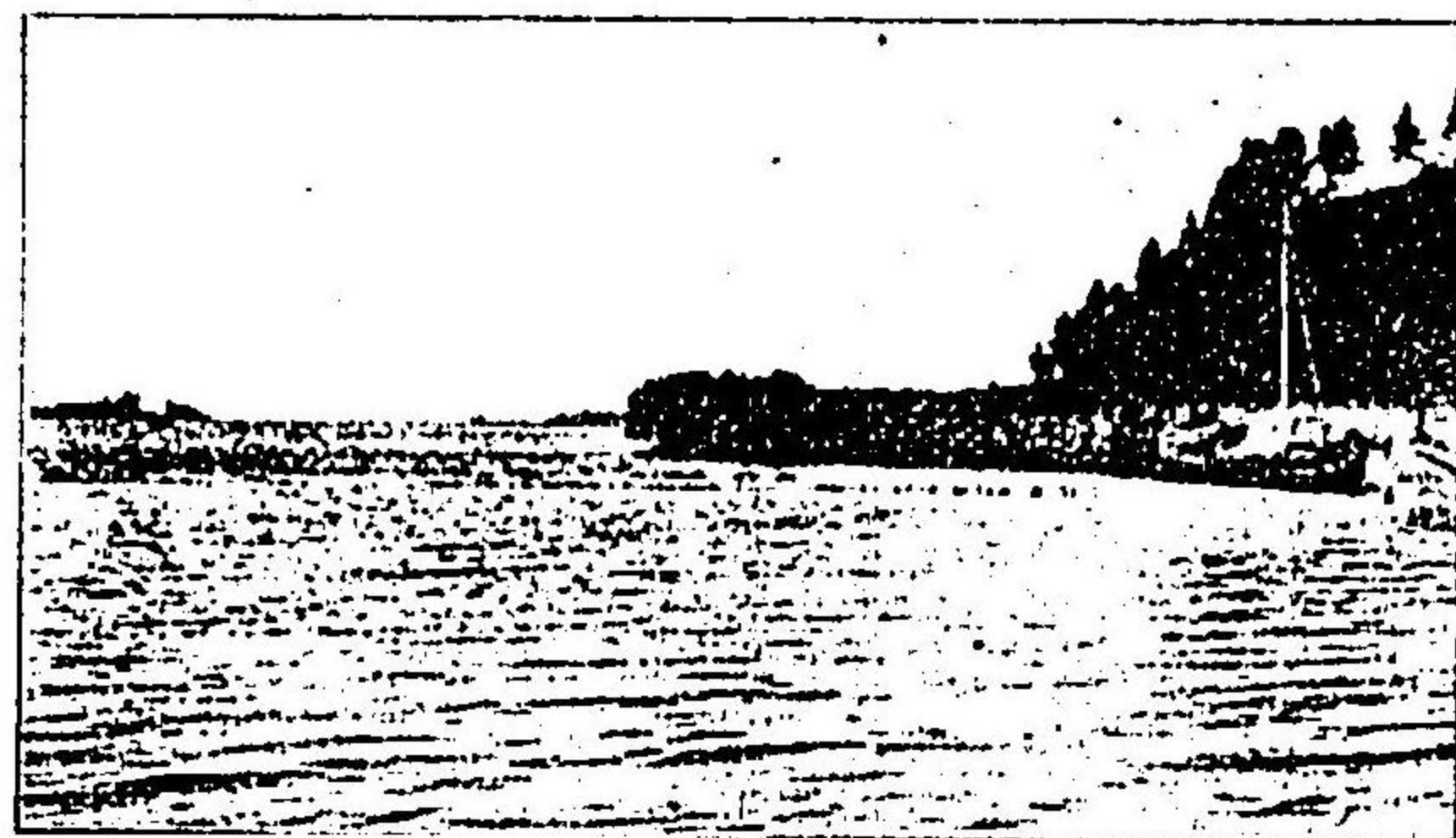
犬吠崎燈臺



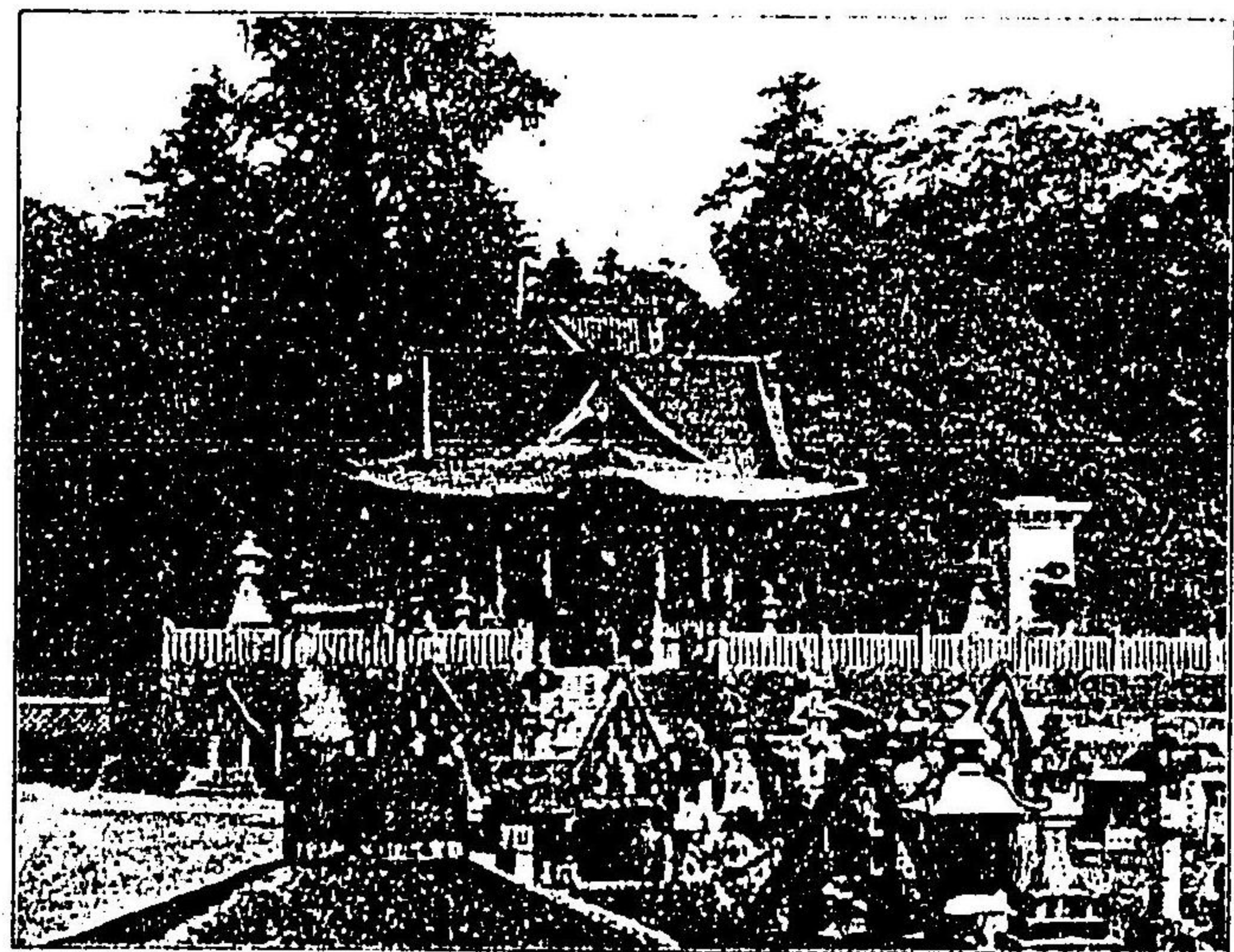
海泉館の滝



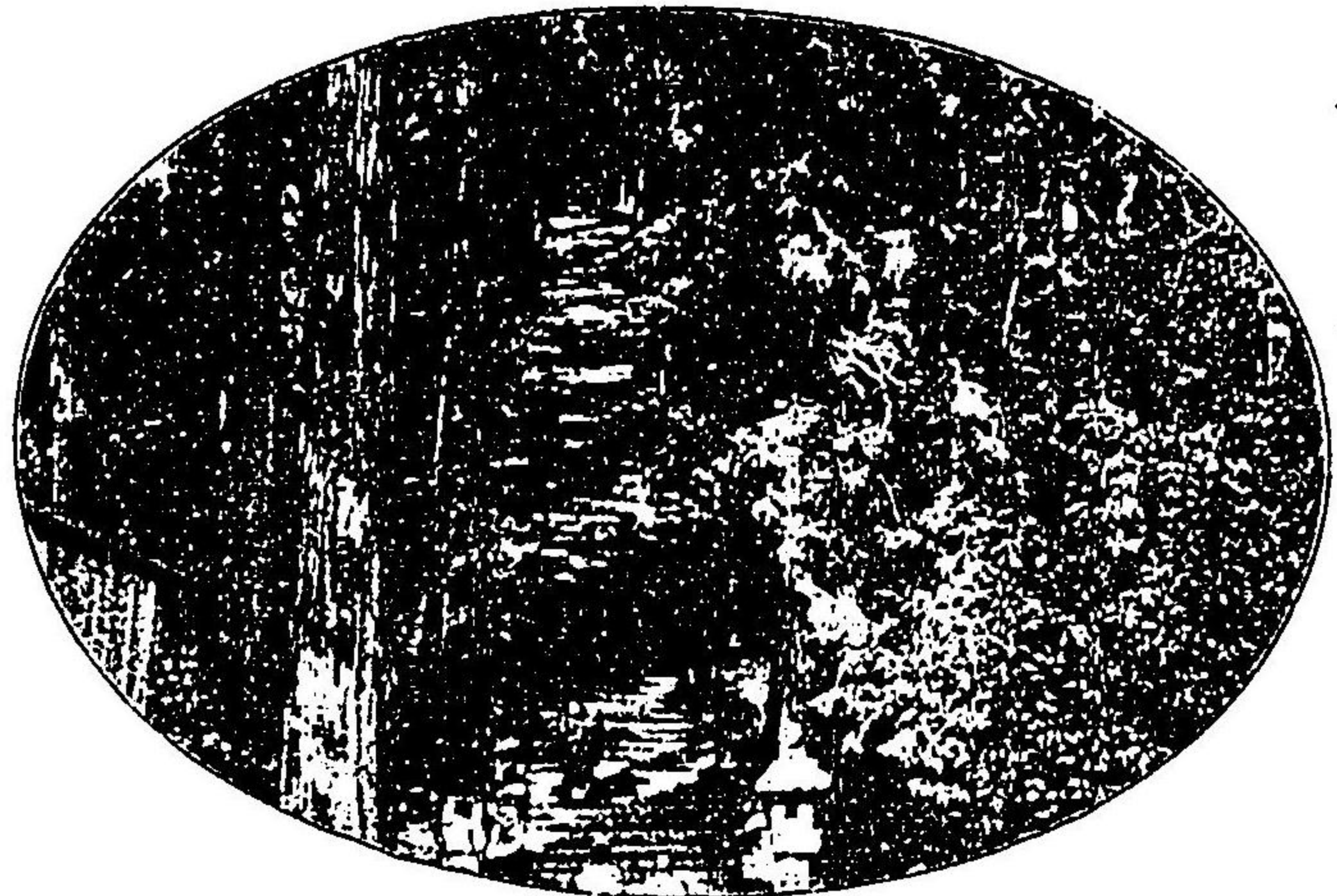
小帝神社



印旛沼



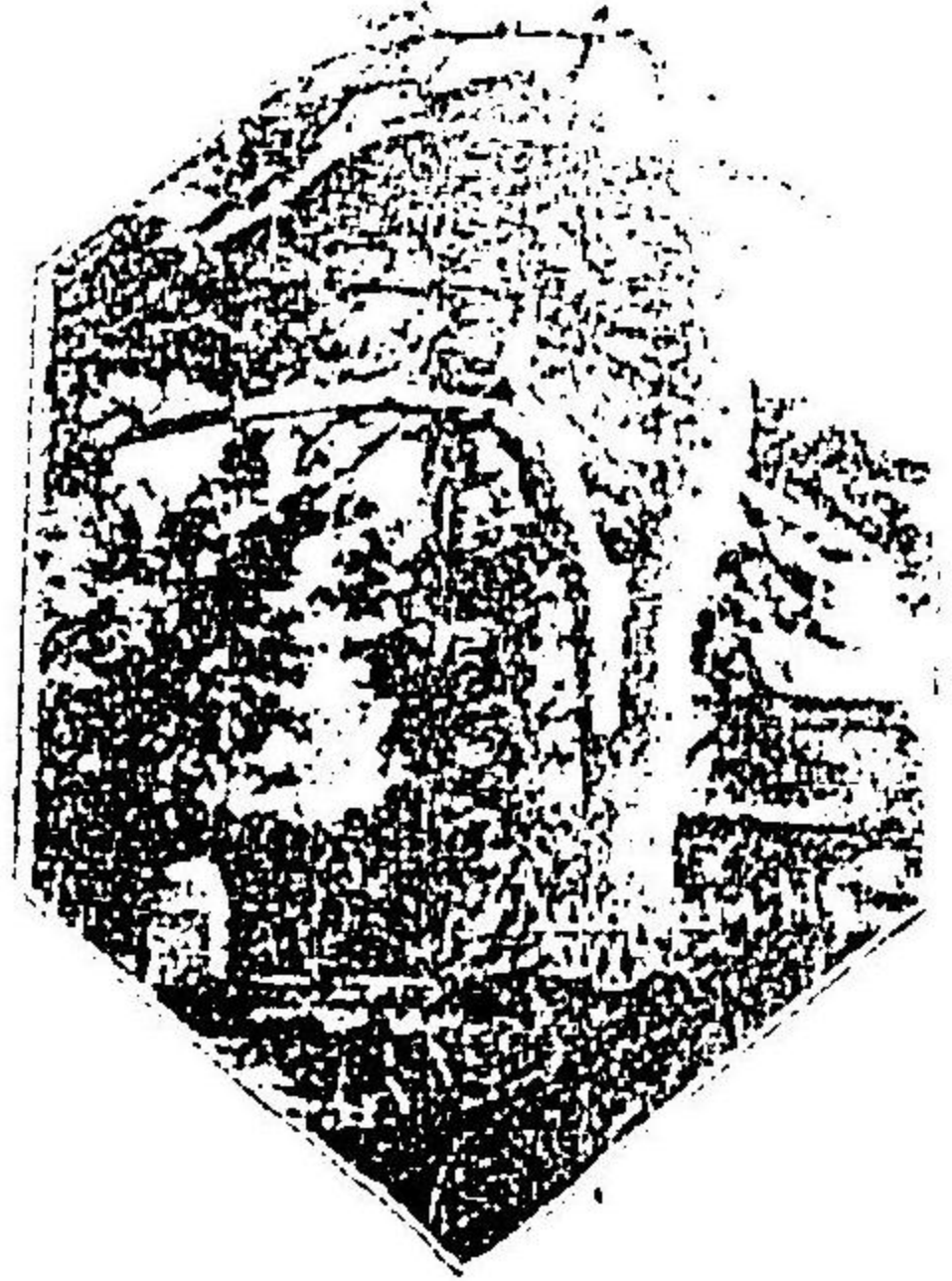
成田不動尊



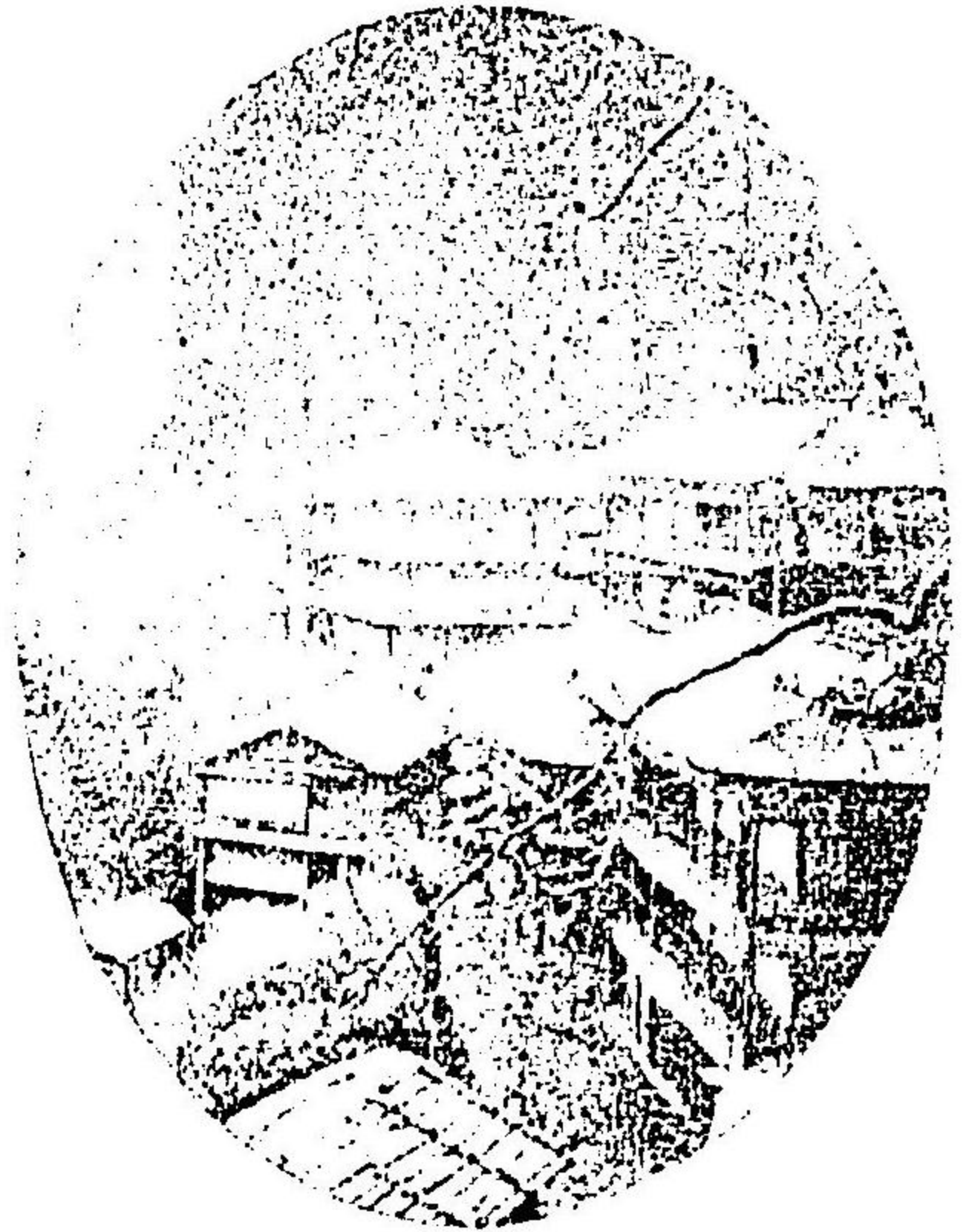
如鏡石段



日光勝降の流



松の蔭御所天皇



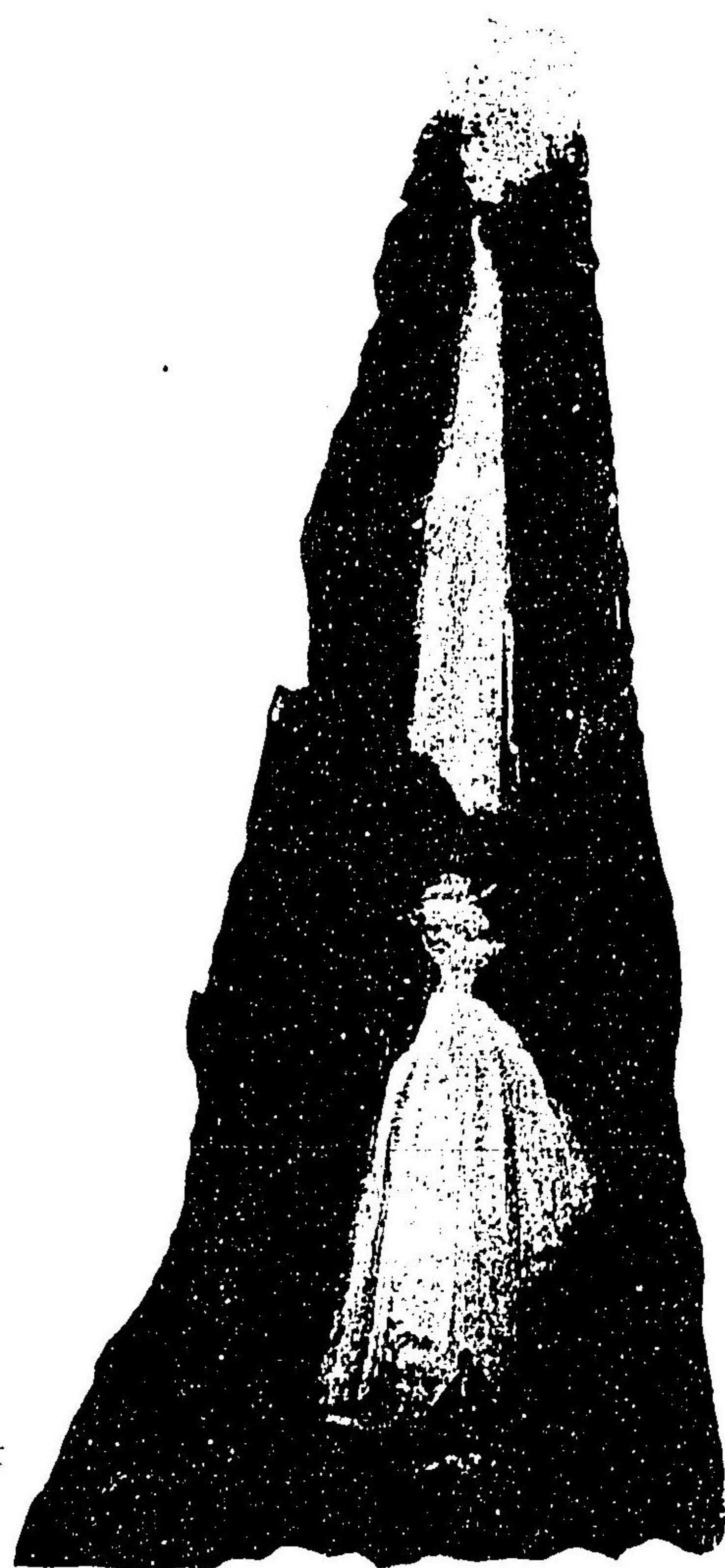
宿泉温厚地



門石山表姓



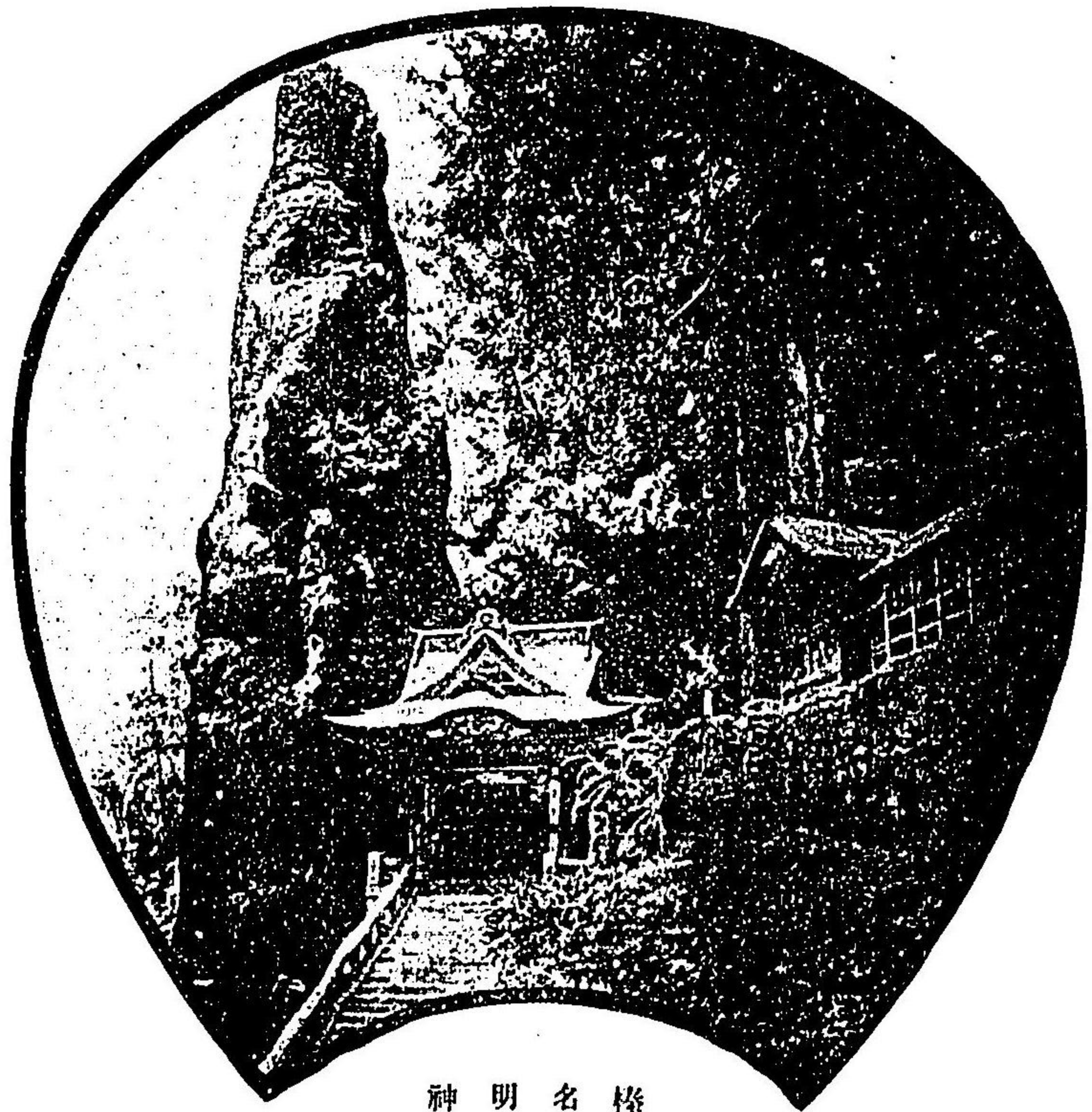
宿原の温泉



伊香保船尾の瀧



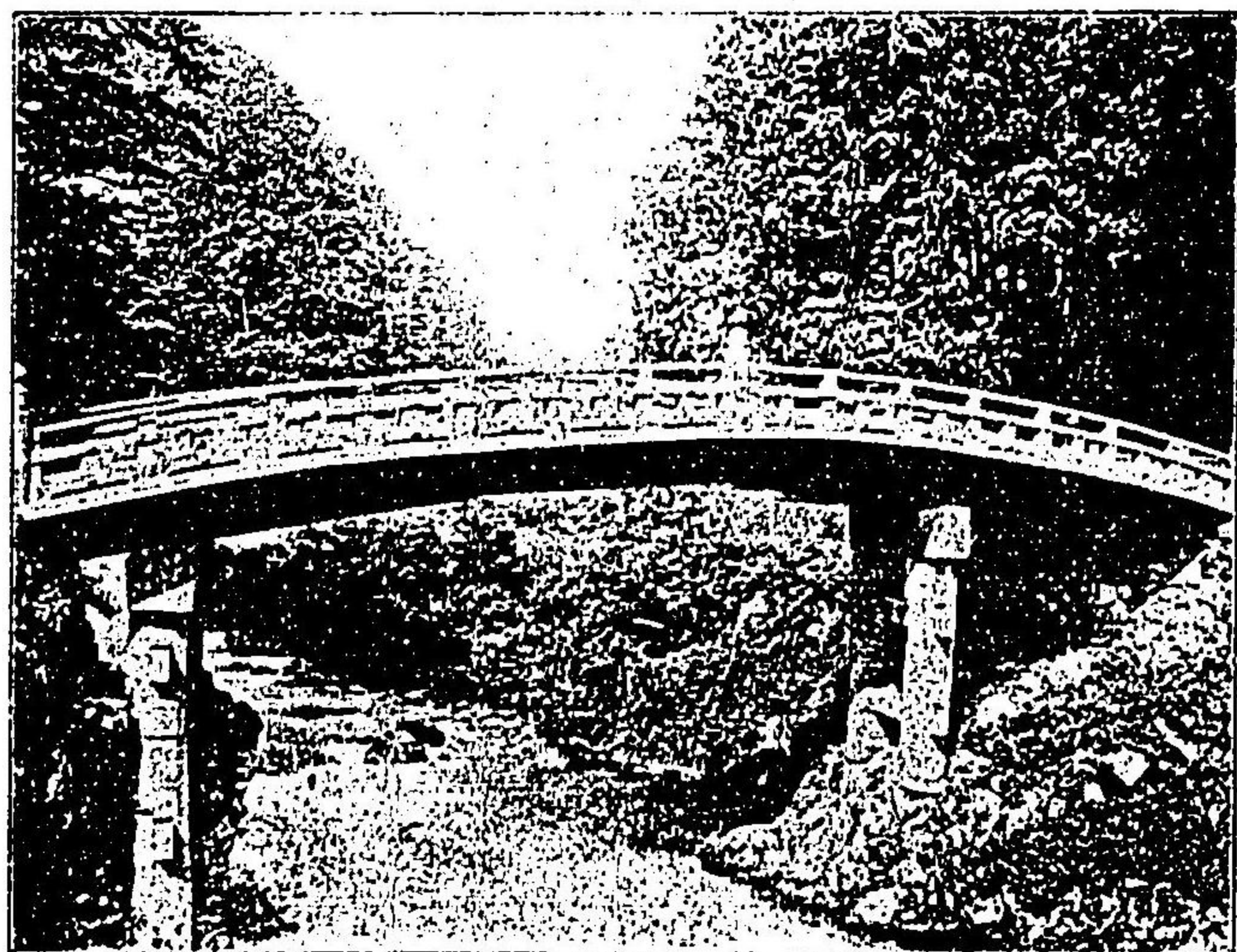
遠原



神明名樺



伊香保温泉場



日 光 神 橋



日 光 陽 明 門

漫遊之友

相摸

鎌倉

鶴岡八幡宮

鎌倉山の星月夜と唄はれて、緒顔短褐の阪東武者が、
 鎌倉を列ね銚子を並べ、軒昂として來往したりし、當年
 の豪華今想ふ可らずと雖も、月沈みて星斗闌干たるの
 時、夜氣冷やかにして衣袂の轉た寒きを覺え、蟋蟀露
 に咽むで古を鳴くを聞くもの、徐ろに古郡府の傍の行
 佛の間に横はるを覺ゆべし。
 長蛇の走るが如き鐵軌は、大船より左折して駒立山を
 望み、蜿蜒として一路鎌倉に通ず、驛の在る所は即ち
 雪の下、直ちに鶴岡八幡宮に詣すべし。

祠の祭神は應仁天皇神功皇后大仲媛命あして、今國
 幣中社に列す、康平六癸卯の歲源賴義之を鶴ヶ岡に
 勸請せしより、百三十星霜を経て、建久四年の春、源
 賴朝地を雪の下に卜し、祠を此處に移して輪奐の美を
 極む、結構壯嚴にして轉た人をして當年の豪志を想は
 しむ、凡そ士女の湘南に遊ぶ者、必らず先づ鎌倉に來
 り、鎌倉に來る者必らず先づ此祠に詣る、故を以て境
 内賣茶の小亭あり、夏は氷を齎ぎ、冬は温湯を勸む、
 就いて羸弱の足を慰すべし。
 一帯の白沙銀を敷けるが如き由比ヶ濱の、青松翠を滴
 らすの間を過ぎ、一の華表あり、更に二の華表の下を
 徑りて詞前に達す、池あり、千古の水を湛へて清冽掬
 すべし、池に石橋を架す、其形稍數詞に似たり、橋を
 渡りて行く事數十歩にして莊重なる一殿宇あり、これ
 神樂を奏するの所、急激なる石燈は其背後より起る、
 燈高さ數十級、之を攀れば殆ど胸を壓するが如きを覺
 ゆ、燈前の東方お當り下の宮なる者あり、聖天子仁德
 天皇を祀ると、人呼んで靜の舞殿といふ、史に稱す、

源九郎將軍謀に會ふて頼朝と不和なり、其千仞の功を拵て、京洛の間に彷徨す、途吉野に入りて風雪に拒まれ進退殆ど谷まる、兎僧覺範等之を擁して其首を獲むと欲す、忠僕佐藤忠信偽つて高祖の紀信に擬し、力戰して僅かに義經を逃れしむ、時に義經の妾に靜なる者あり、其始白拍子たり、技を以て客に媚ぐ、偶義經と親しみ、相馴れて其妾となる、貞烈にして節操あり、併て土佐坊昌俊の義經の堀河の第を襲ふに當り、靜奇智を以て之を防ぐ、自來流離困頓の間未だ暫らくも將軍の側を去らず、從ふて吉野に至る、義經衣川に逃れんとするに當り、揮つて靜を去らしむ、靜歎歎忍むで之れに従ひ、辭して郷に歸らむとす、偶頼朝の獲る所となり、鎌倉に致る、已ふして頼朝鶴岡に詣す、其室政子靜の踏舞を能くするを聞き聘して之を見むと欲す、靜泣いて辭すれども許されず、即ち曾て穿つ所の錦袍を褰り、玉容寂寥として立て舞ふ、座に將軍あり、威嚴烈日の如く、側に政子あり、侮蔑して之を看る、其四方に環視するの貌猶は、曾て郎の副使に従ひ

て犬馬の勞をいたしたる者、今や主客所を異おして、伎を其前に賣らざる可らず、之をしも忍ぶべくんば、何者か將た忍ぶ可らざらむや、名媛が錦腸破れて寸断せんとす、泣かんと欲して泣く能はず、涙を嚙むで立つ、然も其毅然として伎を望むの時、胸中の自から豁然として開くあるものは、茲に將軍の激烈たる權威を弄せむと思へばなり、五人の嬌軀何ぞ其勝の大なる。靜の立て舞ふや、和田堀原の徒之に和せむと欲す、靜即ち語て曰く、「賤や賤賤の苧環線返し昔を今になすよしもがな」と、諸ひ止むで將軍を見る、將軍瞋目して怒るの色あり、靜即ち滿座の貌を一瞥して亦語ふ、諸に曰く、「吉野山峯の白雲踏分けて入りにし人の後ぞ戀しき」と、微笑を脚むで嫣然たり、之を語ふ事三聲、嬌喉宛轉として玉を轉するが如く、踏舞翳々宛かも天女が羽衣の曲に似たり、其語は即ち郎を慕ふの意にして、殊更に愛慕止み難きの意を示すもの、これ當年の烈婦が心意氣に非ずや、其虎を搏ち獅を屠すの將士を弄する事恰も孩兒を弄ぶが如し、何ぞ其意氣の壯なる、

其遺蹟今尙存して、茲に烈婦の嬌魂を忍ぶ可し。石磴を登り悉せば廟門あり、相間に八幡宮の額を掲ぐ、傳へ言ふ良想法親王の筆と、磴の左方に喬木あり、高さ十數丈、亭々として空を凌ぎ、樹幹に數房の乳を垂る、者、之を大公孫樹となす、此樹の下は曾て頼家の遺孤公曉が、躍つて將軍實朝を刺せし所、陰鬱として尙鬼氣の人を襲ふを覺ゆ。

本社及び拜殿は樓門の裡にあり、廻廊之を繞りて莊重の觀を究む。昔豊太閤が晒つて其背を撫し、斗牛の意氣を吐露したる、源右府の木主は白旗の社に在りと、社は拜殿の東方にして、即ち源頼朝の靈を祀れる所、社前に一小池あり、夏時は荷花露を脚むで馥郁の香を放ち、紅白相交りて漫りに情を牽く、池畔亦陰石と陽石とあり、之に詣するに誠意を以てすれば、乃ち好配を獲と、蓋し東道者流の言なり。

●頼朝屋敷

頼朝屋敷と稱ふるものは、滑河を渉りて數町、寂寥たる村落を行悉したる所、空漠なる田圃あり、俚人呼ん

で源右府の館趾といふ、東鑑を案するに、治承四年十二月頼朝上總介平廣常の第より移つて新造の館に居ると、即ち此地たり、當年六十餘州を掌握したりし英雄の遺跡、今空しく麥秀で、昔々たるを見るのみ。

●公方屋敷

更に公方屋敷なるもの二階堂村に在り、これ足利尊氏の叛を圖りし所にして、次いで左兵衛督基氏關東の管領を以て之に館し、爾來滿兼氏滿持氏成氏等傳承して之に住す、里人京師の將軍を呼ぶに習ひ、借かに公方と稱へ、第を公方屋敷といふ、其南方に一小丘あり、飯盛山とは是、東に丘陵あり、起伏して駱駝の背に似たり、丘腹に巖窟を穿ち、窟中に冷泉の清冽なるものを湧ふ、大旱と雖も涸く事なし、これ當年洗馬の所にして、厩龍池月磨墨の如きも、屢々此處に水飼はれたりと、馬は人によつて尊く、水は馬によつて其名残れり、又奇といふべし。

●鎌倉五山

鎌倉の五山と稱するものは、建長寺を以て第一とし四

覺寺之に次ぐ、壽福寺淨智寺淨明寺又之に次ぐ、蓋し足利義滿の至徳三年を以て其順位を定めたるなり。建長寺は巨福山といふ、小袋阪の側に在り、其建長元年の創立に成るを以て建長寺といふ、開山の祖は宋の高僧大覺禪師なり、世に百貫點と呼ぶる、匾額は山門に掲げられたり、蓋し巨福山の巨字に一點を加ふるより斯くは呼ぶる、といふ、筆は海一山の揮ふ所なり、此寺規模頗る宏大にして、寺域殆ど五千二百有餘坪、山門には嘗て十六羅漢の像を安置したりしが、今散逸して僅かに其半を止むといふ、門の構造は宋制に模擬したるを以て、一見頗る他と異なり、門を入り數十歩にして佛殿あり、安置する處の地藏尊は應行の刀にして長僅かに一寸五分、傳へいふ往古此地を地獄谷と稱し、罪囚を減するの所たり、執權時頼の代に及び、濟田某なる者あり、罪を犯して將に斬に處せられんとす、偶々刀手白刃を執つて後に在り、揮つて之を斬らんとすれば、其首堅き事金石の如し、鏘々の音を發して刀を壞る、刀手怪しんで之を問へば、某茫然として

曰く、我日常地藏尊を信奉し、常に其尊影を頭髮の裡に藏ひ、今尚髮の間に結ぶものこれなり、想ふに御影の加護を蒙るなからむやと、即ち出して之を示す、時頼聞いて特に濟田の罪を免し、佛殿を建て、其像を祀ると、佛陀も亦罪囚を曲庇するか。堂の東は即ち觀音堂、古色味ふべし。俯して壽山門を入り、左折すれば開山堂に至る、堂内道隆大和尚の像を安んず、堂後は即ち佛光塔、亦開山碑あり、西を擁して丘陵を負ふ、後山茂林の間開山禪師の坐禪窟あり、更に一窟の暗澹裡に存するもの、一遍上人の坐禪窟と稱す。圓覺寺は建長寺と並び稱せらるる、古刹なり、西市場に通ずる街路に當り總門あり、亦臨濟の宗派に屬し、瑞鹿山といふ、開山は宋の佛光禪師にして、北條時宗の建つる所、實に弘安五年の創立に係る、寺域壹萬七千有餘坪、寺門の額は後光嚴帝の宸筆にして、又大光明寶殿の五字を大書せられたる宸額あり、佛殿に奉揚す、本尊は寶冠の釋伽如來、開山塔は本堂の西北數町の外

に在り、正續院とはこれ、此院は北條貞時の建立する所にして、佛舍利を收めたりしが、後ち開山塔となし、禪師の木主を安んず、寺に佛日庵あり、妙香池宿龍池虎頭石坐禪窟等亦見るべし、藏する所、時宗貞時高時の眞筆、足利義滿の書、南山自贊の畫像あり、亦足利尊氏書寫する所の法華經を見る、此島雄も時に可憐の志あり、寺僧に乞ふて觀るべし。扇ヶ谷の龜谷山なるものは、即ち五山の一なる壽福寺の在る所、此寺昔千光國師の開く所にして、本堂には陳和卿作の所の釋迦を安んず、本堂は西に一帶の松林あり、朝暮潮風の黒む所となり、蘇苔樹幹を點綴す、其背後に六丈の岩窟あり、窟窟といふ、窟中に牡丹花を描き、朝朝及び政子の塔を藏ひ、寺門を出で、東南に觀音山あり、これ望夫石のある所、昔島山重保軍に由比ヶ濱に會せむとす、其妻別離の情に禁へず、此石上に來りて遙かに良人の軍容を望むに、雲霧漠々として知る可らず、妻頻りに晏天の無情を悲しみ、涙闌干として慟哭身を毀り終に石上に死す、故に此名あり

と、望夫石の邊眺望絶佳にして鎌倉の風色雙眉の間に眺まり、山、谷、井、橋、呼べば應へんと欲す。淨智寺は龜ヶ谷に在り、開山の高德を宋の佛源禪師といふ、寺門の前は小袋阪に通ずるの途にして、明月院は其北に在りて相對す。本尊は釋伽無尼佛、又北條師時の木牌を安んず、開山塔あり、其後なるは甘露の井、即ち鎌倉十井の一なり、清泉にして氷よりも冷やかなり、門外にも亦湧湧する所の水あり、之をも稱して甘露井といふ、孰か眞なるを知らず。金澤道の北淨明寺村の東に淨明寺あり、退耕和尚の開山にして、開山塔には和尚の木主及足利直義の像を安んず、境内幽邃にして松樹多し、千古の翠色露滴らむとす、亦稻荷の祠あり、鎌足の勸請する所と、此地は元靈鎌を納めたる鎌倉山の舊跡なり、其稻荷の祠あるにより、山號を稻荷山といふ。

鎌倉宮

鎌倉宮は大塔宮護良親王の靈を祀る所、鶴岡の祠を去る五町有許にして二階堂村に在り、實に明治二年七月

の創設にかゝり、官幣中社たり、社殿淨麗一の丹塗粉壁を見ずと雖も、自ら神威の近づく可らざるものあり、賽者をして襟を正し容を改めしむ、社殿を繞りて、背後に石窟の暗澹たるものあり、窟門狭うして塞ぐに柵木を以てす、其内蘆約八疊を布くべし、これ曾て英烈なる護良親王が怨を吞みて死せし所、親王は後醍醐帝第三の皇子にして、金枝玉葉の身を以て、雨に浴し風に梳り、屢々逆臣の追躡する所となり、或は十津川の險に據り、或は大般若の裡に隠れ、遂に帝をして再び天日を回らさしめたるの大忠良たり、楠氏の忠も新田氏の義も、亦親王の事に感奮したりしにあらざらんや、然して其功名の赫赫は、偶々以て足利氏の悪む處となり、讒口蜜よりも甘くして、一朝圍固の人となる、其宮を此處に奉ずるの逆臣は何者ぞ、これ大逆無道なる足利直義たり、猛獸蛇蝎も猶棲息する能はざる此土牢の裡に幽囚する、何を其殘忍酷薄なる、然も猶言ふに忍びざるものあり、直義の將に鎌倉を走らんとするや、其臣淵邊義博を遣はして宮を此處に弑さしむ。義

博の命を啣みて至るや、宮は燭を執りて法華經を讀誦す、其義博の瞋目して迫るを見、汝我を刺さんとするかと蹶然として立つ、義博直に之に迫り相搏て宮を介し、小刀を執つて刺さんとする、宮頂を縮めて鋒刃を啣ひ、刀折る、更に七首を脱いて之を刺し、首を鹹して去る處、臣子たる者之を聞いて誰か怒髮の冠を衝かざるあらむや、陰鬱たる此土窟の邊、尋ね來りて低徊去る能はず、徐ろに暗涙の襟を沾すと覺ゆ。

●火 燒 地 藏

俗に所謂火燒地藏は覺園寺の境内に在りて、二階堂村鷲ヶ峯の麓なり、鷲峰山といふ、永仁四年北條貞時の建立する所、山の頂きを尋ねて棟立の井を得、即ち十井の一、昔時高野大師の穿ちて關伽の水を汲しものといふ。

●荏 柄 天 神

荏柄天神の社は二階堂にありて最も舊祠たり、祠に束帶の菅公像を祀り、境内梅樹多し、花時は積郁として暗香の人を撲つものあり、社前の關取場は、北條氏直

の關を此所に据えて關錢を徵收し、以て社殿造營の費に充てたる所といふ。

●錦 屏 山

錦屏山瑞泉寺は、又鎌倉に於て有名の古刹たり、二階堂の東にあり、足利基氏の建立する所と、佛殿に釋尊の像を安んず、開山塔には夢窓國師の像及び基氏氏滿の木主を收む、後山の阪路を上る事十八曲、遍界一覽亭の趾あり、俯して蒼海の渺茫たる所、ノへの帆影を指點すべし、山を下りて池あり、天女庵の舊蹟を存す。

●滑 川

曾て名史青砥藤綱が數錢を吝みしを以て今は名あるもの、其源を東鎌倉の十二ヶ所村に發し、吠間の間を貫流して雪の下を過ぎ、大町に至りて海に注ぐ、上流は胡桃川と稱し、其公方屋敷の南に來るに及び、始めて滑河の名あり、坐禪川夷堂川閻魔川は其下流の名なり、延長一里十餘町と、藤綱の宅趾は川の西畔にあり。

●北 條 屋 敷

三鱗の旗印四海を風靡したる北條氏の館趾は、今寶戒

寺の裡に在りて、二階堂の小町に存す、境内の東南に葛西ヶ谷あり、即ち古へ英勝寺の堊の天に發えし所に於て、驕暴なる入道高時が誅に伏したる地なり。

●比 企 判 官

曾て北條氏と權を争ひ、空しく其術中に陥りたる判官比企能員の第趾は比企ヶ谷に在り、趾の存する所今は寺となり妙本寺といふ、僧日學の開基する所、寺城廣き事四千六百坪、境内に比企氏の墓あり。

●葛 原 岡

渺たる小丘陵の特に人を牽くものは、これ慨世の俊傑右少辨後基を斬りたる所なればなり、化粧坂の邊深谷の内、野草茫茫として丈を没し、狐狸盡走りて人に戯ぶるの地、今は葛原岡神社を建て、其靈を慰す、當年此氣慨ある英傑が、忠僕後藤助光を麾きて絶命の詔を與へたるの跡、詣し來りて涙潸然たるものあり。

●化 粧 坂

扇ヶ谷を出て、葛原岡に到る間一阪路あり、これ屢々史によつて著はれたる化粧坂なり、其名の起る所以は

曾て平門縉紳の首級を此處に於て粉飾し、以て寶驗に供したるが爲なりと、元弘三年新田義貞の兵を分つて高時を攻めたるの所、當時は古松六株あり、今僅かに二三の稚松を植ゆるのみ、六本松の名は僅かに残り。

●景清土牢

上總七兵衛平景清が、齒を噛み目を瞑らして憤死したる土牢は、化粧阪の麓に在り、窟濶僅かに丈許、土堅くして石の如し、之を打てば鏘々として鳴る、窟の邊に向陽庵の舊跡あり、庵は景清の女某、父の追福を祈りしものと、劇に演ずる孝女人丸の、彷彿として來り泣くかど疑はる。

●源氏山

名のみ優しき源氏山は、龜ヶ谷に横はる丘阜なり、其御旗山の稱あるは、前九年の役八幡公が旗を此處に植て、戦ひの必らず利あらん事を祈りしによると、山を下りて東方に英勝寺あり、扇ヶ谷に屬す、在昔太田道灌の住せし所、寺に運慶作る所の阿彌陀佛を安んず、

左右に善導法然の木主あり、山門の匾額は後水尾院の震筆にして英勝寺の三字を書す、境内幽邃にして清涼椽に踞して西北を仰げば、源氏山の翠嵐楹頭に落ちんとす。

●由比ヶ濱

雪の如き白沙の浪を浴びて彌々清く、雷の如き青松の風に梳りて彌々翠なる由比ヶ濱は、八幡社の華表より僅かに數百歩、曾て頭大公が悠然として千鶴を放ちたる所、今僅に閑鷗の逍遙するあり、風光の明媚なる蓋し鎌倉に冠たり、海濱院あり、これ横濱の紳商が相謀りて建てたるもの、専ら遊覽の客が宿泊に便せり其他縉紳の別墅多く、時に小籠洩る爪琴の、松吹風和するを聞く、峯の嵐か松風か尋ぬる人の爪音かど、嗟嗚野の秋を忍ぶ仲國の今も在るべし。只其俗化するを奈何ん。

●裁許橋

佐介ヶ谷を流る、小流に裁許橋を架す、鎌倉十橋の一にして其名高し、此邊問注所の舊趾なれば其名ありと

或はいふ西行の杖を止めし所、故に西行橋といふと、孰れか是なるを知らず

●星月夜の井

鎌倉十井の一にして其名千古に冠たり、昔白晝星影の依稀として井底に映るあり、人呼んで星月夜の井といふ、後年土人誤つて鐵器を其中に落し、水沫四散して波紋を立てしより、星影空しく消えて終に見る可らずと、虚誕信すべからずと雖も、井泉玲瓏として列宿も將に影を浸さんとするかと怪まる、極樂寺村切通の畔、星月夜の井は残り。

●長谷観音

八幡の祠より西南半里にして近し、海光山長谷寺にあり、像高さ二丈六尺、十一面の尊像にして、名工春日の作と、堂内更に如意輪觀世音と、勢至菩薩と聖徳太子とあり、勢至像は島山庄司重忠の持佛なりしを、長谷寺に寄進したるものと。

●大佛

長谷寺を出で、北に淨泉寺あり、青銅の盧舍那佛を安

置す所謂鎌倉の大佛なるもの、長三丈五尺、坐像にして、膝の周圍五間半と、賽者試みに像の下に立てば、六尺の男兒をして、恰かも豆大たらしむ。此地もと圓分寺のありし所にして、往古は偉大なる阿彌陀佛を建立したりしが、地變に會ひて顛仆せり、今の像は建長四年に作る所と。

●稻村ヶ崎

亂礁沙を浴びて黒く、奇巖海を劈いて怒るが如きの奇勝は西鎌倉阪の下の海角とす、名けて稻村ヶ崎といふ元弘の昔新田義貞が金装の刀を抛ちて潮水を退けたるの遺蹟たり、濱の眞砂は渺茫として、由比七里に列なり、遠く江の島を雲烟の間に望む、阜あり、其形稻叢に似たるを以て此名ありと、今や縉紳の別墅多し、

●七里ヶ濱

古河公方成氏の兩上杉と武を闘はしたる古戰場、沙平らかにして砥の如し、阪の下より腰越に通ずる關東の七里程、松緑に砂白し、行逢川あり、日蓮上人遭難の時、使者の相會せし所と、又袈裟掛の松あり、上人の

法衣を掛けし所、老僧今亡しと雖も、老松依稀として當年を想はしむ。

●満願寺

七里ヶ濱の白砂を踏みて江の島に至るの途に腰越村あり、義經腰越狀なるものは、即ち此村なる満願寺に於て草せしもの、満願寺は龍護山と稱す、曾て元暦二年源九郎將軍平門を西海に懸して東上す、偶々梶原某の讒する所となり、誣られて鎌倉に入るを許されず、空しく此寺に館して阿兄の無情を恨み、僧辨慶に命じて陳情の書を作らしむ、句々凛烈秋霜の原頭に結ぶが如く、啾々として鬼の歎くが如く、幼婦の怨みを訴ふるが如く、將に無情の金石をも泣かしむべきの名文字たり、これを腰越狀といふ、跡を草するの時、翔ひて硯滴に充てたるの池水あり、硯の池といふ、池畔に巨石あり、辨慶腰掛石と、蝸家縦横、英雄が墮涙の痕を止む。

江之島

●龍口寺

七里ヶ濱より腰越の驛を過ぎ、行逢橋を去る五六町にして龍口寺に達す、龍婦の老松數株伽藍を擁して翠色深し、寺は文永八年九月十二日、僧日蓮の難に係りし所、削手刀を執りて將に高僧の首を刎ねんとす、忽ちにして風雨晦冥、暗澹として咫尺を辨せず、雷鳴あり霹靂して頭上に轟き、削手の刀を三断して過ぐ、恰かも法華經の守護者を救ふもの、如し、日蓮始めて免がる、これを龍の口の御難といふ、寺は弘安年間日蓮の高第日法の創立する所、寺域二千三百坪、中に土牢あり、日蓮を幽囚したる遺蹟と、又敷草石あり、上人の難に遇ひて此上に坐し、甘んじて無辜の刃を受けんとしたりしものと、毎歲九月十一十二の兩日、信徒四方より雲集して、題目を唱へ法鼓を打ち、琴々として波浪を湧かしむ。

●片瀬川

「歸り來てまた見ん事も片瀬川濁れる水のすまぬ世なれば」と、宗尊親王の唄はれし片瀬川は、源々として龍口寺の背を繞りて流る、元弘三年新田義貞の火を縱ちて鎌倉を攻めし古戰場たり、川の東を唐土が原といふ、昔は粟麥の名所たり、唐大和いづれか其名の優し氣なる。

●砥上ヶ原

白雲流水の逝くが儘に歌枕を尋ねて吟咏したる西行法師が「柴松のぐすのしげみ」とうたひたる砥上の原は藤澤の南半里程、鶴沼の南に横はる平原なり、昔は源家の若殿原が、武を戦はし兵を講じたる所、曾て康正元年上杉定正の北條某と血戦したるの跡、當年圓位法師の小鹿啼くと言ひし昔は知らねども、稚松沙を抜いて昔々たるの下、金鈴子の唧々として鳴くを聞く者、神韻飄渺として羽化するが如きを覺ゆ。

●鷓沼

一帯の白沙遶透として足の踏む所滑らかなり、渺茫たる者海幾千里、水天髣髴として遙かに豆島の半島に列

なる、入梁の蓮華峯は近く嶺頭に墜ち、斜めに大山雨降の空に横はるを望み、繪の如き金龜山、呼べば將に語らむとするものは鶴沼の風色なり、藻汐焼く苦屋の烟は風に揺れて漁柳の間に霞暈むる所、潮水浴場あり鶴沼館といひ、待潮館といひ、又東屋といふ、魚介鮮測避暑の客を待つ、藤澤よりすれば二十餘町江の島よりすれば十二町にして近し。

●金山

清風一陣鬢髮を吹いて輕きの時、相摸灘の夕陽を踏んで七里ヶ濱の磯貝を探り、足の行く儘にして片瀬に出づれば石華表あり、左に稻村ヶ崎の險を望み、右に鳥帽子岩の奇を見、落陣蒼洋の波間に映するを見て、一路直ちに江の島に至る、島を金龜山といふ、周回凡そ十八町、全島悉く巖石よりなり、龍蟠虎嘯の石相倚り相待ちて奇言ふ可らず、石磴岩本院の邊より起り、斜めに天を指して登る、山上老樹蒼鬱として蒼尙暗し所謂江の島辨天社なるものは、邊津の宮、中津の宮、津の宮、今江の島神社是なり、祭神は多紀津姫命市杵

島姫命多紀理姫命の三神とす、祠殿莊重人をして襟を正さしむべし、奥津の宮の天井に金龜を描く、酒井抱一の筆と、靈筆神に入り、八面人を睨む、宮の後に古碑あり、僧良真宋より齋らせし所、刻して大日本江島靈跡建寺之記と、缺損して讀む可らず。祠邊に榮螺を焼く者あり、數錢を投じて味へば、風味言ふ可らず、之を想ふて猶唾液の津々として催すを禁せず。

●兒 淵

「白菊と信夫の里の人間は、思ひ入り江の島と答へよ」と、一首の和歌に萬斛の涙を澆ぎ、惆悵石を懷にして深潭の中に投じたる美童の遺跡は、澎湃たる怒濤の來つて巖に咽び、香として又尋ぬる由なし、往時建長寺の廣徳庵に沙門自休藏主なる者あり、偶々天女の祠に詣りて途に一美童に逢ふ、白面借齒宛然美玉の玲瓏たるが如し、これ相承院の稚童白菊なる者、自休見て情禁する能はず、切りに慰慰を通せんと欲すれども美童從はず、自休情火燃えて身を焦し、意馬躍りて死を狂せんとす、白菊爰に到りて漸く心動くと雖も、身を以て

●採

兒が淵より途漸く下りて、所謂粗岩を見る、砥の如き大石眠りて水に泛び、布きて席をなす、此邊採鮑の黒面漢あり、客を呼び錢を乞ふて鮑を採る、十錢を與ふれば小にして蛤の如き者、價を倍にすれば鮑も又大きく、半圓一圓を投するに及びて愈々大なり、蓋し海

底に一鐵箱を隠し、鮑を其内に藏したるを、價に従つて採り來るなりと、狡獪と雖も試むべし、黒漢白波を沿びて水面に躍り來る所、海龜の夜泛ぶに似たり、奇觀いふ可らず。

●龍 窟

探鮑の黒面漢に戯れて、更に岩の上を傳ひて板棧の邊に達し、之を渡れば即ち龍窟、洞は南に向ひて開け、一大妖魔の巨口を開いて海者を呑まんとするが如し、潮流來る時は、激して泡沫を飛ばし、白毛の乳狼躍つて狂するが如し、潮怒れば洞裡を究む可らず、洞口濶さ丈許、棧道を架して入るに便にす、洞内暗うして鬼氣の人を襲ふが如きを覺ゆ、冷風面を撲ちて陰鬱言ふ可らず、即ち松燈を購ふて進む、燈影朦朧、遠く望めば黒衣の妖魔の火を吹いて行くに似たり、進む事四十餘間にして洞究まり、更に兩岐となりて分る、一は胎藏界、一は金剛界、兩部の大日如來を安んず、石あり、日蓮趺坐の跡と、又無熱地あり清冽にして氷より冷やかなり、人指を染むる少時、全身の爲に凍痺するが如

きを覺ゆ、洞漸く盛まり、匍伏するも入る可らず、傳へいふ、これ龍城に至るの途と、窟中に入りて時に美姫の來るに逢ふ、或は疑ふ龍姫の我を迎ふるにあらざらむやと、燈を掲げて之を見れば、何ぞ料らんこれ狹斜の妖狐ならんとは、白面人を欺むくものか、佐羽淡齋江之島を詠するの詩あり。

瓊沙一路截路通、孤嶼峻峭屹海中。
潮浸龍王宮裏月、花香天女廟前風。
客樓研鮑絲絲白、神洞燒燈穗穗紅。
幾入蓬萊諸秘跡、不須幽討債仙童。

逗 子

●海 水 浴

鎌倉より瀛車に搭じて一瞬時、忽ちにして逗子停車場に達す、車を備ふて十町許、山碧に水清き明媚なる風光は、悠然として吾人の雙眉に迫るを覺ゆるもの之れ逗子なり、郡は三浦村は田越、逗子は其字と、灣に沿ふて旅館あり、養神日蔭の二亭最も著はる、西に豆山

の彷彿たるを望み、東に鎌倉江の島の遙かに小田原に連なるを見る、眺望絶佳にして、又相洋の一名區たるを失はず。

●大楠山

「あしかりの秋名の山にひこ舟のまひかしもよこ、はこかたに」と萬葉集に唄はれたるは、今の所謂大楠山にして、中西浦村字秋谷の東北に在り、海を抜く事實に七百二十餘尺と、之を登るに羊腸たる阪路二十餘町、殆ど麓山の老いて禿たるが如し、山頂開豁にして眺望際涯なし、遙かに濛々たる海上を望めば、長鯨の横はりて眠れるが如きものを大島となす、天明らかにして氣澄みたる時、目を凝せば人馬の來往を見るかと怪しましむ。

●森戸浦

森戸の浦は堀内村に沿へる一帯の海濱をいふ、長者ヶ崎あり、白砂青松幾千代の契を込むる所長者園あり、其後なる旗立山は、往古頭大公の兵を起せる時、畠山重忠の來つて三浦義澄を攻めし所、今猶地を穿ちて時

に缺壊を得る事あり、返子驛を去る一里にして稍遠し、風景は伯仲すと雖も、幽遠は即ち勝れり。

横須賀

●米ヶ濱

横須賀は鎮守府の在る所、市街殷賑にして俗氣満々、紅塵途を埋みて又奇を探り勝を尋ぬる能はず、只若松町に龍本寺あり、俚人呼んで米ヶ濱の祖師堂といふ、其後なる米の山は、海角碧波を劈いて懸る、猿島前に横はりて山水の眺望を恣まにす、海濱に角無し榮螺を産す、言ふ昔土人石渡、日逆上人を負ふて米ヶ濱に至らんとするの途、誤つて榮螺の殻に躓き瘡を負ふ、上人見て憐れみ禁せず、即ち法華經の功力を以て、悉く其殻の角を去る、爾來生ずる事なしと、蓋し妙法の濫用なるべし。

●衣笠城址

横須賀町を去る南一里、衣笠村に衣笠の城址あり、これ三浦氏が據りて以て忠を源家に致したるの名城たり。

り、治承四年畠山重忠の來り攻むるや、城將大介義明衆を督して之を防ぐ、已にして戦ひの漸く利わらざるや、息義澄等をして衆と共に去つて頼朝を索めしめ、自ら火を縱ちて死す、實に老雄の義に殉したるの遺蹟なり、山高からずと雖も、之を攀づるに蝸附して尙仰ぐべし、據つて以て敵を城壁に支ふに足る、怪松老杉枝を交へて鬱葱たり、其間僅かに城壁の跡を見る、趾と指さす方や揚雲雀、長閑けき空に陽炎燃えて、麥の穂の寸寸として碧なる所、古英雄の魂魄今何處に在る。

●三浦大介墓

衣笠城を去る十數町、東南の一路田圃の間を走りて大矢部に至る、満昌寺あり、境内に三浦大介義明の墓を建つ、墓前に一字あり、義明東帶の像を安んず、義烈なる老雄白眼世を睨むに似たり、寺記にいふ、頼朝大介の功を想ひ、仲業を遣はして其菩提を吊らはしめ、一字を建立したるものと、古色蒼然賽者を照す。

●大明寺

衣笠村金谷に法華宗の古刹の大明寺と稱するものあり、いふ日法上人の開基と、實に六百有餘年の古刹なりしが、明治十九年過つて火を失し、壯麗なる殿宇悉く焼失し、今は僅かに二王門を存するのみ、現時の本堂は明治二十五年の再建にかゝる。

●走水神社

横須賀を去る南二里にして近し、浦賀町字走水にあり、海水樹曲して、近く富津と相對する所、走水神社の海を抜いて建つを見る、祭神は日本武尊にして、社は丘陵の半腹にあり、石礎斜めに起りて莓苔之を蔽ふ、礎下は即ち走水の市街、商賈漁家軒を接して、村童戯れ走る、又畫中の景なり、言ふ日本武尊東夷征討の時、此地より海を渡りて上總に至らむとす、土人情別の情に堪へず、尊の遺物を止めん事を乞ふ切なり、尊即ち自ら寶冠と香を殘し、終に海に航す、土人其遺物を神とし、祀つて走水神社と崇む、後祝融氏の災にかゝりて今はなしと、走水の北端に海角あり、走つて海に蒞むの所砲臺あり、これ走水の砲臺なるもの。

●三崎城趾

三崎町は三浦郡の南端にして民家千有餘戸、渺たる一市街と雖も、又殷盛の地なり、其三崎の城趾なるものは町の北方にあり、弘治二年北條氏康禪將某をして之を守らしむ、偶々安房の驍將里見義弘兵を起して來り攻め、城遂に陥ると、小網代には新井の城跡あり、これ三浦入道道寸の養父時高を弑せし所、城ヶ島あり、海上に散點す、島上七八十戸の人家あり、夜淺うして漁火點々、螢火の暗を縫ふに似たり、

●海南神社

怒濤咆浪天に潮する所、空黒く海白し、偶々一葉の舟あり、波躍れば雲に入り、水沈めば奈落に墮つ、一上一下處定めずして、水泡の藻屑の底に葬られんとす、内に冠冕の人あり、亦美姫あり、命を天の儘にして従容として死を待つもの、これ當年藤原資盈の其室盈媛と共に海上に漂ふの圖なり、資盈は鎌足十一代の後胤藤原尚資の子なり、封を博多に受け九州の民を撫す、偶々議に會ふて遁れて薩摩に至らんとし、颶風に逢ふ

て蒼海の上に漂泊し、終に此地に來る、土人之を憫れみ、相扶助して資盈を居らしむ、資盈も又能く土民の子弟を撫育し、其德禽獸を化す、土民之を活天神と稱し、歿後一祠を建て、其靈を祀りしもの即ち海南神社なり、拜殿あり神樂殿あり、大銀杏樹二株あり、蠶々天に朝す、社側に高阜の横はるものあり、登臨すれば豆腐の翠樹相呼應して風光の明媚なる千古に冠たり。

●大津海水浴

浦賀の大津町に大津館あり、館濶さ四百餘坪、風光の美に富む、右に觀音崎左に本牧の端富岡の灣を望み、白鷗波に戯れて悠遊する所、扁舟の漁歌を唄ふて過ぐるあり、これ横須賀より至るの仕立舟なり、別に松輪海水浴あり、三浦郡の南端にして下浦村松輪に好風色の地を下して設く、實に東京灣の咽喉にして、海を隔て、前に鋸山の連山を望み、近く劍崎の燈臺を見る、白砂清冽、水穩やかにして波揚らず、恰も碧濤の如し、就て浴をとるに心神忽ち悠然たり。

藤澤

●遊行寺

藤澤は大船の次驛にして、砂淨く松冷しく、涼を納るゝに適せり、遊行寺あり、藤澤山清淨光寺と號す、時宗の本山にして、開山の僧は吞海上人、正中二年侯野五郎の建設する所、其遊行寺の名の興る所以は、開山の祖遊行上人が錫を全國に垂れて、土民を教化したるに習ひ、代々の住僧常に四方に巡錫するを以てなり、龜山天皇の皇子尊親法親王の如きも、薙髮して時宗十二代の祖となり、尊親上人と號して、賤ヶ伏家の枡場にも鉢を捧げ錫をつき、教化遊行したりといふ、往古は伽藍崇高なりしが、一朝火を失して、今は僅かに假設の堂宇を止む、富士見亭あり、これ今上陛下の鳳盤を駐めさせ玉ひたるの跡、其東に小栗堂なるものあり、小栗判官滿重の像を安んず、寺寶に名馬鬼鹿毛の鬮、照手姫所持の古錢を藏すと。

●馬入川

藤澤を出で、平塚に至るの間馬入川あり、源を甲斐の山中湖に發して桂川といひ、相摸を縦斷するに及び始めて相摸川の稱あり、馬入とは其下流を名くるものにして、高座大住二郡の間を流れて海に入る、河に香魚を産す、味美にして香氣馥郁たり、河の畔に乾鮎を賣る家あり、東鑑にいふ、文治四年三浦義澄の船橋を架して軍を渡せし處と、常時は水涸れ石露はると雖も、霖雨山を閉して雲陰鬱たるもの旬日ならずして、濁浪漲り落ち、巖を轉ばし岸を碎く、汜濫の危険甚だしと雖も、又壯觀なり。

●寒川神社

社は相摸川の畔一の宮に在り、祭神は寒川比古命寒川比賣命にして、天平神護年間の勸請と、一の華表を入りて老樹の間を過ぐるもの關東里程一里強、樓門あり極めて莊重、太鼓橋あり、攀ちて登れば即ち本社、幣殿あり拜殿あり、左右に神饌所別當所神輿殿あり、藏する所信玄の鉄兜最も奇とすべし、境内高燥、坐して箱根雨降を望み、仰いで富嶽の雲表に聳るを見る。

●相摸ヶ原

原の在る處人知る稀なり、廣袤數里に亘れる大平原は、中に栗原新田坐間新戸磯部の諸村落を包みて座間村に屬す、古へ所謂「狭嶺」のさかじの小野に燃ゆる火の火中に立ちて訪ひし君はも」と唄ひし所と、秋高くして鶉の頻りに鳴くを聞く、亦銃獵者の好獵地たり。

●無量光寺

寺は祝融の災に罹り、當年の形跡今見る可らずと雖も關東有数の古刹なり、時宗にして遊行寺に次ぐの寺格といふ、聞く説く僧知眞の開基と、寺に宗祖一遍上人の像あり、又佛舍利を藏す、大覺禪師の遺鉢は看る者の徐ろに其雅趣に感じて已まざるべし、山號を龜形峯といひ、老松枝を交へて鬱葱たる所、珍禽來りて集ひ、其聲金鈴の宛轉たるが如し。

●花水川

平塚の驛を過ぎて西に花水川あり、これ曾て「咲くと見え散ると見ゆるや風度る花水川の浪の白玉」と回國

雜記に唄はれたる所、橋あり花水橋といふ、歌あり詩あるの古跡、星移り物變り、古人遊いて又歸らずと雖も水心わらば正に當年の事を語るべし。

●岡崎城趾

今入山瀬村の一隅にあり、賦麗肥えて麥秀の歌を聞く所岡崎の城趾と、城は世々三浦氏の據りたる所、康正二年三浦時高の足利成氏と鎬を削りたる遺跡にして、永正九年新九郎長氏の來り攻むるや、城將三浦義同能く拒ぐと雖も、天時人和に如かず、遂に破れて長氏の據る所となりしと、また知名の古戰場なり。

●大山雨降神社

平塚の町より中原柏屋を過ぎて子易に至るの一路蜿蜒として平野の間を通ず、子易に明神社あり、社前より大山に至る二十餘町、道羊腸として峻嶮、又傳を通ず可らず、阪路を上げれば即ち大山町、人家數百戸、御師の家あり、又挽物細工を賣る家あり、旅店軒を接し、登山の客を招く、山に瀑布多し、飛泉直下、躍つて深潭に走るものは良辨の瀧、大瀧あり新瀧あり、水は異

ならざれども、趣きは即ち同じからず、路漸く悉きて磯阪の天より懸るが如きあり、曰く男阪曰く女阪、阪を上げれば即ち本社、祭神は大山祠命にして神體は自然の巖石なり、石尊權現とは即ちこれ、此石往古日本武尊の憩ひ玉ひしものと、又歸命盡十方無碍光如來の十字を鑄す、僧親戀の書する所と、毎歲夏月白衣漢の音笠を被り金鈴を鳴して、陸續として行く、所謂大山詣なるものは此社に詣するなり、町を壓して聳る櫻山は最も眺望に富む、之を攀する町許、相洋波平らかにして、真帆片帆の風を孕みて來往するの状、直ちに目睫の間に來る、然して又脚下に漠々として雲湧き、凝つて人を包含せむとす、手を延べて雲を捉ふべし、蓋し山中の一大奇觀あり。

大磯

●海水浴場

大磯小磯小湊の濱の磯は銀の如く、雀鳴きつれて走る衝の、翔翔して群立ち飛ぶ所、青松長へに翠にし

て風露墮つる事繁く、潮風袂に入りて、心神を弄ぶものを大磯の海濱となす、驛は古への磯の郷、村落點在して苦屋の烟の鹽焼く釜のみ僅かに人の足を止めたるもの、今人家櫛比して繁榮比なし、縉紳の別墅、宏大的の旅館あり、海水浴場の古きものは勝龍館、構造宏壯にして樓閣相列なり、庭園の美を恣まにす、之に次いで松林館招仙閣、館内に温浴を設けて潮水を湧かす、浴場は元軍醫總監松本某の創意する所、蓋し海外の爲す所に慣ふなり、群磯星列の間水平らかにして清冽、衣を棄て、直ちに躍るべし、此地磯馴の老木多し、松林館の邊殊に然りとす、松と海と蒼翠相連なり、漣漪來り戯れて逍遙の客に馴る、超然として空を凌ぐ芙蓉の峰、白扇倒に懸りて海に入る所、豆山之を迎へて相擁するが如し、海深き所水紫にして漁火點々、眞個に一幅の好畫圖たり。

●虎子石

「抱いて見る旅の戯れの虎子石」とは夢太が百韻の洒落なり、大磯の驛の東端延壽寺の舊趾に、渺たる一堂宇の

内に存す、石高さ二尺一寸幅尺有餘、石面玄黒にして
 蒼色あり、鐵痕を存す、俚俗にいふ、美丈郎曾我祐成
 大磯の妓虎と契り、綱膠漆膠の如し、屢々來りて其家
 に宿す、連理の枝比翼の禽、相遇ふて温情玉の如く又
 蜜の如し、祐成歸るを忘れ、虎放つ能はず、偶々仇氏
 工藤祐經、竊かに祐成を殺して以て後願の憂ひ勿らし
 めんと欲し、人を縦つて虎の家に見はしむ、祐成之を
 知らず、對酌小宴、正に酣はならむとす、仇氏機乘
 す可しとなし、箭を放つて之を射る中らず、過つて庭
 上の石にあつ、鐵深く入りて容易く抜く可らず、祐成
 僅かに免かる、後祐成の時致を拉して富嶽の麓に狩し、
 始めて祐經の首を獲、仁田某と戦つて死するに及び、
 虎此石を愛玩して措かず、郎の遺物として朝夕之を撫
 す、猶慈母の赤子に於けるが如し、依つて此名ありと、
 又十郎身代石ともいふ。

●鳴立澤

「心なき身にも哀れは知られけり」と、脱俗の高僧が杖
 を駐めて徘徊し、笠を傾けて去る能はざりし所、鳴立

澤の古跡は大磯の西に在りて丘陵一帯、老松の蟠根し
 て眠れるが如きものあり、西行堂あり、法師が鶴畑し
 たる仙骨の木主を安んず、虎子堂ありて、大磯の名妓
 虎が薙髮の像を祀る、鳴立庵は寛文の始め俳客宗雪な
 る者の營みし所、後年三千風の閑居して碑を建てたる
 もの今猶存す、庵に西行の色紙あり、此世外の聖僧が
 白雲流水の逝くが儘に、歌枕を搜りて彷徨したりし竹
 杖は、渠が終世の伴侶を送りて、今獨り此庵中に存し、
 落葉として今昔の感あるもの、如し、微雨漸々として
 松濤繁々時、來つて此處に木主を吊へば、鳴の羽音の
 娑婆として、幾度か人を纏つて飛ぶあり、徐るに當年
 の風韻を忍ばしむ、古跡のある處、驛を距る僅かに八
 町許。

●花水橋

驛を出で、東、國道に沿ふて老松あり、幾百年の湖風
 に黒みて、菖蒲其幹を蔽ふ、化粧阪あり、阪といはん
 よりも寧ろ凸凹の稍大なるもの、これ所謂化粧阪の跡
 と、鎌倉にもあり、今積ふ可らず、阪を超へて東する

事町許、石出で砂洞き、僅かに潺湲たる水の其間を縫ふ
 て走るあり、洋制の一小橋を架す、これ所謂花水橋
 なるもの、其名の雅に過ぎて其形の俗甚だしきに驚く。
 當年大磯の町般盛にして、妓院妓坊軒を接するの時、
 金鞍白馬の貴公子が、花を折り鞭を駁して往來したる
 所、今徒らに洋漆の剝脱せる小橋梁のあるのみ、吏人
 何ぞ古跡をして雅ならしむる能はざる。

●國府津

●海水浴

水の美と山の美と雙つながら具はる所、智者も仁者も
 來りて之を娛むべし、國府津の地たる絶壁峩々として
 殆ど國道を壓し、綠波其麓を洗ふて潺々たり、海濱は
 多く黒松を植ゆ、樹幹甚だ大ならずと雖も、蟠根深く
 入りて砂を抱き石を擁す、又數百年外のものなり、山
 は多く蜜柑を産す、遠望一帯簇々として黄金を花とし
 たるが如し、所謂國府津蜜柑なるもの、産額非常に多
 し、眞に金の生る木なるものか、海水浴は大磯の如く

盛んならずと雖も、景は即ち優る、旅館に葺屋あり國
 府津館あり、皆溫浴を設く、大磯に比しては便にして
 廉なり、

●唐津の岡

眞宗の祖親鸞の唐土より一切經を齎らせし時、船を拵
 て、暫らく足を駐めたる舊跡と、雙眼鏡を携へて登
 臨すれば、沖行く船の眞帆片帆、風を孕みて馳する船
 の、人は豆大にして船は葉よりも小なるもの、忽ち幾
 百倍して眼前に迫り來る、馳望千里、快愜いふ可らず。

●曾我中村

曾我の中村は國府津の北一里にして稍遠し、曾我兄弟
 出生の地と、落葉たる一小村、至孝の名によつて著は
 る、近傍に曾我山あり、曾我の原曾我の峯曾我の谷
 と、一掬の水尺寸の地にも曾我を冠するに至りては好
 笑。

●酒匂川

國府津を去りて西する事二十五町、松老いて風白き所、
 春は落花を誘へる水の、秋は最中の月を浚べて、蛇籠

に咽んで銀珠を漂はす好風景は、古への所謂鞠子の流にして、今は酒匂川と呼ばれぬ、源を富嶽の下に發し、上下の足柄郡を貫ぬきて海に入る、水勢激昂急湍躍りて倒まに落つるが如きもの、下流に來るに従ふて漸く平らかに、千曲百回、蜿蜒して過ぐ、其間多くこれ田圃、兩岸に荆棘多し、裡に蕙の咲き匂ひて、女郎花の人を招く四季折々の眺めは究まりなし、岸邊の蘘に鞠多し、都人士の汽車に搭じて來るもの、杖を曳いて美聲を聴かむか、銃を肩にして獵狗を伴はんか、二者一を選びなば、即ち一日半時の娛樂を購ひ得べし。

箱根

●小田原城趾

箱根に至るには小田原の舊趾を尋ねざる可らず、城は新九郎氏早雲の築く所、千古不落の名あり、猿面公が天下の兵を以て攻むるや、氏政終に支ふ能はずして城陥る、實に天正十八年なり、徳川氏の世に至りて、其臣大久保忠隣を此處に封じ、後稻葉氏をして代つて守

らしめしが、再び大久保氏に復して維新に及ぶ、今其城趾に報徳神社あり、二宮尊徳の靈を祀る、小峯の梅林は花甚だ多からずと雖も、氷肌玉骨匂ひ飄れて、月より散れる葩の片々として飛び來る時、暗香人を携ちて夜の關るを知らず。

●松原神社

北條氏の代々尊奉せし所の古祠にして、日本武尊を祀れる縣社なり、本社は方二間半、其前に拜殿あり、幣殿あり、瀟洒にして古雅、人の賽する多し。

●石橋山

山の東南は蒼海渺茫として銀波激瀾、風靜かにして海平らかなる時、夕陽斜めに落ちて帆影參差たる好風景を、翠松の間に眺むべし、治承の昔源頼朝の蛭が小島より起りて會稽の恥を雪がむとするや、大庭景親平相國の命を啣ひて來り攻む、頼朝一戦して敗れ、將士或は逃れ或は死し、頼朝に従ふ者僅かに六騎、走つて山中に入り、偶々一老木の朽ちて洞を成せるものを見、喜んで曰く奇貨措くべしと、即ち交々これに入る、景

親追ひ至り頼朝を索めて獲ず、山中を物色して洞前に來り、獨り之を怪しむ、其屬梶原景時異心あり、頼朝の隠るゝを知つて、故に揚言して曰く、平三之を究めぬ、蜘蛛の囿あり洞口を蓋ふ、又人の入るべきあらむやと、即ち衆を翻へして他に行かすむ、頼朝始めて免かるを得たりと、又關東の名跡たり、山は小田原の西南三十町、石橋山の西にあり、之を登るに高さ十二町、山上に茶亭あり、老嫗若を煮て登臨の客に供し、當年の事を説く極めて喋々たり。

●湯本

國府津停車場を下れば、小田原馬車鐵道の客を俟つあり、之に搭じて行く事一時二十分、須臾にして湯本福住橋際の駐車場に至る、車を下れば即ち湯本、函嶺の東麓に在りて早川の南岸に位す、浴場萬翠樓あり、これ所謂福住なるもの、又小川と稱するあり、共に此地の舊家たり、福住は洋風の建築にして、莊麗を極め、白壁翠色と相映して、一段の壯觀を恣まにすれども俗なり、されども内部は瀟洒たる和風にして、粧飾また

清楚、浴後欄に凭りて臨めば、早川の急湍激して岸に碎け、躍つて飛び、戯れて走る、濛々たる雲霧は忽ち山隈より起りて、隻手を延ばさば之を攔ひべし、前に塔の峯あり、流に臨みて屹立し、朝霞暮烟の纏綿して繞るあり、大雨峰小雨峯、宛がら漢畫の丹青を揮ふに似たるを覺ゆ。

●白地藏

湯本の東二町有許、羊腸たる山路を傳ひて座像の地藏菩薩を得、高さ殆ど六尺、苔の衣に露隕る事繁く、閑雲靜かに眠りて、異禽偶々來り語る、いふ弘法大師の刻む所と。

●矢立杉

森々として空を凌ぎ、參差として枝を垂れたる老杉の偉は今見る可らずと雖も、猶僅かに其跡を止む、當年將士の軍に趨く者、必らず此處に來りて表矢を射、以て勝敗を卜せしもの、故に此名ありと、曾て曾我氏の遺孤、仇氏を刺して復讐の事を遂んとするや、杖を列ねて至り、白羽箭を飛ばして吉凶を卜せしと、兄弟

の没後節婦虎が常よりも又ぬれそひし袂かなわぬ
別れの後の涙は」と、泣いて情郎を追憶したる所、又
「見るからに愛こそ増れ足曳の矢立の杉に残る紀念は
と、二子の鍔痕を見て、其母の袖を沾せしもの、土濡
ひて苦繁し。

●玉 簾 瀧

須雲川の釣橋を渡り、川に沿ひて行く事町許、遊園
り、符を購ふて入るべし、内に二條の飛泉の天漣より
懸りて奔騰碧潭の内に躍るあり、一を玉簾の瀧、一を
樹蔭の瀧といふ、瀧は水源を湯阪山に發し、斷崖の間
を旋回し來り、奔瀉して飛泉となる、玉簾の瀧は水碎
けて千岐、高さ十二丈幅八丈四尺、宛から銀河の空よ
り進りて、水晶の簾を懸けたるが如し、玉簾の名空し
からず、樹蔭の瀧は上流より分れて、鬱葱たる綠蔭の
間を貫ぬき、躍つて三段となり、奔逸して下る、高さ
十五丈、三伏の候人の來つて瀧を望むあらば、山靜か
にして冷氣生じ、飛泉の喧聒して千古の白沫を躍らす
の所、肌に粟せしめ、唇爲に紫なり、多辯の士も

能く語る能はず、瀧に望みて飛烟閣あり、園の北石礎
を上りて八幡社あり、古色蒼然、神靈の來り遊ぶかと
思はしむ。

●早 雲 寺

須雲川を渡りて、湯本宿の東に早雲寺あり、金湯山と
號す、小田原北條氏の歸依する所にして、洛陽紫野の
大徳大隆禪師の開基する所、永録の昔、北越の曉將不
識庵の兵を塵きて亂入するや、寺も亦兵火に罹りしが、
後北條氏政之を再興し、堂塔の美更に幾層の壯觀を究
めたれども、天正十八年猿面公の天下の兵を悉して小
田原を攻むるや、寺は三軍の貔貅が據つて以て本營と
する處となり、尊像木主も徒らに馬蹄の塵に埋もれて、
殿堂頽廢し、殆ど廢墟の如く、次いで慶安年間改築する
所ありしと雖も、又當年輪奐の美を見る能はず、今は軒
傾きて葦蕪纏綿し、屋漏りて月明の夜假臥して星斗の
依稀たるを見る、寺に早雲の木主あり、風丰俊秀、白眼
人を睨む、其昔孤雛飄然勢州の窟を出で、今川氏に客
となり、風雲の旋渦するに會ふて、蹶然鐵鞭を揮ふて立

ち、兵氣肅々夜古函の嶺を超へ、關東の野を睥睨し、
以て小田原北條氏の基を定めたる新九郎長氏、其古英
雄の面白は躍如として生けるが如く、寺は勅願の榮を
蒙るを以て、歷朝の倫旨を殿す、又古法眼元信土佐光
起僧雪舟等の遺筆あり、「早雲寺名月の雲早きなり」と
は俳仙風雪の追憶したる所、其行雲流水の旋轉定まる
なく、得て瞞睨すべからざる神機將軍の籌略は空しく
木主の蒼然として人を弄ぶのみ。

●北條五世の墓

早雲寺中石礎の起る所、石の玉垣を繞りして五基の古
墳あり、石傾きて葛纏ひ、草實秀で、鳥雀來り啄ばむ、
閑古の態朴素の風、寂寞として此下に眠れる主や誰、
曾て赤手にして八州の風雲を定め、武を天下に揮ひた
る古英雄、早雲庵宗瑞が、功名の心を拵て、薙髮して
閑雲野鶴に伴ひて、悠悠世事を知らずと偽りたる新九
郎入道が、草露冷やかにして長へに眠る所、氏綱氏康
氏政氏直等五將の英魂を瘞るもの、英雄の銳氣未だ銷
せず、夜深くして兵馬の行くが如きを聞くは、峯の嵐

の颯々として梢を渡る聲なるべし。

●宗祇法師の墓

霸氣一世を蓋ひたる英雄の墓畔に、黎杖飄々江湖に吟
咏したりし仙骨を葬る、奇といふべし、「果敢なしや鶴
の林の烟とも立後れぬる身こそ恨むれ」と、一首の辭
世に假の世を夢と覺めて、彌陀の樂土に遊びたる古法
師は、連歌の宗匠にして俳諧の祖なり、「三月月の頃よ
り待し今夜かなの一句に凡俗を驚かして咳唾皆珠玉、
朝に霞を吸ひ、夕に月を弄びて放浪し、行く／＼此の
地に來りて病む、實に文龜の二年秋七月、終焉記には
遺骨を駿州桃園の定輪寺に葬ると、想ふに此墓は其遺
蹟を卜して後人の建てしなるべし、碑面苔蝕して、之
を探れど讀む能はず、遺憾之を久しうす。

●早 川 の 瀨

古歌に「早川の瀬ぎり危うき船渡」と詠じたる早川の
流れは、源を蘆の湖に發して、岩を穿ち山に咽び、奔
騰して飛雪となり落絮となり、直下して銀簾となり、
躍つて飛泉の空に懸るが如く、九曲九回山隈を繞りて

螺の如く流れ去る、水の煙霧として走る所、金時山明神ヶ嶽明星が嶽冠が嶽小地獄山早雲山の下を喧嘩して過ぎ、前水未だ去らずして、後流來り侵し、躍つて湯本の急瀬となり、浴客の幽襟を洗ひて早川村より蒼浪の裡に注ぐ、川の邊は元弘の昔に平成輔を誅せし所、會て聖護院准后の此川に拒まれて歌あり「未遠く流れ出でたる早川の浦や千尋の浪路なるらむ」と、又阿佛尼が鎌倉に到るの路此處を過ぎりて、「東路の湯飯を越えて見渡せばまは木流る、早川の水」と、十六夜日記に歌ひたるの遺蹟なり、天正の役細川幽齋の太閤に侍して至るや、「御秘せし袖こそぬるれ老の浪移る月日も早川の瀬に」と、軍陣の吟懐を行りし所、川に沿ひて遙かに石垣山を望むべし。

●石垣山

早川村より登る事殆ど半里、其間千路萬岐、細徑巖嶮の間を通じて、途極めて知るべからず、東道の里人を備ふて行き、漸く豊公一夜城の陣形を見る、小田原の役太閤三軍の馳跡を悉して城を攻む、關東の武士意氣

軒昂、晒ひて千瓢の馬旆を望み、自若として屈せず、豊公即ち甘言を以て城中の裨將松田尾州を應ぎ、以て款を通せしむ、松田即ち竊かに石垣山の間道を教ゆ、太閤大に喜び、山を下して一夜に擬城を設け、小田原を遮ざるの樹木を伐らしむ、黎明城兵望み見て大に驚き、銳氣忽ち沮喪して又戦ふの氣なし、之を太閤一夜城といふ、此山は明應の歲新九郎氏が小田原を攻めんとして、炬火を牛角に結び、全軍鼓噪して透ひ來りたるもの、田單が火牛の故智を學び、奇功を奏せし所なり、昔此山を以て小田原を奪ひしもの、亦此山を以て亡ぶ、佛者の所謂應報なるものか、林羅山詩あり。

山是相摸海岸邊、
八州藩屏稱此地、
英雄忽去今何在、
松樹陰陰起翠烟。

●紹大寺

石磴天を貫ぬく四百級、登り悉せば即ち紹大寺、長興山と號す、湯本より東一里入生田に在り、古へ鐵牛和

尙の開基にして、稻葉正則が先考追福の爲に創むる所、昔時は結構偉大なりしが、今頽廢して見る可らず、山上老樹翁鬱の間朝暮の景に富む、山に紅楓の老木多し、金風裳を拂ひて蕭颯たる時、霜忽ち來りて滿山の錦繡と染じ、翠綠紅朱相映して美言ふ可らず。

●湯本細工

其由來古くして知り難しと雖も、天龜元年北條の命にて、湯本にて御番細工をなせしといふ、樟黒楠等の寄木細工にして、精巧驚くべし、昔時は僅かに器具の類を製作するに過ぎざりしが、今は机書架篋筒食卓等を作り、名産は進んで一の輸出物となるに至りたり。

●塔の澤

湯本に飽きて、早川に沿ひ登る事五町有許、塔の澤の温泉に到る、早川の急瀬は幾旋渦して此處に到り、二重に彎曲して二橋を架す、一は玉の結、一は千歳、頗る雅名あり、橋の西南に絶壁幾百丈、屹然として雲に入るものは湯阪山及び城山、東南は塔の峯の頂さに不斷の雲來往し、松尾明星の連山は岷岷として感まり來

る、四面皆山、山は即ち懸崖絶壁、峻巖刻み來る幾千尺、垂羅髮々として朝露冷やかに、急瀬風度りて水霧々、滂沱として雨の來るかど怪しましむるものは、旅寢の夢の名残なるべし、昔時黃門光圀の明人朱舜水を伴ふて來り遊ぶや、舜水風光の美を歎賞し、驚いて曰く驪山の景に勝ると、即ち勝驪山の名あり、仙樂飄々として山に應へて聞ゆるが如きは、驪山の宮の翡翠の衾にあらすして、勝驪湯邊環翠樓の宴なりけり、温泉の水の滑らかにして玉の肌を洗ふべきは洗心樓新玉の湯一の湯藤屋福住環翠樓、就中一の湯尤も古く、洗心樓は千歳橋の邊にあり、和洋の浴舎を設く、斷崖絶壁を負ふて急瀬の上に臨むものは環翠樓、湖山翁會つて來り遊ぶ、

小樓呼做小仙臺、
浴罷欄前例舉杯。
因病得間殊不惡、
况吾無病將間來。

●阿彌陀寺

環翠樓前の古道を登る事十有八町にして塔の峯に阿彌

陀寺あり、阿育王山放光明律院と號す、佛記にいふ、西天竺の阿育大王八萬四千の寶塔を造り、裡に佛舍利を安置し、之を四大部洲に頒つ、我朝にも又三ヶ所ありて、當山は其一なり、故に塔の峯の名ありと、縁起記にいふ、此寶塔は久しく地中に埋没したりしが、慶長年中に彈智上人、當山の靈囀に參籠し、一向專念稱名する事一百有八ヶ月、忽然として白光あり、赫耀として囀中を照す、上人即ち携ふる所の鐵杖を執り、光明の迸り出づる土中を穿てば、五層の佛舍利塔出でたり、即ち寺に安置すと、林羅山の東行日録に曰く、箱根山東麓、有稱塔澤之池、有僧不食五穀、夏冬唯一葛一衣、不沐不浴不垢不爪、年三十二、常杖鐵杖著鐵履、行峻岨如走平地、書無量壽佛號而有光、多上塔澤者、宿昔信者往來絡繹如緋、我傳聞蓋如此、

と、蓋し彌誓の事を記するなり、寺を見て登る事猶數町、上人龍居の石龕あり、方丈許、荷背之を蔽ふて韻趣掬すべし。

●宮の下の

塔の澤より羊腸たる峻を攀づる事一里十五町、其間に七曲の峻難あり、今は新道に據るの便ありて伸を通すべし、此間早川の激湍に沿ひて、山を繞り谷に入り、青檜雨峯の奇を送迎して、途常盤の瀧を視る、己にして大平臺に達せんとして富士見亭あり、千仞の溪を隔て、遠く宮の下の炊烟を望み、客心始めて緩ふ、大平臺の舊道に姫の水あり、昔小田原北條氏後圃の美姫此水を掬ましめ、以て粉粧の用に供せしと、湧々として湧く、清冽比なし、水の隈垂糸の古櫻あり、枝低く垂れて地に及ぶ、陽春花開くの時は、宛がら環珞を懸けたるに似たり、大平臺を過ぎて、途漸く宮の下に達す、宮の下は海面を抜く一千百二十三尺、早川の南岸に沿ひ、地勢稍々平坦なり、浴場に龍雲館あり、應永年代に竹の下より移住したるものと、初月樓あり、富士屋旅館は結構の壯大を以て名あり、外客の屢々宿泊する所、初月樓は曾て今上陛下の風箏を駐め玉ひし所にして、通俗奈良屋と稱す、客室八十餘の大屋巍然と

して登ち、欄に凭りて遙かに相洋の碧波を望むべし、龍雲館の傍に葉蔭の瀧あり、曾て豊公が眼界に止まりしもの、太閤の湯は此處に在り、是字の英雄が群雄を拉して遊びし所なり。曾て水戸松菊が、

千里江山落眼中、
山自幽靜水自清。
天地妙美人不知、
大道可行又何妨。
人間有氣元浩然、
君子如愚小智。
專此天真誰得禁、
分明眼判是非。

終年賢所解無定止、
一時名利不足持。
可憐世情如片紙、
欲託生涯江山是。

と、月明興に乗じて放吟したる所、明治の初年梨堂相國が風箏に陪して、憚りて暑もよそに過ぎぬらん君が出湯の心すしと、國風一首を止めたるもの、猶人口に膾炙す。

●堂ヶ島

宮の下初月樓の左側より峻嶮を冒して下る事五町、直

●夢窓國師閑居の趾

に堂ヶ島に達す、塔の澤より至るには、宮の下より二町有許を隔て、忍ぶ塚の碑より右折し、下る事數町にして達す、稍順路なり、此地四面皆山にして、綠樹鬱葱枝を交へ、涼氣膚に透りて三伏の候も猶衣を重ねべし、水石幽邃俗塵を杜絶す、眞に是れ山中の仙洞、浴場三あり、江戸屋といひ近江屋といひ大和屋といひ浴舎大和屋に並びて一小丘あり、小堂を建つ、是れ夢窓國師が閑居の趾と、堂側に座禪石あり、國師が遺愛のものといふ、世の中を厭ふとはなき住居にて中々すこき山賤の庵」とは、國師が此幽谷の風露を惜みし吟咏あり。

青山幾度變黃山、
眼裏有塵三界窄。
心願無事一牀覺、
神に入るかと怪しましむ。

●明星ヶ嶽

堂ヶ島より溪流を渉り、町許にして穴屋に達す、これ土人穴居の跡、今も尙細民の雨露を凌ぐあり、是を過ぎて崎嶇たる山路を上る十八町にして山嶺に達す、山は即ち明星ヶ嶽、明眸を凝して遙かに天の一方を望めば、房總の翠巒白波の上に泛び、氣朝らかにして伊豆の大島を雲烟の間に見る、幼婦の夜白布を晒すが如きは酒匂の流れ、平野の間を走りて海に注ぐ、山に百合の花あり、白瓣にして大、芬芳あり、箱根の山百合とは是。

●白糸の瀧

あり、青障の間に懸りて素練を延べたるが如し、高さ三十有六尺、幾條亂下素練泉とは、曾て大槻磐溪の吟じたる所、碧嶂翠巒相圍住、歸程都波白雲遮、多情更有素糸瀑、伴得遊人不憶家とは、學海翁の賦したるところ。

●調への瀧

青障白雲の裡、琴筑の相和するが如きは調への瀧の潺々として巖に咽ふなり、今平松氏の別墅にありて、堂

ヶ島より宮の下に登る間道の邊に在り、高さ十餘丈幅殆ど十二尺、巖壁を劈いて落ち、漕々又切々、仙姫の清風に乘じて絃を彈するに似たり。

●底倉

當年小田原の役、獨眼龍將軍が晒つて太閤の威嚴に伏し悠々として靈泉に襟懷を洗ふの時、名臣片倉小十郎が満腔の神算を打して、軍營の間を縦横し、陣門の下を出入して、奥羽百萬の生靈を安んじたる所、地嶮にして氣清く、宮の下に隣れる幽邃の仙境たり、仰いで明星ヶ嶽を雲表の上に望む所、蛇骨野の畎圃遠く開け、激流の躍つて天馬の翹るが如きあり、蛇骨川といふ、河畔に蛇骨石多し、里俗是を稱して蛇骨の化して石となりしものといふ、實は鹽泉の結晶せるものなり、其精良なるは碎いて醋齒を磨くべし、温泉は川の溪涯に沿ひ、沸々として湧く、曰く神靈湯曰く太閤湯曰く萬壽湯曰く温潤湯曰く靈仙湯曰く梅の湯曰く二色湯と、鹽泉にして浴に適す、旅館に魁春樓あり梅屋といふ、葛屋あり酒琴樓と號し、又仙石屋あり、仙石丈助

の建つる所、三層の高樓にして眺望爽快、就て紅塵を滌ふべし。

●太閤石風呂

天正の役豊公が戦陣の將士をして浴を採らしめ、或は創痕を癒し、或は戦苦を慰めしめし所、今仙石の靈仙湯の西町許にあり、其由来を尋ぬるに、文窓なる者の舊記に詳なり

茲に相州箱根の山中湯井最も多しと雖も就中底倉の石風呂といへるは元龜天正の頃より湯宿某が後庭の背戸にありて其風呂のかゝりたるや高さ三尺許の大岩屏風を立てたるが如く其根根平らかにして廣く打渡したる一枚岩を圓やかに彫りて風呂の形をなし是を呼びて瀬戸の湯といひ習はしけるに天正十八年の頃豊臣秀吉小田原の北條を討つの後數十萬の大軍を卒して此箱根山に屯す然れども城中壘を堅くして能く防戦す秀吉の勢亦大軍なれば敢て急にも討たず兩陣持して守る大閤一日股肱の臣を率ひて此石風呂に浴し玉ふによりて太閤石風呂の名あり

と、後百有餘年を経て、關東の地大いに震ひ、山嶽爲に碎けて、此石風呂も空しく地底に埋没したりしを、文化八年浴場の主安藤伊兵衛、偶々蛇骨川を渡りて之を得、辛うじて動かし得たるものと、亦文窓の記する所なり。

●新田義隆碑

應永十年五月一日味爽、天漸く明けんとして雲霧漠々風怒り山嘯き、蛇骨の水漲りて白波を躍らす所、忽然として軍馬の大嘶聲あり、とるくと馬蹄の響きに夢を破りて、鎧ふたる武者の五十餘騎、丹青畫中の景を踏むで殺到す、將軍劔を抜いて指す方は温泉の烟、深漠として天に沖する所は、是南朝の遺臣新田相模守義隆の竊む所、襲ふて之を討て、濫りに戦ふて逸する勿れど、將士劔を按じて進ひ、忽ちにして大聲叱咤の響きあり、曉來夢を破るは何者と、浴槽の邊大刀を執つて躍り出づる巨漢あり、鬚髮蓬々翠嵐を吹いて氣虹の如し、是義隆の臣世良田一郎なる者、相州父子に陪して浴に侍するなり、敵圍繞して迫る、一郎刀を揮つて

數人を殞し、大聲呼んで曰く、事茲に到る、主公宜しく計をなせと、即ち敵衆の中に躍り、縦横之を破る、義隆間を得て父子相刺して死す、一郎之を見、首を敵人に委す可らずと、浴舎に入りて火を放つて之に殉す、悲風慘慄として天悲しみ地哭す、爾來幾百年、風雨陰寒の夜、時に鬼哭の喞々たるを聞くもの先年碑を茲に建て、其靈を慰す、有栖川大將の宮の家額にして福羽翁の碑文あり、鬼も亦以て瞑すべきか、
底倉より六町にして

●木

賀

に到る、一大瀑布あり、白鷺の瀧といふ、水聲響緒怒つて地軸を碎く、木賀の起源今尋ね可らずと雖も、源右府の侍臣木賀善司吉成痲疾を憂ひ、此處に浴して治せしより此名ありと、往古は宮の下に亞ぐの地たりしが、明治二十五年祝融の災に罹り、全土悉く焼失したりしより、七湯中の一勝地を失ひぬ、今龜屋宮内樓仙石屋等あり、曾て土州公容堂此地に遊び
溪邊巨石勢壯哉 幾個同儕相喚來

●見晴茶屋

木賀よりすれば敵町許、底倉よりすれば爲屋の邊より一町許、右折して達すべし、三方は老杉の天を蔽ふて鬱葱たるあり、夜死して時に羽客の逍遙するありと、前面に俵石山明神ヶ嶽明星ヶ嶽の嶮を望み、早川須雲の紆曲して山隈を走るを見、木賀の浴舎の青翠の間に散點するを瞰む、見晴の名空しからず。

●宮城野

驚くべし、屹岫たる難關の間、渺茫たる此平野あらんとは、村は木賀より早川に沿ひて登る事四町餘、田圃

開け農家散點し、清流の潺々として其間を走るあり、河に臨みて蕎麥切を嚮ぐ家あり、これ名物の宮城野蕎麥、客を見て始めて調ふ、新鮮にして香味美なり、客の就て味はんと欲するわらば、先づ歩を枉げて指命する所あり、後近傍を逍遙する半時にして再び至れば、調理即ち成る、之を忘るれば無聊を忍ばざる可からず。

●小涌谷

箱根山中に地獄ありと稱されたる古への小地獄なるもの、今上陸下の幸せらるゝや、名を改めて小涌谷といふ、宮の下よりは凡そ半里程、底倉の浴舎を回つて、蘆の湯道を登る事町許、左折して二の平に出で、左に坂路を傳ひて、更に蛇骨川の上流を渉り、荆棘雜草の間、自ら小逕をなせる所を過ぐれば、出山の麓に白霧の漠漠として湧くを見る、これ小涌谷なり、海面を抜く實に千七百有餘尺、浴舎の後方に山を登る事三町餘、硫烟の異臭を放つて白雲を起し、瀾漫して山を蔽ふを見る、此地足の踏む所、杖の立つる所、地軟らかにして綿の如く、忽ち穴を鑽ち、穴は忽ち白霧を起す、熱

湯の奔騰して湧沸する所、誤つて指を染むれば忽ち糜爛す。
浴舎に風來樓開化亭あり、浴舎のある所一望快裕、朝暮雨來らんとして白雲山を封するもの、涼風一陣忽ち霧消し盡して痕跡なし、一所にして百景、旋轉究まる事なし、奇勝山中の奇勝。

●千條の瀧

小涌谷より蘆の湯道に進み、蛇骨川の上流の邊に、飛泉幾十丈、絶嶮の上より倒垂に墜つるあり、素練の銀糸を懸けたるが如し、亦白糸の瀧と趣きを均しうす、

●蘆の湯

涼氣風生して雨始めて收まり、雲脚流れ去つて蘆の湯始めて現はる、湯本より畑宿を経て登れば二里二十八町、瀧阪の峻路に拒まれ、辛うじて達す、蘆の湯は七湯中最も高き處に在り、海面を抜く二千七百六十尺、西に寶藏ヶ嶽の巍然たるを望み、南に雙子の連峯を摩き、北には冠ヶ嶽、東には辨天山、死出の山路人稀にして、硫黄山に雲湧き上り、巒峯相列なり、翠嵐颯々

たる所、温泉其間を流れ、硫氣粉々人をして咽ばしむ、風雲常に定まらずして、或は晴れ或は曇り、忽ちにして雲、忽ちにして雨、氣の變する毎に景即ち變る、浴場は松阪樓紀之國屋三子樓龜屋あり、結構頗る數寄、山中の桃源洞たり

●阿字が池

辨天山の麓に幽邃なる池あり、古鏡を磨くが如くにして水玲瓏、秋牙えて池中に蘆花のそよぐを見る、岸に鑛泉の滾々として湧くあり、其色白黄にして半透明、池の餘水は流れて蛇骨川の上流となる、天女祠あり、池に白蛇あり、天女の命を啣ひて、來りて山を鎮むる者と、靈なりと言ふべし、阿字が池の名は池の形に基づく、今知る可らず。

●穗無山

蘆の湯の北花澤温泉の邊三四町にして猪山あり、禿として一木なし、唯茫茫として芽を生ずれども、烈風吹き破りて又穂を生せず、故に穗無山の名あり、山上平らかにして、遠く房總の山豆州の半島を見るべし、明

媚なる風色は、抱いて以て懐に收むに足る。

●笛塚

月明に乗じて古函の嶺を逍遙し、茲に蘆の湯に來りて小瀧谷の雲霧を見むとし、行いて穗無山の東を搜りて、吹笛の囁きたるが如きを聞くもの、仆れ伏す蓬が中に金鈴の唧々として鳴くなり、低徊歸るを忘れて佇立之を久しうして、風露の衣を潤ふすに驚き、頭を上げて仰ぎ見れば、青松翠滴の面を撲ちて點々たるの下、垂羅森々たる一古墳あり、傳へいふ新羅三郎義光の笙を吹いて豊原時秋に秘曲を授けし處と、風丰颯爽たる古英雄、猶此風流韻事あり、賦に千古の佳話。

史に稱す、新羅三郎源義光官に左衛門尉たり、偶々家兄八幡公の家術武術を攻めて、軍屢々利あらざるを開くや乞ふて兄に陸奥に従はんを許さず、朝議之を許さず、義光已むを得ず辭せずして京を發し、逢阪の關を打越えて、近江の國鏡の宿に來るに、忽ち後より追ひ及ぶ者あり、顧みれば瀟灑たる美丈夫の、身には花田の單狩衣に青色の袴打着たるが、引入烏帽子の優しげに、

月毛の胸に鞭ちて來るなり、義光驚いて曰く、子は豊原の時秋ならずや、何の爲に茲に到ると、時秋答へて曰く、將軍悌義あり、官を拵て、阿兄の軍に赴く、聞説く武人軍に蔽ひ生還を期せずと、生別豈死別ならざらむや、少子父祖の代より、世々將軍が家の眷顧を受く、今將軍に別る、其行を送るなくして可ならむやと義光辭すれども聽かず、従つて足柄の險に到る、道を拒むで關あり、輒く人を通せず、時に義光時秋を辭して曰く、關堅うして通す可らず、義光は亡命の客、元より死を辭せず、今夜關を破つて馳すべし、後慮の迫おらざるなり、奥羽の亂平ぐの後、自ら首刎ねて罪を謝すれば足る、然れども子の如きは俗人、武人に非ざるなり、子の爲に法を冒す可らず、須らく去るべしと、時秋聽かず、俄然として憂ひあるが如し、義光之を怪しむ、既にして案を拍つて思へらく、予小にして笙を時秋の父時元に學び、悉く其秘曲を得たり、時元の死する時時秋僅かに九歳、曲譜を傳ふ可らず、終に秘曲をして亦豊原の有たらしめずして了る、渠の我を送り

て至る者、必らずしも是ならざる勿らむやと、即ち時秋を拉して松露の下に至り、楯を敷きて座となし、月明を借りて秘譜を讀ましむ、問ふて曰く吾子笙を携ふるや否やと、曰く是有り、懐を探りて之を示す、義光翠松に凭り、捧げて之を吹く、其聲玲瓏として珠玉を打つが如く、漣々として鐵馬の鳴るが如し、神澄み氣沈み、山神も來つて耳を澄すかと怪しましむ、秘曲二卷授け了る時、空晴れて星斗稀れに、飛鏡關干として丹關に臨むものは、玉兔の杵を止めて感歎するなり、時秋喜び極まつて泣かむとし、義光戎衣を揮ふて立つ、衣袂悉く傾露の潤ふす處となりて冷氣肌に徹り、俯せば谿谷に雲湧きて途を隔て、仰げば月影依稀として老松の枝に在り、轉た征人をして家郷を想はしむ。史を搜りて茲に到り、古將軍の高義と美丈夫の雅懷とを思ふて、身も亦當年史中の人たるが如きの感あり、時秋物語に足柄の山とあるは即ち茲なるべし、往古の所謂筥根路なるものは駒ヶ嶽の麓より蘆の湯の邊を過ぎて足柄に入り、湯坂の峠を超へたるもの、其笛塚の

地は正に其通路なるべし。

●湯の花澤

七湯以外の新浴場、蘆の湯の松坂樓の門前を右へ進れば八町にして近し、此地海面を抜く實に三千三百尺、氣淡くして冷やかに、盛夏三伏の候と雖も、猶衣に綿を容るべし、泉質は硫黄にして、頗る人體を養ふ、里人硫黄泉の沈泥せるものを執り、乾燥して湯花となし、以て四方に輸出す、湯の花澤の名は之によつて起れるなり、温泉宿と稱するものは、只花の湯一戸あるのみ

●姥子

姥子も亦七湯以外の浴場、之に到るに箱根權現の邊より蘆の湯の東岸に沿ひ、浴道の風景を掬して行く事一里半にして湖尻に至る、これ湖水の北端なり、湖尻より姥子に通ずる道は阪路崎嶇、茅茨其間を埋めて登るに難し、湖畔の途も又狹隘、婦女老幼に便ならず、更に箱根町より湖水を渡るの法あり、舟行凡そ二里、波平らかにして舟動かす、却舟漫々として扁舟緩やかに、目を凝れば老樹低く垂れて水と語り、巖巖若に咽んで

翠苔を載せて遊ぶ、青嶂翠巒峨々として峻端に落ち、山色水聲相迎へ相送りて、悠遊の客を慰するが如し、亦奇勝なり。

浴場は只一戸、高瀬といふ、背に冠ヶ嶽の峻を負ひて大地獄を望み、仙石原西に開け、臺ヶ嶽の走りて迎ふが如きあり、沸々たる熱泉は岩罅の間を穿ちて湧く、巖を穿ちて浴槽となす事、猶太閤石風呂の如し、鬼斧の妙、神工の奇、都門の客をして銷魂せしむ、

●仙石原

其名甚だ著れずと雖も、又一仙境たるを失はず、浴場は上湯場下湯場に分つ、上湯に石村、下湯に勝俣の二浴場あり、此地宮城野の村より行くに、下湯場迄十九町にて稍近く、下湯と上湯とは五町を隔てて、稍遠し、熱泉は大地獄より窟を以て引き來り、浴槽の中に沸ぶ、峻遠の人多く來り浴するを以て、里俗駿河湯と呼ぶ者あり。

●強羅

宮城野の名物なる蕎麥切に舌を鼓して、更に左折し行

く事數十歩、垣々たる新道を得、之を登れば瀧坪あり、羊腸たる山腹を踟躕して行く、途屈曲する事數十回、辛うじて達す、熱泉三あり、皆硫黄、白烟濛々として昇り、人をして雲霧の中に彷徨せしむ、此地は東都の縉紳某が、購ふて別墅とする處といふ。

●大涌谷

深々として雲湧き、漠々として霧起る、白烟漲り昇りて、溪を埋め山を覆ふ、硫氣紛々満山、悉く異臭あり、轟々として噴出する熱泉は、地軸を燦かし來りて、其色紅に、變じて緑となり、紫となり、或は白く、或は黒し、熱沙溶けて湯の如く、金鐵碎けて流るゝに似たり、雨低くして雲垂る、鬼の如く魔の如きもの、雨霧の中に走るは、硫氣の凝つて散ずる能はざるなり、嗽々として鬼哭し、轟々として叱咤するが如きは、熱泉の岩罅を劈いて進しるもの、恰も阿鼻叫喚の聲の如し、大地獄の名之によりて起る、蓋し千古の偉觀なり、此地姥子より八町にして、宮の下より赴くには、二の平より屈曲紆回して一里有餘、冠ヶ嶽劔ヶ峯早雲山大

大地獄の中間に挟まり、一大淵谷の天に向つて開け、躍つて蒼穹を呑まんとするが如し、客の半腹に佇立して下熱泉の所を臨むに、草木枯稿して地に生色なく、赭濁の濁流滾々として流れ、流るゝ所濛々として烟あり、烟あるもの皆異臭、鼻を蔽ふて猶堪ゆ可らず、地を穿つ尺寸にして、忽ち白雲湧き、白雲の所熱湯出づ、岩罅皆熱し、地悉く湧く、過つて立脚の地を失せむか、忽ち開府の冥火に焼かれて、心身忽ち滅し、五體凡て溶く、皮膚悉く悚然、人をして戰慄せしむ、大涌谷の名は小涌谷と共に改めしものと、蓋し大地獄小地獄の舊稱に如かず。

●曾我兄弟の墓

蘆の湯より行く事五町有許、風誘ふ小笹の露の玉散る所二基の古墳あり、其傍にも又一基の薜苔を被りて悄然たるものを見る、いふ、曾我兄弟及妓虎の墓と、これ蓋し孝義の兄弟が復仇に赴くに臨み、髻を切つて埋めしもの、虎の塚も又然るべしと、但俗或は髮塚といふ、塚に地藏菩薩の像を刻む、虎の墓には刻して元和

三年と、苔を剝して讀むべし、又以て當時のものならざるを知るに足る、想ふに後人の追福の爲に建てたるなるべし、風雨侵蝕し來る幾百年、鬱鬱たる所、古墳の世を照らすあり、一片孝心數行涙、學生山下二孤墳」とは、詩にいふ所なり。

●一十五菩薩

古墳に一揃の涙を澆いで進む事數十歩、途央にして石標あり、題して曰く、弘法大師作二十五菩薩と、里人いふ、菩薩像は昔高野大師の刻まれたるものにして、古へより其數を屈指するに、數ふる毎に其數同じからずと、岩を穿つて二十一體あり、他の三體は別に入口の前方にあり、合せて尊像二十五體、岩石皆な奇にして、雨霽常に滴り、苔蒸して草生じ、老松蟠根して臥虎龍蟠の如し、苔を剝がし石を磨きて文字を見る、刻して曰く、「實名三郎二郎丞兵衛四郎六郎二郎」曰く某曰く雖「永仁元年八月十八日」云々と、之を按ずるに、大師の作といふは妄なり、永仁は即ち關東の地大に震ひ、小田原の地悉く壊れんとしたりし時なり、三郎二

郎丞兵衛等も不幸にして壓死したるを、後人の地蔵尊を彫りて、此處に冥福を祈りしものならむ、

●多田滿仲の墓

二十五菩薩を距る七八十歩、道の右側に高さ丈許の古墳あり、多田滿仲の墓といふ、俄かに信ず可らずと雖も、石碑偉大常人の墓と異なり、古函の嶺古碑の下、美人長へに眠るか、英雄骨を瘞るか、墓石の一方に記あり、辛うじて讀むを得れども、缺損して解す可らず。

●風穴

奇岩怪石累々疊々たる古函の山腹、二十五菩薩と滿仲の墓との間にあり、風穴高さ尺餘幅八九尺、暗うして覗ふ可らずと雖も、冷風常に吹き來りて、骨を刺すが如し、故に此名あり、奇といふべし。

●精進が池

池は滿仲の墓の後方にあり、方五六町許、池に魚鱗なし、故に精進が池といふ、或は曰く庄司が池と、蓋し後者なるべし、嚴寒の候堅氷池を埋めて厚さ尺餘、氷

上を滑りて嬉戲すべし。

●石地蔵

滿仲の墓より半町許にして賽河原あり、自然石に刻める座像の石地蔵を安置す、高さ丈餘、古色蒼然、其傍に石燈籠あり、七百有餘年外のもの、其形頗る異なるに、曰く

●御状石

賽の河原より數町、芽茨深く閉す處に巨石あり、大さ巨人手を列ねて四圍、猶數尺を餘すべし、傳へいふ、昔頭大公の此石上に踞して軍狀を閱したる所と。

●二子の茶屋

亭は景を以て著はる、几に踞して蘆の湖の一碧を望み、塔ヶ島の離宮を拜す、俯して瞰めば蒼が池水色依稀として人を照し、一望皆丹青、笠笠の野人、白衣の行者、悉々として行く者悉く指點すべし。

●箱根神社

社は即ち宮根權現、坂を下りて南に社務所あり、石の瑞垣苔蒸して、杉の森の神寂びたる所、神威縹渺とし

て、人をして仰ぐ能はざらしむ、祭神は瓊杵尊彦火火出見尊木花咲耶姬命の三神とす、社は古へ關東の總鎮守にして、貞永の式目等に見えたり、今社記を按ずるに、曰く

夫れ當山の初は孝昭天皇の御代に開山聖占上人二世利行丈人三世玄利老人の幽居の地にして神威を崇めしとかや孝安帝の御宇に湖水の中に目代木を建て、相豆駿三國の界とし欽明天皇の御代に韓國の高根權現を勧請し此山の形梵籙に似たればとて箱根山と名づけ湖水の怪石を觀音岩といひ又一字を建て、普門品を誦す即ち今の湖水の塔ヶ島是なり其後役の行者登山し行基大師も昇臨して山岳林泉に名境多しとて兜卒の内院に表して四十八ヶ所の名にたとふ天平寶字元年萬卷上人鹿島明神の神勅を蒙り錫を止め當山に練行する事三年此時箱根三社權現を崇めて上人を四世中興の祖とす諸經の讀誦一萬卷に及びければ世人萬卷上人と呼ぶ又湖水の西の淵に九頭の大龍ありて時々風波を起し人民を惱ます上人彼深淵に臨みて

神呪しければ悪龍水上に出現す即ち鐵鎖の咒縛を行ひければ大樹の下に繫がれて永く當山の守護神たらん事を誓ひ此繫がれし木を梅檀訶羅木といふ弘仁七年に至り萬卷上人勅を蒙りて上洛し歸路三河に於て入寂す坂上將軍田村麻蝦夷を征する時當社に參詣して表矢を獻す同八年十月嵯峨天皇の勅により駿豆相三國を社領に寄せられ又鳥羽上皇の時勅して酒匂の郷を寄進せらる斯の如く代々の天皇殊に當社を崇敬在し宮殿坊舎莊嚴を悉く大江公資當國の國守たりし時其妻乙の侍從當社に詣りて和歌百首を奉る十五世には花山天皇の皇子豐覺法親王當山の座主に任せられ始めて金剛王院の勅額を賜はれり十九世の座主行實に至りて座主職を別當と號し社壇を再興す治承四年八月源頼朝石橋山に破れて土肥の杉山に隠れし時行實弟の永實を遣はして竊かに食を贈りしかば君臣始めて飢を免かるゝを得たり應て永實を郷導として當山に入り別當の僧坊に忍び後志を達するに及びて自筆の消息を行實の許に遣はし忠貞の趣きを謝

し當郡早川の庄豆州土倉佐野の兩郷を神領に寄せられ丹精の祈禱を修すべき旨を頼まれけり此頃より伊豆相模兩社權現を二所と稱へ年毎に將軍の參詣あり或は奉幣使を立てられ其崇敬一方ならず建仁二年九月社領早川の庄の半を裂き二百四十町餘の田地を改めて寄附せられ又曾我五郎時致少時此別當所に寓せり成長して復讐に赴く途次當社に祈誓し恭敬禮拜し肝膽を碎いて祈りをなせり兄十郎の獻詠に「千早振る神の誓のたがはずは親の故に逢瀬結ばん」と五郎も涙と共に「天降り塵に交る甲斐あらば明日は故に逢瀬玉はむ」と後兄弟が祈經を討たる微塵丸薄縁の太刀及赤木の短刀を頼朝より寄附して永く社寶とす弘法慈覺の兩大師も茲に錫を止めて練行する事あり其後北條早雲當國を掌握するに及び永正十六年四月永樂錢四千四百六十五貫六百十四文の地を寄附せり是は其頃早雲の季子菊壽丸別當坊にありて出家得度せしかば其實は別當領及菊壽丸の知行分に宛て行はれしなり早雲當社再建の企てありしかども果さず其

子氏綱に至り社頭僧房等悉く新造あり天正小田原の役に空しく兵燹に罹りたるを後徳川家康之れを再興す
と、社側に東福寺浴室の釜二口を置く、古雅瀟らんとす、藏する所什寶極めて多し。

● 蘆の湖

「玉くしげ箱根の山のみねふかく湖晴れて澄める月かげ」と、湖水は東西二十町南北一里十三町周回殆ど四里、水深くして淵底計る可らず、或はいふ四十有六仞と、これ大古の噴火口なり、老樹古松の葉末の露、幾千年の滴り凝りて湖となるもの、四面悉く山にして、水碧に波揚らず、混漾として古鏡の如し、春嶽老侯の歌に「玉くしげ箱根の湖を見渡せば富士を映せる鏡なりけり」と、これ箱根の倒富士なるもの、千古秀麗の靈峯不斷の雪を載いて倒せに影をひたす所、塔ヶ島の離宮あり、巍然として島中に聳ち、富嶽と其靈を争ふ、湖中に耕鯉あり、長さ六尺有許、天明らかに氣澄みたる時、湖上に泛びて遊泳す、里人時に之を見ると、又

鱒鮭魚を産す、蘆の湖一名鑿字ヶ池といふ、餘水は流れて仙石原に注ぎ倒川と稱さる、即ち早川の源にして、水の流るゝ所景色之に伴ひ、函嶺の奇をして更に奇ならしむ。

● 乙女峠

乙女峠なる者、人其名を聞いて其地を究むる少なし、仙石原の西一里、蘆の湖の西涯に沿ふて山脈蜿蜒北に走り金時山に列なるの所にあり、宮の下よりすれば木賀宮城野を過ぎて一里有許、攀ちて仙石原に至る、仙石原より半里程、渺茫たる高原あり、惰牛眠り未だ覺めず、悍馬群をなして馳するもの、これ耕牧舎の牧なり、是より途は彌々峻、歩々に峻を極め、揣ぎて登る事約半里、始めて乙女峠の絶頂に達す、巖岬の處に踏して望めば、馳望千萬里、山低く谷深く、雲烟脚下をよぎりて、忽ち富士の雲表を抜くを見る、山嶺の積雪球の如くにして玲瓏、手を延せば一掬の分附を得るかと思しむ、山の氣、山の靈、俊秀にして人に徹る、富士を望むに於て好箇の地、乙女峠の富士とは、蓋し此

の佳稱なり。

足柄山

●大雄山

小田原より關本に至る二里程、駕籠を下りて徒歩するに峻阪二十八町、登り悉して表門に入る、寺を最乗寺といひ、山を大雄と號す、曹洞の古刹にして、本尊は華嚴釋迦如來、應永元年了庵禪師の開基する所なり、了庵慧明といふ、相州大住郡糟屋の人、曾て丹州永澤寺に遊び、僧通幻に従ひて法嗣十哲の首座となる、業成りて郷に歸り、途足柄山を踏みて、懸くる所の袈裟を怪鷲の爲に奪はる、了庵之を逐ふ、鷲即ち袈裟を當山の老松の上に於て去る、了庵登る能はず、樹下に跣座して其墜つるを俟つ、須臾にして一陣の清風あり、飄郁たる香を放つて過ぐ、袈裟忽ち翻へりて了庵の肩上に懸れりと、袈裟掛松といふ今猶存せり、表門を入れば、正面を本堂とし、其左を開山堂、又大慈院報恩院あり、多寶塔開祖廟皆莊重、金剛水あり、これ開山

の祖了庵が地中を穿ちて金印を獲たる所、印は其質白金に類す、今寺寶たり、山中老杉亭々枝を交へ葉を交はし、鬱葱として晝尚暗し、陰闇として異響を聴く、人其音を究むるなし。

●道了薩埵殿

金剛水の傍らより左折し、觀音堂の結廂門に入りて右に石磴を登れば即ち本殿、像は古木の立體にして、別に大天狗と小天狗とあり、道了なる者は開祖了庵の徒弟、無雙の大力にして能く鼎を扛ぐ、當山草創の時、自ら巨石大木を運び其功跡からず、寺成るに及び、自ら當山守護の誓願をなし、應永十八年三月二十七日、師了庵の死すると共に、忽然身を變じて天狗となり、雲中に飛行したりと、毎月二十七八兩日賽者夥たしく、境内熱鬧、都門の士の遠く來り詣するあり。

●足柄古關

「足柄の關の山路を行く人は知るも知らぬも疎からぬかな」と、實にや人烟稀れにして山深く、秋冴えて千草百草咲き亂れ、仆れ伏す小萩が露に袖ぬれて、辿り

來る裝に萬の紅葉を染め、難關前に横はりて家郷茫茫たる時、知るも知らぬも誰か人の暮かしからざる、古關の趾は矢倉澤に在りしといふも今定かならず、矢倉澤は古へ足柄山へ通ふべき一小驛なれば、關も此邊にやありしならん。

●山城趾

文和元年新田左兵衛佐義興が孤軍を率ゐて奮闘したる所、薄金の鏡の花やかに、驛馬に鞭ちて縱横馳突せる當年美丈夫の面目、磅礴として夜氣の間に現はるゝかと思はしむ、趾のある所神繩村、郡は上足柄字は城山。

下總

市川

●市川の渡

兩國橋より東逆井の橋を度りて、砥の如き道路の東に馳するものを尋ねば、小松川の宿を過ぎて直ちに小岩村に達す、河は其幅甚だ廣からざれども、水清くし

●鴻臺

は、町の北方を壓して立つ、或は言ふ國府の臺と、古へ國府の在りし地なればなり、其始め太田持資の之に據りて白井城の敵を夷げしもの、後年新公方義明の、兵を起して小田原を攻めんとするや、小弓の御所を發して、陣を此山に布き、氏康の爲に敗れたる所、亦安房の雄鎮里見氏の鋒を北條氏と交へ收績したるの古戰場、古より此丘阜に據りたる者の、多く凱歌を奏したるを聞かず、鴻の臺は攻むるに易く、守るに難きの所か、臺は水面を抜く數百尺、滔々たる長江に瀝んで懸る、老樹山を封じて鬱葱、天守臺の跡あり、登臨して四方を望めば、安房の連山峨々として横はり、西に

葛飾の沃野を望みて、遙かに東叡山を雲烟の間に見る、床几塚あり、淺間社あり、抜け穴は八幡の柱に通ずと怪しむべし、夜泣石あり、羅漢井は臺上最も古跡たり、絶壁の下水碧にして旋渦する所を鐘ヶ淵といふ、昔里見氏の巨鐘を船橋の慈雲寺より奪ひ來り、軍鐘に宛んとして誤つて船を此處に沈む、里人附加して、龍神の名鐘を惜む爲と、鐘ヶ淵の名はよつて興れり、此地今は陸軍の所轄に屬し、教導團を置く、濫りに登る可らず、空しく風流の士をして長歎を發せしむ。

●總 寧 寺

翠雲巖として道を挟み、瀟灑たる風色の依稀たる處大門あり、門を入れれば即ち佛殿、本尊は釋尊にして、また六社明神の社あり、鹽釜神社を模擬したるものと、大門の前なる下馬札の前に二株の榎あり、曾て太田道灌の自ら植えたる遺愛の篋といふ、客殿の傍にも一株の古梅あり、老幹殆ど朽つると雖も、年々珠苔を開いて芬芳の馥郁たるを聴く、又道灌が旣賞の遺樹と、寺は江戸川の岸に在りて安國山と號し、曹洞の名刹たり、

寂靈和尚の開基せしもの、初め江州に在りたるを、開宿の地に移し、更に内町に轉じたるを、徳川家綱の改めて茲に移さしめしもの、實に寛文三年なり。

●眞 間

眞間の山は一帶の丘陵悠々として鴻の臺に列なる、半腹に弘法寺あり、石磴面を壓して高さ六十餘級、登り悉せば即ち二王門、像は色黒漆の如くして、形ち頗る異なれり、傳へいふ名工運慶の作と、願勝して門を入れば、左して直ちに中門より本堂に詣すべし、常唱堂あり、祖師堂には日蓮上人の像を安んず、此寺元眞言宗なりしを僧日朝の改めて日蓮宗となせしもの、猶舊名を存して弘法寺と呼ぶ、釋迦堂に安置するの釋尊は宮木常忍の刻り所、又方丈の傍丘陵の上に遍覽亭あり、眼を縦ちて房總武の風景を見るべし、山に楓樹多し、其眞間の紅楓と唄はれて、歌に詩に風流韻士の吟咏に上りしものは、古へ釋迦堂の前にあり、人の戯れに樹幹を抱く、五人手を列ねて、猶尺餘をわますと、今は枯槁して見る可らずと雖も、猶數株の老木あり、

秋風山を染めて錦綫の如く、其下に漭を敷き、酒を暖むるも好風流なり。

●繼 橋

弘法寺の石磴を下りて橋あり、其南に當りて架れる小橋を眞間の繼橋といふ、古へ河中に巨大の柱を立て、以て二個の橋梁を支へたるを以て繼橋とは呼ぶなり、「勝鹿や昔のまゝの繼橋を忘れず度る春霞かな」と慈圓法師の詠じたるもの、新勅撰に收められぬ。

●手兒奈の古祠

繼橋を度りて百餘歩、老松霞罩りて、潮風長へに枝を鳴らすの所、一字の古祠あり、楣間を仰ぎて手兒奈神の額を得、手兒奈とは未婚の處女をいふもの、蓋し人名には非ず、萬葉集を閲して手古奈追懷の歌を見る、稽ふるに頗る上代の人なるべし、老松は其墓表といふ、手古奈は葛飾の貧女なり、美貌温玉の如く、風姿嬋妍として眞に絶世の國色たり、有情の痴漢之を見て、誰か情緒の亂れて纏綿せざる者あらんや。追つて情を通せんと欲する者無慮百有餘人、手兒奈堅く却けて許さ

ず、只世人の徒らに外貌にのみ懸戀するを歎じ、世を厭ふて眞間の入江に投じて死すと、後文龜元年弘法寺の僧日興なる者、夢に手兒奈の靈験を知り、祠を建てて之を祀る、毎歲九月九日を以て祭日とす、士女腐集參詣する者夥だし。

●松 戸

驛は江戸川の東岸にして、陸前濱街道の一小驛、市川より上る事里餘にして遠す、史に稱す北條氏綱の新公方義明を攻むるや、夜半淺草川の流れを亂して軍氣颯爽、疾き事風の如くして松戸の堤に達し、櫓を敷きて席となし、將士相會して謀を定むと恐らくは今驛の有る所なるべし。

●相 摸 臺

名は何によつて起るを知らず、松戸の東方に當れる高原なり、廣さ兩三町、登臨して葛飾の野を望むべし、天文六年十月年少にして氣鋭なる新公方義明が、小田原氏と兵を交る時、椎津村上鹿島堀江の驍將五十餘騎を縦ちて此臺に登らしめ、以て敵の軍容を見せしめし

所と、當年兵馬倥傯の所、今驛路の馬の鈴を聴くのみ。

●東漸寺

松戸を距る二里にして小金の町に到る、町に古刹あり、浄土宗にして關東十八檀林の一、東漸寺といふ、開山は經譽上人にして文明十三年に創むる所、古へ根本内に在りたるを、五世の祖行譽上人の今の地に移したるもの、寺域廣さ六千坪、老松怪杉途を壓して立つ所、翠滴屢々瀟々として面を撲つ、行く事數百歩山門あり、佛法山の扁額を掲ぐ、明入某の筆と、筆蹟味ふべし、門を入りて老杉あり、當山鎮護の靈樹と、樹幹凡そ二丈有餘、轟々天を指す、又數百歩を數へて中門あり、撞樓堂を建つ、梵音轟々餘響あり、之を撞けば方八里に聞ゆと、其傍に樅の巨木あり、老杉に比して太さに於て稍小なれども、高さは即ち優る、往年雷火あり、樹上に震ひ、亭々たる梢頭を折り、今は殆んど枯れんとす、圓光大師の木主を安置する處正定院あり、圓通閣には觀世音の像を安んず、慈顏温容眉を垂れて賽者を看る、寺に垂糸櫻あり、東漸寺の糸櫻なるもの、飛絮

優麗人をして覺えず鈴を駐めしむ、本堂は頗る壯麗にして、棟上黄金の葵章あり、徳川氏の與ふる所、烈日之を射つて、人をして正視する能はざらしむ、本尊は阿彌陀如来、普賢勢至の二像を侍座せしむ、堂塔悉く壯麗にして、小金町中の絶觀なり。

●小金ヶ原

茫茫たる大平原、千葉印旛東葛飾の三郡に跨りて、野草人を没し狐兔徘徊す、小金が原に鈴虫の鳴く」と詠みて彷彿ひし古への歌人が旅に病みたる所、豈獨り鈴虫のみならんや、秋呀あて星斗闌干たる時、招く尾花の葉末の露に、馬追虫の哀れを唄へば、蟋蟀咽んで金鈴子の宛轉たるを聞く、徳川氏の頃原を分ちて、高田上野中野下野印西の五區となし、牧馬を放ちたるを以て小金の牧場の稱あり、今は窮民を送りて開墾せしめ、又當年の像を見る能はず。

●流山

幕末の驍將近藤勇が敗殘の兵を集めて殊死して戦ひたる所、猶夏草の菁々たる所、紅杜鵑の血を染むるが

如きを見る、町は頗る殷盛、豪富軒を接して、其に下總の一大富源たり、所謂流山味味を産する所。

●野田

流山を距る約三里、江戸川の流れに臨む、町の上花輪に岡部氏の城趾あり、今は麥秀で、秦々たるのみ、清水に金乘院あり、堤臺に入幡社あり、其祭禮の盛んなる都人士を驚かす、蓋し野田は醤油の醸造をなす者多く、市街殷賑なるを以てなるべし。

●生沼

野田の西北座生新田にあり、沼は東西に狭く南北に廣し、周圍殆ど二里半、江戸川の流に及び、扁舟に棹して入るべし、水淺き所蘆花白く、鶴雁來り遊びて、夏は水鶏の憂々として鳴くを聞く、風光明媚宛がら仙洞に入るの思ひあり。

●常敬寺

關東七箇大寺の一、眞宗にして西本願寺派に屬す、二川村中戸にあり、寺記にいふ、延慶の年親鸞上人の孫唯善錫を東國に垂れて鎌倉に來る、偶々將軍の宮惟康

親王の歸依する所となり、此地を相して七堂伽藍を建て、以て唯善に寄附せりと、後花園天皇號を中戸山と賜ひ、寺を常敬寺と呼びしむ、寺域瀟洒、寺僧潔癖あり地を拂ふて糞塵を止むるなし、

●關宿城

關宿は大利根の水碎けて江戸川に走るの所、野田を距る約四里、城は元足利氏の幸臣築田河内守の築く所、康正の年成氏鴻の巢に在り、築田氏結城黨の領袖として此城を守ると、天正元年築田政信弟綱政と共に北條氏政と戦つて敗れ、城遂に陥る、徳川氏の代となりて久世重之之を領し、代々相傳へて維新に至る、今は廢墟の空しく田圃となるあり。

●宗榮寺

永仙院殿系山充公大禪の墓表の在る所、永仙院殿とは古河公方晴氏の法號なり、里人之を御所印塔と呼ぶ、古將軍が戦ひ數奇にして怨みを吞みて眠る所、寺は觀照山と稱す、松平康元の香華院たり。

●八幡神社

途再び市川に歸りて八幡の村をよぎる、八幡神社あり、社記にいふ、寛平年間宇多天皇の勅願により、石清水の八幡宮を勧請せしものと、古へは社殿莊重たりしが、桑田碧海幾浮沈して、落葉荒廢見る可らざるに至りしを、源右府の再興せしものと、後再び衰頽して僅かに現形を存するのみ、社前に大銀杏樹あり、幹空洞をなし、小蛇群棲す、毎歳八月十五日、當社の神事に當り、縹渺として神樂を奏する時、蛇樹上に現はれ簇々として枝葉に蟠まると、未だ俄かに信す可らず

●八幡の藪

所謂八幡不知の藪なるもの社傍街路の邊に在り、柵を繞らして人を遮ぎる、此地往古八幡宮を勧請したる所と、俗傳にいふ、水戸黄門光圀自ら此地に入り、異人の基を圍むを見、局終つて藪中を出づれば、即ち三春秋を経たりと、藪廣さ僅に四五十坪、躍らば即ち越ゆべし、或はいふ此地行徳の入會地なるを以て、八幡村民の濫りに入るを許さず、故に此名ありと、至説といふべし。

中山

●法華經寺

市川より佐倉街道を行く二里、巍然たる老樹の丘阜の上を蔽ふあり、仰いで山門を望むもの、これ中山の法華經寺なり、汽車に搭じて來り中山の驛を下れば僅かに五町有許、石碓あり、登り悉せば即ち寺門、所謂中山の鬼子母神なるものなり、山を正中山と號す、今寺僧の説く所を聞けば、昔建長六年日蓮海に航して下總より將に鎌倉に歸らんとす、同舟の客に富木播磨守なる者あり、中山の土豪なり、偶ま上人の所説を聞き深く法華經の功力に感じ、文應元年第宅を毀ちて一字を建てたるもの即ち此地なり、即ち人を遣りて日蓮を迎へしむ、日蓮喜んで之に赴き、爲に法を説く事一百日、自ら一竹四菩薩の像を刻むで其堂に安置するもの、今所謂奥の院なりと、寺城廣さ一萬五千坪、本堂中央に在り遙かに海を望むで建つ、經藏遺骨堂鼓樓堂常唱堂五層塔等相列なり、本堂の後ろに小丘あり、鬼子母

母神の祠を建つ、祖師の説法堂あり、祈禱堂あり皆莊嚴、客殿方丈悉く數奇を悉し、豪華驚くべし、僧は絹布を纏ひ水晶の念珠を爪ぐり、財を散じ香を極む、果して祖師の眞意なるや否や、常唱堂の背に大公孫樹あり、里人呼で泣銀杏といふ、其來由を問へば、古へ真間弘法寺の開山日朝、父播磨守常忍の怒りに觸れ、其前を遠ざけらるゝ事多年、日朝屢々來りて許されんとを乞へども得ず、朝悲しみ極まつて此樹下に慟哭す、故に泣銀杏といふと、常山の開基なる富木播磨守常忍の墓は奥の院の路傍草堂の裡にあり、常忍老後難髮して日常と稱し、此堂裡にありて寂然として妙法を咀嚼したりと、一居士の高志、今の俗僧を振肅するに足る。

●妙正ヶ池

中山の北二十町許字千束に妙正が池あり、池水千頃の水を湛へて長へに碧に、蒼然として顔色を照らす、兩岸は茅茨生ひ蘆花亂れて、淵底深き事知る可らず、法華者流の法徳を説くに曰く、昔日蓮上人の富木常忍の

●安房須明神

爲に大法輪を轉じ、説法教化なし玉ふや、此池に龍在り、化して窈窕たる美人となり、中山に來り祖師の説法を聴く、信心肝に銘じて深く渴仰するに似たり、一日此美人祖師の許に來りて法名を乞ふ、上人即ち自ら曼荼羅を書し妙正の法號を與ふるに、美人喜び拜して退き、得々として去る、上人即ち人をして其跟を跟けしむるに、此池の邊に到りて忽然として消ゆ、曼荼羅は即ち樹梢に懸れり、衆之を奇とし、始めて美人の龍女たるを知り茫然之を久しうす、後池を妙正と名け、祠を建て、龍女を祀ると、所謂法華經の龍女得脱の事を附會したるなり、龍の化するや必らず美女、終に一度も醜婦たりしを聞かず、上人の其跡を追はしめしも故あるかな、里俗妙正が池より中山に到る道を曼荼羅小路といひ、或は蛇小路と呼ぶ。

●安房須明神

祭神詳かならず、中山の北方一小丘陵の上にあり、或はいふ、里見忠弘の男長九郎弘次を祀ると、今も其傍らに小圓塚あり、或は信ならんか、史に稱す、里見長

九郎弘次年甫めて十五、父に従つて軍に在り、北條氏の兵と戦つて利ならず、里見の軍收れ走る、時に長九郎緋紅の母衣をかけ、白馬に鞭ちて敵衆の裡に躍る、軍容颯爽進む所皆破る、即ち馬を控へて大に罵つて曰く、我聞く北條氏の兵天下に敵なしと、今一羸弱の少年を擒にする能はざるや、名實の背反何ぞ夫れ甚だしきと、其聲凛烈熾として秋霜の如し、微風徐るに鬢髪を吹いて紅顏爛々鮮媚、敵衆恍として酔へるが如し、敢て來り追らず、弘次亦生還を期せず、我軍の遠く走るを見て退かずして、四方を睥睨す、偶々敵中に松田右京亮あり、進んで是に迫り、相搏つて馬より落つ、弘次下に在り、松田其上に跨る、刀を抜いて刺さんとすれば、風半玲瓏花より鮮やかにして之を殺すに忍びず、即ち助けて走らしめんとす、弘次怒つて曰く、長九郎は武人なり、敵の憐れみを以て逃るゝに忍びんや、茲に至るは命なり、速かに首を刎ねよと、逡巡の間衆雲集す、松田泣いて首を截して去る、亂平らぎて後、松田佛に入り、名を浮世と改めて、弘次戦死の所に來

り、墓を立て、冥福を祈りしもの、即ち此丘阜なりと、古への武人何ぞ其志の優なるや。

●高石明神

安房須明神を去る數町、高石神に在り、里見氏の家宰正木大膳の墓と、大膳は里見氏の驍將、義弘の國府臺に戦ふて破るゝや、氏康追ふ事頗る急なり、大膳之を見て馬を回らし、逆まに氏康の陣を突く、大膳驍勇にして籌略あり、機を見る神の如し、敵中に入り大に叫び戦ふ、常に好むで鐵鞭を揮ふ、鞭閃めく所人馬共に碎く、七突七驅敵人皆潰ゆ、大膳左右を顧みて曰く、噫是小田原北條氏の精銳なり、惜しい哉我公をして我謀を用ひざらしめしを、即ち走つて義弘に追ひ及ぶ、氏康感歎して之を逐はずと、祭神は大膳騎馬の像なり、勇姿堂々、尙當年の意氣を想はしむ、

行 德

●行德德願寺

行德驛は江戸川の海に注ぐ所、般賑の市街なり、德願

寺は海岸山と號し、淨土宗の古刹にして名高し、古へ普光庵と稱し、僅かに方丈の草庵なりしが、建長十九年圓譽上人の經營によりて、今の伽藍を建立す、本尊は阿彌陀佛、運慶の作る所と。境内閻魔堂あり、安置する所の像は長八尺有許、又運慶の刀と、寺に菖蒲多し、毎歲梅雨の候花開いて紫白拉雜、葵の上初霜風風城錦の袖曰く何曰く何、又境内の美を添ふ、寺の在る所行德町一丁目

●行 德 八 幡

應神天皇を祀る、行德町三丁目にありて古殿宇たり、これ驛の總鎮守にして、祭禮の豪華なる目を驚かすべし、又神明社なるもの一丁目に在り、古へ中洲に在りたるを後年茲に移すと、此邊を金海の森といふ、これ慶長年間金海法印の一字を創め金剛院と稱せしに基づく、今御行屋敷の趾と稱するは其遺跡なるべし、此邊の海岸多く鹽を焚く、行德鹽とはこれ、砂白く浪平らかなる所蟹舎蟹莊相列なり、苦屋の烟の搖曳する所宛から齋の如し、濱に行德衝あり、嬉戯して砂上を走る

村童之を逐へば颯然として飛び、又來つて戯る、風流韻士の杖を曳いて來り賞する多し。

船 橋

●葛 羅 の 井

地出醜泉 豐姬所鑑 神龍之淵 大旱不涸 溝乎維圓 名曰葛羅 不絶綿々

とは太田南畝の題せし所、東葛飾郡葛飾村字本郷なる葛飾神社の境内に在りて、稻荷社の側に在り、水清冽にして掬すれば即ち醜し、土人傳へて曰ふ、水脈遠く龍城に通ず、之を呑まば瘧を愛ひすと

●勝間田の池

葛飾村に在りて船橋道の傍に在り、土人は地名によりて本郷の池といふ、萬葉集に「勝間田之池者我知逆無然言君之額之無知之」と新田部親王の詠じたる所、或は大和に在りといひ、或は美作にありといふ、今暫らく此地の舊記による、池の畔に熊野社あり、稍丘陵の形をなせる所、登臨して池を見るべし。

●阿須波神社

「今更に妹歸さめやいちじるさ阿須波の宮に小柴さすとも」と、俊頼朝臣の歌ひし所、葛飾村西海神にありて、後醍醐天皇を祭ると、本社祭禮を里俗芋祭といふ舊慣として此日芋を食ふを以てなり、里人此神に祈るに小柴を以てす、多く旅人の行途に上る時、途次の恙なからむ事を乞ふ、俊頼朝臣の歌も茲に胚胎するあり本社入口に石芋あり、いふ、往古高野大師の錫を當國に垂るゝや、日暮此地を過ぎて一茅屋を見、就て一宿を乞はんとす、家に老嫗あり極めて偏執、家に食なきを以て之を許さず、座右に累々として芋あり、之を問へば即ち石と、大師嫗の慳吝を惡み、之を懲戒せんと欲して、屋後に芋圃のあるを見、加持して悉く石と化せしむ、其芋四時變せず、年々葉を生ずと、食物の報ひ恐るべきかな。

●慈雲寺

大峯山慈雲寺は禪宗の古刹にして、鎌倉建長寺二世の祖佛光禪師の開基する所、船橋町の北端にあり、本尊

は行基作の釋尊像、昔は堂塔の美を極めしも、里見氏の亂に會ふて兵燹に罹り、一朝烏有に歸す、其梵鐘の如きも、亦奪略せられて國府臺に運ばれしが、江戸川の洲に沈みて、徒らに鐘が淵の名を止む。

●意富比神社

船橋驛五日市に鎮座す、祭神は天照皇太神豐受皇太神にして、八幡大菩薩春日大明神を脇座とす、社殿莊重攝社あり末社あり、人丸社天神社稻荷社常盤社相列なり、寶殿秘殿齋殿は本社傍に在り、社記を按ずるに、昔景行天皇の四十年、日本武尊東夷を征するの途次、此地に駐まりて遙かに伊勢の神廟を祈る、忽ち見る海上に扁舟あり、漂泊して眼底に来る、船に白熊を立て神鏡一面を懸く、尊驚いて曰く、これ皇太神の降臨し玉ふにあらすやと、收めて社殿の鎮となす、これ即ち當社の草創と、年代の古き殆ど絶無といふべし、東夷誅に伏すの後、尊之を天皇に具し、其靈異を奏す天皇即ち勅して、神廟を朝日の宮と號し、當社を夕日の宮と名づけ玉ひ、第四の皇子五百城入彦尊をして、

●茂侶神社

此處に下りて東國の縣主たらしむ、後天喜三年源賴義の奥夷を征するや、八幡公をして當社を修築し、朝敵鏡撫の新願を籠めらる、後年勅して船橋六郷の地を賜ひ、源義朝をして再び修せられたるもの、源右府の時に到り、偶々宮司某其忌諱に觸れ、神も又座せられて神領を剝奪せらる、承久元年實朝之を復し從前の社領を寄せしが、爾來東國の風雲急にして戰亂絶ゆる事なく、神殿荒廢して亦昔時の觀なかりしが、徳川氏の天正十九年、新たに社領を寄附し、次いで備前守忠次をして社段を造營せしめ、結構漸く備はる、今は縣社たり、毎歲秋冷の候大祭を施行す、其式優美にして素朴頗る神威の靈あるを覺ゆ。

茂侶の社は意富比社の攝社にして、淺間山の丘陵に鎮座す、祭神は木華咲耶姬命、延喜式内の舊祠なり、丘は前に遠ヶ谷を控へ、白砂青松依稀として契り久しく遠く海を隔て、富嶽の靈巖を望み、天晴れて筑波の晴嵐を見る、房岬の青螺は水天の間に泛ぶ又勝區あり。

●遠が澤

「松一本時雨れて雲の逝きにけり」とは、逍遙の俳客が吟懐を行りしもの、其船橋の海濱を遠が澤といふ、又釜が淵の名あり、昔平親王の妾桔梗の此處に閑居して終に海に投じたる所と、怪しむべし、或は此地を御菜が浦といふ、古へ徳川氏二代の祖が東金に狩するの途次、船橋の驛に宿したるを以て、里人此に漁どり以て獻す、後常例となりて、毎年魚介を幕府に獻じたるより此名ありと、船橋の宿は東京より千葉に到るの途次唯一の大市街、般賑にして富商軒を接す、魚介新鮮、馬鹿貝の名産あり、又車蝦に名あり。

●時平神社

船橋より海に沿ふて東する二里有餘大和田の驛あり、驛の鎮守は時平神社、藤原時平を祀るもの、蓋し此地時平の莊園たりしを以て、其靈を此處に祀れるならん里人梅樹を忌むと、好笑すべし。

●習志野の原

渺茫として一望千里、船橋驛の北方より西は藥園を

界して、東大和田の新田に接す、古へ正伯原と言ひしもの、明治六年 車駕親臨して兵を此地に練り、依つて習志野の名を賜はる、平野茫々一の見るべき無しと雖も、見るなきの所も又一奇。

●鷺 沼

今は渺たる一村落、津田沼の停車場より數町の處にあり、當年大旗相望み、威風遠近に揮ひたる頭大公の軍容香として知る可らず、傳へいふ此地は新公方義明の小弓の御所より來りて鴻の臺に次したる所と、古へ大沼あり、鷺沼と稱へたるも、今は即ち無し。

●馬 加

幕張停車場より渺茫たる芋圃の間を過ぐれば、海に沿ふて馬加の村、僅かに城趾の殘骸を見る、これ馬加康胤の據りて武を揮ひたる所

●稻 毛 海 水 浴

幕張より檢見川の町を過ぎ、砥の如き一路の海に沿ふて走る所海水浴場あり、海氣館といふ、名は稍俗なれども景は即ち雅、樓の建つ所國道を前にし、巍然とし

て海を壓す、流あり白銀の瀧といふ、老松館の四方を繞りて幾千百株、偃蹇して沙上に俯すあり、怒つて天に朝するあり、踟躕して作るは、海風に黒みて色支黄、恰も舞子の濱に似たり、小舞子とは著者の一私言と雖も、或は近からんか、老松の間に數棟の客舎を設け、客の撰ぶが儘にす、頗る洒落、館内別に温浴あり以て垢荷を洗ふべし、魚は即ち内海の鮮、酒は遠く灘の醇、飲むべく食ふべし、盛夏三伏の候、樓に上りて假臥すれば、潮風吹き起りて俗塵を洗ひ、心神の快言ふ可らず、東京附近の好浴場。

千 葉

●登 戸 神 社

稻毛より千葉に到るの路、黒砂の蟹舎を過ぎて登戸に到る、木村屋あり、又好箇の海水浴場、木村屋の前より街路を隔て、石礎を登れば即ち本社、祭神は天御中主神にして千葉介定胤の創建する所、古へ千葉氏元服の守護神たりしが、中道廢頽し又見る能はざりしも

近年修築して稍舊觀に復す、社は丘陵の上に在り、袖が浦の風光を雙眉の間に收め、閑鷗帆影の參差たるに驚き、海を蔽ふて群がり飛ぶ、一幅の好畫圖を展ぶるが如し。

●千 葉 神 社

創建以來九百有餘年、殆ど十百霜星を経んとするの古名祠、祭神は天御中主神にして、實に長保二年に勸請する所、社殿莊嚴神威赫耀たりしもの、明治七年祝融の災にかゝり、堂塔烏有に歸して又見るべきなし、社は千葉町本町の北隅里俗院内の地にあり

●大 日 寺

千葉神社に隣り阿比留山と號す、千葉氏累代の菩提所たりしも、中世以後頗る荒廢し、什寶多く千葉寺に歸す、境内に千葉常兼以下十六世の墳墓あり、五輪の石塔にして、今央頽廢す

●來 迎 寺

千葉町に遊ぶ者、行いて來迎寺の阿彌陀如來を拜すべし、傳へいふ天竺の昆首羯磨の作と、寺は道場に在り、

淨土寺にして知東山と號す、寺は始め時宗たりしが、天正年間萬里小路秀房卿の男滿譽尊照大僧正の家康の命により之を中興し、改めて淨土宗となしたるもの、代々千葉氏の歸依する所、今尙氏胤等七基の墓碑を存す、傳へいふ、此地に道場の地名あるは、徳川家康の東金に狩するの途次、此地に假營を設け、滿譽上人を延きて、其説法を聴聞したるにより、假營を稱して道場といふ、後地名となれりと

●羽 衣 の 松

本町の通を南する數町、大和橋を渡りて縣廳の傍に公園あり、名は公園と雖も、實は唯一小平原、風韻なく雅趣なく、只羽衣の松あり、樹幹丈許、蟠つて地に臥し、延いて四方に偃蹇す、落陣斜めに射り蒼翠綽の如く、秀靈の氣瀟洒の體、覺ゆる足を駐めしむ。

●猪 の 鼻 臺

千葉の町由來勝區少なし、先づ指を猪の鼻臺に屈すべし、臺は巉巖幾百尺、袖浦の風光を臨眺して立つ、往古千葉氏の城を構へて武を輝かせし所、天高くして蒼穹

風度れば、鋸山の青巒岬の波間に泛び、雲烟渺茫として遙かに武相の山を望む、富嶽老松の頂を磨して、碧波洋の天に連なり、物見の松あり、幹を抱いて下瞰すれば、燐壁十餘丈立脚の地を掠りて走る、寒川の海君待橋一昨の内に來り、絡繹たる人馬は宛がら盆景盤中の景の如し、仰げば松高くして天低く、青嶺颯々として海風に鼓奏す、暑に熱を忘れ、寒に冬を知らず、好箇の遠望臺。

●君待橋

君待橋、其名の何ぞ哀れに優しきや、傳へいふ治承の昔、千葉之介常胤源頼朝を此橋上に迎ふ、公左右を顧みて橋の名を問ふ、左右答ふる能はず、時に常胤の季子東六郎胤頼進んで曰く「見え隠れ八重の沙路の待つ橋を渡りも敢へず歸る舟人」と、古武士が千古の風流、又藤原實方の歌枕見よとて陸奥へ左遷せられたる時此處をよぎりて、但人に橋の名を問へば、應へていふ君待橋と、實方即ち懐紙を搜りて「寒川や袖思が浦に立つ煙君を待つ橋身にぞ知らる」と、橋は猪鼻臺

●寒川神社

君待橋の邊寒川の村落に在り、延喜式内の古社と、石華表あり、朝霧海風を浴びて色玄黄、内に本社ありて拜殿相列なる、末社七八其周圍に點在す、境内の老樺

の下、寒川の長洲に懸れり、橋長さ六七尺、知らずんば橋あるを忘る、其實の小にして、其名の斯の如く大なるも奇といふべし、往古は此流れ猶廣く滔々として海に朝し、左右は多く蟹舎櫻村、人烟稀にして野草人を没す、偶々橋の邊に美人あり、曾て長洲の情人と契り、常に此橋に佇立して情人の至るを待つ、蓋し一日も缺く所ならず、偶々霖雨に會し、濁流滔々旋渦し來りて橋を流す、美人之を見て悄然、郎と誓約の絶えん事を歎き、潸然として泣く、偶々郎約の如くに至る、橋已にあらす、即ち躍つて蹠らんとし、衣を掲げて水中に入る、水流急にして脚を失し、忽ち情郎を掠めて去る、美人之を見て救ふ能はず、慟哭して絶えんとし、心を決して又郎の溺る、所に投ず、後人橋に名けて君待橋といふと、村老の語る所、何ぞ其嘶の哀れなる。

大銀杏樹、濶々として柯枝天に朝す、共に六百有餘年外のもの、祭神は寒川比古寒川比賣の兩神、又天照皇太神を祀る、社の境内に白旗神社あり、これ當年土豪千葉介常胤が蛭が小島の流人の爲に兵を擧げて應援せんとし、馬を此社頭に進めて軍の利あらん事を祈りし所、白旗二十條を寄附す、社の名の依つて起る所、桑田幾度か碧海となるも、神靈舊に依つて崇高、祭神は譽田別尊氣長足比賣命

●千葉寺

阪東三十三ヶ所觀世音の靈場、海上山觀音院とは是、寒川神社の東千葉寺村にあり、寺内瀟灑、老櫻枝を交して開花の候遠く望めば環路を列ねたるが如し、千葉町の士女が唯一の遊覽場とす、辰鐘あり、刻して弘長元年十二月二十二日と、之を撞けば梵音朗々、袖浦の魚驚いて逃ぐと、中世此鐘を改鑄せんとし、之を江戸に輸するに、鐘自ら鳴りて其音千葉寺と叫ぶが如し、鑄工恐れて之を返送す、故に此名あり、毎年十二月晦日、里人此寺に集まり、面を包み姿を變へ、互ひ

に地頭里正等の奸曲を罵り、即ち大に笑ふ。之を千葉笑といふ、又奇習なり、今果して在りや否や。

●小弓館趾

蘇我野より山に登る數町、古への小弓の郷あり、今の所謂生實村、小弓御所の趾あり、大永五年新公方義明の原友幸を破りて館せし所、義明は執袴者流中の麒麟兒たり、父祖の遺業の空しく地に墜ちたるを慨し、憤然として蹶起し、大いに四方の志あり、安房の豪族里見氏により、武威漸く揮ふ、偶々大兵を動かす、一舉にして北條氏を破らんとし、反つて國府臺に破られ、新業中道にして絶つ、小弓の御所も義明の戦死と共に陥り、殘墟廢臺、雲搖迷して當年の事を悲しむ。

佐倉

●白井城趾

千葉より佐倉に到るの途白井の驛あり、驛の西北の丘陵に廢墟の落葉たるを見る、これ當年の白井城趾、史を案ずるに城は千葉介常胤の男白井六郎常康の築く所

常康頼朝に屬して功あり、累世源家に仕ふ、四世の祖祐胤に至り、骨肉牆に悶々の禍あり、其子行胤逃れて他邦に流過し、後將軍尊氏に従つて軍功あり、名を興胤と改め遂に本城を復す、爾來數世相襲きて之に據りしが、文明十一年千葉俊胤の時に至り、太田道灌兵一萬に將として來り攻む、俊胤智謀あり、壘を堅うして出でざる事六閱月、敵の戦ひに倦むを視ひ、即ち短兵急に之を攻む、旗鼓堂々鼓奏して之に迫る、道灌大いに破れ、其弟圖書之に死す、伏屍縱橫流血杵を漂はし、天地爲に碎けんぞす、實に千古の快戦たり、後數世政亂れ武威衰ふに及び、小田原氏に依りしが、其亡ふるや、白井城も又潰へ、終に徳川家康の收むる所となる、太田圖書が怨みを呑みて眠るの墓あり、又謙信一夜城なる者あり、曾て永録年間不識庵が裨將を遣はして城を攻めし時、一夜にして擬城を築きたるの趾と。

●圓應寺

瑞湖山圓應寺は白井田町にありて臨濟の名刹たり、白井與胤の幼時竹若と稱するや、父祐胤早く卒し、叔父

胤氏竹若を殺して城を奪はんとす、侍臣岩戸五郎胤安竊かに之を知り、姿を變じて山伏の狀に扮し、脊後に負ふ所の笈の内に竹若を隠し、走つて鎌倉に逃れ、之を建長寺の僧佛國禪師に托し、其長ずるに及びて、再び城を復するを得たり、是に於て與胤深く佛氏の恩を感じ、寺を建て、徳を頌す、寺は前に印旛沼の碧波を望み、背ろに蒼々たる翠巒を負ふ、寺に入景あり、飯野露雪、湘戸秋月、城嶺夕照、洲崎晴嵐、光勝寺晚鐘、遠部落雁、諸戸歸帆、舟戸夜雨、風色掬すべし。

●阿多津の祠

白井古城址を望みて東町許、吠血の間に一小石祠あり、里人呼んでいふ「おたつ様」と、これ竹若の母多津女の縛に就きし所、多津女は竹若の母なり、胤氏の密謀を探知し、先づ之を岩戸五郎に告げ、竹若を守つて難を避けしむ、胤氏多津女の密偵せし事を知り、兵を遣りて之れを捕へんとす、多津女急を聞いて遁る、追兵頗る急なり、即ち身を路傍の叢中に隠し、以て追兵を避く、偶々多津女病あり咳を愛ふ、時に寒威甚だし

うして堪ゆべからず、胸迫りて咳出づ、忽ち追兵の知る所となりて戮せらる、烈女が悲惨の末路なり、天爲に悲しみ、地爲に愛ふ、後竹若志を得るに及び祠を建て、之を祀る、今に到るも里人咳嗽を患ふる者祈念するに必らず驗ありと。

●松雲寺

圓應寺の西北洲崎に在り、境内に山王權現を安んじ、其側に一株の老樟樹あり、枝葉鬱葱交も天を蔽ひ、高く雲表に秀で、遙かに之を仰ぐべし、言ふ竹若丸白井與胤の九州より之を移栽したるものと。

●宗徳寺

曹洞の古刹にして、白井壺町にあり、應永年間原四郎胤高の創建する處、古へ老樹鬱葱として晝尚暗く、鷗鼻啼いて人に戯る、日蔭寺の名あり、寺内に權現水あり、徳川家康の偶々之を喫し、京都の柳の水に似たりとて、後歴々點茶の料に充てたるを以て此名あり。

●光勝寺

白井八景の内、光勝寺の晚鐘なる者あり、梵音低く度

りて印旛の水烟に響く、寺に閻魔像あり、其首は小野篁の刻む所と、佛舍利塔あり、舍利一粒を藏す、

●佐倉城

佐倉の町鹿島の山に在り、繞らすに濠を以てし、山上老樹鬱蒼、顧みて將門山を望み、俯して蜿蜒たる佐倉の市を瞰る、元和元年土井利勝の改築する所、今は兵營たり。

●海隣寺

治承三年七月二十六日、千葉介常胤千葉城に在り、侍臣を率ゐて、海濱に月の昇るを拜せんとす、時に暗濤たる海上、光明の赫灼とし沖するあり、常胤怪しんで侍臣をして網を投せしむ、即ち閻浮陀金の阿彌陀佛と得たり、常胤之を奇とし、馬加に一寺を建て、尊奉したりしものを、後年佐倉の鑄木に移すと、尊像を繪名して月越如來といふ、初め眞言秘密の靈場なりしが、中世千葉介貞胤の一邇上人に歸依せるより、改めて時宗とす、

●將門山

天慶の亂に平親王將門の城を構えたる所、將門山の名はよつて起れり、山上に古城跡あり、將門の舊跡によりて馬加輔胤の築きし所なり、將門神社あり、陰鬱たる古祠にして、叛臣の悪靈を鎮む、山は佐倉の町將門に在り、山を傳ひて酒々井に至る、酒々井は成田街道の一村落、

●武田館址

あり、酒々井村本佐倉に位す、曾て徳川家康の武田萬千代をして居らしめし所、今荒廢して見る可らず、

●清光寺

寺は本佐倉の古刹、淨土の靈場にして月峰上人の開基する所、天正年間無筆和尚の大樹寺殿の遺齒を携へ來りて埋葬したるは、山内清淨の靈域なり、後年徳川家康東金に遊ぶの途次駕を枉げて和尚を訪ひ、大樹寺殿の齒塚に詣し、和尚と懐舊の物語あり、墓前に一株の厚朴木を手栽して去りたりと、佐倉風土記の記す所。

●口の宮神社

所謂佐倉宗吾の宮なるもの、内郷村大佐倉にあり、酒

々井を距る半里程、義民木内宗吾及び其妻と四子との靈を祀る處、宗吾は堀田氏領内の里正、身を殺して藩政の苛酷を改む天下傳承、史に劇に之を記し之を演せざるなし、喪客常に雲集、香華絶ゆる事なし。

●東光寺

瀛車酒々井驛を走りて、遙かに一碧を見る、これ印旛湖なり、湖を望むに宜しきは驛の東光寺、西に酒々井の町を繞らし、南に銚子街道の走りて帶の如きを見る、東は即ち翠山青嶺、相重りて其間四十七谷をなす、谷の北端は碧波渺茫、古鏡を磨ぐが如き印旛の湖、漁舟の白帆來往して閑鷗の飛ぶに似たり、山と水と相送迎して、此處に天下の奇を恣まにす。

●淨光寺

延徳二年に粟飯原胤光が其持佛なる十一面觀世音を安置し、寺を佛林山と號す、始め同心院と稱せしが、胤光の子胤信、父の法名を取つて淨泉寺と命ず、酒々井の大篠に在り、曹洞の古刹にして、境内頗る幽邃なり。

●宗吾堂

印旛

●印旛沼

封建の世武人權を恣まにして、庶民は只其願使の儘なりし時に當り、慨然立つて義を恠へ、奮つて死を辭せざりし義民木内宗吾を葬りし所、公津村塾方に在り、宗吾は法名を徳滿院涼風道閑居士といふ、其四子彦七徳治乙治徳松等の墳墓あり、供養堂五佛堂念佛堂大師堂頗る莊麗、毎年八月三日、此義民が怨を吞ひて、磔殺の刑に處せられし日を以て大法會を執行す、四民廣集、轟々として稱名の聲曉に徹す。

●麻賀多宮

公津村の鎮守にして古社なり、社は二所に分る一は臺方に在りて稷山神社といふ、稚産靈神を祀り、一は船形の手黒に在りて瀨津宮といひ、稚日靈神を祀れり、傳へいふ、應神天皇の御宇、印旛の國造伊都許和命の勸請せし所と、稷山社に攝社五あり、印旛國造社、幸靈社、馬來田郎女社、猿田彦社、天日津久社といふ、又瀨津宮に三攝社あり、賀志波比賣社、阿須波社、八代稻荷社といふ、社殿皆古雅、稍荒廢に屬すと雖も、杖を枉げて來り詣すべし。

東西二里南北七里有餘、周回殆ど十二里、五十有六の村落之を繞りて蘆荻の間に點在す、沼は船尾の邊に神崎の流れを受けて起り、壩間の間を紆曲して鹿島川を合せて漸く廣く、酒々井の北に及びて斜めに北を指し、始めて渺茫たる一大澤を現す、沼の形四方に廣きを以て、湖畔の遠望に妙ならざれども、高きに登りて之を見れば、碧霄落日を浸して其色紅に、風をよぎて蘆花頻りに騒ぎ、暮烟搖曳して湖面に垂る、白帆の船の漁歌を唄ふて過ぐるあり、秋暮落葉の景最も畫中の者なるべし、印西の平賀の岡、印南の飯野の山、酒々井の光勝寺、等皆湖水の風景を賞すべきの名區あり、船を泛べて湖心を度れば、銀鏈艇外に碎けて客心緩やかに、舟の行く處潑潑の魚あり、時に躍つて舟中に入る、一輩の行く處にして澤中吉高の東に至り、水俄かに激して扁舟幾度か旋回するが如きは、澤中の最

も深き所、淵底に大洞穴あり、水旋渦して注ぐ、止まる所を知らずと、此の如き者二所あり、「さくちの穴」といふ、これ水伯の棲む所にして、穴の邊小魚群棲す、漁夫船頭に立ちて網を投すれば、忽ち幾千百尾を獲、これ鱸の小なるもの、里俗「さくち」といふ、故に穴の名とすと、二所の穴相距る四五歩、泥龜の怪あり、大さ牛の如し、又大鯉魚あり、長さ長鯨の如し、怒つて尾を揮へば、水五十餘ヶ村に氾濫すと、棒大の俚言信ならずと雖も、扁舟に棹して茲に泛び、之を想へば肌粟せしむ、水色群青を流すが如し、船に凭りて流れば、人面皆蒼然、殆ど生氣あるなし、沼上に陰火あり、北須賀以北に多し、梅雨連日雲烟低き時、或は秋風吹き止むで滿目荒涼、蕭條として雨のそぼ降る時、團圓として湖上に火あり、水中より燃えて其色蒼白、大さ鞠の如くにして飄々、湖上數尺の上を徘徊し、或は散じて無數の螢火となり、或は合して一團の陰火となる、鬼哭の聲あり、嗚然として泣くが如し、俚人之を「川螢」といふ、印旛湖上の奇觀たり。

●松虫の墓

六合村松虫の松虫寺に在り、昔聖武帝第三の皇女松虫の内親王姫を病みて茲に左遷せらる、偶ま此里に一字あり、瑠璃光佛の像を安んず、宮深く之を祈り、病始めて癒ゆと、墓の在る處即ち松虫寺、蓋し後年宮の名を冒さしめしなり、寺門の二王は洪慶の作と、雙々相搏つが如き尊像は、優艶なる寺の名に似ず、皇女帝都に歸りて薨せらる、の後、特に遺骨を茲に賜はりしもの、薬師堂の後方に葬ると、或はいふ皇女にわらず宮女なりと、後説或は眞ならんか。

●吉高城趾

俯して印旛湖の水を瞰み、仰いで筑波の青螺を天の一方に望む所、六合村吉高の掛鼻山上に、吉高の古城趾あり、城は千葉氏の屬將吉高代介の據りし所、所謂千葉氏五十八支城の一なり、掛鼻の臺下吉高の漁村あり、此邊の鮒は鱗に金色あり、肉硬くして味美ならず、即ち金鮒なる者、漁人之之を捕ふるや、水面を打撃して魚を驚かし、魚の驚いて藻屑の間に窺むを、靜かに手

を以て之を捕ふるなり、其術巧みなりといふべし、鮒は焼いて串に貫ぬき、名産として之を賣る。

●花島山

吉高臺上に廢趾の跡を吊ひ、來つて花島の丘に登れば、山の奇谷の勝、更に又幾層の畫圖を倍す、丘は六郷平賀の地、古へは途絶ぬ水深うして跋る可らず、漁舟を備ふて行く、宛然一孤島なり、花島の名はよつて起ると、桑田未だ變せず、蒼浪靛袴として岸を打つ頃、島上に大日本寺あり、高野大師の掛錫し來りて護摩を修したるの地と、山中に不動堂あり、護摩壇は其遺蹟と、又獨鈷の水あり、半腹を穿ちて湧く、當年大師が黄金の獨鈷を執りて、酌んで靈水に宛てたるもの、山大ならざれども十六峯の奇あり、八谷其間に横はる、脚を登て、下瞰すれば、碧水漲りて島影倒立に懸る、島上の人水底の客、仰げば即ち俯し、俯せば即ち仰ぐ、白鷺兩三四汀蘆の間を涉り、飽きて忽ち飛び、飄然として柳條の下に立つ、裴翠あり低鳴して過ぐ、行客之を見て歸るを忘るもの、實に花島の風色なり、名月の

烟りて鐘の靜なり」と、俳客が筆を投じて歎じたるも宜なる哉。

●結縁寺

寺は船穂村の名刹なり、本尊は行基作る處の阿彌陀像、寺内に源三位賴政の塚なるものあり、これ賴政の弟深栖三郎光重の建つる所、賴政の爲に冥福を修するなり、此地は源九郎が牛若と稱し、猶白面皎齒の美少年たりし時、金買吉次に従つて陸奥の秀衡に據らんとするの途次、經りて盜を討ちし所と、扇の芝は賴政の名に縁みしものにして、名馬塚は源三位の愛馬を埋むる所と雖も知る可らず、寺は古へ僧坊相列なり、關東眞言の大道場なりしが、一朝火を失て終に廢頽す、安養坊山中坊、大仙坊等、皆其舊趾なり。

●竹袋城趾

下利根の流に沿ふて木下河岸を下れば、竹袋に木下川端の城趾あり、城は往古平將門が僭して尊號を冒し、瀕りに内裏の官名を擬し、威を遠近に振ふの時、牧野の郷の庄司の娘小宰相を此城に招き、緩歌漫舞、日の

嘯し夜の明くるを知らざりし所と、前は大河谷後は渺茫たる大湖水、名けて

●手賀沼

といふ、沼は印旛に次ぐの大澤にして、東西は三里、南北は三十餘町、水源は三方より流れ來りて交も沼に注ぐ、沼は巨口を開いて之を呑み、木下より利根に向つて吐く、千間堤の舊蹟あり、享保年間高山友清の沼を横断せんとして成らざりし所、沼に鯉を産す、手賀沼草菜は庖丁者流の珍とするものなり、淺酌低吟挾んで以て好下物となすべし。沼は岸淺くして蘆荻風度り、支流四方に分れて蜘蛛の手の如く、行人の容易く汀に近づく可らざるものあり、故に鴻鳥常に來り及び、悠々として人を知らざるもの、如し、里人網を以て工みに之を獵す、手賀沼網の名あり、近時都門の縉紳、濫りに銃を肩にして赴くに及び、鴨鴉の類頗る狡猾となり、遙かに人影を見れば即ち飛ぶ、亦近づく可らざるに到り、湖上の風色を害ふ事夥だし。

成田

●神護新勝寺

佐倉より更に成田鐵道に搭じ、成田停車場を下れば阪あり、阪を登りて左する數町、懸崖を開いて峻阪現はる、足を駐めて下瞰すれば、成田の小市街は簇々として雙眉の間に迫り、新勝寺は山の半腹に聳えて、參詣の群集豆大にして指點すべし、行く／＼阪を下れば即ち旅店、海老屋小川屋田中屋鍵屋貞松館等櫛比して賽者を待つ、旅館の前は新勝寺、所謂成田不動尊なるものは、成田山明王院といふ、新勝寺は其別當所なり、靈尊高さ六尺、金剛明王降魔の像にして、昆首羯磨の自から刻む所、古へ山城國葛野の高雄山神護國社寺護摩堂の本尊たりしが、朱雀天皇の御宇、平親王將門の亂を構ふるや、寛朝僧正に勅して朝敵調伏の法を修せしむ、寛朝勅を奉じて此像を奉じ、下總の國成田の郷に來つて祈誓す、亂平ぎて後再び京師に歸らんとして、像を扛ぐるに重き事鼎の如し、即ち新たに此地に伽藍

を建て、神護新勝寺と號す、今の成田山是なり、門を

すべし。

●駒形山

入れば石壘みて席の如く、途究まりて石燈現はる、高さ數十級、登れば即ち二王門、左に辨天祠あり、通眼院新勝寺本坊等は、山を負ふて列なる、右に阿彌陀堂正福院あり、門を入れば靈泉あり、不動明王の像を建つ、池に跨りて石橋を架し、更に石磴を登れば即ち本堂、護摩の烟長へに立蔽ひて、堂内黒暗闇、濛濛たる雲烟の裡、赫耀たる靈光の眼を眩はすもの、是れ賽客の獻燭なり、鐘樓寶塔額堂接待所等、結構の壯麗にして偉大なる、實に海内に冠たり、奥の院は後山に在りて、老樹蒼鬱たる處、群鶴飛翔し、鏽然として天地皆古蒼、新勝寺の庭は山により地を垣げて造る、假山蜿蜒、水泉冷澁、奇石其間を點綴す、然れども後山の寂寥に比しては頗る俗、唯遠望の賞すべきあり、凡そ明

山は船橋より成田に至る別街道に在り、鎌ヶ谷日井の古城址を探りて木下に至り、直に安食の驛に通ず、安食は渺たる一小驛、印旛沼の下流の將監川と會する所に横はる、山は即ち驛の傍、山上に駒形神社あり、社記にいふ、天平三年初夏此地大に旱す、次いで仁平元年六月淫雨蕭條として止まず、雨降るもの月餘、濁浪溢れて瓊圃を浸し民飢饉に苦しむ、餓殍途に横はり、窮民四方に離散す、時に郡司大浦廣民、社を茲に建て、身を以て天に祈る、翌年果して驗あり、五穀豐饒、民大に喜ぶ、今も猶大旱淫雨に會し、士民の社に祈るあらば忽ち驗ありといふ。

●龍角寺

王院に賽する者、多くは俳優藝妓工匠商賈の輩にして、風雅の何たるを解する少なし、故を以て山の設計實に俗氣、秀靈の氣を損ふて得々たり、境内燈籠畫館の如き、日清戰爭成田利生記なる者を書き、噴飯絶作

駒形山に近く龍角寺あり、天竺山と號す、寺僧若を養て語りいふ、寺は和銅二年龍女の化し來りて財を投じ、僧に托して建立したるもの、黄金の瑠璃光如來を安置す、天平二年釋命上人なる者、廢を興し、頽を修

して以て居る、偶々翌年天下大に旱す、朝議勅して釋命をして雨を祈らしむ、釋命齋戒沐浴壇に上りて法を修する一七日、大雨沛然として坤軸を碎き、田園を潤うすもの更に一七日、忽ち天に龍あり、三嚇して死す、其尾の墜ちたる所は大寺の龍尾寺、腹部は印旛湖畔の龍腹寺に墜ち、雙角を生じたる龍頭は、惺然として此寺に墜つ、寺初めは龍開寺と稱したるもの、始めて龍角寺と改め、金字經を具して頭蓋を頭下に埋む、後天曆三年異僧あり、一杖一笠飄然として來り、一軀の金剛神を刻む、去るに臨んで書を止めて曰く、我は是天竺の毘首羯摩天、當寺の本尊は西天竺祇園精舎に藏したる佛體なるを以て、我來つて金剛神一軀を止むるなりと、次いで正暦年間名匠運慶又一軀を刻み、左右兩神始めて完たし、後屢々祝融の怒りに觸れて堂宇灰燼す、今の本堂は千葉介邦胤の天正二年の火災の後に再建する所なりと。

今相馬記を閱するに寺記あり、いふ、天竺山龍角寺に龍神社あり、月の三日には稻穂の湖中より龍燈飛騰し、

飄々として社の楣間に懸る、又傍に三大洞穴あり、石を疊みて席となす、昔は人の住みけん、今は妖怪あり、隱座頭といふ、盲目にして圓顔、展田で、人を脅かすと、怪しむべし、寺を下りて千抱が池あり、水枯れて草生じ、中に一株の古松あり、但俗傳へいふ、昔一貧女あり、米を作らんとして田を購ふに由なし、即ち池の淺水を撰ひて、一日に千抱の苗を挿さんとし、力盡きて瘞る、松は其墓表と、今は其松も何時しか枯れて池は則ち田となる、貧女の志悲しむに堪たり。

●長沼

飯岡新妻水樹の諸川の注ぐ所、廣袤二里餘の湖水あり、其形瓢の形を損ねたらんが如し、岸を繞りて南北羽島、福田長沼安西磯部の諸村落あり、矮竹叢裡酒旗の翻翻たるは、曠の邊の村酒屋なり、鶏犬途に戯れ、村童郎歌を唄ふて嬉遊するもの、宛然雪舟の畫の如し、沼の在る所田圃の灌溉に便にし、土地豊穰、又舟楫を通ずるの利あり、碧流漫々たる所、鯉鱖棲息し、釣を垂る、一半時、潑瀾として大魚の竿を奪はんとするあり、

都人士が一日の好消光地なり。沼に沿へる豊住村、其長沼の丘をなす所に城址あり、古へ大野修理の據る所と、常總軍記の後世に語る所なり。

●小帝神社

成田を距る東二里、小御門村の名古屋に在り、これ贈太政大臣藤原師賢の靈を祀る所、師賢は後醍醐帝の寵臣、執務者流中頗る氣慨あり、王道の頹廢を憤り、北條氏を亡ぼして再び天日を回らさんと謀り、謀顯はれて逆賊來り圍む、戰ひ利あらず、重耳習に走り大王關に獵するの急に臨み、帝即ち大塔宮の、獻策により、途三條河原より、師賢をして偽つて主上と稱し、幸に擬して山門に登らしむ、師賢泣いて拜謝し、法勝寺前より袞龍の御衣を被り、瑤輿に乗じて西塔院に登る、從ふ者四條中納言隆資二條中將爲明中院左中將貞平、悉く衣冠を正し、鹵簿整然肅々として行く、即ち釋尊堂を行宮となし、兩塔の山僧衆を悉して來り守る、威儀粲然、王法佛法相倚りて雲霧を排き、再び龍馭を回

らさん事近きにあらんとす、偶々唐崎の激戰に大衆逆徒を激へ馳ち、敵を壓して凱旋す、衆意氣頗る軒昂、即ち袖を列ねて行宮に至り奏して曰く、西塔は人少くして地險ならず、皇居を定むるに適せず、若永の昔後白河院の御幸を垂れ玉ひたる時、已に南谷の圓融坊を以て行宮と定められたり、先蹤誠に佳兆なり、希くは早く龍馭を本院に移し玉はん事をと庭上に星列して請ふ所あり、偶々烈風吹き起り、蕭颯として御簾を捲く、衆驚いて仰げば、袞龍の聖天子は、何を料らん、これ尹大納言師賢ならんとは、大衆即ち散す、師賢等數卿今は山門も頼む可らずとて、夜半險を冒して竊かに帝に笠置に従ふ、既にして敵又笠置を圍み火を縱つて之を攻む、衆殊死して戰ひ、錦織判官等之に死す、皇居終に陥り、殷湯夏臺の歎きを見る、扈從の月卿雲客、悉く東夷の捕ふる所となり、師賢も又捕はれて下總に流さる、千葉氏祐胤命を受けて之を此地に幽す、昔杜少陵が天寶の亂に逢ひ

路徑瀝瀟雙蓬髮

天落滄浪一釣船

と放吟したる心を忍びて、坐神觀法詠詠是事として悠遊自適するもの十閏月、年強仕に滿たずして髮を削り、桑門緇衣の身となりしが、これ英雄世を欺むくものにして、鬱勃たる銳氣未だ銷沈せず、月を見て悲しみ、花を見て泣き、風霜雨露悉く腸を断つので、風雲の會を俟ちて蛟龍再び尾を揮ばんとしたりしが、哀れむべし天年を此俊傑に貸さず、二豎に侵されて英雄不磨の魂、空しく草萊の下に埋れぬ、爾來物變り星移る六百年、遺跡茫々として知る可らず、僅かに吠圃の間一堆の古墳ありて、里俗呼んで公家塚と稱したるもの、始めて此英傑の恨を吞んで眠るの地たるを知り、明治十四年淨財を醜集し、祠を建て、其魂を慰す、小帝神社の號は、今上の勅して賜はる所、今別格官幣社たり、英雄が埋骨の處櫻雲一朵、芬芳千古に芳ばし、又秋草風露繁し、小萩が下に秋を尋ねて、此古忠良が遺勳を想はしむ。

●助 崎 城

小帝の社に詣して徘徊すれば傍ら數町にして助崎城趾

に至る、城は千葉介常胤の子大須賀四郎の築く所爾來相傳ふる二十世、天正十八年に及びて亡ぶ、廢趾二城、底不知の非あり、物見の松あり、舊城の傍獨活を生ず、色美にして香氣馥郁たり、人之を採らば崇を得と、近年一禪僧あり、晒つて之を刈り、携へて家に歸る、夜戸外に聲あり、叫んで曰く、我獨活を返せと、其聲啾々幽鬼の泣くが如し、僧聽かず、即ち叱して曰く、獨活は是人の食ふべきもの、徒らに草莽の裡に委すべけんや、汝何者の怪ぞ、濫りに此天與の好下物を吝むと、鬼泣いて止まず天明に至る、僧終に憐れみ、獨活を拵て、歸ると、今も獨活叢生す、試みに之を摘むべし、果して鬼の來るや否や。

滑 河

●菊 水 山

安食を経て佐原に行くの途滑河の町を過ぐ、町小と雖も般昌、古跡頗る多し、菊水山あり、小田氏の故城趾と、山の名美にして、之に據りし所の人頗る醜、奇と

いふべし、小田氏は元弘の二股武士、幾度か南朝に従ひ、北朝に下り、恬として恥づる事なし、忠に似て不忠、不忠に似て忠、其心猫眼の變幻定まるなきもの、里人の稱して、南朝忠臣の遺跡といふ晒ふべきかな。山の麓石を疊みて清泉あり、菊水の井と、水清冽、石に刻して菊水と銘す、當年此猫眼兒、此水に對して顔色を照らさるゝの感なかりしか。

●滑 河 觀 音

仁明天皇の承和七年、小田將治朝日が淵に綱して此像を獲、像大さ一寸二分、即ち寺を建て、之を安置す、龍正院といふ、阪東二十八番の靈域にして、此本尊を藏むる所の大觀音は十一面の尊容、佛工定朝の作る所と。

●朝 日 が 淵

觀音堂を距る町許、西方壠圃の間に在り、古へは小田川の碧潭にして、尊像の出現したる所、今變じて麥浪の蒼々たるあり、其邊に二三株の翠柳を見る、柳條長く垂れて人を翳るの所石碑あり、刻して觀世音應現碑

と、碑銘は東叡山凌雲院の僧大僧正實乘の撰する所と。

●兒 塚

滑河の町西大須賀の四屋といへるに兒ヶ原あり、路の畔に苔蒸す一基の石碑ありて、里人は稚兒塚と呼ぶ「昔下總の原の渺茫として月沈み、路行く人も稀なりし頃、何處の里の上崩ならむ、年の頃漸く十一二の稚兒なるが、塗笠の露を載せて、竹の杖の足もたゆげに、千草の花に袖ぬれて、心細くも辿り行くを、此邊に棲むひくつけき荒漢の、あられなくも行手を遮りて、召したる衣の美しさに、井を賜はらひやといふ、稚兒只管に佯ふれども許さず、もどかしとてや、頓て寄りそひて、稚兒の咽喉を絞め、敢なくなりし亡骸の衣を刺きて、何處ともなく亡せたりしを里の者の見出して、わな淺まし、玉の如き愛しき者と、哀れにもなしたるよとて、其邊に瘞めたるに、秋草なぞ咲き出で、そいろに哀れの彌増りぬ」とは舊記の云るす處、頗る隅田川の邊なる梅若塚の由来に似たり、

原の在る處今は即ち畑、蕎麥花開いて村娘の空しく徘徊するを見る。

●東三井寺

日本三三井寺の一にして、瑠璃光山千手院といひ、本尊は千手の觀音像とす、堂の側に三井あり、水玲瓏、水よりも冷やかなり、寺寶に桔梗の前の鏡及び七首を藏す、桔梗は平親王の嬖妾なり、美人容姿を粧ふの間尙七首を藏す、其心計る可らざるものあらむ。

佐原

●神崎神社

「神代より繁り立てたる湯津柱榮え行くらんかぎり知らず」と唄はれたる山桂樹は神崎の社に在り、社に在る所神崎の驛、佐原と滑河との中間に位し、滔々たる坂東太郎の流に沿ふて人口二千有餘、社の祭神は面足尊、慎根尊、正殿崇高、拜殿あり靈鏡を掲ぐ、末社兩三、幽邃の域に居る、石磴驛の畔より起りて、天を仰ぐ百餘級、山上の山桂樹は俗に「なんじやもんじ

や」と稱ふるもの、周圍三四抱の老木なり。

●十島

神崎の前押砂の邊、利根の流漫々として廣袤知る可らず、直に霞の浦に通じたる頃、香取の海と呼びて難所たりしが、逝く水の流れ長へにして然も古の水に非ず、塵芥土埃を齎らし來りて底漸く淺く、淺き處遂に洲をなす、十六島とは即ち是なり、島は上新島に屬する者、上の島中の島結佐六角西代松崎、下新島に屬する者、大島三島境島ト杭島磯島長嶋八筋川加藤洲中洲扇島となす、蘆花淺水の處、炊烟偶々搖蕩して白鷺江を横ぎりて飛ぶ、眞帆片帆の風を孕みて大刀根の流れに漁歌の緩やかに聞ゆるあり、景が畫か、扁舟十六島嶼を回れば、水色水聲行く處に異なり、悠遊して歸るを忘る、

●朱堂

八筋川島に「アカン堂」なるものあり、十一面の觀世音を安んず、堂は悉く丹塗を以て塗る、落陣刀根の岸頭を射つて映すれば、遙かに見る島中朱團々、金島の

墜ちて江に沈むが如し、神崎より望むに更に壯觀。

●十橋

川を渡れば即ち川、橋を超れば即ち橋、川の在る處橋あり、橋の在る處茅茨の家之に伴ふ、十二橋登置に十二橋のみに止まらんや、橋は即ち繩を以て繋ぎ、藤蘿を以て編む、誠に太古の景の如し、十二橋の名ある處加藤の洲、子育觀音堂あり、寺僧加藤洲藥なるものを賣る。

●津宮河岸

大刀根の流れを下りて香取の神宮に賽するには、舟を此河岸に拵てざる可らず、津の宮は佐原の東三十町、利根の綠波を北に扣へて立つ、水中に華表あり、遙かに陸に列なるもの十町許、津の宮の本社に至る、祭神は澳津彦澳津姫の兩神。

●香取神社

神殿莊嚴にして靈威灼々、人をして覺えず襟を正さしむるものを香取神宮となす、神宮は神武天皇の十八年創めて建立する所にして、祭神は經津主神、武甕槌命

天兒屋命之に合祀す、今官幣大社に列す、境内廣潤、正面に正殿を鎮め、拜殿神樂殿神饌所相列り、末社攝社數十宇高丘を壓して建つ、弓掛杉三本杉斥候杉木母杉の亭々として天と語るの所、星塚塚塚塚塚の靈蹟あり、七橋と稱ふるは、地口、五段田、大阪、萱田、下井、氷室、小山の七橋梁、神泉の靈水滾々として滴る、事なきは、氷室井、大阪井、龜井、御手洗井、眞彌井、奴久井、太刀洗井、琵琶井、下の井、石井、東隱井、西隱井の十二井、八阪の勝は、幸若阪、若宮阪、下井阪、氷室阪、奴久井阪、御手洗阪、大阪、龜邊阪、此の如く打算すれば悉る事なし、櫻の馬場は馳望千里の靈地、老櫻森をなして一望千株、爛花珠を列ねて、飛絮亂れ飛ぶ、花下に杖を駐めて佇立すれば、長江流碧にして雲烟天に連なり、十六島の奇、潮來の烟願みて指點すべし、朝には即ち彩丹の筆、夕には即ち一抹の墨畫、天下の一靈場たり。

●側高神社

社は香取神宮の攝社にして大倉山に鎮座す、山上老樹

鬱鬱、秀靈の氣ありて凜冽、激暑も爲に肌に粟せしむ、社に奇習あり、讃撫の祭といふ、毎歲神事を行ふや、里人神前に集まりて濁酒を酌ひ、微醺襲ひ來りて興正に酣ならんとする時、座中の人誤つて其鬚を撫するあらば罰杯三を重ねしむ、大酒の人好んで之をなし、終に酔ふて立つ能はざるに至りて止む、奇習大に妙なり、願はくは長髯を撫して宴に陪せんか。

小見川

分郷城趾

小見川の西南一里にして近く分郷の城趾あり、小見川越前守粟飯原左衛門尉等の據りたる所、古へ小見川城と呼び、今城山といふ、山の有る所殘墟あり、巨大なる石櫃を存す、こも又當年兵士共の夢の跡、雨露繁くして草依稀たり。

七本樹

佐原を距る二里有餘、府馬を距る一里半にして、小見川の市街を見る、町を距る數町八都村の小見に德聖寺

あり、寺は臨濟の古刹、七本樹の名木は寺域にあり、これ數百年外の大銀杏樹にして、幹大さ三四抱、枝葉四方に垂れ、殆ど寺を蔽ふ、樹上に寄生する樹木あり、曰く樟、曰く楓、曰く松、曰く竹、曰く南天燭、曰く牛殺樹、母樹の銀杏を合せて七本樹とは是なり。

逆阪

阪の名一に何を奇なる、良文村の五郷の地に樹林寺あり、門外に急激なる石礎起る、高さ百餘級、忽ち見る一痴漢あり、山嶺より逆々に這ふて下り來る、これ何の業ぞ、就て問へば曰く、里俗にいふ、逆々に此阪を匍伏し下れば、小兒の痲疾を治すと、故に危うきを冒すなりと、逆這阪の名は之より起れり、寺に老櫻一株あり、不斷の櫻といふ、爛花四時斷えず、葩は即ち單瓣小にして愛すべし、堂の後山に千丈ヶ谷あり、目のゆく處凡て圓圃、いふ東六郎鎮胤の城を構へし所と、東は千葉氏なり、故に千葉ヶ谷ともいふ。

菰敷の原

海上の菰敷の原なる者は、利根の流に臨みて、須賀山

より鹿の戸に亘れる砂原あり、刀根の水千古の碧を浸す所、白砂青松依稀として當年の俗を止む、川を隔てて常陸の砂山の白砂夕陽を射るを見る、笹川の水は潺湲として原を横ふて過ぐ、笹川蜆なる者は此河流の名物なり。

椿湖の遺跡

香取郡の東南より海上匝環に跨る大平原、今耕りて墾圃能く肥ゆ、此地古は廣袤十里餘の大澤にして、怒浪漫々常に岸を浸す、長元の年平忠常の香取に據りて反するや、源頼信湖を亂して之を討つと、口碑にいふ、太古濃漠の時此地に大山茶樹あり、樹幹六百丈高さ七百餘間、柯枝四方に廣がりて周圍方三里、花開く時は滿天凡て紅に、錦繡の雲を望むが如し、一朝大風あり樹を覆へす、樹の倒る、處地悉く沈み、濁水漲り出でて忽ち湖水となる、椿の湖是なりと、荒唐の談と雖も耳を傾くべし。

福聚寺

小見川を距る三里、銚子には即ち五里半、東城村の

南に普陀洛山福聚寺あり、鐵牛和尚の開く所、寺に禪師の墓石あり、圓形にして高さ七尺、小宇を建て、之を蔽ふ、寺は地頗る高燥、眺望の美に富む、其八景と稱する者は、石階晴嵐、堰水夕照、城山秋月、外廓夜雨、前郊蒼雪、本寺晚鐘、替地落雁、飯岡歸帆、何者の名づけ、ん、其稱拙にして俗なれども、風景は即ち佳し。

多古城趾

多古は香取の一都邑、八日市場を去る二里半餘、佐倉より酒々井を経て六里、町の西方一小丘の横はるを見るもの、これ京徳四年千葉胤直の戦破れて自及したる舊城跡なり、久賀村に其墓標あり。

御所臺

臺は古河公方成氏の上杉氏と戦ふて敗れ、扈從數騎と共に夜逃れて千葉介康胤に頼り、久賀村に流寓したる地なり、康胤爲に第を此地に建て、成氏を居らしむ、之を御所臺といふ、今は其跡なし、唯僅かに舊名を止むるのみ。村に眞言の大刹あり、久賀村の

東 禪 寺
とは即ち是、多古の町を距る僅かに半里程にして近し
實に天平三年の創設にして、堂塔古雅、蒼然として衆
客を照す、本尊は阿彌陀如來、何人の刀なるやを知ら
ず色黒漆の如くして温容寂寥人をして渴仰せしむ、境
内に古石碑あり、千葉胤直等戦死の靈を祀ると、又一
名跡たるを失はず。

銚子

圓福寺

刀水の濼々として海に瀉ぐ所、常陸の羽崎と相對して、
巖礁島嶼其間に横はり、形銚子の如し、故に此名あり、
下總にありて千葉と拮抗するの地、其繁榮或は渠の上
にあらん、千葉よりすれば二十里餘、小見川より七
里有半、今は瀛車に搭じて一睡の間直に達すべし、
町に圓福寺あり、眞言の靈場にして、神龜元年僧德道
の開く所、前は銚子の海風を壓して二王門あり、門を
入れば直に撞樓、梵唄海を望んで鳴る、龍藏權現の祠

あり、大落佛あり、四時湖風に梳りて其色猪褐、又
古墳あり、瀧川一益の墓碑と、蝸附の痕亂家縦横、他
腐して碑文を讀む可らず、僅かに早器居士の四字を數
ふ、其墓の信なるや否やを知らず。

川口明神

圓福寺の後より河口を望むで走れる丘陵上に建つ、白
紙大明神とは俚俗の稱する所、口碑に傳ふる所亦妙話
あり、昔四日市場の長者に一女あり延命姫といふ、容
貌醜惡無鹽の如し、偶々安倍晴明を見て、戀情禁ずる
能はず、追つて借老を約す、女や獨網俚の意切なり
と雖も、晴明其醜を思ふて終に之を厭ふ、一夜女の隙
を覗ふて逃れ、小濱の磯に至りて履を脱し、水に溺れ
たるが如くして、翻りて路傍の安西寺に隠る、女逐
ひ至り、郎の履を見て、其水に投じて死たるを信じ、
悲み極つて激浪の内に投じて死す、里人之を憐れみ、
女の死屍を尋ねて茶屋し、其齒骨と櫛とを埋めて、之
を齒櫛大明神と崇む、後世誤りて白紙大明神とす、
此神自ら其容貌の醜なるを嘆じたるを以て、今も毛髮

の美ならん事を祈る者、必らず櫛を容れて之を祀る、
亦紅粉を供する者あり、顔の痣を治すと、神の志可
憐の情に堪へたり。又晒ふべきの談あり、此邊の海濱
偶ま不漁なるあらば、里人先づ安西寺の晴明社に至り
て祈り、其白幣を乞ひ來りて、此神前に供し、再び祈
誓するあらば忽ち大漁と、蓋し神靈猶癡情を忘る、能
はず、今に到るも情郎の襟袂を愛するものか、社は青
松翠嵐の間にあり、地狹隘と雖も、眼下に銚子の濱の
奇巖怒濤を見、風色の目を喜ばしむるものあり。

一の岩

刀水の河口を挿んで怒浪の中に屹立するもの二、一
の岩と言ひ二の岩といふ、岩の間相距る五十餘間、一
の岩以北は即ち鹿島根、暗礁一帯水中に横はりて舟楫
を通す可らず、故を以て來往の舟は、必らず岩の間を
過ぐ、實に阪東太郎の難關にして、風浪一度怒れば鯨
波澎湃、颯然として碎け來る、舟容易く行く可らず。

千人塚

川口の臺場の邊、巨大なる古塚あり、塚上地藏尊の

石像を刻む、いふ昔漁夫等の溺死者を葬りし無縁塔と
昔時燈臺の設けあらざるや、暗夜風伯怒るの時、茲に
火を焚いて通船の行路を照せしと。

黒生岬

本銚子の町の悉る處海角碧波を貫いて走る、目途ケ鼻
といふ、即ち黒生岬なり、此邊の海岸凡て介殼、蛤
螺相重り、浪に洗はれて滄浪漂泊す、岬の前に帆掛石
あり、真帆の順風に孕むが如し、此岬は銚子の人士が
二十六夜待をなす所

海鹿嶋

岬角に立ちて海を望めば、水烟縹渺、翠螺を泛べて雙
峯の島嶼あり、所謂海鹿島なる者、島に海鹿多し、天
晴れて海穩かなる時、小狗の嬉戯するが如き者二十三
十、多き時は殆ど數百、群棲して戯る、其聲鷗の鳴く
に似たり、雙眼鏡を縦ちて見る、又奇觀といふべし。

犬吠岬

怒浪濤ケ濱の巖岬を撃つて澎湃たるものを見、黒生の
岬より、落日波間に浮沈するものを望みて犬吠岬に

至る、水沫珠を躍らして其色白く、海風一陣雲霧を吹くが如きは、浪の碎けて飛ぶなり、岬角に胎内潜の岩あり、岩罅巨口を開いて遙かに海を含む、海角の極まる所燈臺あり、海面を抜いて登ゆる事百七十尺、燈光白黄にして旋轉し、半分時に一閃す、光芒二十海里を照すと、海水浴場に曉鷗館あり、其名最も著はる、館は其始め銚子の船紳が資を醸して建て、以て遊宴の場に宛てたるもの、今は港角第一の避暑地となれり、曉來雲霧未だ開けず、漂漠として波浪の聲格たる所、忽ちにして物あり、一大赤球の團々として大さ十數抱なるもの、半ば水に浸りて波濤爲に紅に、半ば雲に入りて天爲に紫なるもの、吐嗟にして飄々天に沖す風來り雲晴れて金波激遊、始めて知る是金鳥の飛ぶなり、知るべし曉鷗館の名の因つて來る所を。

●外川の濱

犬吠が岬より砥石山を下り、佛名の磯を過ぎて長崎の鼻に達す、南すれば磐磯、砥の如き岩石の其色玄黄なる者、長く布きて菴の如し、徒歩瓢々磯の上を度れば

即ち戸川の湊、盤舎落々人烟稀なり、いふ古へ海嘯の害ありたる所と、海を望んで砲臺の遺趾あり、外川の臺場なるもの、臺上顧みて鯨岩を見る、長鯨汪洋の波間に泛びて百泉を吸ふが如しと、又南海を望みて一礁あり、岸を去る町許、礁は水面を抜く五六丈方二百餘間、里人仙の窟といふ、岩に怪棲めり、其形人の如く鼻高くして精顔、被髮にして徒跣、兩腋に翼を生じ雲中を飛行すと、所謂天狗なる者、人恐れて岩に登らず、岩の半腹を穿ちて洞窟あり、攀ぢて入れば洞内廣潤、優に長館を揮ふべし、洞の奥二條、一は下つて外洋に出で、波浪來り搏つ、容易く近づく可らず、一は左して礁上に出づ、岩罅を攀ぢ蝸附して登れば、青峭黒壁宛から削れるが如く、高さ十數丈、人を見れば怒浪狂ひ來りて躍つて吞吐せんとす、漁夫に非ざるよりは久しく立つ能はず

●犬若島

仙が窟を下りて南町許、海角より磯巖の上を沿ひて犬若島に至る、島は奇巖怪石壘々累々、猛獅相搏ち非龍

蟠るが如し、頂上に清酒たる小宇あり、漁人の守護神と、踞して海氣の磅礴たるを望み、仰いで砂丘の渚に走る所、白鷗の舞ふを見る、丘を隔て、銀波激遊たるものは即ち、

●名洗浦

浦は銚子磯廻り中第一の好風景、南に高神明神の丘を負ひ、翠積走る事二里、碧波白浪を劈いて懸る所屏風が浦、長亭曲浦相列なりて、天高く氣晴朗たる時、遙かに富嶽の天の一方に懸るを見る、松青く砂白く、海濱を歩りて奇石怪巖を拾ふも又一興、明星貝の美真珠貝の艶、都門の好土産とすべし。

●松岸

常總日記の一節に、「松岸といふに船果てたり此處より飯沼かけて岸に臨める家居ども見渡すに時知らぬ雪の降り積みたる心地するは皆蠣の貝もて葺けるなりけり」と言へる松岸は、西銚子に列なれる漁村なり、此地の濱に魚介多し、魚菜の垣船板の門の戸など蠣壳の附着したるも寂し氣なり、村に宇賀神社あり、漁村一

帯の總領守とす。

●四十八瀧

山靜かにして禽嘯ひ、水清くして魚泛ぶ、とくくしの清水の冷やかにして凝る所飛泉となる、翠嶂を走りて懸るあり、岩罅を穿ちて躍るあり、瀧大ならざれども其數四十有八、大瀧最も大なり、高さ數十尺、壑々として墜つ、瘋癲の者往々來り浴す、屢々治する事ありと、瀧の在る所不動尊の祠あり、鐘樓あり、二王門あり、本社亦莊重、其瀧あるによりて、俚名を瀧郷村といふ、海上郡内の一名勝。

●飯岡岬

汪洋の烟波濼々として天に連なる、一帶の白砂は遐透として海の極まる所を知らず、所謂九十九里の濱の起る所にして、長井岬とも呼ぶ。俚諺にいふ、「九十九里では鰻が取れる」と、此邊の漁家凡て鰻獵を以て專業とす、銚子よりは名洗の浦を逍遙して來るべし、飯岡の町は市街般眼にして漁戸商戸相櫛比す。

●玉崎神社

は町の中央にあり、玉依媛命を祀る、傳へいふ、永録の五年、安房の雄鎮里見義頼なる者、其裨將正木盛賢士岐頼春等をして、見兵七千を率ゐて、内藤久長を上總の宮の城に攻めしむ、時に一の宮玉前神社の宮司某尊奉する所の姫の神靈を奉じて城に據り、固く執つて降らざるもの六箇月、城終に陥るに及び、宮司神體を奉じて此地に逃れ來り、一字を建て之を安んずと。

●眞福寺

回祿の災屢々厄をなして、寺灰燼する事兩三度終に舊觀の美を失ふと雖も、猶見るべきものあり、銚子を距る五里有半、八日市場を距る殆ど三里、本堂の傍に辨天祠あり、藥師堂六角堂三十三觀世音堂子安觀音堂等、老樹の間に列なり、幽邃の靈場なり、開基は應永三年貞範上人の聖觀世音を安んじたるもの、眞言宗にして成田新勝寺の末寺なり。

八日市場

●西光寺

八日市場の在るところ匝瑳郡、町は小なれども即ち殷賑、町の西南福岡の米倉に西光寺あり、眞言の古刹とす、寺廣さ二千餘坪、文珠堂の巍然として建つあり、其傍は即ち大師堂、唐門の結構は目を驚かし、山門の構造古雅にして掬すべし、遙かに望めば萬緑の叢中數點の紅を認むるものは、櫻桃の爛花陽春の風に薫するなり、眞言の一靈跡、

●内裏塚

孤墳一堆榮として人吊、はなく、老松翁鬱として當年の事を悲しむが如きの所、老桑樹あり、太き一抱有半、幹殆ど朽ちて洞をなす、地は野田村野手に在りて、村童野老が時に來つて一抱の花を捧ぐるのみ、傳記にいふ、白鳳の元年、帝大友亂に逢ひて走る、妃耳而刀自又従ふて逃る、途を失して帝と相分れ、宮妃宦官十有餘人を率ゐて常陸に至らんとし、船颶風に逢ふて海上を漂泊し、下總野田の郷に止まる、妃終に薨す、即ち此處に埋葬せり、老桑樹は即ち其墓標と、禁裏塚神林の名あり、

内裏塚を距る數町宇御屋敷なる地は、即ち日蓮の高弟日朗の出生地なり、朗師名は吉祥磨、千葉氏の族印東氏の男にして、年甫めて弱冠髮を削りて佛に歸し、日蓮の徒弟となる、師の没後代つて一宗の事を行ひたる高德なり、碑は一堂宇の内にあり、高さ僅かに七尺、蒼然古道を照す。

●日朗碑

●延壽寺

八日市場を距る二里半、井戸野の郷に延壽寺ありて眞言宗の古刹たり、寺の在る處一帶の丘陵、東は新川の流を繞らし、顧みて渺茫たる蒼浪の涼風に蜿蜒として際涯なきものを見る、これ所謂干瀾八萬石の沃野なり、撞樓の梵唄聲低うして殷々、遠く江に横はりて、何人の旅寢の夢にか入る。

我孫子

●我孫子驛

松戸より小金の驛を過ぎ三里にして近し、陸前濱街道

の一路砥の如きものを傳ひて我孫子の驛に達す、驛は往古屢々戰塵の蹂躪する所となり、流血玄黃伏屍縱橫たるもの、今は城砦の遺跡をすら見る能はず、商賈殷盛にして旅舍相列なり、當年の事を問へども笑ふて應へず。

●布施辨天

富勢村丘陵の一古祠、境内幽邃にして風光の美あり、祠畔の宮司の家を尋ねて、其由来を聞くも亦一興、宮司語りいふ、往古此地渺茫たる湖水にして、周回幾十里底深くして鬪るべからず、偶々大同の二年七月、紅龍あり其色猩緋、碧波を劈いて湖上に現はれ、土壇を捧げ來りて一島嶼を造る、島の上白光あり、赫灼として夜湖上を照らす、里人之を怪しむ、一夜夢に一女仙の但馬の國筒江の郷より來るを見て大に驚き、黎明光明の所を尋ねて一軀の辨天像を獲、高さ三四寸、微笑を啣んで靈あるもの、如く、即ち草を刈りて屋を葺き僅かに雨露を凌がしむ、後高野大師の垂錫するや、此地に來りて其靈異を聞き、行いて其像を拜すれば、何

を料らぬ、これ曾て自ら筒江の郷に於て刻成したりし像ならんとは、即ち京に歸りて伏奏し、爲に一伽藍を營ひ、紅龍山東海寺とは是なり、寺に風景の賞すべき多し、曙山の櫻爛として前に横はり、香風一陣輕羅を吹くの時、女仙の靈尙磅礴として飛絮に戯るゝかと思はしむ。

●布佐町

曾て仙骨飄々として風月を友とし、俳諧の寂を味ふて吟詠を事としたる俳仙蕉翁が、日既に暮れかゝる程に利根川の畔布佐といふ處に着く此川に鮭の網代といふものを工みて武江の市に鬻ぐ者あり宵の程は其漁家に入りて息ふ夜の宿屋しと鹿島紀行に止めたる布佐の町は利根川の西に沿ひて木下河岸を距る敷町我孫子には三里にして遠し、町の内相島三河屋の村落は手賀沼の淵に臨みて朝霞暮烟の眺めに好し、蕉翁の所謂鮭の網代は布川の急瀬に設けたるもの、水勢を激さしむるを以て、近年官の禁する所となる。

●大龍山

山は我孫子の鎮にして都部に在り、寺記にいふ、最明寺入道の女某之を開基し、薙髮して法性尼といひ、寺を法性寺と號せり、尼歿するの後數年、寺僧一夜尼の來つて夢に入るを見る、尼語つて曰く、妾在世の時無上の榮華歡樂をつくし、人世の苦を思はず、不知不覺の間に諸種の罪障を侵したるもの、死後報じ來り、身を化して手賀沼の毒龍となる、頭は十六の角を生じ、全身に八萬四千の鱗を生じ、常任惱苦を受けて堪ゆ可らず、希くは貴僧生前の知遇を思ひ、妾の爲に萬卷の經を誦せよと、翌朝沼の邊に至れば一莖の蓮花あり、其色純白にして清淨、花辨抱合して一部の血盆經を捧ぐ、寺僧之を受けて曰く、昨夜囑するもの實に是なりと、堂に歸つて讀誦し、鬼爲に散ず、依つて寺を名けて正泉寺といひ、號を大龍山とす、今も尙堂を繞りて古墳の落葉として立つを見る、これ法性尼の墓なりと。

●御天樣

我孫子の青山に日天子社あり、里俗おてん樣といふ、昔拜の九日を射るや其一は殞ちて此地に入ると荒唐の

甚だしき實に驚くべし凶年不毛の歳には此社地に芹を生じ窮民をして摘ましむ豊年には即ちなしと、社に竹篋あり、每幹細くして長し、葱々林をなす、之を伐らば血出づと愈々驚くべし。

栗橋

●城山

權現堂の流西南を繞りて滔々たる所栗橋の城山あり、空壕四面を繞りて山靜かに、秋高くして蒼浪千里、刀水の風色を一眸の内に望む、山は元古河公方氏の據りて以て雄を揮ひ、下河邊行朝の稱を稱したる所なり、天正十八年終に亡ぶ。

●光了寺

栗橋より數町中田町にあり、寺に名妓靜の舞衣を藏す、寺記にいふ、後鳥羽天皇の朝天下大に旱す、朝議勅して高僧を集め雨を乞の法を修せしむれども驗なし、即ち更に美姬二百人を召し、神泉苑の靈池の邊に於て舞をなさしむ、舞ふて九十九人に至り尙驗なし、時に白

●靜の思案橋

といふ、勝鹿村の大堤にあり、橋柱中央虫蝕、蒼然として古色あり、橋長さ二十尺幅十五尺、但人いふ、橋は義經の龍姫靜の、郎を追ふて來り、始めて高館の敗報を聴き、茫然として爲す所あらず、涙闌干として低迷したりし所と、靜の思案橋、名の優しくて、事の何ぞ哀

れなる。

●鳥喰の里

「誘はれて我も宿りに急ぐなり歸る夕の鳥喰の里」と、今も鳥喰村の名あり、渡瀬川の東に沿ふ、當年道興准後の吟懐に入りたる所。

●鮭延寺

静女思案橋の邊大堤の街道に沿ふ、古刹なり、境内に碩儒熊澤蕃山の墓あり、蕃山は了介と稱し、古儒者中の俊秀なり、曾て備州侯に仕へて功あり、後明石侯の聘する所となり、大いに用ひらる、侯の封を古河に移さるゝや従ひて來り、偶々幕府の爲政を見て平かならず、即ち表を奉りて私見を陳す、忠言偶々忠諫に觸れ、罪を得て幽囚せられ、次いで卒す、來つて墓邊に詣すれば、淡雲一抹低迷して去らず、亂塔仆れ伏して涙數行の思ひあり。

古 河

●古 城 址

廢址殘壘吠圖の間に横はりて、今徒らに村婦野老の徘徊するを見る、當年古河公方の覇を八州に揮ふや、白馬金鞍相來往して、日月長へにながきを覺ゆ、城址のある所陸羽街道、鐵路によりて來れば、驛を下りて僅かに六七町、古河の市街の西南にあり、城は始め下河邊行義の築く所、下河邊城の名あり、下つて應安の歲上杉憲榮の據る所となりしが、弘和年間小山義政來つて之を陥れ、神將某をして之を守らしむ、爾來攻守相次ぎ、終に康正十二年に至り、足利成氏の收むる所となる、古河公方の名は依つて興れり、成氏の敗るゝや、城は北條氏の有となり、徳川氏に及びて城主歴々變じ、終に土井氏に至りて終る。

●頼政神社

古河の城址に頼政廟あり、廟内に頼政神社を鎮座す、丹聖之を粉飾して頗る壯麗、内に古墳あり、いふ源三位入道頼政の首塚と、傳へて曰く、頼政の宇治に死するや、其臣渡邊競渡邊唱等、首を奉じて東國に至り、來りて此地に瘞じと。

境

●將 門 古 館

境は猿島郡の都邑、關宿を距る二十町、古河には三里餘を隔つ、長井戸の深澤西に横はり、刀水碧にして其南を繞り、悠々として銚子に瀉ぐ、東京よりは汽船に搭じて行くべし、其將門古館なる者は、町を距る二里餘、岩井村の城合に在り、これ天慶の昔、平將門の僭して親王と稱し、相馬の島廣山に據るの時、別館を設けたるの地、國玉神社あり、此逆臣が惡靈を祀る、

●女 夫 松

長谷の眠松とは是、此松翠色長へに依稀として、柯枝廣く四方に垂れ、天を覆ふて蓋をなすもの方六七十間、遠く望めば翠雲凝りて水滴らんとす、松は夜に入りて其枝葉悉く騒む、恰も合歡の葉に似たり、眠り松の名は依つて起る。

結 城

●古 城 址

水戸線の停車場を下りて南五六町、結城の町の南北に横はるを見る、町の大谷瀬に古城の趾あり、曾て藤原秀郷が支城を構へたるの所、下つて鎌倉氏の時源右府の小山朝光を封じたる所なり、朝光累世之に居り、遂に結城氏と稱す、結城氏は驍悍の武士、將は能く指揮し、士は能く戦ふ、結城の名は實に此將士によりて天下に揚れり、維新の役、官軍東下して之に據り、敗殘の幕兵と戦ひたる所、今は城廓悉く頽れて濠渠徒らに灌溉の用となるのみ。

●稱 名 寺

結城町中の大刹、新居山と號し、關東七個寺の一なり、眞宗の祖親鸞上人の高弟眞佛坊の開基する所、本尊は阿彌陀如來にして、春日の刻む所と、境内に結城朝光以下四世の古墳あり、遺骨は土中石櫃の裡にあり、瓶に銘して識別せしむと。

源翁和尚墓

野草茫茫たる那須野の原、金風頻りに噪いで人跡空し、偶々原頭に怪あり、人の草萊の間を過ぐるあらば即ち魅せらる、怪の棲める邊人骨累累、又飛禽走獸の死屍あり、天盛りて陰鬱たる時腥風颯爽として襲ふと、時に一老僧あり、藜杖に倚り飄々として来る、眉霜秀で、鶴癩頰る仙骨あり、途に怪の横はるを聴き、知らざる如くにして行く、時に日漸く暮れて飛鏡一輪皎如として茅茨を貫いて出づ、其色蒼白、依稀として淡雲の間に懸る、老僧笠を傾けて偈を誦し、瘡々然として僅かに一路の草運を辿れば、忽ち飄々として仙樂を奏するが如きを聴く、耳を澄せば尾花が露のそよぐにもあらで、琴筑の漕々たるものなり、老僧獨り怪しみ禁せず、或は思ふ、これ怪の人に戯るゝに非ずやと、忽ちにして美姬あり、影の如くにして現はる、綾衣朱袴僧を見て嫣然として一笑す、即ち九花帳裡の人なり、僧晒つて曰く、汝何の求むる所かあると。姬いふ、我貴僧に求む、願はくは妾をして佛果を得せしめよと、

僧曰く、善し汝元來野狐の妖、温顔人を欺むき、國を亂り家を壞る、果して何の心ぞ、今身死して魂猶磔磔し、行路の人を惱ます、速やかに妄執を去つて得脱せよ、我を併せて欺かむとは迂なりと、水晶の珠數を執つて之を打つ、妖絶叫一聲、一道の白氣と化して天に去る、爾來又原頭に妖なしと、僧は即ち源翁、所謂源翁和尚殺生石を度すなるもの、俗傳は世人の委しく知る所、禪師後寺を此處に建て、後小松院の祈願所たり、安穩寺といふ、禪師の墓は境内にあり墓名に大寂院法王禪師と銘す、寺のある所、結城町玉岡の邊。

玉日宮

五層の石塔苔蒸して老松怪杉相擁して之を繞るもの、地を稱して玉日といひ、塔を玉日宮の墓といふ、玉日姫は親戀上人の配にして、關白藤原兼實の女なり、親戀死して後此地に來り歿すと、傳説詳らかならず。

綾戸城址

將門の暴意を揮ふや、城を結城の山川に築く、所謂納涼御殿とは是なり、時に下野沼田の庄に絶世の美人あり、

り、將に他に嫁せんとは、將門其國色を聞き、途に要して之を奪ひ、此納涼の臺に置く、寵遇他に異なり、女頗る思慕あり和歌を巧みにす、今も猶此地に若御前の稱あるものは、和歌御前の訛り傳じたるなり、女の墓は一小祠古色玄黄として祠前風度る事靜かに、蕭颯として當年平親王の暴を怒るが如し。

水海道

水海道町

町は豊田郡に屬して絹川の東に沿ふ、取手を距る五里餘、國中屈指の都邑なり、水海道は古へ御津海道といふ、相馬内裏の僭帝が、此地を以て近江の大津に比し、以て御津と稱したりしを、後年水と呼び、水海道といふと、驛に古城趾あり西鬼怒川の碧潭に臨みて眺望絶佳。

旗懸杉

那の宗道村法光寺に一老松あり、樹幹低く這ふて殆ど地に横はらんとす、古蒼の色蘚苔の上に纏綿す、傳へ

いふ、豊田四郎の多賀修理を下總に攻むるや、軍利ありずして退き、旗を此松に植て、敗兵を集む、敗兵未だ至らずして敵先づ來り、四郎狼狽して走る、又旗を收むるに追わらずして、旗幟翩翩を千歳に残す、今法光寺に藏する者是なり、旗は素絹にして蟬龍の圖を繙す、大旱の時之に祈れば即ち雨を得と、敗殘の臥龍其驗果して有りや否や。

鬼怒川

名號櫻

鬼怒川の水千古の恨を載せて滔々たる所、豊岡村の飯沼に壽龜山弘經寺あり、寺は横會根の城主羽生氏の建つる所、淨土宗の名刹にして良嶺上人の創むる所なり、一帶の淨區松杉翠々たるの間、巍然として山門あり銀鶴飛翔の下を過ぎて本堂あり、撞樓梵唄其音殷々寺中に名號櫻あり、これ神天上人の名號を書して懸けたるもの、上人の曾て累女の怨恨を得脱せしめたるは、即ち此寺に寄寓せし時なり、其怨婦の墓なるもの

は大花羽村羽生の法藏寺中

●累

墓

とは即ち是なり、寺門を入りて右に古墳あり、歸真理屋性真信女とは即ち墓銘なり、累は羽生村與右衛門の女、容貌醜惡瘡痕滿面、一見人をして恐れしむ、年嫁に及びて配する者なし、獨り空閨を守る、偶々靈場禮拜の六部あり、四方を遍歴して是に來り、途に迷ふて累の家に宿す、累之と情を通じ感歎甚だ切なり、終に村老の媒によりて縁を完ふす、六部即ち累の家の家名を襲いで與右衛門と稱し、稍村落の間に用ひらるゝに及び、忽ち累女の醜を厭ひ、終に之を鬼怒川の淵に投じて殺す、後一女を娶り、女兒を産み菊と名づく、菊長するに及びて突然狂疾を發し、口父の惡を責めて止まず、其聲其態宛かも累の怒るが如し、村民悉く戰慄、拱手して如何ともするなし、偶々聖僧祐天之を聞いて憐み禁せず、自ら經を修して怨鬼を拂ひ、菊女即ち免かる。

●累 ケ 塚

相 馬

●相馬 内裏

相馬内裏の古跡は、相馬郡の守谷町に在り、これ天慶の昔平將門が據つて以て牙城となし、暴威を遠近に揮ひし所、將門は高望王の孫、其先の皇家より出づるを以て、一朝忽然として非望を企て、武藏守與世王藤原純友等と相結托し、相馬に據て叛し、俗して天皇と稱し、其館を内裏に擬す、兇暴此の如きに至りては古今獨り將門あるのみ。兵を四方に縱ちて、財を奪ひ婦女を掠め、暴逆到らざるなし、官軍之を討ちて利わらず、勢頗る猖獗なり、偶々平貞盛藤原秀郷と、其兵の少なきを覗つて之を襲ひ、貞盛矢を飛ばして其額に中つ、將門馬より墜つ、秀郷進んで其首を截し、終に之を誅すとは史の稱する所。

内裏の跡、山に據り谷を繞らし、規模頗る偉大、老櫓怪松翁鬱として枝を交へ、晝暗くして蝙蝠飛ぶ、草萊を分けて木下闇の間に到れば、冷氣颯爽として人を襲

なるものは、法藏寺前より飯沼に至る流の、旋渦して鬼怒川に會するの所なり、當年枯荻風に亂れて落葉颯々、蛇籠の水の白泡立てて逆巻く所、兇兒利鎌を逆まにして立ち、醜婦半水に溺れて猶死せず、切齒眞目して朽木を握み、煩轉して無情の良人を呪む、毒刃既に肩上を劈いて流血滾々、流水爲に碧なるものは、これ與右衛門累を殺すの圖にあらざるや、今も猶微雨蕭條たる初夏の晩、汀鶯低鳴して飛ぶ所、點々たる冥火の飛ぶが如きは、これ怨婦の泣いて螢と化せしにあらざるや。

●雁

島

島は下總七不思議の一、飯沼の水中に在り、平時は水面鏡の如く、島の影たもあるなし、只秋風漸く至りて鴻雁來り渡れば、島自ら水中より湧き、春初禽の漸く歸らんとするに至れば、島も自ら水底に沈む、殆ど雁の時の爲に浮沈するが如し、真に七不思議の一とすべし。

ひ、鬼氣磅礴たるが如きを覺ゆ、池あり、城址を距る五町餘、周回凡そ四町、碧水凝りて苔の如き所、水草の花の咲き亂れて、風のまに／＼漂ふもの、これ當年平親王が瀧川餘流を引きたるものか。

●禪 福 寺

小絹村の巨剎に普門山禪福寺あり、萬治年間大隣玄綱比丘尼の入つて寺を治むるに及び、大ひに廢を興し、荒を修め、規模稍見るべし、本尊は將門の持佛十一面觀世音なり、寺を距る町許村内に相馬小次郎の古城址なる者あり。

●島 廣 山

島廣山は所謂枯梗が原なるもの、秋露凝りて葉末に玉の貫ぬけば、蒼翠頻に亂れて、漫に情を牽く、地は守谷町郷川の高原にして、俯して貝塚の沼を瞰るべし、老松千古の翠を擁して青嵐長へに依稀たり、傳へていふ、昔時將門の僭恣して親王と稱し、守谷に據つて叛するや、偶々美姬枯梗の色に迷ひ、奪ひ來りて妾となす、寵遇後宮に絶せり、秀郷の將門を誅せんとするや、

竊かに桔梗に就いて將門の起居を問ひ、窺ひて之を討つ、將門の悪靈死して瞑せず、怨みを桔梗に歸して、無辜の草木に及ぼし、此原の桔梗をして花咲かしめずと、桔梗あれども花咲かずの古唄は即ち是に基づく。

●桔梗塚

稻井戸村の藤原に落葉として一小塊の横はるを見る、これ當年美人が芳骨を瘞むるの所と、美人名は桔梗、將門の妾たり、秀郷と相謀りて此叛臣を誅す、後秀郷功を桔梗に奪はるゝなきやを杞憂し、欺いて之を殺す、哀れひべし西施五湖の恨、悲風長へに松籟を度りて、馬鬼の草碧に、來つて塚を吊へば、魂將に怨を語らん

●佛島

島の在る所は山王村延命寺の邊、蠶飼川の流水に暖かるゝ所太郎塚あり、佛島は塚の邊にして四面水を繞らし、雜草生ひ茂りて人跡絶たる所に古墳あり、苔の凍てたる所石白く、露滴る所水碧なり、人の躍つて地を踏むあらば、即ち憂々として地底に響あり、又七不

思議の一、土人名けて平親王の塚といふ、石礎の藪苔を踏んで登れば大日堂あり、其間には石佛古墳累累として横はる、老松あり、樹幹朽ちて尙餘命あり、翠雲青黛畫圖の如し、いふ、將門の誅に伏したる地と、或は其古墳なるべし。

取手

●馬場の城山

途水戸線に入りて利根川に沿ひ、取手の停車場を下れば、殷賑なる商戸の軒を接して横はるあり、旅館酒樓或は妓院、其繁榮なる刀水河畔の名都邑と稱すべし、其馬場の城址なるものは驛の馬場にあり、天正年間大鹿左衛門尉の小田氏の爲に固守し、一色某と戦つて死したる所、牙城の在りし所、三面に絶壁峙ち、其下深をなす深さ十丈、蒼田前に横はりて利根の碧流を見る、川廣くして水滔々、對岸の人小にして寸許、丹青の妙を見るが如し。

●取手古渡

取手の渡は詩に歌に古來吟咏の風流を行りし所、枯萩風度りて蘆花雪の如き所、碧波渺茫として天に連なる、仰げば遙かに芙蓉峰の秀靈千古に秀づるあり、此邊鯉魚を捕へて賣る、其法は嚴冬天地凍れるの時、靜に舟を行りて岸を漁り、水中を凝視して鯉のひそむ所を視ひ、漁父を以て之を刺す、其技殆ど神に入り百に一を過たず、夏は即ち鯉抱き、漁人赤裸々、躍つて水中に入り、鯉の集まる所に至りて之を捕ふ、巧みなるものは雙腋に之を抱いて泛ぶ、勇壯にして快哉を叫ばしむ。

●鬼作左の墓

本多作左衛門重次、驍勇を以て鬼作左と呼ばる、千軍萬馬の間を來往して、手必す敵の首級を提ぐ、剛毅にして朴素、後家康の怒りに觸れて屏居し以て卒す、墓は井野の寺前にあり、里俗相傳ふて御墓山といふものこれ、老松あり、蟠根相擁して眠るが如し。

●文卷川

「水菖のかきながせども流れぬは文卷川といへばなるべし」とは道興准後の詠みしところ、文卷川古へ

文間とよび、雅馴して文間といひしもの、更に文卷といふにいたる、川の下に文間の庄あり、蠶飼川の支流なり、文村羽根野の平野を貫流す、巖巖奇澗の目を驚かすなしと雖も、渺茫たる青野原悠々として水の紆曲する所、宛がら白布を晒すに似たり。

●文間神社

文卷川の碧流ゆるくして流れざる所、文間の庄に角の宮奥の宮あり、これ延喜式内の蚊網神社なるもの、祭神は罔象女神、天大に旱するや、俚人火を焚いて雨を祀る。

●國香墓

蠶飼川に沿ふて川原代村の安樂寺に在り、五輪塔にして其色古蒼、國香は將門の叔父にして貞盛の父たり、將門の叛するや、國香を攻めて之を殺す、貞盛痛恨骨に徹し、秀郷と相謀りて遂に之を誅し、以て父の仇を報ず、墓は貞盛の建つところ、父の冥福を修するなり。

安 房

館 山

● 館 山 灣

舟東京灣を發して水波渺茫、銀蛇の交も走るが如き漣漪を劈いて忽ち青螺の水天の間に泛ぶが如きものを見る、これ即ち館山の港、灣を菱花灣といふ、鏡が浦とは俳士歌人の命する所、水深くして浪平らかに、船舶林立するの間閑鷗あり、鳴いて波間に隠見す、海に注ぐものは沙入川、川を以て館山と北條とを界す、島嶼二あり、灣中水紫の所に泛ぶ、一は鷹島一は沖の島。

● 鷹 島

島は周回六町許、蒼翠たる千古の碧の鬱葱として秀靈の氣あるところ辨天祠あり、右に那古船形の漁火を見左に館山の炊烟を靈鷲の間に望む、夏は即ち涼氣颯爽、骨肉皆な冷かなり、島上藝女あり、廣重の繪く所に似ずして其色玄黒、男女を識別し難し、數錢を投すれば即

ち躍つて海に入る、奪ひ來る處蛟龍顯下の寶珠ならで、榮螺鮑の沙垂るゝもの、誰か當年の淡海公たるものぞ。

沖島は鷹島を距る約十町、周圍僅かに町許、老樹鬱々として、風景の佳なる鷹の嶋に譲らず。

● 古 城 趾

町の西南を壓して城山あり、これ里見氏支城の趾、安房の驍勇が遙かに富嶽を仰いで武を揮ひたるもの、今徒らに風景の美によつて顯はる。

● 館 山 公 園

館山の海岸に沿ふて西南に丘陵あり、北下臺の公園とは是なり、南方に大日岩の奇あり、形富嶽に似て其裾に大日如來の尊像を彫る、臺の下は鏡が浦の古碧一帯皎として古鏡の如し、洲の崎の晴嵐富士の暮雪、沙見の炊烟、景の畫に似て、畫の景に如かざるは此名勝なり。

● 海 水 浴 場

に金近あり、素朴にして頗る平民的なり、學生等の喜

● 小 網 寺

出野尾の不動明王なるもの、即ち此寺に在り、像は良辨僧正の作る所、弘法大師の垂跡なり、境内修行谷なるものあり、中世寺稍荒廢したりしを、里見義實宗秀上人を請じて之を修す、地は北條の南一里餘、遷徙たる白砂を踏んで安房神社に至るの途なり、寺内に觀音堂あり、青龍堂あり、撞樓の鐘は古色掬すべし。

● 安 房 神 社

宮崎村の大神宮に鎮座す、社は實に神武天皇の元年に創建したるところ、天太玉命を祀る、舊記にいふ、天雷命阿波の齋部を率ゐて沃野を東土に求め、麻穀を播くと、此社は其當時の創立なるべし、境内瀟灑にして纖塵なし、社殿壯麗ならずと雖も神威縹渺近づく可らず。

● 平 砂 浦

安房神社を辭して相濱の海岸を踏み、西岬村に及ぶ海を平沙の浦といふ、銀砂縹渺として長汀曲浦二里餘、海は即ち鬼ヶ浦の險、怒浪澎湃として岩を碎いて

んで來り遊ぶ所、鶴屋、玉泉館、田村屋、杉岡樓、等は浴場と割烹店と旅人宿の重なるもの、就中玉泉館は特に榮喜齋泉の湧出する所なり。

● 北 條 八 幡

館山と沙入川の流れを隔て、北條の市街あり、國內第一の繁華境、市坊六あり、裁判所郡役所警察病院學校等凡て便なり、海水浴場多く、吉野屋、富士橋、開花亭、北洋館、山海樓、凡て旅舎と割烹とを兼ね、海水清澄にして肌を洗ふべし、八幡社は町の八幡に在り、郷社にして應神天皇を奉祀す、境内幽邃にして眺望絶佳、老樹社殿を繞りて古翠掬すべし。

● 稻 村 城 趾

館野村の稻村城趾は、往古里見氏が據つて以て勇を房總に揮ひたるの地、厩龍嘶いて疾風起り、颯爽として銳氣敵陣を呑む、驍將甲を貫して立ち、兵氣勇壯にして然も嚴肅、甲兵幾萬、向ふ所風靡せざるはなく、里見の武名今に赫赫たるもの、城を此地に構へしなり、爾來滄海幾變遷、また當年の跡を忍ぶ可らず。

翻へり、風荒れて亂雲急なる時、腰々舟を覆へず、浪の名の優しくして、海の名の恐ろしき、又一奇といふべし。

●洲の崎

右に館山の翠波を歴し、左に外洋の幌濤たるを見る、海角走つて海に入り、平郡の大武岬と相托して内海を抱く、海角の山上に屹として洲の崎神社の登つあり、天比理乃咩命を祀る、實に神武天皇の紀元元年なり、山の麓に石窟の暗澹たるあり、中に役小角の像を安んず、小角曾て説に會ふて伊豆の大島に流されし時、夜波濤を踏んで屢々來遊したる所と、其邊に滾々として靈水の湧くあり銀水といふ、透明玲瓏として清冽比なし、一に獨鈷の水といふ、大旱にも涸るゝ事なし。

●手斧切舟越明神

西岬村の濱田と見物との間に古廟あり、蒼然として人を牽く、祭神は稻田媛命、社内に石窟あり、瀧口の小高神社に通ずと信す可らず、社に老朽の獨木舟を藏す、長さ二間半、木の何たるを知らず、太古の遺物といふ、

或は信すべし。

●金胎寺

神戸村小塚の古刹、弘仁年間高野大師の開基する所と、大師自作の木主、自筆の曼陀羅を藏す、其寺寶佐野名號なるものは、兵亂の際奪はれて鎌倉に至り、今は光明寺中に存すと。

●龍伏の松

西岬の汐見の崎、海風玄黄として涼を送るところ、翠幹寒寺の庭に横はりて龍の伏せるが如きもの、これ名木龍伏の松なり、樹の高さ低くして八九尺に過ずと雖も、柯枝翠を凝して地上に假懸し、龍蟠虬蟠海風を吹いて鮮やかなり、蒼々として地を覆ふ事百餘弓、樹下に老嫗あり、村娘の美なるものを携へて茗を煮以て客に供す、凡に筆硯を具し、雅人に乞ふて詩歌を書せしむ。

●布良

布良の海角は巖巖絶壁突兀として海に斗出し、水天劈断の間遙かに大島の青螺を見る、海角の極まる所、滄

浪を貫いて鬼瀧礁の暗礁あり、東西十三町南北六町に亘り、其處の水色即紫黒、常に舟人の恐るゝ難關なり。

那古

●那古寺

北條を去りて那古に來り、補陀洛山普門坊千手院那古寺に詣す、寺は元正天皇の養老元年、行基僧正の開基する所にして、後源右府の修築あり、二王門三層塔を立て、結構の偉大にして壯麗なる、賽者眼を驚かす、東に女坂の羊腸たるを望みて、西に男坂の峻坂あり、石燈急下天上より落つ、其間には即ち青嶂翠壁、萬羅森々として垂れ、風に亂れて飄々たり、登り盡せば老松あり、柯枝逆さに垂れて人の頂きを磨す、本尊千手觀世音は、所謂那古の觀音なるもの、阪東三十三所の靈跡にして、行基の刻む所と、二王門の邊茶亭の海を臨むて建つあり、就いて慰へば、雙眸の間に來るものは鏡の浦、ノへの歌帆風を孕みて來往し、涼風雙袂に充

ちて軽く、或は天寒くして雪降る時、霏々たる飛絮の巴字をなして亂れ、蟹村蟹舎を打して一面の銀世界とす、仰げば青松銀鬚を生じ、伏せば急阪白布を敷く、房總の海濱絶無の好風景。歌あり。那古の浦の霧の絶間に眺むれば 道與准后 此處も入り日を洗ふ白波

●延命寺

長谷山延命寺は北條を距る東北一里有半、國分村本織に在りて曹洞の古刹なり、傳へいふ永正十七年里見義堯の僧梵眞をして開基せしめしものと、里見氏累代の墓あり、結構壯麗、寺寶に里見氏珍蔵の典籍武具等の見るべきものあり。

●船形觀音

船形の普門院大福寺に船形の觀世音なるものあり、仁明天皇の御宇に慈覺大師の建立せられたるもの、本尊は行基僧正の石を彫みて作りたるものなり、堂宇悉く丹堊、遠く望めば青嶂の下、金鳥の焼けて墜下したるかど怪しましむ、奇巖怪石堂の四面を繞りて將に落下

せんとするが如く、人仰いで戰慄す、堂に上り欄に凭りて遙かに望めば、鏡浦浪平かにして、依稀たる長短亭の翠烟淡霞、宛も盆景山水に髣髴たり。

●大武岬

船形觀世音の山脈、東より走りて海に入り、洲の崎の海角と雙々相對して碧濤と共に眠るが如き所、これ大武の岬にして、大房の岬角といふ、角は恰も竿の如くにして長く、海に入る殆ど半里、雀嶋の島嶼を枕にす、海角悉く水神社あり、龍淵神社と稱するもの、白龍の瀑あり、緑樹の間を劈きてかゝる、清風冷氣交も臻り、避暑の客をして何の爲に來りしかを怪ましむ。

●妙福寺

文永年中僧日蓮小松原の難を遁れて富浦村の南無谷に來り、將に鎌倉に航せんとす、偶ま風濤大に起り、船を出す可らず、即ち土民泉澤權太郎の家に留る、居る事數日、老母爲に法號を日蓮に乞ふ、日蓮即ち妙福の二字を授く、後年權太郎の來つて日蓮を身延山に訪ふや、日蓮大に喜び、歡待至らざるなし、自ら着くる所

の法衣を脱し、裸體にして跣座し、弟子日法を顧みて曰く、予昔泉澤氏の家に寓するや、權太郎君の老母、我爲に汚衣を洗濯す、衣の乾く間、此の如く裸體にして讀經せり、汝我が爲に此赤裸の像を刻せよと、刻成る、日蓮自ら七字の題目を書し、裸體の像に添へて之を權太に贈る、權太大に喜び、家に歸りて一草堂を建て、母の法號を取つて直に寺號とす、像猶存す、高僧の面目生けるが如し。

●富山

山深くして珍禽啼き、林靜かにして異獸眠る、豁流潺々として奇石秀で、青嶂碎くる所石花咲く、樹は老ひ草は仆れて、小萩の床の亂れしは、何者の臥せし跡なるらむ、秀靈の氣雲霧の間に起り、人をして心膽を寒からしむるものは富山の險なり、傳へいふ山は天宮命の舊蹟なりと、岩井村合戸の東に登ち、海面を抜く千二百尺、登り悉して觀音堂あり、老杉の梢を摩して漱瀧たる金波の天に列なるを見、風景國中に冠たり。

●逆柿

平郡の犬掛に逆柿あり、但俗相傳ふ、古へ源頼朝の石橋山に敗る、や遁れて此地を過ぐ、携ふる所の鞭を地中にさし祝して曰く、此枯木の花咲くあらば、乃公も亦意を達するを得んと、幾何もなくして鞭芽を生ず、葉漸く茂り、秦秦として長ず、鞭は即ち柿の木なり、逆まに地に立てしを以て、枝葉凡て下に向ふ、逆柿の名の起れる所以。

●高崎鑛泉

高崎灣の水滲に瀦して高崎の鑛泉湧く、鹽泉にして硫黃の氣あり、青白の色を呈す、浴舎あり、壯麗偉大ならざる所反つて素朴、魚介新鮮にして味ふべし、海を隔て、伊豆の天城を望み、氣明らかにして富嶽の巖くを見る、輕阿に乗じて月夜銀漣の上を走れば、眼の行く所悉く神仙宮庭の景。

鋸山

●日本寺

保田より舟を捨て、上り、行く事十數町にして鋸山

の山骨を見る、山は安房上總二國の境をなし、峻秀にして雲霧に入る、攀ちて登るに土涸れて岩出で、突元として行歩に難し、山勢漸く急にして石悉く現はれ、山は數朶となりて嶽をなす、嶽の甚だしきものは犬牙錯雜、遠く望めば鋸齒の如し、老樹の鬼舞獸吼の形ちせるものを穿ちて石逕あり、羊腸として二十餘町、漸く仁王門の屹然として立つを見る、門を入り磴を登れば即ち鋸山の名刹日本寺。

寺は行基僧正の勅を奉じて建つる所、僧正手づから一刀にして三禮恭敬し、齋戒して刻みたる藥師瑠璃光佛及び日光月光十二尊の像を安んず、後良辨僧正の錫を垂る、や、山に關關泉を穿ちて加持の靈水とす、水清澄大旱に際し曾て成する事なし、慈覺大師も來りて阿彌陀觀音の二像を收む、高野大師の來り遊ぶや、百日の護摩を修し、大黒天の石像を刻して遺物とす、傳へいふ、往古山中に靈裝あり、十二坊院の梵唄鳴つて山谷に應ずるや、忽然として現はれ、飄然飛躍、百坊を走りて讀經の聲をなす、其音秀妙聞くもの爲に耳を

傾く、一朝犬忽然として去り、又見る事なし、諸坊漸く萎靡して揮はずと、頼朝の時に至り、再修して舊觀に復す、又尊氏の靈夢を感じたるに依ると稱して大に土木を起し、修築して伽藍の美を競はしむ、これ奸雄人を籠絡するの手段なるべし、今の伽藍は安永三年恩傳和尚の四方に勸化して淨財を醸め、辛うじて素志を達したるものといふ、巨鐘あり、海中より出現するものと、其色黒くして剝剝の跡あり、大悲堂には觀世音の像を安んじ、石階宛まる所に藥師堂あり、更に閻魔堂其左は即ち僧坊、達磨石あり、禪僧跌座の形に似たり、奇といふべし、僧坊を過ぎて大黒堂、堂の下に吞海樓あり、其名の何ぞ壯大なる、寺僧無聊、喜んで客を延き、茗を煮て山中の奇を語る、語未だ悉きずして、眼中の景幾變轉、寒嵐白波遂々として欄宇に掛まると、開山堂の邊より更に登れば、蛙石あり、巖あり、獅子岩あり、皆其形によりて名づく、無漏窟、護摩窟、薛羅洞、皆太古の巖苔を蒙る、通天關は天に連なりてかゝり、日輪山月輪山其左右に峙ちて、瑠璃山の山頂

に十洲一覽臺あり、臺上に立ちて、望めば房總豆相の青嶺、駿甲信野の高山常陸武藏の山河皆な雙眉間中の山水たり。

●元名の霸王樹

保田の元名に霸王樹あり、駿州龍華寺のものに比すれば稍小なりと雖も、東國には稀なり、高さ丈許、左右之に協ふ、又奇觀の一なり。

白 濱

●野 島 岬

白濱の地外洋を貫ぬいて碧波の上に懸る、怒浪澎湃として銀珠を飛ばす所、漁村依稀として夕陽沈み、怪巖奇兀、龍の天上に排つあり、虎の岬を負ふて嘯くあり、天馬の躍るが如きは銚子の岩、鳥の翼を廣げて舞が如きは鷲峯岩、玄黒にして漆の如き所、六花の粉々として飛ぶが如きは、潮の花の凝つて風に亂るゝなり、壯觀比なし、これ白濱野島岬の絶景、飯山より陸路僅かに三里程なり、岬角の悉くる所辨天祠あり、祠前落葉、

仙女の在すや否や、燈臺あり、不動白色にして光芒二十漚を照す。

●芋 井 戸

白濱の村落點々として列なり、丘陵起伏して山眠るが如き所、麓に數莖の薯蕷あり、四時枯れず、青綠長へに秦々たり、土人誇りいふ、弘法大師巡錫の時、土人の爲に特に手づから植ゆるものと、大師逝きて幾星霜、薯蕷老いて今鰻と化したるや否や、芋の在る邊に芋井戸あり、毎歲井中より芋苗出で旬日ならずして其葉繁茂すと、これ水底の鰻の反つて芋を吐くにあらすや。

●七 浦

安房の七浦とは白間津より北白子に到る沿岸の風光をいふ、秋刀魚の漁獲を以て名あり、古へ鯨を捕ふるや「一匹捕れば七浦販ふ」と、古來は此沖にて鯨嶺盛んに行はれたりと見ゆ、今も猶時に長鯨の波間に躍るを見る事あり。

●高 塚 山

山海を抜く七百二十尺、巍然として蒼穹に聳ゆ、七浦村の大川より登る事十七町、眺望の快湖なる蓋し絶無なり、眼を凝して遙かに伊豆の天城を見る、瞰下すれば七浦の長短亭遷透相列なり、漁村の烟悠やかにし暢び低く搖迷する所、歸帆漁歌を唄ふて過ぐるあり、山に龍宮山の名あるは海上より望むに屋氣樓に似たればなり。

●下立松原神社

朝夷の村を距る三十町にして近し、旭ヶ岡に在り、祭神は天日鷲命、治承の初、源賴朝の石橋山に敗れ、逃れて安房に走るや、麻呂五郎を東道の主として、兵を國中に恟ふ、偶々此處を經りて祈る處あり、後裔を鎌倉に稱するや、大般若六百卷、弓箭等を獻ず、社殿蒼然、岬を負ふて翠色滴々たり。

●莫 越 山

杳見の丘莫越の山は豊田村に在り、相傳ふ天宮命の齋祀する所と、祭神は手置帆負命彦狹知命往古は社殿莊重結構偉大なりしも、中世兵火に罹りて荒廢し

たるもの、漸く天保年間及び修築するを得たり。我
脊子を莫越の山の喚子鳥君呼びかへせ夜の更けぬ間
に」と萬葉集に唄はれたる名跡。

●千 朶 楓

満録村大切に在り、秋風稍を度りて滿目悉く紅繡、宛
がら紅雲の搖曳するが如し、樹幹高さ三丈、柯枝四方
に延びて其徑二十餘丈に及ぶ、蓋し天下絶無の名木な
り。

●太 夫 崎

江見村吉浦の岬角、澎湃たる汪洋に斗出する所、太夫
崎の名あり、岩罅を穿ちて不動明王の像を安置す、其何
人の作なるやを知らず、刀痕の跡已に銷磨して幾百年
外のものたるを知る、不動窟の邊更に一岩窟あり、洞
口廣さ二十尺、松明を捧げて入れれば冷氣面を撲つが如
きを覺ゆ、洞漸く蹙る所、又入る可らず、然れども其
奥究まる所を知らずと陰暗處ゆ可らず、昔時此洞に夜
夜大嘶聲あり、轟として海嘯の來るが如く、反響して
山嶽に響き天地に震ふ、里人戰慄相顧みて驚く、偶一

壯丁あり、密かに之を覗へば、暗中光芒あり、雙々相
列りて炬の如し、驚いて岩罅の間に匍伏し、息を凝ら
して之を窺ふ、怪奔然として躍り、走つて岩角の上に
立つ、之を凝視すれば即ち驕驕なり其色黧黑、鬚毛飄
爽として前額を蔽ひ、一氣海風を呑む、真に天下の駿
なり、即ち走つて俚人に告げ、圍繞して之を捕へんと
すれば、駄駢して人を近づけず、近づく者は即ち嚙ま
る、疾き事天馬の如し、時に頼朝の侍臣某當年馭馬の
術を以て聞ゆ、偶々此を過ぎり、躍つて馬腹を捕へ、
忽ち之に跨る、驪幾度か之を落さんとして能はず、終
に驚發せられて厩中の虬龍となる、即ち名馬太夫驪な
る者、後年源九郎將軍に従つて、船越の險を冒し、平
門を西海に破したるの駿なり、洞の處落陣蒼洋に映す
るものを見るに、金鳥般朱にして大さ數抱、旋回して
波濤に沈み、暮色蒼然、行旅の客をして轉た家郷を思
はしむ。

鳴 川

●波 太 島
郡は長狭、村は太海、漁家落莫たる所、海上一町にして
波太島の勝あり、島の周回殆ど十四町、島小と雖も實
にこれ壺中の天地、峯あり谷あり、又村落あり、奇た
る漁家にして人烟稀小、村童蟹を捕へて戯ぶる、相傳
ふ頭大公の石橋山に敗る、や、失踪して此地に來る、
士民仁右衛門あり、公を待つ頗る忠實、公之を嘉し、
覇業成るに及びて此島を賜ふと、故に仁右衛門島と呼
ぶ、島の外は白波激漣、奇巖百態の間辨天島菜葉島
あり、其他水に泛ぶ所の小嶼、手を延ばせば一掌の内に
入らんとす。

●清 澄 山

波太の翠波を見て鴨川の町を過ぎり、行く事三里にし
て清澄山あり、山上清澄寺を建つ、迂曲數回仰いで漸
く上るべし、寺記にいふ昔人の稱して不思議法師と結
名する者あり、雲を踏み霞に駕して飄々として來り、
老柏樹を伐つて虚空藏尊を刻みて寺に供へ、殿する所
の三顆の摩尼寶珠を出して三所に埋む、今の寶珠山、

如意山、摩尼山は即ち是なりと、又明星水あり、不思
議法師の獨鈷を取りて穿ちたるもの、白晝明星の依稀
として井底に映りしより此名ありと、承和三年慈覺大
師來りて此山を修め、靈地壇を築きて法を修す、其山
中の魘魅を封するが爲に投じたる獨鈷の止まりし所を
獨鈷山と號す、後年靈域頗る頽敗し、寺僧亂惰、法力
大いに薄らぎ、爲に雷の震ふ所となりて、寺悉く燒け、
源親元の再建する所となる、聖僧日蓮の始めて髮を削
りたるの古跡、此覇氣稜々たる僧は、實に此寺の沙彌
たりしなり、靈山高き事千三百尺、寶珠山如意山金剛
山露地山獨鈷山鷲峯山之次ぐ、山上は凡て形勢千里、
山氣俊秀、真に別天地の感あり。

●誕 生 寺

天津の町より一里にして小湊に出づ、誕生寺あり、こ
れ日蓮の生れたる所、山上に其靈屋を存す、寺は山を
負ひ海に溢み、境内清涼にして石磴疊み成す鉸町、山
門を入りて誕生堂あり、絶代の聖僧が呱呱の聲を揚げ
たる所、中央は即ち祖師堂、本堂には十界の諸佛を安

んず、堂の結構頗る偉大、始め日蓮の法弟日家の祈禱生の祖師像を刻むや、佐久間重貞爲に資を助け、本寺を經營して日家を二世の祖となす、誕生水は日蓮出生の時、忽然として湧出したるもの、蓋し諸天の龍王に命じて淨水を噴出せしめたるもの、滾々として千古の清冽今に絶へず、誰か來つて爲に口嗽ぎ、聖僧に似するあらんとする者ぞ、山頂は物見の臺、東に勝浦崎の走りて忽戸崎に連なるを見る、波太島太夫島相托して呼應すべし、絶勝の地、絶無の靈山。

● 妙の浦

誕生寺の山を下りて東、妙の浦の海平らかにして濃紫の如きあり、土人傳へいふ、日蓮上人の此地に在るや、里人に諭して漁獲をなす事を禁ず、里人堅く其訓戒を守り、子孫相傳へて今に至るも猶海に漁らず、賊に魚屬の安樂淨土たり、近海の紅魚魚湖の難を避けて多く之に聚る、客の舟を泛べて拍手するあらば、碧水漸くにして紅に、遂に群りて船側に泛ぶ、大なるものに至りては四五尺許、水面二三尺の處を旋りて泳ぐ、

美観究つて凄愴の感あり、里人訛り傳へて鯛の浦といふ。

● 蓮華漣

妙の浦に添へる一掬の地、曾て日蓮の誕生するや、妙の浦の渚に忽焉として白芙蓉生ず、八葉にして色玲瓏、異香を薫じて蘭麝の如し、中世海嘯の難に會ふて其地没すと雖も、尙海中に巨巖を殘す、其處即ち蓮花の開きし跡と。

● 劍洗井

安房は日蓮の誕生地なるを以て舊跡頗る多し、此井大和村の地にありて靈泉と稱せらる、曾て聖僧の東條景信に襲はれ、劍を前頭に受くるや、此井に會ふて劍を洗ひ、走つて水滸の一小庵に隠ると。

上 總

大 網

● 大網神社

鐵路の本所より東に走るもの、千葉に到りて房總線となり、分れて東南に向ひ、忽ち大網の驛を得、房總線に任りて般昌の一驛たり、社は郷社にして興田別尊、健御薨命、大日古貴命の三神を祀る、社殿壯麗ならずと雖も古樸。

● 本國寺

これ法華宗の古刹にして、所謂上總の檀林なるもの、大網の宿にありて伽藍宏壯、此寺古へ眞言の古刹にして善興寺と稱したるもの、文明年間領主酒井氏の法華經を信奉し、領内の寺院を打して悉く法華宗となしたるより、此寺も亦改めて蓮宗となり、名を本國寺と稱す、僧坊相列なり、堂塔美を究めて、人をして嘆稱せしむ。

● 大關城址

福岡村依古の島に在り、自山六郎重康の據りたる所、城險にして攻むるに難し、重康側を東金の城主酒井氏と隙あり、酒井氏隆敏甲兵を催して來り攻む、重康壘を堅うして之を守る、兩軍相對して戦はざるもの月餘、隆敏無聊に堪へず、即ち島山氏の權臣某に款を通じ、内外相應じて之を攻め、終に城を陥れたる處、後若干もなくして廢城となる、今は廢墟の僅かに見るべきあり。

● 清岸寺古趾

大網より千葉に通ずる一驛土氣と名づくるあり、大網を距る僅かに里餘、城山の東麓に清岸寺あり、普化宗にして一月寺に屬せしが、中世故ありて廢寺となる、今は僅かに不動明王の古祠あるのみ、祠の邊に水聲の聲響喧聒として響くあり、これ即ち清岸寺不動の瀧、水冷やかにして氷の如し、盛夏三伏の候、土人の瀧壺に來りて浴する者多し。

● 本壽寺

史に稱す、酒井小太郎定隆の足利義尚に仕ふるや、年壯にして弱氣あり、亂世に乗じて奇功を植てんとし、孤劍飄然關東に遊びて足利成氏に據りて、其帷幕に參し、未だ其運籌を示すに及ばずして忽ち上杉氏の亂に會ひ、成氏逃れて古河に走り、從士多く離散す、定隆も又將に房總の地に航せんとして舟を行る、船中の客に雲水の徒あり、日泰といふ、之と語るに頗る意を得るもの多し、定隆初めて日蓮の遺教を奉ず、後定隆の安房に到りて里見氏により、風雲に乗じて上總半國を奪ふや、一寺を此地に建て、日泰を請じて住持せしむ、次いで日泰の歿後外廓を毀ち悉く僧坊となしたるもの即ち本寺の創立なり、陽春花開くの候、山門より本堂に至るの間、紅雲一朵飄飄して途を蔽ふ、樹は皆數百年外の老木、樹幹殆ど朽ちて僅かに餘命を食るもの頗る古雅、これ當年酒井氏の植へし所と。

●土氣城趾

本壽寺と相對して土氣の町を挟む所古城趾あり、山深くして木繁く、山脚を裁ちて一路を通ず、鬱樹鬱葱とし

て左右より之を覆ひ、踞踏して登るに足趾頗る暗し、暗阪の名あり、阪を登れば即ち酒井氏牙城の趾、傳へいふ、酒井定隆の威を四方に揮ふや、支城を東金の地に建て、自ら之に移り、土氣の城をして嫡子定治に守らしむと、即ち此山上の遺墟なり、爾來風雨幾星霜、憐れむべし英雄雄視の跡、今徒らに麥秀の語あり、空しく潭城に歸せんとす。

●法光寺

大和田に法光寺あり、酒井定隆の長享元年に開基する所、開山は日泰上人なり、寺傳を閱すれば、内に幽鬼の佳話あり、曰ふ、第二世日行上人一夜隣村に住いて說法し、獨月明を弄びて歸る、途枯葉の脆々としてそよぎ、雪白の花の迷々として亂る、所を過ぎる、寂冥たる風色掬すれども悉きず、忽ち一小流を渡る、丸木橋の邊茫として一道の白氣あり、之に近づけば即ち婦人、形容枯槁して顔色蒼然、又人界の者ならず、年齒僅かに二十有許、髮髮亂れて面を蔽ふ、懷に嬰兒あり、呱呱として乳房を吸ふ、女上人を見て呼んで曰く、

●赤人塚

法光寺の邊赤人の碑あり、赤人塚の三字を刻す、水田渺茫其周圍を繞りて、塚の在る所僅かに一掬の地をなす、土人傳へいふ、これ歌聖山邊赤人の墓と、其眞偽俄かに知る可らずと雖も、古塚蒼然數百年外の傳あり、時に羽客の遺遺するが如きは、蒼浪風度りて月明の夜孤雲の獨走るなり。

●千段古洞

大和村字山口に千段穴と稱するあり、法光寺より十數町にして行くべし、穴は其口狭くして直徑僅かに二尺有餘、匍伏して入れれば即ち第一の洞、廣さ方九尺、四壁の土既に化して石となり、是を敲けば鏘々として鳴る、燈を執つて手搜し漸く小洞の他に向つて通ずるを見る、踞踏して僅かに入れれば、數間にして第二洞に入る、此洞廣さ事席十疊を敷くに足る、其奥に又小孔の起るあり、奇を驅つて進めば即ち第三洞、冷氣骨に徹り、鼻息の漸く苦しさを覺ゆ、第四洞を究めて第五洞、

妾不幸にして數奇、事志の如くならず、爲に聊か佛に祈る處あり、夜々此處に來りて拜す、然れども此孩兒あり、讀經長ければ忽ち泣いて止まず、爲に誦したるを得ず、上人幸に妾が志を憐れまば、讀經の間願はくは妾に代つて孩兒を擁されん事とぞ、涙數行下る、上人之を誦し、袖を以て孩兒を受く、已にして經漸く半ならずんとして、孩兒重き事石の如く、冷やかなる事鐵の如し、全身爲に痺れて堪ゆ可らざれども、力勉して僅かに經の了るを待つ、女大いに喜び謝していふ、我願始めて足れり、願はくは貴僧に報ゆる處あらん、されども君は法界の人、又凡俗を以てすべからず、妾今一寶珠あり、願はくは之を贈らん、幸ひに珍藏する所あれど、一顆の名玉を與へ、忽ち一道の白氣と化して消ゆ、蓋し幽鬼の迷ふて彷徨するなり、上人怪んで寺に歸り、受くる處の珠を見るに、透明にして水晶の如し、天晴る、時は玲瓏にして水の如く、雨降らんとすれば、汚濁にして白乳を起す、其玉の何たるを知らず、名けて晴雨の名珠といふ、今に藏せり、山號を改めて

其極まる所を知らずと雖も、人は漸く第三洞にして止むべし、深く入れば大氣稀薄にして堪ゆべからず、千段穴とは土人の名づけたるもの。

●雄蛇ヶ池

池は大和村の安養寺、山に據り丘に沿ひ、堤防を築いて祭流を支ふ、池廣き事數千歩、汀蘆の邊に立ちて遙かに對岸を見れば、人影小にして土偶の如し、水波渺茫として湖水に似たり、波靜かにして水碧く、鴨鴈來り群れて人を恐れず、里人網を以て夜之を捕る、山間の一僻村、此良禽あり、旅人到るあらば、即ち炙りて之を饗す、香味津々言ふ可らず。

●墨染櫻

古櫻の精、嬋娟たる少婦と化して、戯れに人を招くや否や、墨染櫻の名優にして情を牽く長し、これ當年西行法師の楠のし所と、櫻のある所丘山村山田の貴船神社、祭神は鸕鷀草葺不合尊、亦西行法師の勸請したるものと。

●小町山

墨染櫻に隣りて小町山あり、村の名を小野といふ、六所明神の社を距る東殿町、翠雲霞懸たる松林のある所、凝翠を分けて、亭々たる一老松の矗立天を指すものあり、其邊に老櫻あり、春風吹いて蝶の翼の輕げなる時、此蒼翠の内、爛として紅雲の淡彩するあり、美人當年の玉容を見るの思ひあるべし、此地は絶世の美人小町小町の生れたる所と、但説信するに足らざれども、又試みに耳を傾むべし、村老の附會頗る巧みなり。

東金

●鴉ヶ根城址

大綱を距る一里有半にして東金の町に至る、古へは渺たる村邑にして、四顧悉く落葉たる大平原、狐鬼戯れ靡塵跡を印す、家康秀忠等の屢々獵に托して武を練りし所、古跡頗る多し、其鴉ヶ根の城址と稱するものは東金の臺上鴉ヶ峰にあり、これ鳥雄酒井定隆の居りし所、山碎けて嶋嶺峙ち、絶嶮削成する翠樹の上、天險に據りて牙城を設く、俯せば即ち東金の市街、一路蜿蜒

凝して都邑相列る、遙かに眼を縦てば、激澗として峻雪の輝くが如きものあり、凝視すれば汪洋の漫々として天を浸すなり、南には長狭市原地生の連山相列りて翠巒重疊、遠く大東岬に至りて海に入る、厓端に三株の老杉あり、遠く望めば太夫木の天を指さすが如し、里人の所謂三本杉なるもの、或は牙城物見の杉と、説は之を標の杉といふ、蓋し船舶の海上より來るもの、先づ此老樹の梢頭を見て方位を知るを以てなり、亦風風池あり、昔酒井氏の覇業漸く成り、鴉ヶ崎の城樓、旭日の瞳々として天に朝するや、頻りに鐘瑞あり、風風偶々舞ひて城を一匝し、池邊の老梧桐の上に止まり、徘徊して去らざるもの半日、更に舞ひて池汀に下り、妙音玲瓏宛轉として玉を轉ばすもの三聲、終に東を望ひて去ると、今は梧桐枯れて池水又涸き、徒らに當年の名を残すのみ。

●本漸寺

前に八鶴湖の碧潭を臨みて僧坊相列なり、尙ほ堂宇六

舎、日蓮宗の巨刹にして、寺城廣さ殆ど一萬五千餘坪、堂に踞して遠望すれば、盛夏の天漸く明けんとする所、淡々として朝霞わが、八鶴湖上に搖曳して、荷花の清輝を包む、湖を見るの地なり、水を挾むで安國山

●西福寺

あり、寺は古へ源平の戦に際し、叡山の僧某、日吉社の幣及び智者大師の影像を携へ、難を此地に避けたるものと、影像今寺中に蔵す、絹素已に玄黄として丹彩殆ど形を失ふ、古色蒼然たり、西福寺と本漸寺との間には八鶴湖、青山水澗をめぐりて水藍より碧し、東金廓外小西湖」とは、梁川星巖の嘗て詠したる所、湖は爲に其名高し。

●尼御所

尼御所の在る所高平村家の子の妙真寺、寺後の山上に一掬の丘陵あり、これ當年護良親王の妃の配せられたる所と、正史の徵すべきなしと雖も、土人の語る所に據れば、親王の讒に會ふて鎌倉に謫せらるゝや、妃其に従はん事を乞ふ、許されず、即ち窈かに之を遂はんと

して顯はれ、捕へられて此地に流さる、妃世態の無常なるを歎じ、髪を削つて佛門に歸し、號を妙宣といふと、寺の名は即ち妃の法號なり。

成 東

●鳴 戸 城 趾

城は城東の山上に在りて、古へ芳賀伊賀守の據りて武を輝やかしたるの所、遠望臺の趾あり、成東の流長へに悠々として、其間商賈軒を接す、また歩を枉ぐるの名勝地。

●浪 切 不 動

鳴戸城趾の邊浪切の不動院あり、是れ當年行基僧正が東國に巡錫して途是を過ぎり、海上風伯の怒に觸れて溺死するもの、幽魂終に祭るなきを哀れみ、浪切不動の像を刻ひて風伯を鎮むる所と、山高からざれども奇岩怪石岬々として天に聳え、龍嘯虎吼の岩あり、之を踏んで登るに、奇態千狀其形言ふ可らず。

●勝 覺 寺

古へ名匠運慶の靈腕を練らんとするや、佛に誓ひて千體の佛像を刻み、これを國內の大刹に收め、或は海に投じて龍神に贈ると、偶々釋尊及び四天王の靈像を刻み、上總の海上より海に投じたるもの、波浪の漂はす所となりて此地に漂着す、里人即ち執りて之を祀りしものこれなり、後盜あり、寺に入りて像を偷み、行く處を知らず、惜しいかな、名匠の刀痕、今草莽の中に走りて所在を知らず、佛もまた威の乏しきに似たり、寺の在る所縁海村宇松ヶ谷。

●矢 指 神 社

神體は白羽の一靈箭、其所因奇ならずして可ならんや、傳へいふ、源頼朝の石橋山より逃れて當國に入るや、義を四方に怖へて威漸く揮ふ、偶々上總海灣の里程を算せんとし、大東崎より北するに、一里に一箭を立て、下總の飯岡に至りて九十九箭、即ち止む、此地は其白羽箭を崇めて神となし、以て頭大公の靈を祀るものと、縁起尤も奇なり。

横 芝

●横 山 二 王 尊

芝山二王の名三尺の童子も之を知る、其降魔の相を現はして白眼江湖を睨むところ、昆首羯摩が入神の刀、人をして覺えず遂巡せしむ、二王尊の在る所天應山觀音寺、二川村の芝山にありて、横芝の驛よりするに二里にして稍近し、本尊の觀音像は慈覺大師の刻む所、或は弘法大師の刀ともいふ詳かならず、堂の在る所一堆の丘陵、數百年外の老樹鬱葱として之を繞り、蒼翠凝つて人の面を照らし、顔色悉く蒼然。

仁王尊は古へ千代田村の金龍山金光寺に在りしが、弘治年間井田因幡守友胤の族を悉して三谷大膳と戦ふや兵火焰々延いて佛寺に及ばし、靈像殆ど焼けんとしたれども、惡火終に此降魔の像に近づく可らず、門に至りて火勢衰へ、風位漸く變じて他に走ると、後之を觀音寺に移したるもの、靈像眞に靈あり、千古を臨眺して威相顯如、寺寶に三尊の彌陀佛の畫像あり、絹素を

●蓮 福 寺

千代田村の飯櫃山上に稻葉山蓮福寺あり、天文年間山室飛騨守の城を此山上に築くや、勝軍地藏の堂宇を建て、寺を以て其別當所となせしと、寺に阿彌陀佛あり、行基僧正が三七日の齋戒をなして、一刀三禮謹んで刻む所と。

●飯 櫃 城 趾

蓮福寺の邊飯櫃の城趾なるものあり、廢墟殘墨落眞として見る可らずと雖も、大永の昔山室飛騨守常陸が、十萬の貔貅を養ふて威を揮ひ武を輝かしたる古城趾、山の北に蒼松を抜いて一高阜あり、妙見臺の見晴しなるもの、古へ妙見の社を崇めたる所、臺に上れば馳望開豁、東北に四所明神社あり、これ飯櫃城鬼門の鎮護と、城亡びて神尙在り、廟前の古帳風なくして捲ぎ、徐ろに當年の榮華を想はしむ。

●德藏寺

逆福寺の邊に在り、昔飛騨守常陸の大軍を率して多古の城を襲ふや、城主牛尾胤仲衆を督して戦ひ、力悉きて城と共に亡ぶや、胤仲の菩提寺なる真弘寺の僧、名作の空しく戦塵に委するを歎じ、自ら負ひ來りて常陸に歸したるもの、即ち寺を此處に建て、靈像を安んず、脊負投の釋迦とは是なり、像高さ一尺五寸、佛工定朝の刻む所。

●椎崎城

收除の戦將が怨みを帯びて痛憤したる所、史に稱す、椎崎の城主椎崎三郎勝任父祖の遺業を受けて之に據り、世に椎崎殿といふ、勝任常に土氣の城主酒井定隆の專横を惡み、痛恨骨に徹す、密かに之を除かんとし、て兵を擧ぐ、兩軍鼓噪して吉田原に戦ふ、已に定隆を獲むとして偶々、福齋齋に起り、叛臣の爲に誤されて死す、城次いで陥り、樓臺高厦空しく一片の雲烟となると。

●埴谷城址

武射の西山に據りて落莫たる一村あり、上總戸の産地なる陸岡村、村の埴谷に埴谷豊前守景正の古城跡あり、其東に妙宣寺の靈の雲に登ゆるを見る、これ當年城門の鎮護神妙見洞のありし所、山の麓に誕生水あり、城主左近將監の子日親の誕浴せしものと、日新は妙宣寺の僧、高德にして村民を化す。

一の宮

●大東岬

房總鐵道の究する所一宮の驛あり、驛を下りて里除、人車機々砂丘の間を過ぎて達す、岬は海客の所謂大東の難關、海角起伏躍つて海に入り、餘脈延いて怒浪の裡に入るもの一里有餘、暗礁、隱巖、或は出で或は隠る、潮充つれば悉く沈み、波濤激して寒々、水林天を蔽ふて風浪の險言ふ可らず、船船誤つて來るあらば、海若躍つて之を殺し、船と人とを吞吐して再び歸さず、惡龍の淵の名空しからず、海岸は漁家點々、砂丘の影に隠見す、曾て海嘯幾度か來り、幾百の生靈を拉

●釣崎

して水底に葬る、暗夜巖頭に立ちて海に對へば、浪花輝いて火の如く、其色蒼白、幽鬼の魂尙磅礴するかと怪しましむ、海岸は奇巖怪石幾多の長短亭をなして北に走り、飯岡の岬に通ず、即ち九十九里の濱に起る所、海岸に細砂あり、幾多海濱水滸のものと同じからず、名けて鐵砂といふ、色玄黒、白波と相嘴んで黒白の奇觀を呈す、鐵砂の横はる所を歩いて筆草を獲、其狀茅茨の如し、秋風颯爽として其葉一度枯るれば、其幹に毛筆の如きものを生ず、大東の筆草なるもの、亦名産の一なり。

●釣

神代の昔彦火々出見尊の釣を垂れて、鱗魚の食ふべきを教へたる所と、東浪見浦の海角なり、此地に鳴山の奇あり、山は一丘陵、砂と石と相擁して蒼翠長へに眠る、山に登りて耳を聳つれば、琴々として風度り、波浪の鳴るが如きを聴く、其音の起る所を知らず、遠州七不思議の一なる袖子ヶ浦の浪の音に似て小なるもの、濛々たる其異響は或は海底に洞穴あり、水の旋渦

●東浪見寺

して入るにあらすやと雖も信じがたし、蓋し波濤の反響なるべし。軍荼利明王の靈像を祀れる軍荼利山東浪見寺等は鳴山の邊東浪見村に在りて秀靈の地なり、山は幘壁削成するが如くにして奇巖相嘴み、老樹柯枝を覆ふて、逆まに山上に懸る、急激にして仰ぐが如き石礎を上る四十餘級、蒼然たる華表あり、其左側の崖下は末無川の上流、水泉岩に當りて冷澁、躍つて狂し、狂して走る、珠沫滂沱之に近づけば衣袂悉く沾ふ、更に登りて太子堂に至り、聖德太子の古像を拜して、百餘級の石礎を攀れば、二王門あり、安置する所の雙金剛神、怒つて賽者を搏たんとするが如し、本堂は即ち軍荼利明王を安んずる所、觀音勢至の像あり、亦阿彌陀佛あり、温容寂冥眉を垂れて人を撫す、山上は汪洋の漫々たるを望み、幾多漁村の長短亭をなして列なるを見る、奇怪なる巖谷を攀ち來りて、此坦々たる風色に接す、送迎の妙實に絶佳なり。

●玉前神社

内藤久長の據りて勇を稱したる一宮の城址を望みて、一宮本郷の町に玉前神社あり、景行天皇の東狩するや、親しく勸請し玉ひたるものと、祭神は玉依媛命、史にいふ、彦火々出見尊偶々皇兄火闌降命が藏する處の魚鉤を借り、日向の海濱に釣ります、大魚あり來つて鉤を呑み、糸を断ちて逃る、皇兄之を聞いて大に怒り、直に失ふ所の鉤を返さん事を迫りて已まず、尊即ち先づ新たに鉤を造りて之を納れ、次いで失ふ所の鉤を索むると稱して海中に入る、雙手藍潮を排いて沈む事百有餘尋、忽ちにして潮水絶え、一道の白砂燦爛として遙かに連なるを見る、怪んで進めば、途中相逢ふ所の人、皆官服を着け冠を戴き、威儀頗る堂然、然も其色蒼白にして地上の人にあらず、行く事里餘、忽ち一大樓門あり、石を壘みて左右より積み、其合する所朱樓を設く、其下は即ち門扉、堅うして開く可らず、仰いで欄間を見、始めて天龍門と書するを見る、これ龍宮城なり、門を破いて宮中に入り、王に謁して鉤を返さん事を乞ふ、龍王躊躇して容易く出さず、盛宴を張つて之を遇し、後宮に在りて命を待たしむ、後宮の内美人多し、中に二姫あり、曉暁の明星の如し、姉なるは豊玉媛、年少なるは玉依媛、共に龍王最愛の女たり、尊之を見て恍として酔へるが如し、終に豊玉姫と感愍を通じ、悠遊歸るを忘る、居る事三年、龍王始めて鉤を返へす、尊情緒綿々、漸く辭して去らんとす、別に凝みて豊玉姫泣いて曰く、妾君が恩に馴れて相親しむ已に三歳、日月短かきにあらずと雖も、昨猶今の如し、奈何ぞ長く別離の情に禁へん、且つ妾已に妊めるなり、他日必らず君の許を訪ふべし、幸に舊情を忘る、勿れど、即ち滿珠干珠の二寶珠を贈る、尊願盼して龍城の門を出で、此海濱に上陸し、家を建て、姫の至るを待つ、已にして風雨晦冥たる時、海上遙かに光輝あり、音樂風颯として聞え、姫即ち至る、伴ふ處のものは玉依姫と、社は即ち玉依の靈を祀るもの、毎歳八月十三日神事を行ふ、里人鼓奏して神輿を擔ぎて海に入る、輿の將に海に入らんとするや、海風俄かに起りて怒浪澎湃、

時ち來りて輿と人とを蔽ふ、然れども一人の傷づく者なしと、里人稱して御迎風といふ、社の在る處石を壘みて壁となし、清淨の城を卜して祠殿を建つ、蒼翠鬱葱柯枝天に朝して、其下頗る清涼、詣して以て涼を入るべし。

●内藤古城址

俚人の稱して城山といふものは、永祿年間内藤久長の割據したる所、偶々里見義頼の驍將土岐頼春衆を督して來り討つや、久長防戦甚だ力む、土民又蜂起し、竹槍旗突貫して其後を包む、勝敗未だ知る可らず。頼春勇武絶倫、大刀を執つて陣頭に迫り、暗臨叱咤して城に迫り、肉迫して之を攀づ、勢猶猶當るべからず、城遂に陥り、慘虐の事俄かに起る、婦女老幼と雖も逃るゝなし、蓋し頼春土民の久長を救ふを怒り、村民を殲して仇を報するなり、臣民の其君に悉す、敵と雖も其志を憐れまざるべからず、頼春の成す所頗る憎むべし。

城址のある處本郷の西に横はるの丘陵、これ當年流血

を乞ふ、龍王躊躇して容易く出さず、盛宴を張つて之を遇し、後宮に在りて命を待たしむ、後宮の内美人多し、中に二姫あり、曉暁の明星の如し、姉なるは豊玉媛、年少なるは玉依媛、共に龍王最愛の女たり、尊之を見て恍として酔へるが如し、終に豊玉姫と感愍を通じ、悠遊歸るを忘る、居る事三年、龍王始めて鉤を返へす、尊情緒綿々、漸く辭して去らんとす、別に凝みて豊玉姫泣いて曰く、妾君が恩に馴れて相親しむ已に三歳、日月短かきにあらずと雖も、昨猶今の如し、奈何ぞ長く別離の情に禁へん、且つ妾已に妊めるなり、他日必らず君の許を訪ふべし、幸に舊情を忘る、勿れど、即ち滿珠干珠の二寶珠を贈る、尊願盼して龍城の門を出で、此海濱に上陸し、家を建て、姫の至るを待つ、已にして風雨晦冥たる時、海上遙かに光輝あり、音樂風颯として聞え、姫即ち至る、伴ふ處のものは玉依姫と、社は即ち玉依の靈を祀るもの、毎歳八月十三日神事を行ふ、里人鼓奏して神輿を擔ぎて海に入る、輿の將に海に入らんとするや、海風俄かに起りて怒浪澎湃、

の交黃として腥風頻りに吹きたるの古戰場、來つて古の事を忍べば、青草依々風に點頭いて語るあるが如し。

●廣常城址

内藤の古城址と相對して屹然たる山嶽あり、地平を貫ぬいて時つ事三百尺、峭頭巖々として天と語らんとす、羊腸たる山路の峻々として險なるを攀て山頂を究むれば即ち本丸、城樓の趾あり、練武場の舊趾あり、森族上總介廣常が殿臺の牙城たり屢々來つて兵を督したる所、猶其舊蹟の横はるを見る。

●松嶺

長柄の二名木と稱せられたる皮部松は八積村の宮原に在り、樹幹空洞にして唯松鱗の相抱合するのみ、試みに石を空洞の裡に投すれば、又音響なく、其根底を知る可らず、崎嶇蟠根龍の躍るが如し、吼聲峻々風に對して微吟あり、漚々として松嶺の琴筑を鼓するが如し。樟の名木は土陸村の上の郷に在りて、樹幹實に十八抱にして尺三寸を餘す、高さ丈許、幹裂けて四方に分れ、

宛から笠を以て覆ふ如し、蟠根、悉く地上に現はれ、現はるゝ所已に石と化す、洞の處優に入九人を座せしむべし。

茂原

●押原寺

本郷の町を距る二里餘、茂原の町に在り、常在山と號す、題目堂あり、是曾て日蓮上人が掛錫して四方に遊び、新教の爲に説法したるの途次、此に來りて草庵を結びたるもの、日蓮記の茂原庵とは是なり、堂に日蓮自筆の曼荼羅あり、虬蟠の躍るが如き靈壘、恰も聖付其人に接するが如し。

此地始め曉將齋藤兼綱の館したる所、偶々兼綱將軍宗曾親王の怒に觸れ、采邑を沒せられて三浦泰村に托せらる、泰村任侠、自ら其領土を裂いて兼綱に給し此地に置く偶々日蓮此地に來り、深く兼綱の歸依する所となる、兼綱も又濁世の榮華を捨て、日蓮と號す、族須田重勝箕輪次成等皆其徒弟となる、終に館を擧げて日

蓮に寄附し、茂原寺を建つ、實に英雄得度の所なり。

●岬日岩窟

國府里に瀨府の關あり、往時上總の國府を置きたる所此邊丘陵相列なり、蜿蜒起伏して走る、山腹に神代穴居の趾あり、押日村最も多し、大なる者は十餘人を座せしむべく、小なる者も猶能く五六人を容る、洞口狭くして方二尺有餘の處、燭を執つて入れば、地層をなして下り、廣さ席十餘疊を布く、穴は更に穴を生じ、其奥に大日如來の像を安置す、何人の刀なるやを知らず、石若黒にして古し、穴の中に蝙蝠多し、燭を見て驚き、婆娑として飛び來り、人の面を撲つ、古來怪樓めりといふは蓋し是なるべし、大日窟といふ。

●武峯

長柄村の舟木に鐘ヶ淵の奇を見、秀靈の涼氣に流汗を洗ひ、去つて延命山に美人香骨を瘞むるの跡を吊ひ、足指漸く仰ぎて終に武峯の山麓に至る、山勢走る所途突兀、或は蟠根の上を攀ぢ、或は巖隙の間を過ぎ、辛うじて緑樹の蔭に達す、山頂に武峯神社あり、社記に

●笠森寺

いふ日本武尊の東征するや、武峯の頂に登りて夷賊の軍容を見、旗下の鶴林に願指して向ふ處を定めたりと、山は上總にありて鹿野山は次々の高峯、俯して凸凹の丘陵を見るべし、凸凹の處必らずしも小阜にあらず、下つて到れば悉く山嶽、地を抜く數百尺、數百尺のもの即ち遙かに蹊下數千尺の下に盡爾たり、峻秀の氣磅礴として横はる、顧みて長柄山を指點すべし。

●長柄山

は上長柄に在り、寺あり胎藏寺といふ、蓋し源右府の胎藏曼荼羅を寄附したるに依る、寺記を按じて秀胤當山に逃るゝの一節を得、いふ、上總介平秀胤一の宮の大柳にあり、寶治元年七月千葉胤胤兵を起して之を攻む、秀胤戦つて利あらず、走つて此山に隠る、時人之を長柄山殿といふと、胎藏寺は蓋し秀胤の建立する所なり、寺に大木牌あり、住僧茗を養て朝暮之に供す、牌面記していふ「長柄山殿別駕秀胤大居士」、又曰く、胎藏寺殿花溪妙泉大信女」と、これ秀胤夫妻の靈位なり。

袖にそよ涙の雨のぬれしとて

今日笠森を尋ね來にけり。

とは日蓮上人の詠じたるもの、風流韻事あり、僧語譚話の高僧、猶此風流韻事あり、寺の在る所水上村、山を號して大悲山といふ、天台の古刹にして傳教大師の開基する所、懸崖の上本堂あり、南面して建つ、其下は絶嶮百餘尺、崖に上りて下瞰すれば、眼眩めき足戰き、堂と共に千仞の下に墜ちんとす、寺門二あり、一は二天門、一は二王門、安んずる所の靈像皆奇なり、本尊は正觀世音、赭顏滑脱にして禿たる寶頭蓋尊あり、人の撫摩するにによりて耳鼻殆ど滅す、像何の罪障かある、憐れむべし、藥師如來あり、地藏菩薩あり、不動明王に隣りて大黒天あり、寺寶に日蓮所寫の法華經、傳教の錫杖武田兵部の納めたる十六善神の畫幅等あり、猶猿面公權現公の手書ありと。

●橘神社

本納の驛に橘神社あり、縣社にして社殿莊麗、綠樹の

間に建つ、石華表あり、柱に鶴して二宮莊といふ、昔日本武尊の妃橘姫を相模の沖に失ふや、哀悼の情綿々として禁する能はず、其鹿野山の醜虜を平げて此處に振旅するや、妃の遺物を地に埋めて山陵を築き、一橋樹を植へて紀念となす、其樹忽にして長じ、鬱葱として柯枝相擁す、開花の候芬芳四散、蜂蝶來り乘まる。俚傳にいふ、此陵鷹を忌む、鷹を携ふる者の來るあらば、鷹即ち逸し、又捕ふ可らずと、昔時將軍赫々の威を以てしても、猶此村を過ぎれば鷹を措くと、神威漂渺近づく可らず。

鬼涙山

●造海城主

戰雲動きて腥風吹き、兵馬倥傯として、人武あるを知りて文あるを知らず、禮讓地を拂ひ人倫漸く亂る、况んや風流韻事をや、此戰亂の世に當り、安房の俊傑里見義成が若を千歳に流したるの古名跡、城は竹岡村の懸涯にあり、山に據り谷を繞らし、金城鐵壁堅うして攀

づ可らず、城將真里谷丹波守又能く戦ひ、勇武を以て稱せらる、偶々里見義成來り攻む、義成は年少にして濶容玲瓏、馬を陣頭に進めて衆を麾いて之を圍む、烈日爛々此美丈郎を射來りて、白星の宵祭として光輝あり、貫する所の甲は小櫻を黄にかへしたるもの、醜虜にして眼を驚かす、猩耕の馬旆軟風に漂流して、一朶の紅雲飄颻して搖曳するが如し、銀鑿錚々、風車俊秀の紅雲飄颻して揺曳するが如し、城將丹波遙かに之を見、兩軍恍として醉へるが如し、城將丹波遙かに之を見、既に弓に箭を番えんとして之を拵て、歎稱して曰く、嗚呼此美丈郎、實に里見氏の寶珠なり、嘗て流血を黄の間、二人の驍勇漢を提げて、之を水田の裡に投じたる勇武將軍は實に此美少年か、我之を討つに忍びずと、即ち義成を麾きて曰く、聞く卿の才文武に涉り、最も思藻に巧なりと、願はくば鞍馬の上百首の吟詠を得ん、歌成らば丹波城門を開いて降を乞はむと、義成晒つて之を諾して曰く、丹州武を以て文に代んとす、寔に千歳の好風流にして、實に義成の面目なり、願はくは百題を得て百首を獻せむと。干戈相見ゆるの時、兩將陣

頭に立ちて應答す、丹波一題を出すや、義成即ち一首、即吟流る、が如し、終に百首にして了る、丹波驚いて曰く、卿は眞に稀世の將帥なり、我誓つて兵を交へずと、即ち城を出づ、何ぞ其吟懐の優雅なる、時人稱して百首の岡といふ。

●隠れ岩

天險惡にして風雨咆哮する所、奇巖潮を蒙りて白く、海真として地將に覆らんとす、偶々金甲の將軍あり、從士兩三騎、峻嶮萬狀の間を繞つて走る、蓋し敗殘の將なり、追騎數百物色して之を逐ふ、途漸く極まりて海角悉き、走つて海に躍らんとす、忽ち見る岬頭一巨巖あるを、其中方丈許、須らく命を賭して天に委すべしと、即ち匍伏して入る、激浪來り搏つと雖も、洞口狹うして、潮流僅かに膝を没するのみ、追騎到る、隻影を見ず、即ち相顧みて曰く、妖狐我を誑らかして途を誤らしむ、堅子蓋し遠く走らんと、鏝を廻らして走り歸り、將軍即ち免がる、これ源右府の石橋山より遁れて此地に來り、再び搜索の敵騎に追はれしものなり、

時人稱して隠れ岩といひたるもの、即ち明金岬の海角、岬は鋸山の連嶺漸く起伏して起る所、牛臥の岩に跨りて、遙かに浦賀の烟を見る、此邊の地凡て岩、岩は即ち千態萬狀、猿猴の舞ふあり、羅漢の跣座するあり、大鵬の蒼穹より翔り來るあり、龍眼岩獅子岩子安岩、然して隠れ岩最も著はると雖も、隠れ岩は名の如くして、終に形を見るべからず、蓋だし風浪澎湃幾星霜、岩の洞をなせる所を碎さ去りて、終に當年の形を失せしものか。

●大樟樹

蒼々天を蓋ひ、翠々地を包む大樟樹は、環村の田倉に在りて、鹿野山其北に峙つ、老樟の柯枝を圍るに周圍六十尺、昔豊公が戯れに其樹幹を測りしに五丈八尺なりしと、爾來青山黄土となり、歲月流る、が如しと雖も、老樹尙依稀、樹の下に大山祇祠を建つ、堂宇蒼然、古色人を弄ぶ。

●鬼涙山

山は鹿野の分岐、蜿蜒西に走り、起伏する所鬼涙と稱

ず、馳望千里快澗極りなし、いふ、日本武尊の東夷を征し、鹿野の醜虜を殲すや、虜の逃るゝもの走りて此山に隠る、尊遂到りて之を圍ひ、鬼慟哭號泣して助命されん事を乞ふ、故に鬼涙山の名ありと。

●千草濱

秋はいろく波を寄せくる

千草の濱は佐貫川の源流して瀉ぐ所、北宮津の洲に到る、長汀山浦砂白き處、松翠にして蒼苔黄なり、朝暎淡霞を破りて波朱紅、漣漪碎けて珠沫悉く赤し、涼風吹く處雙袂輕く、鬢髮揺いて快いふ可らず。

小糸川

●妙見祠

小糸川の潺々として素絲を洗ふが如き處、突兀たる小峯の孤立するものは人見山、山は川に添ひて青松數十仞、石磴天を仰ぎて二百有餘級、登り悉せば古廟あり、楣間獅子頭山の額を掲ぐ、筆勢奔逸、山の怒るに

似たり、傳へいふ平親王の崇信する所と、堂前に立ちて四方を望めば、明金崎磯根岬富洲の洲南に横はり、西に富岳の雲表に峙つを見る、其下に連嶺あり、牛の眠るに似たるものは雨降山、遙かに水天塲の處に走るものは本牧の岬、相擁し相語りて龍虎の嘯くに似たり、青螺一髮巨人の水に浮ぶが如きは伊豆の半島、近く鹿野山上の人馬歴々として見るべし、山を下りて人見の神社、郷社にして國常立尊を祀る、舊祠にして創立の年代知る可らず。

●石舟

人見の地舊趾多し、其石舟なるものは、一小丘の上に見在り、長丈許にして幅は即ち五尺有許、石は其色赭褐にして稍蒼色あり、苔蝕して石花亂れ接ぐ、舟の在所の土堅き事石の如し、足を擧げて之を蹴れば其音錚々、塚は何人の眠る所なるを知らず、人呼んで内裏塚といふ。

●氷上川繼墓

小糸川の流に沿ひて小村落あり、二間塚といふ、傳

へいふ二間塚の地往古野草茫茫、狐狸出没して行人稀なり、然れども此の地豐沃、耕して以て田圃となすべし、里人某あり、衆を督して之を耕ざる、草萊漸く開けて一丘陵顯はる、丘は渺たる一圓塚、試みに之を穿てば、憂々として鐵頭に當るものあり、怪んで丘を崩せば石棺出づ、其形方にして石面猶缺削の痕を存す、衆之を怪しみ、辛うじて蓋を開けば又棺あり、之を開く三度にして一圓瓮を得、其中に衣冠整然清酒たる一官人あり、面貌生けるが如し、衆驚きて環視すれば、冷風一陣颯爽として吹き來り、骨身粉齏して忽ち消ゆ、即ち棺の石蓋を執つて碑となす、氷上川繼の墓之なりと。川繼は天武帝の皇子鹽燒親王の子、桓武の朝に至り、叛を謀つて順はれ、伊豆に流さると、其碑此處にあり、怪しまざるを得ず。

●阿萬松

昔貞元親王の罪を獲て上總に謫せらるゝや、此地に來り、落葉の生涯を了る、其塚貞元村より西南村に至る路傍に在り、阿萬松は其東南二町許、茅茨拉雜たる小

丘の上に在り、樹幹岐れて二となり、恰かも神龍怪風を吸ふが如し、傳へいふ、親王の寵姫阿萬の墳塚と、阿萬松の名は起れり。相傳ふ、阿萬は此地の美女なり、偶々親王の寵を蒙り、奉侍頗る貞淑、親王流謫の意を慰むる多し。親王の薨するや、哀悼病をなし、爲に身を毀りて死すと、悲しむべし、松頰嶸々、美姬の墓に哭するが如し。

●建曆寺

阿萬の松を距る數町、濱古に眞言の古刹あり、建曆寺といふ、寺に貞元親王の木主を存したりしが、祝融氏の怖む所となりて、一朝灰燼に歸す、寺寶の二十五假面頗る珍奇、いふ、貞元親王の靈を鎮むるが爲に、特に刻みて之を冠り、緩舞したるものと、刀痕古雅珍とすべし。

鹿野山

●神野寺

木更津より五里有餘にして鹿野の靈峰の道を横たへて

時つを見る、高さ千五百尺、神秀の氣磅礴して、老杉千古の苔を蒙りて、幽々たる所、靈鷲あり、翼丈餘、一大輪形を描き、悠々として天に舞ふ、或は疑ふ羽客の逍遙するに非ずやと、堂廣さ十間四面、客殿廻廊四方に度りて莊重いふ可らず、本尊は軍荼利明王、藥師如來、共に聖德太子の刻む所、見真大師垂錫の靈地たり。

寺號は古へ鹿野山琳聖院神應寺と號せしが、元保元年、鑿阿闍梨の時に至りて、即ち鹿野山怨怒院神野寺と改むと、石燈石佛悉く古色の蒼然たらざるはなし、境内に大杉明神祠十二社堂飯綱權現祠あり、護摩堂阿彌陀堂經堂六角堂鐘樓辨天堂あり、皆宏壯、鐘樓の梵唄、強力の者怒つて打てば、其音轟々、上總近海の魚悉く逃ぐと。

鹿野山一覽記あり、之を閱するに靈山の事悉く明瞭、記にいふ、鹿野山神野寺は推古天皇の御宇聖德太子の開基草創し玉ふ靈場なり其往來を問へば國の府中より三四里

して谷に響き山に應ふ其谷流れて四十八の瀧壺となり、神定が瀧大瀧は魔所にして人倫の及ぶ事難く大半嶮岨にして足立たず御手洗の上は御夢想の目洗水あり、清涼として溢れ流る本堂より東北の隅に高門あり、これ本院神野寺なり家康公自ら筆を下して本山境内一里四方の地餘草牛村の郷の朱印を玉はる庭前には海内無雙の糸櫻あり、折らば折れ花に免しの盗人は、と其下に禁制の高札を建つ春は櫻花に座し夏は風香ばしく風狂の遊人多し門を出でて右に權現公の御札寫しの間の牆を繞らす、圓山の衆徒軒を並べ十院各門を列ね門前の民家は百餘軒西は箕輪町東は阿伽井町東嶺に秀で、日本武尊の鎮座あり、人皇十二代景行天皇の御宇關東に夷御をなして羅刹鬼王の如く王命を奉せず尊征伐の勅を蒙り關東に發向し玉へば夷の王阿久留といふ者數多の鬼類を集

も高く菩薩鹿王の化跡を示し玉ふ鹿苑場なり先づ二王門に登り面を仰ぎ望み見れば額には智積僧正泊如の筆蹟阿吽の仁王は跋扈憤怒の威を現じ古き佛作と言ひ傳ふ本堂は南に向ひて十間四面の伽藍高さ九丈六尺本尊は藥師如來軍荼利夜叉明王の兩尊御丈一丈二尺にして上宮太子の御彫刻なり、會て親鸞上人は常陸稻田の里より參詣し玉ひ手づから名殘の御姿を止め教行信證の成就を祈り玉ひ源頼朝公は御佩刀を獻じて勝利の鋒先を祈り不日にして千葉北條の味方を得給ふ誠に南方軍荼利夜叉の道場なり、兩脇には不動毘舍門日光月光十二神後堂には太子十六歳の御姿禮堂の雲龍は狩野房信二間には天人羅綾の粧ひ幾多の繪馬あり阿久留王對治の圖は狩野章信富士の狩場は狩野の右京詩歌連仲の類數ふ可らず、本堂の西の方御供の井には注連繩の音高く不淨を拂ひ瀧不動と石碑の句も指さされて坂を下れば良辨僧都御作の不動御手洗の瀧は清泉玉を吐き池水滔々と

め駿州に出迎ひ争ひ戦ふに鬼類敗北して遂に退いて當山の北嶺に隠れ住む是に於て尊養雲の劍を揮つて攻め上り終に阿久留王を殺し玉ふに鮮血草に染みて流是が爲に赤し其地を呼んで血草川と唱ふ群屬首を刎ねらるゝに及び泣き泣しひ鬼涙の原の名あり故に太子此山を草創し玉ふ時永く尊を崇め奉りて白鳥明神と號す千尺の石壇を下れば昔時天人來降して妓樂梵唄の聲山を動かす計りなりし天樂闕あり峻嶺高々ととして風際の底も足下に踏み四方の山々も鼻端に泛ぶ首を回らせば房州一國は杖の前に指さすべし、往昔仁明天皇の御宇慈覺大師圓仁が瑜伽の靈地を示し玉ふに、

- 八尾 八作 八峯 八塚 三十二尊
- 鬼畜人天 廬舍那道場
- 諸人の罪消え行くぞ神の野は
- 四畝四菩薩五崎五如來
- と尊い哉智識の金言八尾は
- 嶽の尾 不動尾 春日尾 地藏尾

釜の尾 雷松尾 (不明) (不明)
 作といへるは
 一作 二作 三作
 七郎谷作 窪見作 大蛇作 菊作
 八塚を廻れば
 阿久留王塚 不動塚 狐塚 行人塚
 二塚 火定塚 入定塚 (不明)
 四畝五崎は地名を尋ね慈眼庵に杖を休め塔の松鳥帽
 子山塔の背より仁王澤に下り飯鉢食組釜尾馬の背は
 澤を限りに流れ高鳥の峰は田倉の軒に積き七郎谷太
 郎ケ谷は天神影向の古跡谷を越へ峰に登れば小丸塚
 の半腹に金剛石あり不盡不境にして賊に竇相智を拜
 する心地す草ケ作の細道を茅林に登り西海庵に汗を
 拭ひて鳥居崎に息ふ云々
 と、以て山の勝を窺ふべし。

●鳥居崎

本堂より上町を徑て十四五町鳥居崎の勝地に達す、崎
 は懸崖の上に臨みて懸り、坦々として三四反の平地な

り、節を擧げて指さす所、周准天羽の郡は遠く南西の
 外海より彎曲し、延いて利志ヶ浦邊に衛の歩を懸かし、
 千種海黒戸の浦に苦屋の烟の霞罩めて、船橋の遠く
 添に漣の銀を漂はし、行徳の海より浙江の湖となる、
 雲煙縹渺たる所、品川の沖に白帆走り、神奈川の人江
 に船浮ぶ、六浦金澤の水波渺茫の間に横はる、伏
 虎の羅漢の怒りて搏つが如きは箱根雨降、略駝の惰眠
 未だ覺めざるが如きは阿布利大島、馳望實に千里、關
 東の平野一目の間に睥睨する、寺記に所謂、三千世界
 を眼前に悉し、十二因縁の内に究むるが如しといへる
 どころ、これ鳥居崎の風光なり、外人多く來り遊び、
 幽衿を洗ふて山水の美に耽るもの、毎歲數百人の上に
 出づ。

●九十九谷

名工左甚五郎の建てたる表門の下に出で、所謂下町
 なるものに至れば、數町にして鹿野公園あり、園は綠
 樹亭亭、清淨の域にして涼氣肌に透る、園は即ち九十
 九谷の奇を見る所、大小の丘陵蒼翠滴らんとして起伏

し、或は躍り或は走り、戯れて相搏つが如きもの、俯
 して一々指點すべし、九十九谷の在る所は即ち九十九
 山、峻巖天に懸れば白雲來り迎ふ、山の奇谷の奇は、
 相待つて即ち九十九勝となる、山勢漸く走りて漸く低
 く、終に雲煙の裡に没すを見る。

●白鳥神社

在昔鹿野山に鬼あり、阿久留王と稱す、容貌醜怪、
 力衆に超ゆ、牛を搏て殺し、熟せずして之を喰ふ、婦
 女を掠め、飽けば即ち殘虐を恣にする、兇暴到らざる
 なし、四邊の土民皆離散し、田圃爲に耕さず、事京に
 聞ゆ、帝即ち日本武尊をして之を討たしむ、尊命を帶
 びて至り、險阻を侵して之を攻む、醜虜忽ち萎靡し、
 阿久留終に首を授け、惡鬼即ち夷らぐと、白鳥神社は
 尊の靈を祀る所、鹿野公園の山頂に在り、神靈縹渺山
 の鎮護をなすに似たり。

木更津

●木更津神社

靈岸島より海に航して東京灣の煙波を横ぎり、涼風輕
 快にして健袂に充つれば、凡に依りて身の華背に至る
 を覺えず、喧聒の聲に夢を破れば、翠雲凝りて左右の
 翼を張れるが如きの青樹、國道を壓して海に入らんと
 し、般賑なる市街の櫛比して我を迎ふるが如きはこれ
 木更津の町なり。陸よりすれば本所より總武の鐵車に
 搭じ、千葉より右折して房總の鐵軌を走り、一の宮よ
 り下りて更に腕車を驅らざる可らず、或は千葉の寒川
 より一葦舟を縦ちて行くものあり、海平らかにして水
 波揚らず、好箇の遊覽に適せりと雖も、船に天蓋なき
 を以て、三伏の候には殆ど燒殺されんとす。
 木更津は古へ君不去といふ、里人誇りて曰く、此地は
 日本武尊の東征の時、海若の怒りに觸れて、船殆ど覆
 へらむとす、貞烈なる淑妃、橋姫進んで尊に謂つて曰
 く、舟子傳へていふ、海神崇りをなす、人を以て祀ら
 ば即ち驗ありと、妾乞ふ之に當らむと、言未だ了らず
 身を躍らして怒濤の内に入る、尊哀悼禁する能はず、
 此海濱に上陸して、空しく縹渺たる海上を望み、低徊

して去る能はざりしもの十數日、故に君不去といふ。町の大宇吾妻に吾妻神社あり、これ橋姫を祀る所、いふ、此地は媛の死屍の漂着したる所と、吾妻の森あり、老樹社を繞りて蒼鬱、相擁して神靈を護るに似たり。

●飽富神社

木更津を辭して進む事二里餘、根形村に飽富の神社あり、曾て朱雀天皇の勅願あらせられたる靈場なり。祭神は神八井耳命にして、亦倉稻魂命を配祀す、地は小丘の上に位して、檜杉の老樹蒼苔已に黒し、鬱葱として天と列なる、境内は眺望豊富にして、遊人の節を枉ぐるによろし。

就いて社記を問へば、宮司誇りいふ、天慶の亂將門の暴威を揮ふや、天皇深く之を憂ひ、勅使を下して當社に佩劔を納れ以て、朝敵鎮撫の勅願を込めさせられたりと、其靈劔今尙存し、長く社寶となる。

●鏡ヶ峰

望陀八景の一、鏡ヶ峰の名月なるものは即ち此地なり、

飽富の社を距る町許、削成せるが如き丘陵あり、羊腸たる阪路の螺の如きものを傳ひ行けば即ち絶頂を究む、月明の夜登臨して臨めば、水田渺茫として脚下に連なり、古鏡の赫灼として磨けるが如きものあり、ふて人を迎ふもの、これ田毎の月の泛びなるべし、木更津附近の一名勝。

●白山神社

小堰村の白山神社なるものは、帝大友及妃菊理比賣命の靈を祀る處と。

故老語りていふ、帝大友の亂に逢て逃るゝや、近江の山前に薨したりと稱し、密かに海に航して上總に來り、遣水山に據きて之に據る、兵氣大に振ふ、偶々山野邊の中納言任に征東將軍に拜し、兵を率ゐて來り攻む、大友之と戦ふて利あらず、終に御腹川の畔に於て、妃菊理媛を刺し、次いで勿ねて死す、征東の使即ち尊骸を此地に葬り、更に一祠を建て、尊容匿せずして生けるが如き首級を水桶の中に盛りたるものを社殿に安置し、白山大權現と崇む、爾來桑田幾度變じて、星霜過

ぐる事早く、明治の初年に及び、官命じて其祠を開かしめしに、其内果して古桶あり、朽腐して僅かに形を存するのみ、徐ろに之を開けば、其内空虚又一物を止めざりと、古老のいふ所怪しむべしと雖も、大友の近江に薨せりといふも、今俄かに信す可からざるが如し、此邊大友の舊跡多きを以て見れば、或は信とすべきもの無きにあらざらんや、史家の來りて討索すべきの靈地たり。

●十二所神社

社も又大友皇子の古跡、古老の白山神社を語る所、稍異なれりと雖も、其大友を説くに至りては同一轍なり。いふ、京軍の勝に乘りて皇子の遺水城を攻むるや、敗殘の兵既に潰えて又起つ可からず、大友其再び回天の謀を企つる能はざるを知るや、城中の宮妃婢妾を出して富岡の地に置きて曰く、我軍の命運旦夕に迫り、營は朝露の如し、其亡ぶるや是命なり、戦の罪となす可らず、然れども楚歌四面に聞えて、再舉元より望む可らず、城陷るあらば即ち火を縱つて自殺せむ、卿等

火の揚るを望まば、即ち速やかに計をなせと、言々悉く血、句々皆涙、泣いて告別の辭をなして去る。宮嬪等十二人、交互高きに倚りて鶴首し、遙かに城中の容を覗み、吶喊の聲耳を聳し、叱叱の響魂を破る、今や遺水城邊戦正に酣なり、宮妃等戦々競々、偏に煤烟の揚るなきを望むに、志事に違ひて、忽ち黒烟の旋渦して天に冲するあり、是に至りて百事休す、即ち相抱きて慟哭し、及に貫ぬかれて死す、十二宮嬪の絶魂去つて又歸らず、搖迷して遺水城邊に迷ふと、其嘶の何ぞ悲惨にして壯烈なるや。

●久留里

●市塲

町は久留里に連りて小堰川の流に瀝み、驛は菘附たりと雖も般賑、久留里の餘光を受けて商賈頻りに潤ふを見る、町に包有する村落十四、吉野村最も大なり。市場より流れに沿ひて久留里に至れば、黒田氏の古城趾あり、今廢趾に屬して落窶の景轉た人を泣かしむる

と雖も、古へは一度望龍の名城と呼ばれ、千古不落を唄はれたるもの、曾て松平出羽守の之に據り、後土屋氏となり、世襲して居る處ありしが、更に酒井氏に屬し、又黒田氏の有に歸し今日に到ると。

久留里神社

社は町の浦山に在りて、千葉の千葉神社と同じく、天御中主命を祀る、傳へいふ、此社古へは佛に屬して、細田山と號し、妙見寺の管する所たりしが、新令一度出づるや神佛相交はる可らず、爲に分離して久留里神社と稱す。

社記の靈他したるものを緋けば、天慶の亂に平將門の六所妙見の一を安置し、以て武運の旺盛を祈りし處と、神非禮を受けず、何を効驗あらんや。

龜山神社

龜山村の瀧原に古祠あり、龜山神社といふ、社を繞りて小堰川の急瀬旋渦して流れ、途究つて懸崖より墜ち、忽ち一大銀河の漲りて天より墜つるを見る、これ所謂不動の瀧なるもの。

但人謂ふ、古へ瀧壺の邊赫灼として光明あり、岩罅の間より迸り、烟々人を射る、其處孰んぞ靈なくして可ならんや、野老相顧みて逡巡し、一人豪膽を以て誇るものを煽動して行かしむ、壯漢躊躇進み能はず、衆の擲擲に會ふて醉するも快ならず、即ち揮つて岩を擲ち光明の處に到りて不動尊を獲と、社の祭神は日本武尊。

藏福寺

龜山神社に詣りて河原より山に登るに、足跡漸く仰ぎて半里程、登り悉して左折すれば、南に一帶の古松森森として蒼翠を揮ふあり、これ即ち觀音山、觀世音の古祠あり、祠前に賽して右折し、更に十數町を行きて、突兀たる山隈に奇巖怪石の嶙然として峙つあり、岩の怒りて天に躍るが如き上に佛堂を建つ、即ち草河原富士山藏福寺なるもの、岩は一指を以て押すも猶介れんとするかと危ふましむ、名工刻む所の羅漢像は、山の陰岩の鼻、到る處に悄然として立ち、老僧の時に華を捧ぐるの外、又人の來り詣するなし、此仙窟として空

しく草薺の程に委せしむ。

姉ヶ崎

姉ヶ崎神社

市原郡の海濱長短亭をなして走る所、姉ヶ崎の都邑あり、驛の東明神岡に姉ヶ崎神社を鎮む、社の祭神は級長戸邊命にして、日本武尊の勸請せしもの、今天兒屋根命及び日本武尊を合祀す。

社は驛の東端より數百級の石磴を登りて、屹然たる丘陵の上に建つ、殿宇莊麗、老杉之を繞りて瀟々天を指し、賽者をして徐ろに神靈の縹緲たるを覺えしむ、境内に女夫杉あり、又縁結の杉あり、村娘楊枝を捧げて之を祈る、默詣數刻、容易く去る能はざるが如し、祈る處の事果して何事ぞ。

山の在る處群丘の起伏するものを貫いて時ち、眼を縦てば銀波渺々袖浦の欹帆を望む、筑波の嶺は右に老杉の梢を靡し、富士の靈峯は左に社頂を掠めて立つ、西に富士ヶ嶺北には筑波の言又是にも用ふべし。

椎津城址

姉ヶ崎の南、一小流の喧嘩して流るゝものを隔て眞里谷信政の古城址あり、椎津城といふ、信政は天文中里見氏の爲に亡ぼされたるもの、今廢址の悄然として當年の事を悲しむあり。

八幡

飯香岡八幡

八幡の驛は上總の都邑にして最も本縣廳所在地に近きもの、千葉を距る僅に二里有餘なり、寒川濱野の磯を過ぎて直ちに達す。

八幡社は驛の飯香岡に在り、譽田別尊、息長足姬命、王依比賣命の三座を祀る、傳へいふ天武天皇の白鳳四年、藤原季滿の救を奉じて勸請せしものと、攝社五末社二十九、皆銅板を以て屋を社傍に葺く、大銀杏樹の樹幹數乳を垂るゝ者あり、いふ當年勅使季滿の自ら裁へしものと。君が爲今日植へ添へし銀杏木に

幾世経るとも神宿るらん
とは季満の期したる所、此木幾百星霜を經るも秦々として枯稿する事なく、寔に神靈の來り宿るかと思はれぬ。

●音信山

郡の高瀬村より崎嶇たる山路を傳ひ、眞里谷に至らんとするの途に音信山あり、山甚だ深からずと雖も、山勢最も奇に、綠樹鬱鬱谷を封じて、其下玲瓏たる清泉の銀を布くが如きあり、歌に詩に幾多韻士の吟咏に入りたるの所なり、即ち音信山の時鳥とはこれ、初夏新緑の梢を掠めて悲聲數過、亂れて四方に鳴き、轉た行程の客をして銷魂せしむるもの。

大多喜

●根小屋城址

夷隅川の急湍旋渦して去る所大多喜の町あり、町は夷隅郡の都邑、繁榮勝浦と相拮抗す、川の西に廢墟の跡あり、これ安房の驍將正木大膳の據りて以て武を遠近

に揮ひたる所、稱して根小屋の城といふ、天正の末年本多忠勝徳川氏の命を以て之に居り、更に阿部氏となり稻垣氏となり、終に大河内氏に移りて廢せらる、地は當年の俊傑が相したる所、天險によりて城廓を廻らし、深深山を擁して飛禽走獸も猶近づく可らず、内に巨井あり、水濘々として湧き大旱と雖も涸るゝ事なし、これ正木氏が軍用水となしたるもの、水色今猶依稀たり。

●圓照寺

寺は町の圓照寺谷にあり、臨濟の古刹にして開山は日光禪師、曾て源右府の創むる所と、寺に正木大膳の薙刀を藏す。寺僧縁起を説いていふ、大膳は里見氏の家宰、資性勇猛當る可らず、又籌略あり、深く里見氏の爲に謀りたるもの、反つて豎子輩の陥るゝ所となり、叛を以て誣するを覗ふて之を殺すと、後里見義頼の子彌九郎、其勇猛を慕ひて自ら正木大膳と稱し、其土岐氏と眞木城

に戦ふや、薙刀を揮つて敵中に躍る、鎧袖觸るゝ處敵人皆殞れ、終に土岐氏を敗ると、薙刀は當年彌九郎が遺愛のもの、古色蒼然として掬すべし。

●湯倉鑛泉

湯倉河邊の青嶂相削成して、翠滴滴たんとするが如き所、忽ち一大白屏の山を繞りて列なるを見る、これ湯倉の白厓なるもの、斷崖數十尺悉く白堊の如し其下は即ち鑛泉の沸々として湧く所、浴舎あり、湯倉川の急瀬に流むで立つ、水清冽にして石現はれ、俯して銀鱗の嬉遊するを見る、衣を塞げ石を度り、手を延して捕捉すべし、一拙なるものと雖も、十中二三を得、これ湯倉山の清興。

●浮石

浮石は總野村の佐野に在りて三條の飛泉の奔騰して墜下するの下に在り、浮石の形奇ならざる所即ち奇なり、石は其數僅かに四、磐流の上に泛び、水を抽く僅かに

常陸

水戸

●第一公園

日本鐵道の磐城線に搭じて水戸に至る、水府は古へ徳川氏の城を構へ、御三家の威全國に震ひたるの地、北は那珂川を控へ、南に千波の沼を瀆み、城山市の中央に發えて、其西を上市とし、東を下市とす、陸前濱街道第一の大都會なり。名所舊蹟頗る多し。

第一公園は舊樂園の在りし所、即ち水府上市の西南二十五町常盤村の神崎に在り、天保の末年、烈公齊昭の設計に成る、樓臺を建て園圃を設け、欄に凭りて直ちに千波の碧波を臨むべし、山靜かに水清く、風光の明

媚なる、遊覧の客をして歸るを忘れしむ。園は稱して借樂園と云ひ、亭を好文と名く、樓は即ち樂壽臺、誠上好箇の名稱たり、園内古梅數千百株を植ゆ、氷肌玉骨に香薫して、徐ろに行路の人に戯る。園に對して櫻山あり、梅花梢を辭し、老鷗即ち櫻雲深き所に移る、又一仙境、山の背に縁岡あり、昔義公光圀の高枕亭を設けて、世俗の外に嘯きたるの跡。

●第二公園

第二公園は即ち弘道館の在りし所、三の丸の舊城趾を垣らげて造る、門を入りて正面に弘道館の講堂あり、今幼稚園の遊戯場となる。園の中央に弘道館の碑あり、碑は寒水石にして高さ七尺三寸幅六尺、碑面隸字の彫刻あり、縷々數百言、烈公齊昭の書する所と、孔子廟あり、廟の邊梅樹幾百株、臥龍の態搏虎の姿偃蹇して芳を恣まにす、正門あり、戟門あり、戟門は壯麗にして大成殿に摸すと、中に孔子の木主を安んじ、烈公自ら孔子神位の四字を書す、倭に水戸市中の名勝となすに足る。

●水戸舊城

水府城の趾は上市と下市とを左右の翼として屹然市の中央に聳ゆ、本丸の東に在る城趾を二の丸といひ、地稍前者より低く、本丸より俯して二の丸の屋を超え、遠く市街を望む、地勢更に下りて東に一門あり、淨光寺廓とは是なり、之を佐竹氏に在城の正門となす、本丸の西に西丸あり、西丸の西に更に一廓を起すものは、舊藩主が居館の地、一に天守閣と稱す、其馬場城の名あるものは、往古馬場二郎資幹の據りたるを以てなり、資幹九世の裔滿幹の時に至り、江戸通房襲ふて之を奪ひ、累世之に居る、八世の孫重通の時、佐竹義宣と戦つて破れ、城終に奪はる、後武田信吉の封せらるゝや、嗣なくして國除され、徳川頼宣之に代りしが、慶長十四年水戸公始めて此地に封せられ、爾來御三家の威名赫々として天に冲し、名主光圀齊昭の名主あり、名臣には藤田東湖の輩あり、皆大義名分を説く、水府の名は實に尊王の異名となり、天下の耳目を時つる所となる、城は明治二年祝融の災に罹り、今は僅かに樓臺の

舊觀を止むるのみと雖も、殘臺廢墟尙當年の餘光を示すが如し。

●常磐神社

借樂園の東隅を割いて設くるもの、水府の名主義公烈公の靈を祀る、今別格官幣社たり、水府の士女、故公の偉勳を想ふて、來り詣する者踵を絶たず、社段宏壯丹聖粉壁の壯麗なしと雖も、清澗にして神靈を綴んずべし、神樂殿あり、其中烈公造る所の陣太鼓を藏ひ、鼓は徑四尺五寸胴の周圍一丈五尺五寸、長さ殆ど六尺二寸、稀有の珍品にして、烈公自筆の鼓銘を刻す、堂の左側に巨砲あり、また烈公の録る所と。社の左傍に鎮靈社なるものあり、維新の國難に殉したる忠義の魂を慰す。

●藤田東湖の墓

三度決死而不死 二十五回渡刀水
七乞間地不得間 三十九年七處徒
と滿腔の意氣火の如きものを吹いて、赤誠凛冽鬼神をも泣かしむべし俊傑藤田東湖の永へに眠る所は、上市

の共同墓地に在り、碑面題して表誠の碑と、これ烈公齊昭の筆を揮ふ所、名公と名臣と相托して尊王の義を尙へんとして、不幸意の如くならず、天も又此英物を容れずして、安政の二年江戸の地大に震ふや、東湖江戸の藩邸に在り、其母を助けんとして、誤つて柱梁に打たれて死す、公深く之を惜み、命じて郷里に葬らしむと、即ち此地なり。

●晒井

共同墓地は水府人士の奥城なり、市の馬喰街を過ぎ、辻曲して行く事數十武にして墓地の門に達す、之を入れば巨碑古碕累々として列なる、表誠碑は墓地の北端に在り、碑の傍に東湖の父幽谷先生並に其配丹氏の墓を建つ、老松翠檜奥城を繞りて天を衝く、尙東湖先生生前の意氣厲發するものに似たり。

と衣笠内大臣の歌を刻す、池は萬葉集の
三粟乃中瀬向有曝井之不絶將通彼所爾妻毛我
とある所、

千波

●千波沼

水府城の翠巒を擁して千波沼の古鏡を磨ぐが如きもの
あり、西は上市の南に迫り、東は下市の脊を襲ふ、東
西三十五町五十間、南北六町、周回一里二十六町、沼
の溢れて下流に注ぐ所珠見崎といふ、龍神社あり、其
邊一小橋梁を架す、名けて銷魂橋といふ、沼は分れて
三方に走り、上下市の間を聯ぬる堤塙を柳堤と稱し、
古へ支那の西湖より一株の柳を採り來りて植えたるも
のと、沼に七崎の景あり。

妙法崎 駒入崎 庵崎 藤ヶ崎

梅戸崎 筑能崎 柳ヶ崎

と、此池は帝室の御獵場たるを以て、水上鴻雁多し、
嬉遊して人を恐れず、空しく好銃の客をして切齒せし

ひ、湖岸に入景あり。

七面山秋月 梅戸夕照 柳堤夜雨

詩田落雁 神崎寺晚鐘 下谷歸帆

藤柄晴嵐 綠岡暮雪

と、義公源光因の撰びしもの、

湖東に磯濱の青松の一葉翠雲を凝すあり、其間は即ち
水田渺茫、空高くして秋肥ゆるの時、黄金の波濤聲
として、其間牧牛の悠遊して眠るものは、宛然一小島
の颯爽として襲ひ來るに従ひ、覆へつて湖面に墜つ、
墜つれば即ち山上に船を行るべし、木によつて魚を求
むる豈難しとせんや。

朝霞暮煙風雨疊晴、四季に景を變じ、四時に態を改り、
一景去れば一景來り、常住の人をして、猶千波湖畔の
景を悉す能はざらしむ。

●大洗海水浴

水府より舟を僦ひて那珂川を下り、那珂の港の對岸視
町より、行く事二十餘町にして大洗の濱に到る、激波

體結、澎湃して岸を打つ、岸は即ち龍嘯虎吼の奇巖、
相怒り相搏ちて海角を捧ぐ、海角は頂上に龍鬚此將の
長へに海風を吹くあり、海水浴場あり、魚來庵とい
ひ金波樓といふ、欄に依りて汪洋の波間を望めば、茫
渺たる蒼海原、漫々として水天に連なり、水色常に變
轉して窮まるなく、怒浪欲崩都門紅塵の眼を驚かしむ。

●子日の原

萬代を君に契りて今日迄は

子の日の松にひかれ來にけり。
と、烈公齊昭卿の詠じたる子の日の原は、大洗の海角
の海に至る所、海水浴場の後山に在り、山上磯前神社を
建つ、國幣中社にして大己貴命、少彥名命を合祀す、
石段危級海を壓して立ち、魚來庵の邊より上るべし、
磴を登り悉せば即ち本社、瑞垣長へに苦蒸して神威
崇高、社の後は子の日の矮松白砂を穿ちて叢生し、翠
滴殞る處松齋を生ず、焼いて味ふに香氣滿腹、恍とし
て酔へるを覺ゆ。

●浴 德 泉

下市の吉田の森より西を指す八町許、綠岡村の笠原山
に水神の祠あり、龍前風露繁き所、清泉湧々として
湧く、寛文中引いて以て水戸の飲料水となしたるも
の、徳川齊修之を浴徳泉と名づく、蓋し靈水の恩を忘
れざらんが爲なり。

●盛長者の宅趾

水戸伯樂坊の北半里程に長者山の岡阜蜿蜒して横はる
あり、東北は那珂川の碧流に瀦みて、廢墟今尙存す、傳
へいふ八幡公の奥羽を征するや、途此を過ぎりて長者
の家に宿す、長者は常陸の土豪、門葉素々、金穀充實
す、其一度異圖を挾むあらば、東國の士民風を望む
で争ひ附かんとす、然して長者の眉宇に霸氣あり、必
らず後年朝家の累をなすを察し、奥羽の亂平ぐの後、
八幡公之を攻めて亡げすと、但傳最も疑ふべし。

●重 盛 墓

水戸市を距る西北二里有餘、小松村上入野の丘陵に在
り、傳へいふ平貞能の重盛の遺骨を奉じ來りて瘞めた
る所と、其信なるや否やを知らず。

那珂

●湊町

那珂は南に那珂河の流れを繞らして、東茨城に連なる、郡小にして名跡奇勝の尋ねべきもの小なし、湊町は郡中第一の繁華場裡

湊江に旅寝の床は波もまた

枕の上によするごとく

と、内藤義泰の詠したる處、枕頭流水の潺々たるを聞くは、即ち那珂川の流、征人の婦は爲に腸を断ち、逍遙の客は爲に幽襟を洗ふ、水聲は千古變轉する事なくして、之を聴く人の千状萬態なるも奇といふべし。

●御殿山

東に海洋の銀波を受けて、湊の坊舎樓の如く走ると西は即ち翠樹重々、相累りて群青の如し、南は那珂川の碧潭を隔て、磯濱の蟹村を指すべし、筑波の靈峯は夕陽を懷に抱きて、翠峯緋紅の錯雜せるもの、宛がら丹青の圖を展べたらんが如し、これ即ち湊町御殿

山の景、山は明媚なる風光を弄びて、頂上に蒼蒼閣を立つ、これ烈公齊昭の營みしもの、御殿山の俗稱は蓋し閣によりて起れりといふべし、今は閣已に無しと雖も、其舊趾に立ちて東海の景を専らにすべし。

●觀濤所

湊町の南一里、平磯の高原にして、脚下に怒浪緩湖の澎湃たるを見る、礁は浪を蒙りて雪の如く、雪の團々として飛ぶは、白鷗の浪に戯れて翔るなり、漁舟頻りに隠見して、夜は沖を遙かに漁火の明滅する所、山上一基の碑を建て、觀濤所と、いふ蓋し源烈公の命したるものなり。

●勝倉鑛泉

那珂川の北岸に沿ふて勝倉の鑛泉あり、泉質硫黄の氣あり、浴場一兩舎、以て客の浴するものをまつ。

●三國瀧

開説 飛過不歸去 瀉出蜀魂千歲情
奔泉 飛過不歸去 瀉出蜀魂千歲情
とは、黃門光國卿の詠したるもの、瀧は上國井の瀧上

に在り、飛泉甚だ壯大ならずと雖も、地頗る幽邃、風景清洒にして俗塵を洗ふべし。

●眞崎浦

浦といふは即ち沼、村松村の西に横はりて又村松沼といふ、沼小と雖も周回一里餘に及んとす、淋しきはいと、眞崎の海の波かへる昔のあとの哀れさ。と、宗祇法師の笥を駐めたるの古跡なり。

太田

●太田城趾

太田は久慈郡の郡邑、般賑にして富賈軒を接す、町の一方に一帶の小丘陵あり、これ古へ阪上將軍の城を築きたる所、古へは規模頗る偉大にして今の太田町の如きは、殆ど其廓内に圍まれたりと、後藤原氏通延再び之を修して以て居る、次いで佐竹氏松平氏を経て、水戸の傅相中山信敏此に封されしが、享和年間松岡城に移さるゝに及びて、太田は終に廢墟となると、城趾に

して此の如く古きものは稀なり。

●殉難碑

町の養福寺に一基の石碑あり、高さ六尺幅三尺、石古しとせざれど、其邊自ら秀靈の氣あり、これ奥戸藩主松平氏及其郎從等の爲に建てたるもの。松平氏名は頼徳、元治元年水府の變に際し、堅く正義を執りて屈せず、終に奸黨の爲に誤られたる者なり。

●西山

太田の市坊を過ぎて西の方十町許、泉田村に西山館あり、これ西山隠士光國卿の世事を抛ちて隱栖したるの地なり。元祿の初年、義公政を世子に譲り、自ら隱栖の地を索めんと欲して此邊に遊ぶ、偶々山勢の崎嶇として、風色の幽邃なる所を見、顧みて俚人に問へば即ち西山と、公大に喜び、此地果して凡骨をして仙化せしむるのどころ、館して以て俗腸を洗ふべしと、翌元祿四年徙りて之に居る、公薨するの後僧をして之を守らしめしが、火を失して仙境悉く烏有に歸す今の館は後年舊

形を摸して作りしものと云ふ。

●桃 源 橋

太田より西山へ行くの途、源氏川の潺湲たる急瀬の上
に懸る、これ西山公の架せられたるもの、路傍の小嶋
に桃を植ゆ、陽春三月花開いて妍を争ひ麗を競ふ、眞
に桃源の名空しからず、王母の美容香として見る可ら
ざるも、西山碑の蒼然として人を迎ふるあり。

●四 度 瀧

山を月折といひ、瀧を四度といふ、郡の袋田村に在り
て、飛瀧直下四百尺、秋風山を染めて滿目凡て紅な
る處、一聯の銀鏡碎けて飛雪を飛ばし、其幅殆ど二
百四十尺、鞆鞆として山壑を碎いて墜つ、雄壯にして
壯麗千古の偉觀なり。
登山の半腹瀧に沿ふて不動堂あり、像は運慶の刻む處
と名刀靈あり、怒つて瀧を搏たんとするが如し。
瀧の上流に又瀧あり、小生瀧の生瀧の瀧、高さ七丈幅
之に均し、壯觀にあらざるなしと雖も、四度の偶にあ
らず。

筑 波

●筑 波 山

峻秀千古の靈山にして扶桑東方の精華を鍾ひるもの、
富嶽の靈峯と其崇高を争ふ、古へ天照皇太神の天下り
て此山に登らせらるゝや、筑を彈じて水波の曲を奏し
玉ふに、妙音宛轉として眞に神仙の樂なり、心なき鹿
島灘の潮流も、爲に去るを惜しみて逆流し、波濤琴々
終に山麓に達す、故に筑波の名ありと、山は海面を抜
いて峙つもの實に三千百八十尺、
雪は申さず先づ紫の筑波山
と雪翁の詠じたる一の華表の邊を過ぎ、筑波の市街を
見て漸く上れば、中禪寺あり、知足院といふ、大御堂
の宏壯三層塔の綺麗、求聞持堂の峻巖なるものを拜し
て進む、女體山に登るには大御堂よりすべく、男體山
に攀づるには三層塔より迎るべし。
客の多く筑波に登る者、先づ大御堂より東山町の華表
の下を過ぎ、紆曲して女體山に登る、女體山よりは巖

礫の犬牙錯雜せる間、鐵鎖の垂下せるものに絶りて、
辛うじて御幸ヶ原に至る、其間凡て青峭翠壁、冷氣颯
爽として人をして膚に粟せしむ。御幸原は陰陽兩山の
間に應せらるゝもの、仰いで靈峯の相擁するが如きを
見る、御幸が原より西の方男體山に昇れば、山嶺に伊弉
諾命の靈祠あり、伊弉册命を祀れるは女體山、共に延
喜式内の古社にして神前に賽するもの、秀靈の氣の磅
礴たるを覺え、醉客も爲に襟を正す、山に名勝多し。

●御 幸 原

は實に山間の勝區、陰陽の兩峯相迫りて、原は漸く其
間に應せられんとす、目の行く處悉く奇態怪狀、蒼翠
相擁ちて壯大いふ可らず、茶亭五あり、曰く依雲、曰く
向月、曰く放眼、曰く迎客、曰く遊仙と、何人の命じ
けん、其名頗る雅なり、

●連 歌 岳

陽山の南に屹然として聳ゆる山中の山、名けて連歌の
嶽と、相傳ふ、日本武尊の東夷を征するや、歸途甲斐
の酒折を過ぎ筑波の嶺の遙かに雲表に聳ゆるを願み

て。
珥比麼利菟玖波塙須擬氏異玖用加禰菟流
と、以て侍臣に示す、左右次する能はず、偶々東道の
一老翁進んで曰く。
加俄奈倍兵用珥波虛能比珥波苦塙加塙
と、即ち山を名けて連歌嶽といふと。

●大 黒 石

女體山に登りて東、忽ち一大巨人を見る、肥軀にして
温顔、左肩に囊を負ひ、右手に槌を握り、胡座して登
臨の客を待つが如きもの、これ大黒石の奇なり、石は
形によりて名けらる、石面蒼黒にして鮮苔之を蔽ひ、
古色人を照らす、又出船入船の名石あり、長さ各十間、
幅三間有許、形状恰も巨船の如し、故に此名あり。

●高 天 原

女體山の東高天原の靈場あり、帝業後に在し、群神を
召して扶桑の雲霧に逍遙し、降つて此山上に會したる
所、故に高天原といふと。山の絶頂を挺んで、更に高
き事九十尺餘、蝸附して辛うじて登る、登れば即ち

神の會せし靈峯、馳望千里、俯して八州の野を指點すべし。

●石 門

高天原の下石門の奇あり、巖扉の間、漸く盛まりて峭壁相迫り、將に磊落して人を壓せんとす、兩岸相距る僅かに二尺有許、人其下を過ぐるわらば、忽ち戰慄して急ぎ走らんと欲す、鬼神返しとは即ち是、又辨慶七戻といふ、昔僧辨慶の七度は是に來り、七度過ぎる能はず歸りし處と、疑ふべし。

●水 無 川

筑波嶺の峯より落るつ水無川

戀ぞつもりて淵となりぬる

と、陽成院の御詠わらせられたるは、即ち此靈泉、男體山の頂より湧きて、巖角嶂峭の間を繋回し、筑波町の國松に走りて筑波川と會す、

●胎 内 潜

の奇は登山の客の忘る可らざるもの、女體山に在り、窟内陰闇にして長百尺許、人匍伏して之に入る、冷氣

襲ひ來り、屢々松明を消さんとす、女體山中唯一の奇。

●小山田城趾

郡の小山田村にあり、城趾の在る所本城といふ、城は古へ八田知家の築く所、元弘の亂興るや、忠良藤原藤房笠置に捕はれて此地に配せられ、北條氏の命を以て八田高知の爲に監視せらる、即ち小山田城塞の一隅なり、藤房の名尙殘れり。

延元二年、北畠准后親房の、結城氏と共に義良親王を奉じて陸奥に入らんとするや、途海に航して颯風を穢弄する所となり、親房の船僅かに常陸に漂泊す、高知の子治久、即ち部下の將士を率ゐて之を關城に向へ、皇軍の爲に兇徒を防ぐ、遠近風を望んで歸し、親房の威大に揮ふ、居る數年兵氣頗る猖獗なるを以て、足利氏高師冬に兵數萬を授け、一舉して之を討たしむ、兩軍相鬪りて旗鼓堂々、勝敗未だ知る可らず、偶々治久敵の甘言に欺かれ、走つて賊に降り、城終に陥る、實に千古の恨事なり、爾來數世足利氏に臣事したりしも

足利氏の威衰ふに及びて北條氏に屬し、太田三樂の爲に攻められて城終に陥り、城將小山田氏治則、遂して僧となる、爾來太田氏より佐竹氏に移り、終に廢墟となる。

女 化

●女化稻荷

陸羽の濱街道に横はりて、渺茫々として郡の中央を横斷するもの、東西三里十八町南北三里の大平原、其名の來る處頗る奇とすべし。

往古此地に農夫忠七なる者あり、耕耘の歸途偶々捕鼠の間を過ぎりて、壯丁の一老狐を縛して殺さんとするを見る、狐悲鳴を揚げて泣く、救ひを求むるもの、如し、忠七之を憐み、就いて壯丁に問へば、狐狡猾連夜來りて家鶏を奪ふ、依つて畏を設けて之を縛し、正に撲殺の刑に處せんとするなりと、即ち數錢を投じて之を購ひ、縛を解いて之を放つ、後數月、忠七又耕耘より歸る、暮靄原頭に充ちて白露漸く滴たらんとす、草

逕漸く窺まらんとして一古祠あり、祠の邊一美人の呻吟して苦しむあり、忠七近づいて之を擁し、介抱懇篤に到らざるなし、病即ち癒ゆ、忠七將に辭し去らんとす、女曰く、妾は羈旅の者、偶々從僕を失して迷ふて是に至る、日將に晡せんとして、獨り原頭を行く可らず願はくは君の家に一宿せしめよと、忠七已むを得ず之を諾して家に伴ふ、家貧にして夜衣に乏し、忠七の着くるもの只一具のみ、即ち之を女に與へて、自ら爐邊に眠る、夜深うして寒威凜冽堪ゆべからず、即ち夜と共に語りて天明に至る。

翌朝より女自ら耕耘に従ひ、或は糸を績むに、十人の事は一人を以て之を成す、家富み財充つ、居る十數年一女二男を生じ、季子三歳に及ぶの時、女一朝忽然として去り、又行く所を知らず、益し曩年助けたる老狐の、女と化し來りて恩を報せしなり、里人之より女化原といふ、女化稻荷社あり、即ち老狐を祀れるもの、狐は均しく狐なり、而して那須野の妖狐の如く醜を千歳に遺すあり、然して又此老狐の如く芳を萬古に傳ふ

るあり、狐もまた人に同じきか。

●金龍寺

寺は馴柴村の若柴に在り、曹洞宗の古刹にして太田山と號す、古へ上野の金山にありしもの、新田義貞の菩提を吊はんが爲に創建するなり、天正十八年豊公の命によりて牛久に移し、次いで寛文六年今の地に移せり、境内に新田氏累世の墳墓あり、寺は西牛久の沼に臨み、東北に擁阿沙茫として開け、幽邃なる古道場なり。

●稻敷の里

俗ひつゝ、もかくて幾世を過ぎぬらむ

假寝ならはぬ稻敷の里と、喜多院入道の詠じたる稻敷の里は今の八原村八代の稻塚の地なるべしといふ、一葉松あり、樹幹十有二尺、柯枝四方に假懸して、蒼髯人を拂ふ、松下に一小祠あり、一葉松神社と、古祠頗る蒼然

●龍崎城址

龍ヶ崎は郡の名都邑、丘陵あり、町の北隅を壓して立つ、これ天正年間十岐頼貞の據る處、城址の東に龍ヶ

峰あり、遙かに鹿島灘の銀波混洋として天に列なるを見る。

●逢善寺

は天台の名刹にして、太田村小野の古道場、慈雲山とは其號なり。總常日記にいふ。

昔時逢善道人と云へる仙骨の此庵中に修業するや、慈眼大師偶々掛錫して到り、庵をよぎりて道人に會ふ、道人大師に謂つて曰く、貴僧須らく此地に一梵刹を立つべし、必らず大慈者を感得するあらんと、言了つて忽然として消ゆ、大師茫然として自失する者之を久しく、恍惚の間一靈像を感得し、即ち刻む是に祀ると、本堂頗る莊嚴、二天門は屹然として聳え、樹木鬱蒼たるどころ、銀鶴來り巢ひ、人を見て來り戯ぶる、又山中に一段の風流を添ゆ。

信太

●霞

太古濃漠の時、天地の氣未だ定まらず、輕き物は揚り

て天となり、重きものは沈みて地となる、秀靈の氣凝

つて山となり、冷澁のものは結んで水となる、水の鹹き

ものは即ち海、淡きものは即ち湖、湖の大なるもの、

琵琶の湖霞が浦、山の靈なるもの、富士の山筑波の嶺

常陸は實に山と水との偉なるもの、雙美を有す、霞の

浦は碧濤漫々として水波渺茫、淵底深くして料る可ら

ず、東西七里十町、南北六里三十三町、周回殆ど三十

四里餘に度り、信太河内行方新治の四郡及び下總の香

取郡之を環る、下流に浪逆浦の名勝あり、北浦の流の

末と共に、相擁して奔瀾一勢利根川を掠めて外洋に瀝

ぐ、浦の幅の廣き處、水天相連りて知らずんば大海か

と誤またる、水滸の長短亭、風色萬態筆紙の悉す所に

あらず、天晴れ氣靜なる時、筑波の峯の來りて影を侵

し、日光の連翹又遙かに之に戯ぶる、來往の敬帆去就

の閑鷗、悉くこれ畫中の景にして、畫も又如かざる

●浮島

櫻川瀬々の白波繁ければ

霞うながす信太の浮島

とは歌聖紀貫之の詠じたるもの、島は實に霞浦の一名區、其形西北より南北に延びて、宛かも長鯨の眠るに似たり、島背は凡て丘陵山凹起伏して青嶂翠巒頗る賞すべし。保元の亂藤原教長の誦せられたる所、島上尙遺蹟あり、老樹鬱鬱として空しく當年の事を忍ばしむ。

土浦

●平國香墓

東に霞の浦の碧波を臨みて、土浦の市坊整然として横はる、湖畔第一の殷富の地、水滸に沿ふて平親王築く處の古城址あり、城址を距る數町明神の地に五總明神社あり、これ常陸大掾平國香の墓と、國香は貞盛の父にして將門の叔父なり、兇豎の亂を起すや、國香の從はざるを以て、襲ふて之を殺す、古武士が千古の悲憤を瘞むるの地たり。

●弘法井

圓形の一清井、徑僅かに三尺有餘なる者、悉く石を以て壘み、亭を建て、之を蔽ふ、閑説く高野大師の巡錫するや、此地偶々大旱し、里人水なきに苦しむ、大師見て之を憫み、自ら杖を以て地中を穿つに、清泉涇々として湧き又涸る、事なし、大師里人を顧みて曰くこれ老翁の聊か以て遺物とする處と、辭して去る、爾來大旱と雖も涸るゝを知らず。

●閑居山

郡の志筑村大宇上志筑に閑居山在り、土浦線の石岡停車場を下れば西一里三十丁、道路平坦徒歩尤も佳なり途上懸瀨川を渡る、舊は信筑河と稱せるものと。山は高野大師の草創、乘海大徳中興の靈場にして一に志筑山と稱し、高峻ならずと雖も登ること三丁、平坪の地に學寮あり、就て憩ふべし、老松山を蔽ひ、蒼鬱として其間古櫻の枝を交ふるあり、花時は絶世の美觀、下瞰すれば一帶の翠原遠く霞が浦に連り、風光絶佳言ふ可らず、岩角を攀ちて數十武、右に大師の石像を見る、其右傍更に岩窟あり、首を屈めて入るに丈五尺深さ

十七間、漸く狭くして匍伏すべし、凹地あり、大師の石像を安置す、里俗金堀穴と云ふ窟を辭して仰は山腹の大師堂は岩角に憑り、樹根に跨りて危構最も神斧、行基菩薩の作十一而大師を祀る、更に鐵鎖を握り棧十梯餘級を昇るに、左側に巨岩あり、中に弘法大師の密教を封するありと、階下を右折する丁餘、飛泉あり、巖岨の上より涓々として蒼翠の間に流る、筑波の高峯を望まんとせば登る七八丁山頂に至るべし、舊三月廿一日は大師の縁日、遠近の賽者群集雜踏す。亦東北十丁志筑田井なるもの有り、その東の小丘を杜ヶ崎と稱し、一に幕山と云ふ。昔平城天皇井出左大臣師元に勅定して東下せしむるや、卿こゝに來り木々の梢の紅葉したるを見、小山に幕を張りて遊覽せしより其名ありと、歌あり、筑波根の裾邊の田井に秋田かる

染てけり時雨も露もほしやらぬ
しづくの杜の秋の紅葉

●葦山

山は筑波山脈の一、本部の西北を走りて眞壁郡に跨る。筑波彌乃會我比爾美由流安之保夜麻。安志可流登可毛左禰見延奈久爾と萬葉集の唄へる所。

●潮來

町は所謂潮來出島、俗語の所謂「潮來出島の真菰の中で萬蒲咲くとはめづらしや」といへる所、行方郡の南、霞浦の東に瀕す、股脈なる市街にして、人烟常に搖曳して、依稀として人を招く、潮來圖誌に曰く。常陸なる潮來の里は江都五町街に倣ひし廓なり朝夕の出船入船落ち合ふ客の至盛は花の晨雪の夕十六嶋はいふも更なり鹿島香取息栖銚子の浦々まで一望に浮み富士筑波の兩峰は西南に連なりて眺望頗るよしと、又曰く。潮來の潮浪里より遊女町まで十餘町其間を淺間下といふ高き並木枝差交せり潮來のハラ〜松とて沖乘

●鹿島

船の目わたの森とぞ春は梅に藤の名木四季の眺めいと宜し此處より信太の浮島手に取る如く見ゆと言ひ得て潮來を悉せり

●神宮

潮來より舟に乗りて達すべし、縣道は鋒田の町よりするを便とす。社は實に神武天皇の紀元元年健甕槌神を祭れるもの、經津主神及天兒屋命を祀りす。社殿の莊嚴にして神威の標渺たる、筆紙の悉すべきにあらすして、不文の之を記すに憚かると雖も、僅かに其概略を紹介すべし。本社は二重の瑞籬を透らして、拜殿其前に在り、本社に北に神樂殿奏者殿あり、樓門の壯麗なる所、人自なら項を蹙むべく、素盞鳴社あり、攝社末社境内に散在して、名蹟の夥多なる、本書を代ふるも悉さず。七盛井あり、曰く

染井 清水井 葦柄井 波左間井
 成井 保太井 寸府井
 といふ、更に七不思議と稱するあり。
 御藤 海の音 御手洗水 根上松
 末無川

と、東道者を備ふて行くべし、然らずんば名跡を見残すの悔あるべし。

●御手洗水

社の石華表の巍然として天に横はるの邊、御手洗の池あり、清泉滾々として珍瓏玉の如し、之に口嗽けば口中の病を忘ると、

●要石

社の東南町許、七不思議中の最大不思議なる要石あり、四方に離を繞らし、前に華表を建て、神として之を崇む、濫りに人をして近づかしめず、石は地を抽く二尺許、圓頂にして凹處あり、試みに之を押せば即ち搖く、然れども其根底深くして料るべからず。
 傳へいふ、古へ地底に大魚あり、其長さ里餘、一度怒

つて尾を揮へば東國の地悉く震ひ、民爲に苦しむ、鹿島の神之を憐れみ、要石を執りて大魚の頭部を押へ、再び動く能はざらしめしものと、いふ處頗る妙なり。

●御笠山

山は即ち神宮四方を繞れるの靈山、老樹太古の色に誇りて、葱葱天を蔽ふ、其間山腹を繞りて紅杜鵑多し、五月花開いて満山皆血なり、
 山上に御笠神社の靈祠あり、曾て武甕槌神が兜を埋めて、悪神を禊ひし所と。

●萩原の里

鹿島の町に大織冠鎌足館趾あり、信すべからず、曾て宇治の橋に驍勇を顯はしたる快僧筒井淨妙の塚は中島の筒井に在り、左顧右盼之を過ぎて萩原の里、
 秋ならば花に心や留めまじ

霜に枯れたる萩原の里
 と、藤原光俊の詠したる所、康元の歳光俊鹿島の神廟に衰せんとして途此處を過ぎり、秋風已に去りて、枯萩の殘骸空しく行路にまみるゝを見て哀を唄ひしとて

る。

●童子女松原

萩原の里を距る數町、輕野村を過ぎて蒼翠の途を挾んで假寐するあり、童子女松原といふ常陸風土記の所謂「昔神の男、神の少女と云へるあり少女をば海上安是の少女といひ男をば那賀寒田の郎子ともいひしが何れも美麗なる生れつきにて互に想ひ合ひて遂に契を結びしが人目を耻ぢて二株の松と化し一を奈美松と名け一を古津松と呼ばれたり」
 なる所、雙美俄かに松と化す、我をして其昔に在らしめば、梅と柳とに化すべかりつるを、蕉翁教へて曰く、
 梅柳さそ若衆かな女かな
 と、好笑すべし。

多賀

●平

濱街道の瀛車に乘じ、水戸より佐和、石神、大畑、下孫、助川、川尻、高萩、磯原、を経て關本に下車すれ

瀧

ば、直ちに平瀨の煙波渺茫として天を浸すを見る。
 瀨は峻巖崎嶇突兀として水を擁すれども、碧濤深くして浪平らかに、以て大艦巨舶を泊すべし、このあたり眼に見ゆるもの皆涼しとは蕉翁の言ひ得たる所、時に夜雨蕭條として雲脚緩き時、霧か霧か白くして烟の如きもの、海を掠めて磅礴し、其間人かに漁火の漸く眠らんとするを見る、多賀郡中の好風光、
 ●勿來古關
 吹く風を勿來の關と思へども
 路面にちる山櫻かな
 と古將軍が風流を弄びしを以て名あり、勿來關趾と稱するものは實に山上の國境、磐城と常陸との界なり、關の在りし所今老松七八株あり、其下一基の碑に刻するに八幡公の詠歌を以てす。
 ●天妃山
 大北川の河口に在りて、翠松蒼杉巖嶂の上を蔽ひ、延びて海中に入る、海若幾度か激して山を呑まんとし、山は幾度か笑ふて之を擁擁するに似たり、青嶂の下巖

に絶りて下れば、無数の蟹見あり、人を見て驚き走る、之を捉へて竿頭に結び、鮓のひをむ所を尋ねて竊かに之を出せば、鮓は其圓顔を振立て、口を尖らかして之を食ひ、香餌を食りて飽く事なし、此時静かに竿を引けば、鮓は竿と共に出て来る、一度出来れば、淡墨の入道子は、終に海士の兒の玩具たるのみ。

磯原

逆旅登高會、開懷萬里風、大津翻浪白、薄葉壓霜紅、獨秀一枝菊、孤飛片影鴻、三杯桑落酒、興入醉鄉濃、とは水戸黄門光圀卿の賦したるもの、地丘陵をなして馳望際涯なし、首を回せば山又山、相重り相交りて其奇實に人を酔はしむ。

河原子海水浴

下孫の停車場を距る僅かに十餘町、河原子の濱の白砂、選透として開け、青松岬を負ふて蒼を凝らすの下、水長へに碧にして海底軟らかに、衣を拵て、凝脂を洗ふ

べし、浴樓あり、鮮を研つて虹の如き氣を吐くに足る。西茨城と眞壁の二郡は名所として銘を曳くに足るもの少なし、

岩瀬停車場の東敷町、僅かに磯部の櫻あり、諸典櫻川の所謂磯部神社の在る處

つより春邊にわれを櫻川

波の花こそ間なく寄すらめ

と紀貫之が詠じたるもの、石を刻して記す

筑波連山の一なる雨引加波の雙峯、雨引は櫻の名所にして、眞言の古刹あり、加波山事件の在りたるを以て有名なり、

其外「波り来て未だどくし筑波川伊佐々の橋に感る夕暮」と、道與准後の詠じたる眞壁の伊々々橋、下妻の光明寺等にして、大寶沼の北岸なる關城趾は北島親房の孤忠を守りて敵の精銳を碎きたるの古城趾なり、

下野日光

日光神橋

汽車宇都宮より北走して日光停車場に達し、例幣使街道を過ぎて蒼翠鬱葱の境を行く、路漸く仰ぎて行歩稍緩、俾日光の市場に止まり、旗亭につきて渴を慰し、更に晃廟を指して進み、地漸く急にして溪流現はる、青峭と峻巖とに跨りて朱欄の橋梁を架す、これ即ち日光神橋なるもの、碧潭波朱相映じて莊觀いふ可らず。

架せしむと、信す可らずと雖も靈地なり。橋は衆庶の渡るを許さず、別に數十歩にして更に庶人の通すべきものを架す。

日光廟

日光は下野第一の殿堂にして、又日本第一の壯觀を究む。當年將軍の威と權と富との如何なりしかを知らんと欲せば、上野より汽車に搭じて、日光停車場を下れば即ち足る。

廟は元和三年天台僧正の勅を奉じて、大御所家康の遺骸を久能山より改葬するや、始めて此千古未曾有なる壯麗の殿宇は成る。

廟の巨資を費やしたる、單に將軍の内努のみにて實に黄金七十萬兩に上れりと、其他侯伯旗下の士の寄進扶掖せる所のものを打算すれば、實に慮る能はざるものあらん。

廟を拜せんとするには長坂の石磴より登りて、輪王寺門跡の通用門を入りて三佛堂に出づべし。三佛堂に安置せるものは千手觀音馬頭觀世音彌陀如來

の靈像、堂を繞り兩大師を詣して雙輪塔を得、塔は傳
教大師の銘文を模したるもの、これ僧正天海の建つる
もの。
莊麗なる石華表を過ぐれば酒井若州の獻じたる五層塔
あり、古色蒼然最も掬すべし。

既にして廟門を入れば、忽ち丹壘粉壁の眼を奪ふに
驚く、破風の白象花崗石の水盤最も莊重、右に青銅の
華表を入り、經堂を左して石磴の傍、獨眼龍將軍の獻
じて以て二なきを示すの意を表したる南蠻鐵燈籠あ
り、徐ろに石磴を登れば飛越の獅子、柵と獅子と同一
石根より削らるゝに至りては驚くべし。傳へいふ將軍
秀忠、鬼廟の造營を落す、柵石を巡視して其粗造なる
を惡み、頗る悦ばざるの色あり、左右之を危ふむ、已
にして此猛獅を見て心始めて解くと、豪華なる將軍
も、此獅子の奇に一驚を喫せしも宜なり、

●陽明門

門は結構の壯麗を以て天下に鳴り、精巧を以て千古に
冠たり、楣間を仰いで後水尾院震筆の扁額を拜す、額

の懸る所は雲中麒麟飛騰の彫刻にして、梁頭賽客を望
んで吞吐せんとするが如きの快は、蛟龍の怒つて火を
吹かんとするなり、梁頭出づる所樹形の楣間は、梧桐
風風きて金鳳來り舞ふ、其猛烈と穩和なるものとを配
す、妙といふべし。

●唐門
仰いで天井の美人を見、人をして恍たらしむるは、天
女仙樂を奏するの圖なり、又八方睨四方睨の龍あり、
古法眼狩野元信の描く所、其天井を支ふる柱は楓樹の
大圓柱、中に逆木の柱あり、建築の際木工の或は誤ち
たるものか、魔除の柱と稱す、其結構の偉大にして美
麗なる、外人の屢々消魂するの所。

●本殿
は即ち唐制の破風造なり、怪獸を安置す、或は爬虫
と、恙といふ、虎に似て、其丈四尺許、青銅にて之を鑄
る、門の棟頭に龍あり、人呼んで尻切の龍と、破風の
下は許由巢父の像、承塵には竹林の七賢を刻む、彫刻
の精巧なる、遊覽の客をして眼を眩せしむ

拜殿と本殿の善美を窮めたるは、實に天下の豪華を恣
まにしたるに似たり、如何に當年將軍の豪華と權威と
の赫々たりしかを窺ふに足る、銀無垢の花瓶に金銀の
松竹梅を挿みたる、銀瓶のみにて其量各十八貫目づゝ
ありと、又堆朱の柱あり、一本を作るに八萬兩を費や
せしと、斯の如きもの四、人は唯其豪華に眩し、口を
開いて呆然たるのみ。

●寶塔

は即ち權現公を葬るの所、唐門に向ひて右折し、名工
左甚五郎の彫刻したりと稱せらるゝ、眠猫の下を過ぎ、
阪下門を入れば、石磴疊々面を壓する二百餘級、登り
悉せば老樹鬱蒼として、燦爛たる光彩を包むが如し、
此處寶塔あり、青銅にして丈許、此塔の下長へに眠る
者は、即ち權現公德川家康の靈なり。

●霧瀧

瀧は鬼山の懸崖を貫いて懸る、所謂日光三大瀑のいな
り。
稻荷山の蒼翠を掬して小倉の麓を過ぎ、途漸く難くし

て北行するもの里餘、紆曲して漸く山頂に出づ、是れ
則ち望瀑臺の名勝、忽ち蕪々として風波り、翠々とし
て浪の寄するが如きを聞くと、怪んで眼を縦てば、青
嶂峻巖を劈いで銀河の逆さに懸るが如きを見る、これ
即ち霧降の瀧なり、途を巖隙の間に取り、險峻峻路を
下りて漸く瀑下に立ちて仰げば、瀑は濛濛として墮ら
砕けて二段となる、上なるを一の瀧と稱して、高さ十
五丈、直ちに二の瀧起る、高一の瀧に均し、躍つて地
軸に入る所、岩石之を激へて水漿飛び、珠羅砕けて銀
珠となる、銀沫は更に散りて白霧となり、霧は更に雲
を起し、近づく者皆な沾ふ

●裏見瀑

神橋より左折して中禪寺の古道を辿り、蓮華石を経て
裏見の新道に入れば、直ちに久志良の原に出づ、縷の
如き一路の草葉の間に走る者を尋ねて、山の氣の秀靈
なるものを感じ、雙袂漸く冷やかにして水の正に近き
を知る。
忽ち脚下に當りて潺湲たる谿流の、岩罅を嚼んで走る

所、苔沾ひて翠嵐頻りに襲ふが如きは、即ち裏見の下流にして、岸に臨んで行く事十數町、茶亭あり、夏は曹達水の新鮮なるものを隔ぐ、就て渴を慰すべし、茶亭より瀧に到る迄僅かに二三町と雖も、其間峻巖突兀として峙ち、辛うじて削道の通せるのみ、危険出だし、瀧は巨巖の間より進み出づ、宛がら海若の潮を吹くが如し、高百尺幅七八丈、壯觀いふ可らず。巖に蟠附して瀑背を繞り、後より瀧を見るの奇あり、裏見の瀧の名の依て起る所以、また白糸相生の二瀑布あり、

●華 巖 瀑

は晃山の瀑布中第一、高さ殆んど七百尺、中禪寺湖の水悉く破れて瀉ぐかど疑はる、琴々漉々、人之を望むに眼眩み耳聾す、瀧の墜つる處深さ圍る可らず、岩燕あり、谿流來り啣む巖罅の間に巢ひ、瀧を掠めて飛翔す、又奇觀なり、樹木鬱葱たる所、水氣常に彷彿し爲に霧瀦を生じ、山深くして地靈に、誠に太古の傑あり。

●般 若 瀧

般若方等の瀑布も、又三瀑布に次ぐの奇觀、記ありといふ。裏見の茶屋の前より溪を渡り森林を過ぎて、半里許にして清瀧村に出づ、是中禪寺本道なり、是より更に溪流に沿ひ山を廻り馬返に達す、一茶店あり、葛屋と云ふ來往の客の休憩する處、是より中禪寺湖迄は舊道一里十二町新道二里にして近し、而して道は即ち益々峻嶮、四顧の風景奇怪にして悉す可からず、或は大谷の急瀧岩に激して、鞋を噛まんとし、或は惟巖亂翔して頭を搏せんとす、行くこと數町深澤に至る、これ華巖、般若、方等三瀑の下流の湊合する處なり、是より曲折せる坂路を上り劔ヶ峯の茶亭に達し、右方瀧淵を望みて、始めて般若、方等の瀑あり、仙女の嬌羞を含んで素履を掩ふに異ならず、又遙かに左方山腹を擬視すれば、白旗一流翠嵐の裡に在り是れ布引の瀧とす、眺望甚佳なり、更に透曲せる山道を登ること十數町、中の茶屋に達す、山愈高くして餘益々深く、山翠簷を浸して涼蕭掬すべし、店前

に一磐石あり、磁石なりと云ふ、試に金扇を取て之に接するに引力極めて微なり、夫より猶曲折して登ること十町許始めて山頂に達す、路頗る平坦にして大平と稱し、深林鬱蒼甚猶暗し、行くこと二三町すれば即ち華巖の瀧と、途の奇思べし。

●舍 滿 淵

山の奇、水の奇、岩の奇、谷の奇、滿目凡て崎嶇にして千態萬狀、怪といひ、妙といふべきものは、晃山中夫れ舍滿が、大谷川の急瀧怒つて巖を呑吐し、勢に乗じて狂奔し來り、更に又岩の捉ふる所となりて、水勢淵々激せんと欲し、終に山の如き巨石を劈いて千尋の淵底に墜つ、其間岩石削成し、奇巖峭立す、淵に臨んで一大巨岩あり、其上に靈庇閣を立つ、對岸の一青峭の恰かも刀を以て削れるが如き所、憾殆の二梵字を刻す、

●中 禪 寺 湖

秀靈の山此靈水を待つて愈々靈なり、湖水は東西三里

南北一里、周回七里三十二町と、華巖の瀧より數町にして達すべし、湖畔に旅舎あり、泉屋中村屋米屋葛屋等は其大なるもの、樓に登り古鏡の如き池を臨みて、鮮を割き酒を行る、快いふ可らず。湖中に斗出して寺崎の勝あり、慈覺大師の藥師堂を建てたる所、又歌の濱あり、寺崎に列なる、これ勝汀上人修道の靈地なり、湖上の入景なるもの、豈獨り八景十景に止まらんや、朝霞暮烟春花秋月、其勝同じくして、其景は即ち均しからず、風雨陰晴各々眺望の美を呈す、避暑の好山水。

●湯

本

は野州著名の温泉場、客の之に到るには、中宮湖畔より中禪寺湖に沿ふて走り、男體山麓の綠蔭に涼を容れて菖蒲沼に出づべし、舟を雇ふて湖面を渡る、蒼樹逆風に落ち來りて風景掬すべし、已にして舟を拵て、岸に上り、右に地獄川を涉たり、地獄茶屋より龍頭の瀧の邊に至る、此邊は即ち紅葉の名所、秋老いて霜漸く結ばんとする時、滿山悉く緋紅、落錦飛んで紅なり

其間懸崖を劈いて一大瀑布の

●紅葉の瀧

と稱するあり、水色紅を流すが如し、國性爺ならすと
も、雖か驚かざるものあらん、近づいて凝視すれば、
満山の紅葉の水に當りて映するなり、瀧高さ百六十間、
下流は奔瀧漸く急にして中禪寺の湖に注ぐ。
瀧を見て稍進めば

●赤沼原

原は山中の大平原、渺茫として蒼浪人を拂ふの所、七
八月の候には即ち千草八千草咲き亂れて、漫りに行客
の情を牽くあり、山中の一仙洞、仙洞漸く悉きんとし
て峻路あり、之を登れば即ち湯湖、湖に沿ふて浴場あ
り、分れて十となる。

●温泉場

は河原湯、純子湯、瀧湯、姥湯、笹湯、御所湯、自在
湯、鶴の湯、蓼の湯とす、泉質は硫黄にして透明無色
稍酸味あり、頗る人體に適す。

●名産

に、日光羊羹、日光湯波、日光蕃椒、塗物挽物等あり
就中湯波と蕃椒は味ふべし。

●宇都宮

●古城趾

古城趾の所今は衆庶の遊園となり、春風悠々として、
浩然の氣を養ふべし、これ所謂、宇都宮釣天井の在り
し所なり、城は康平の五年宇都宮宗圓の始めて築く所、
子孫累生之に居り、下野宇都宮の武名を揮ひたる所な
り、宇都宮氏亡びて、蒲生、奥平、本多、松平、阿部
氏より、戸田氏に移りて維新に及ぶ。

●大谷觀音

停車場より里餘、城山村に坂東十九番施無畏觀世音の
靈場あり、本尊は丈六の大石像、傳へいふ弘法大師巡
錫して此地に來り、石の奇にして岩の快なるに驚き、
巖罅を踏み、清泉を掬ひて曰く、此地山清く水淨し、
眞に東國の靈地なりと、即ち自ら岩窟の中に入り、石
を刻みて像を作ると、満山皆石、石は即ち奇態萬狀、

所謂大谷石の出づる所なり、

●二荒神社

社は宇都宮の市内白ヶ峯の丘陵に在り、祭神は豊城入
彦命、實に仁徳天皇の朝を以て創建したる古祠なり
曾て將門の相馬に據りて叛するや、藤原秀郷來りて當
社に其鎮撫を祈り、前九後三の役にも、賴義、義家の祈
願する處あり、源右府の泰衡を討たんとするや、又奉
幣使を遣はして祈誓の事ありしと、縁起頗る味ふべき
ものあり、人の當社を以て二荒神社の分社となすは、
偶々其名の似たるを以て訛れるあり、當社と二荒神社
とは全く同名にして別なり。

宇都宮より汽車却走して、雀宮石橋を過ぎ、小金井
の停車場を下りて三十町許、室の八島といへる所あり
此處烟霞の搖曳するを見るに適すと、古歌あり。
下野や室の八島に立つ烟

思ひありとも今こそはしれ。
我爲にありけるものを下野や
室の八島に絶えぬ思ひは。

と、葦畑一抔老松の間を渡りて指かず、依稀として人
を包むに似たり、試みに笥を枉ぐるも亦一興。

●小山城趾

小金井の次驛にして般賑なる大市街、其繁榮の狀殆ん
と宇都宮を凌ぐ、町を繞りて好箇の美觀を恣にす
る思川の東岸に古城趾あり、保元の頃下野大塚小山政
光の築く所にして、後年足利氏滿の亡ぼす所となる。
天正の役、猿面公天下の貔貅を提げて此處に陣し、威
嚴烈日の如く、陪從の侯伯を屏息せしめたる所、今當
年兵馬の徵すべきなしと雖も、潺々たる思川の水、聞
は昔を語るべし。

●西那須原

●鹽原

武士の矢なみつくろふ小手の上に
散たばしる那須の篠原。
と鎌倉右大臣の詠じたる那須野の原、今は稍耕種を志
す者あり、鉄鋤漸く土を嚙むと雖も、地瘦せて石多く

草萊渺茫として行く所を知らざるもの、これ那須原頭の景なり。
 原を横たふて鐵軌の走る所數驛あり、鹽原に到らんとするには西那須野停車場より下るべし、驛を出で、關屋に至る三里、其間只渺茫たる平野を眺めて、途漸く仰ぐの時、始めて箒川の急瀬旋渦して巖に激し、進りて瀧となり、蹙々として鼓奏の音を發す、鹽原の奇は實に之より始まる。
 入勝橋を渡りて間奇橋を過ぎ、白羽の坂に連理の枝の人を招くを見、遙かに回看瀧を見て、箒川の清潭に巨巖怪石の奇と、水の清冽にして水晶の如きに驚き、幾多の瀑布に幽谷を洗ひて大網に至るに、早く已に一浴場を得、これ即ち河原の湯。
 大網より兒ヶ淵の上を過ぎ、白雲洞を過ぐれば、山愈々碧にして、水彌々清し、洞の邊に舊道あり、左初めの險といふ、奇巖天に舞ひて、路右より行客を襲はんとす、古へ武士の必らず靴を左にして危険を避けたるより此名ありと。

已にして龍化瀑の奇を見、溪流に沿ひて奇石の究めて奇なるものを探り、材木石五色岩を見て漸く福渡戸に至る。

●福渡戸

には、松屋榭屋和泉屋玉屋等の浴場あり、皆榭を伏せて温泉を浴槽に延く。温泉の湧く所は箒川の溪流咆哮して飛下する所、青崎巖の下に在り、試みに此處に來りて浴するあらば、寒風髪を梳りて、冷雲體を拭ふの奇あるべし。

●天狗岩

福渡戸より上る事四五町、一大老松の龍巖を吹いて偃蹇し、虬髯を動かして行雲を擁するに似たり、これ夜半羽客來りて逍遙する所、故に天狗岩といふと。

●野立石

は亦山中の奇、溪谷の間に横はりて、曾て古英雄の爲に其脊を貸し、以て夜營を張らしめたるもの、氏郷野立石の名より起れり。

●鹽釜湯

は、野立石より四五町許、福渡戸に比肩すべからずと雖も亦幽邃の地、名妓高尾の碑あり、いふ古名妓高尾の生れし所と、古へは絶世の美人を生じたるの水、今空しく白面にして醜容なる妖婦が化粧の水となる。美人靈あらば長歎を發すべし。

●瀑布

鹽釜より鹽の湯を過ぎ、鹽原山の瀑布漸く其壯觀を専らにす、鹿股川に沿ふて行くに、翠巖裂けて雙瀑並び懸る、其右なるは咆哮、左なるは即ち霹靂、高さ各十五丈幅六丈と、更に十町にして。

●雷霆瀑

あり、水山上岩罅の所を流れ、砥の如き大石の上に布きて、俄然として深淵に墜つ、高さ十丈幅五丈、之を二番の瀧とす。

三番瀧は二番瀧を距る二十町にして、之を仰ぐに寒雲低迷する峭頭より逆風に落つ、高さ實に三百尺、恰も素糸を練るが如し、故に素練の瀧といふ。

●雄飛瀑

は、一番瀧より十数町にして、龍噴虎吼の奇巖、相搏ち相怒るが如き溪洞にかゝる、飛泉巖々岩に咽びて白雪を飛ばし、雪は散りて白霧となる、瀧の深淵に躍るの音、轟々響々として耳を聳さしむ。

●妙雲寺

は鹽原の門前に在り、門前は古町に隣りて山中の小天池、古へ筑後守貞能の、小松内府の妹妙雲尼に具して東國に走るや、下野に來りて宇都宮朝綱に倚り、終に此山中に入り、曾て内府歸依する所の、旃檀香木の釋尊像を尊奉し、閑雲野鶴を伴として生を終ると、寺は其冥福を修する爲に建つるもの、尼の法號を取りて號となす、尼の古墳あり、高丈一、石を重ねる九級にして菴苔之を閉ざす。

●浴舎

鹽原の湯の湧く所は、
 福渡戸 鹽釜 鹽の湯 加下戸 門前
 古卷 須卷 新湯 古湯本
 等に於て、箒川の急瀬、清輝なる水精を恣まゝにして

其間を流れ、然も脈絡自ら相列なる。浴場の重なるものは、福渡戸に満壽屋、松屋、畑下戸に佐野屋、升屋、大和屋、門前に宮田屋、松本屋、山口屋、古町に會津屋、米屋、萬屋、鹽の湯には明賀屋あり、皆二層三層の高樓。

●那須温泉

は、東那須より下車するも可なれど、黒磯の驛より下るを便とす、驛より那須の七湯に至るには馬車の便あり、其間僅かに四里餘。

那須の湯は那須嶽の烟を望みて、白ヶ嶽の麓に湧く、地僻として浴舎又壯麗と稱す可らざれども、其泉質の人體に効ある、古來他に比類を見ずといふ、旅館に湯本小松屋あり、浴客の必らず宿泊せざる可らざる所。

●殺生石

三國傳來の妖、白面金毛の怪、九尾の老狐が三浦介の飛箭を蒙り、化して石となりたるもの、即ち那須野の原の殺生石なりと、石の邊人畜誤つて觸るゝあらば忽ち殞る、白骨累々、鬼火原頭に徘徊せしもの、源翁の

一喝に逢ふて、毒惡の氣忽ち散れ、僅かに石の殘骸を止めたりしが、三十餘年前此地洪水あり、今埋没して知れ難しと、石の在りし所、那須温泉湯本の邊、蕉翁會て句あり。

飛ぶものは雲ばかりなり石の上

●黒田原

は黒磯の次驛、那須村寺子にありて幽邃の地なり、老松白雲の裡、伐木丁々の音を聞きて、浴場の客舎に一太白を擧ぐ、誠に山中の仙なり、温泉は那須の七湯より繩を伏せて延くもの、那須より便なるを以て、近時來り浴する者多し、旅館に大水屋あり。

●古木

●古城

は栃木町の沼和田に在り、皆川秀光の居りし所、後栃木縣廳の所在地たりしが、宇都宮に移るゝに及びて、甚だ落莫の感あり。

●大平山

山は町の西里餘の所に横はりて眺望頗る絶佳山上に三光神社あり、慈覺大師の草創するものと、古齋蒼然として神靈の赫灼たるを覺ゆ。曾て元治の歳水府の浪士天狗の徒が據りて以て黨伐の争ひをなしたる所、當年殺氣の氛氣たるもの、今は即ち閑雅幽邃の清涼山

●唐澤山

は安蘇郡の佐野に在り、これ天慶の昔、一片の俠骨凛然として秋霜よりも嚴に、孤劍飄然黒驪を躍らして猿島の僧都を衝き、鼻雄將門の首を奪ひたる、藤原秀郷の館せし所、山上馳望千里、兩毛の野を馳馳して、甲信の峻嶺を望み、富嶽の笑つて老松の間に隠見するあり、今佐野の士女が春中秋の遊覽場となる、唐澤山神社あり、秀郷の靈を祀る。

●足利

●古城趾

足利城趾は大字足利の本城了嶮山上にあり、傳へしよ

天喜年間鎮守府將軍秀郷七代の孫、足利太夫成行、初めて之を築き、子孫相繼ぎて家綱俊綱忠綱等に至る、忠綱の後足利氏義兼に移り、義氏頼氏直氏尊氏に至るもの文正元丙戌年より長尾但馬守に屬し、天正十八庚寅年北條氏直の爲めに亡びぬ。今は唯城跡として其名あるのみ。

●足利學校

は仁明天皇の朝小野篁の設立する所、往古日本文學の精華は、實に足利と武州の金澤とに降されりといふべし、後足利氏屢之を修築し、上杉氏又能く文學を重んじたるより、關東戦亂の間と雖も、幸ひに兵燹に罹る事なく、終に今日に及ぶ、古書珍本頗る多し。其洗心易の如き、表紙に永享九年曆の紙を用ふ。

●鑿阿寺

寺は足利義兼の開基にして、眞言秘密の靈場なり、町の家宮に在りて、堂塔宏壯頗る美を極む、本尊の大日如來は、空海の刻む所と。

●長都路

は足利停車場より一里許、北郷村大月の流水を挾んで長堤凡そ一里、春風一度渡れば紅杏漸く笑ひて爛花忽ち開く、櫻雪幾千朶飄舞として散らばる處、百千鳥の友呼び交はすに、人は瓢を携へ肴を提げて來り遊ぶ、長都路櫻の名遊近に香ばし。

上野

高崎

●鬼石温泉

日本鐵道の瀛車の上野に入るや、其第一次の驛は即ち緑野郡の新町、驛の悉く所神流川の急湍を渡り、三波石の奇を拾ふて、勅使河原に小田原北條氏と瀧川一益との血戦したる跡を吊ひ、來つて鬼石の町に入る、鑛泉あり、八鹽といひ、淨法寺といひ、又澤の湯といふ、炭酸冷泉にして透明、其味頗る鹹し、胃腸に特效あり。

浴場に鑛泉館あり、前に神流川の清瀬あり、奇石清磔

の間を走りて白羽箭を飛ばすが如し、川を隔て、御嶽の蒼巒を望む、杯を揚げて酔を沾はんとすれば、盃中の酒皆青し、驚いて凝視すれば、これ蒼翠霧の相間に落ちて逆さに陰を浸すなり、清涼の氣忽ち液下に生ず、食膳に上るの鮮は即ち神流川の香魚、大さ殆ど八九寸、稀に尺に及ぶ者あり、或は炙り或は煮、或は鮓として好下物たり。

●倉賀野古碑

驛は新町の次驛、驛を下りて二十町、八名八幡の奥坊より登る事數十町にして古碑あり、剝剝して蒼苔之を蔽ひ、古色蒼然として、一見其近代の者ならざるを知る、碑面に。

辛巳歲集月三日佐野三家定賜健守命孫寶刀自此新川臣兒斯多彌足英兒孫大兒臣聚二兒長利僧母爲記定文也放光寺僧

●金井澤の碑

の五十一字を勒す、或はいふ白鳳十年に建つる處、多胡の古碑よりも古しと、山上の碑といふ。

山上の碑を見て猶登る事十餘町、荆棘の間漸く一縷の途をなすものを辿り、辛うじて金井澤の碑を見る、碑の形頗る山上のものに似たり、碑面亦數十字を刻し、神龜三丙寅二月二十九日と勒す、神龜は白鳳より後、五十餘年と雖も、今を距る實に千四百十有餘年、桑田幾度か滄海に變するの間、幸ひに埋没するなくして猶古色を弄ぶ、奇といふべし。

●多胡古城趾

停車場より二里、多胡の城村にあり、當年帶刀先生多胡義賢の城きて以て東國の雄鎮たりし所、偶々先生の甥源太義平、英邁にして斗牛を呑むの氣あり、當時骨肉相食み、兄弟齋に闘ぐの災ありて、義平俄かに先生を襲ひ、遂に之を太藏谷に殺す、後先生の遺子冠者義仲、乘勝の武威を以て、父の舊領を復すの志あり、偶々粟津に敗れ、素志を遂ぐる能はずして死す。

●多胡古碑

碑の在る所吉井と熊川との中間、池村といへる所なり、碑高さ四尺一寸、幅上に狹くして尺六寸、下に廣くし

て二尺餘、實に日本三古碑の一なり。蒼苔を剝ぎ缺損の跡を探りて之を讀む。

辦官符上野國片岡郡綠野郡甘樂郡並三郡内三百戸郡成給辛成多胡和銅四年三月九日甲寅宜左中辨正五位下多治比直人太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊

と、和銅は今を距る殆ど千二百有餘年前、古蒼の色の殆ど靈あるかを疑はしむ。

磯部

●佐々木盛綱墓

高崎より信越線に移りて、直に磯部停車場を得、停車場を距る二十町許、磯部山松岸禪寺あり、古刹蒼然として、石碣途に横はる、内に佐々木盛綱の墓あり、石塔殆ど碎け、碑面の勒する處讀む可らずと雖も、僅かに正應六年四月日の七字を搜るべし、斷碣若他して人吊ふ稀なる處、石の瑞垣僅かに蕙蘿の纏ふ處となりて仆れず、此古英雄の墓に隣りて、赤穂の遺臣大野九郎

兵衛の墓なるものあり、九郎兵衛赤穂を去りて飄然此處に來り、書を村童に教へて死すと。

●浴湯

磯部の鐵泉は炭酸質冷泉にして、之を浴槽に延き、熱して客に浴さしむ、浴舎に共齋館、風來館、對丘館、山城軒、信泉亭あり、山深からずと雖も、風光稍賞すべし、其伊香保の湯の近きにあるを以て、今は人の赴く者大に減じたりと雖も、都門精神の別墅多し。

妙義山

●妙義神社

流車磯部の驛より松井田の驛に達し、碓氷の川の湯々として幽谷を洗ふものを度れば、足趾漸く仰ぎて、妙義の奇即ち始まる。

社の在る處は妙義町、白雲山の冷雲長へに搖曳するの下、金洞金鶏の二山相對するの處にあり。

社は實に往古欽明天皇の朝に創立するものにして、光仁天皇の寶龜年中之を再興す、當時の社は明曆二年に

立てしものと、里俗稱して卯の神といふ、開運出世の守護神たり。隨身門あり、唐門あり、本社は結構頗る偉大、神樂殿あり、神輿殿あり、皆壯嚴、人をして仰いで神威の赫灼たるを思はしむ。

●石門

妙義山中石門實に十五の多きあり、造化の戯れに岩を碎き石を抉りたるかど怪しましむ、曰く。

- 第一石門 第二石門 第三石門 第四石門
- 星 穴 射貫穴 東體内穴 西體内穴
- 夫婦岩穴 鞍岩穴 級戸穴 蜂巢穴
- 鳥越穴 阿波岩穴 助岩穴
- 又、東仙人巖、鞍掛石、蛇寶岩、古屋詰巖等の奇あり。

●長清道士墓

長清道士、其何者の出なるやを知らず、父の仇を復し逃れて金洞山中に入る、禪を學び法を修し、霞を食ひ霧を吸ふて頗る仙氣あり、曾て錫杖を以て巖を穿ち、

其裡に跌座するもの三年、一念只心膽を練る、道士常に一青牛を養ふ、青牛頗る靈あり、能く道士の意を解して、之に仕ふる恰かも僕従の如し、道士食漸く乏しきに至るや、竹筒を牛角に懸け、命じて山下の市街に行かじむ、青牛依々、巖罅の上を度り、巨巖の下を過ぎ、險阻を行く宛がら砥を度るが如く、一氣にして町に至り、大聲を發して呻吟す、里人之を聞いて曰く、お牛様來れりと、即ち各米鹽を喜捨して與ふれば、牛即ち點頭して謝するもの、如く、須臾にして其形を失ふ、驚いて山を仰げば、石門の邊青牛の業に豆大にして走るを見ると、一夜道士青牛に乗り、雲を踏むで虚明に遊び又行く處を知らずと、里人道士の爲に墓を建てて以て祀る、墓は今幸澤橋の上流緑樹鬱葱たるの所に在り

榛名

●皇太后御蔭の松

高崎より馬車に搭じて行く事四里、澁川の一小市街に

入る、伊香保に至るには是より二里、人車を通すべし、行く事一里有許にして、權側の間翠雲搖曳するが如きあり、これ一老松の蓋々天を指せるもの、皇太后御蔭の松といふ、曾て英照皇太后の野立あらせられたるの趾、一小碑あり、

芝中の松のやどりに千代かけて

と、萬里小路博房の歌を勸す。

●伊香保

之より足趾漸く仰ぎて、途頗る峻嶮、再び一里餘にして伊香保の町現はる。浴場の大なるもの、兩木暮、村松、島田、千石、石阪、塚越、岸、福田、森田。伊香保温泉場組合を設けて業を營む、規律嚴然、頗る他の浴場に異なれり。

温泉は炭酸泉にして其色赭褐、嚴罅の間湧々として湧く者を樋を伏せて毎家に通じ、以て浴槽に充たす、盛夏の夜都下の士の暑を避くるもの多く、酌婦藝妓の類多し、仙境頗る俗氣を以て汚さる。

●船尾山

は高崎街道の西に當りて、往古傳教大師の開基する所の古刹たりしが、一朝火を失して堂塔悉く烏有に歸し、今僅かに斷礎の落葉たるを見るのみ、山に船尾の瀧あり、伊香保に遊ぶの士の、常に其壯觀に驚くもの、瀧は蒼峭の間より峻巖を碎いて墜ち、二段となり、三段となり、豁然として深潭の内に躍る、水晶の簾の如く、又素練の糸の如し。

●蒸風呂

伊香保町の南二十餘町、ニッ獄の山中に蒸風呂あり、熱氣濼々として鐵砂の中より昇る處、病客を布きて假臥し、或は踞して以て病の在る所を温むるに、全身漸く熱し、流汗津々、手を以て體を摩すれば、垢屑手に從つて落つるに至りて止む、蒸風呂を出で、浴槽の水を被り、垢屑を洗ひ去れば、心氣の爽快なる、蓋し普通温浴の比にあらず。

●榛名神社

伊香保より二里餘、湯澤の左岸に浴ひて一小橋梁を渡

りて行く、伊香保平あり、山中の小平原にして、牧牛の牟々として鳴くあり、人を見て即ち訝かる、角を傾けて身を護るもの、如し、此地眺望頗る絶佳、伊香保富士相馬ヶ嶽鞍馬山の近く行路に登ひゆるあり、赤城の赭山禿として雲烟一抹の處に横はる、之を見て進めば、即ち榛名の湖水、水清冽にして翠樹青峭を泛べ、天と一色相列る、其東岸清水の處に菖蒲多し、所謂伊香保沼のわやめ草なるもの、湖に浴ふて水中に石碑の沈めるものあり、いふ、往年美人の溺れし所と、已にして天神時に至り、一大華表の蒼穹に聳ゆるを見る、これ榛名神社一の華表なり、これより山に倚り溪に沿ひ、奇巖怪石の重々累々として、或は天を指し、或は地に伏し、或は相扶けて體を支ふが如きものあり、其奇の名状すべからざるもの、これ葛籠岩の奇峭なり。葛籠岩を見て、巖罅の間路漸く究まり、潺湲たる溪流に跨つて朱欄橋を架す、即ち榛名の神橋、橋を度れば岩石鬼狀をなし、其間を穿ちて僅かに磴を設く、磴を登れば即ち四足門あり、柱扉楣間皆蟠龍を刻す、いふ、

昔時門扉の龍、夜出で、榛名湖に遊ぶと、蘇生して鱗鱗をなし、名工の刀痕恰かも生けるが如し。

門を入りて更に石磴を登れば即ち榛名神社、社殿莊重にして山氣蕭々、神靈の在すが如し、廟内二古燈あり、鐵製にして六角形をなし、古鏽自ら花の如く、蒼然として人を青殺す、いふ新田義貞の獻する處と、燈籠光依稀として古忠臣の遺業を誇るが如し。山は妙義の如く峻ならずと雖も、其奇岩怪石の多きは、實に人を驚かす、其最も奇なるは社脊の御影岩、巨人の形をなして高さ十數丈、風度れば颯々として鳴る、恰かも英雄の酒を被りて朗詠するに似たり、鞍掛岩あり、天狗石あり、虎岩の怒るが如き、龍伏岩の假寐たる、其間には即ち老松怪杉、或は伏し、或は仰ぐ、柯枝縦横たる所藤蘿鬱々として幽禽鳴く事頻りなり。

赤城山

●小暮村

突兀として單峯の駱駝の横はるが如き赭山は、夕陽斜

めに射りて其色焼くが如し、前橋より東北六里、小暮村に達す、村は赤城山麓の小市街にして、此處にて登山の準備をなすべし、

●赤城湖水

湖水は山頂に在りて、四面連山の起伏するものを繞らし、白雲常に影を浸して上碧落に連なる、いふ、湖水に一大排鯉の怪あり、大さ五六丈、胸の周圍殆ど牛の如しと、平時は其形を見る可らず、夏日天霽れて片鱗なきの時、偶々登山の客の眼界に入る事あり、然も近づいて見る可らず、只湖心の薄紅色を呈するを以て知ると、友人遅塚麗水氏記していふ。

某一日好霧節を曳いて高きに升り眺望す、會見る湖面に物あり、色は渥丹の如く稍や金光を帯ぶ、或は左し或は右す、某大に怪しみ眸を凝して諦視すれば正に是れ魚、其の節を植つるところより湖に至る凡そ十七八町程、魚の大いさ徑寸ばかり推してこれを量れば魚の大いさ應に二三丈ばかりなるべし、某稷然として毛髮を豎つ、馳せて山を下り、中途に及

び更に小立して諦視すれば、湖心圓波を揚げて倒影
驚きぬみ、怪魚の影終に之くところを知らずと、
と、其大さ料る可らず。

前橋

●古城趾

前橋は上毛の首府にして、縣廳の在る所、殷賑なる大市
街なり、其城趾と稱するものは、文明年中太田道灌の
築く所、天正の頃驍將瀧川一益の據りたる所なり、其
關東の要路に當るを以て、頗る要害の一城塞たり、今
は僅かに斷礎のあるのみ。

●國定

は伊勢崎の次驛にして、博徒國定忠治の出生地なるを
以て名高し、其墓は停車場を距る町許に在り、石塔常
に缺損の痕あり、いふ、此塔を碎き、其一片を懐にし
て丁半場裡に入り、輸贏を争ふ者は、嘗て敗る事なし
と、故に博徒の物かに来り碎くありと、笑ふに堪へた
り。

草津

●草津温泉

温泉は靈湯の上野に在るもの、中、往古より其名の天
下に噴々たるもの、御醫者さんでも草津の湯でもしと
いへる俗語あるを以ても、其名湯なるを知るべし、然
れども地頗る僻にして、車馬の便少なきを以て、伊香
保磯部の如く、避暑遊山として行く者なし。

温泉は吾妻郡にあり、白根の嶺其後を遮りて、不斷
の雲常に徂來し、白烟濛々として天に漲る、山脈連亘
天狗山となり、元白根山となり、萬坐山となり、神宮
石尊の二山となり、遙かに淺間の烟の斷へず天を焦す
を望む、湯は實に元正天皇の養老五年、行基僧正の錫
を此地に垂るゝや、偶々山腹より熱泉迸り出で、硫黄
の氣の氛々として鼻を撲つ、四邊の地皆熱砂、杖を以
て穿てば、俄然として穴を生じ、穴の所忽ち白霧の生
ずるを見る、即ち自ら熱泉を掬ひて浴を取り、其人體
に功あるを思ひて、里人に教へて浴せしむと、今白旗

武藏

武藏の名勝を説くに當り、特に東京市及び其附近に關するものを
除く、若し夫れ一度筆を東京市に入れんが、此東洋の一大都會は
之を小冊子の能く悉くすべきにあらず、況んや本書は漫遊の案内
にて、其目的とする所、多く山紫水明の境、暑を銷し、寒を避く
るの地を讀者に紹介するを主とするが故に、都門萬丈の紅塵を描
くは、決して水來の面目にあらず、故に特に東京市を除く、乞ふ
讀者幸ひに諒されん事を。

品川

●御殿山

山は品川の海に臨みて、遙かに房總の翠巒を烟波渺茫
の間に見る、銀波激漣たるの所、海龜の三五相列りて
泛ぶが如きは、所謂品川の御墓場なる者なり、山に櫻
樹多し、陽春花開くの候、満山悉く紅雲、鑿鑿として
搖曳するの下、士女酒を携へて來り看る、花下に茶亭
あり、几を設け甍を布きて客を待つ、山は今山尾某の
有とると雖も、花時は特に開放して衆庶の覽を縱

湯、熱之湯、脚氣湯、綿の湯、鷲の湯、龍の湯、金尾
羅湯、地藏湯、饑川湯、松の湯、新御座湯等あり、浴
槽相連りて、旅舎軒を接し、殷賑なる小市街を成す。

●世良田長樂寺

中仙道の深谷停車場を下り、馬車を驅つて馳す、刀水
の滾々として千古の翠を凝すの所、有名なる船橋の危
棧を渡り、平塚の村落を横きりて達す、寺は順德帝の
御宇源義季なるもの、開基するところ、台密禪三宗弘
通の古刹なり、満山老木蒼鬱として柯枝廟宇を蔽ひ、
幽禽友を呼びて其聲玲瓏、金鈴の宛轉たるが如し、寺
に什寶多し、毎年展じて虫干をなすの時、衆庶の見る
を許す、其最も奇なるものは、開山草創の際、義季の
遙かに請じて一山の主僧となしたる榮朝禪師の竹杖な
り、佛頂竹を以て工みに之を作る、又義貞寄進の杖あ
り、或は武藏守義宗の制札を藏すと、皆千古再び得可
らざるの逸品なり、其他歴朝の震翰等、皆能く糊を以
て装し、寺僧誇りて客に示す頗る得々然たり。